Oracle® Developer Studio 12.5: C ユーザーズガイド

Part No: E71949
2016 年 7 月

ORACLE

Part No: E71949

Copyright © 2016, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクルまでご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT END USERS: Oracle programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, delivered to U.S. Government end users are "commercial computer software" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the programs, including any operating system, integrated software, any programs installed on the hardware, and/or documentation, shall be subject to license terms and license restrictions applicable to the programs. No other rights are granted to the U.S. Government.

このソフトウェアまたはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアまたはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション(人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む)への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性(redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアまたはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、Oracle Corporationおよびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

OracleおよびJavaはオラクル およびその関連会社の登録商標です。その他の社名、商品名等は各社の商標または登録商標である場合があります。

Intel、Intel Xeonは、Intel Corporationの商標または登録商標です。すべてのSPARCの商標はライセンスをもとに使用し、SPARC International, Inc.の商標または登録商標です。AMD、Opteron、AMDロゴ、AMD Opteronロゴは、Advanced Micro Devices, Inc.の商標または登録商標です。UNIXは、The Open Groupの登録商標です。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に別段の定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。適用されるお客様とOracle Corporationとの間の契約に定めがある場合を除いて、Oracle Corporationおよびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクルのアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility ProgramのWeb サイト(http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc)を参照してください。

Oracle Supportへのアクセス

サポートをご契約のお客様には、My Oracle Supportを通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は(http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info)か、聴覚に障害のあるお客様は (http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs)を参照してください。

目次

このドキュメントの使用法 21

1 C コンパイラの紹介 23
1.1 C バージョン 5.14 Oracle Developer Studio 12.5 リリースの新機能 23
1.2 x86 の特記事項 23
1.3 バイナリの互換性の妥当性検査 24
1.4 64 ビットプラットフォーム用のコンパイル 24
1.5 準拠規格 25
1.6 C Readme ファイル 25
1.7 マニュアルページ 25
1.8 コンパイラの構成 26
1.9 C 関連のプログラミングツール 28

2 C コンパイラ実装に固有の情報 29
2.1 SPARC Oracle Linux 29
2.2 定数 29
2.2.1 整数定数 29
2.2.2 文字定数 30
2.3 リンカースコープ指定子 31
2.4 スレッドローカルな記憶領域指示子 31
2.5 浮動小数点 (非標準モード) 32
2.6 値としてのラベル 33
2.7 `long long` データ型 34
2.7.1 `long long` データ型の入出力 35
2.7.2 通常の算術変換 35
2.8 Switch 文内の Case 範囲 36
2.9 表明 37
2.10 サポートされる属性 38
2.10.1 __has_attribute 関数形式のマクロ 39
2.11 警告とエラー 40

2.12 プラグマ 40
2.12.1 align 40
2.12.2 c99 41
2.12.3 does_not_read_global_data 41
2.12.4 does_not_return 41
2.12.5 does_not_write_global_data 42
2.12.6 dumpmacros 42
2.12.7 end_dumpmacros 43
2.12.8 error_messages 43
2.12.9 fini 44
2.12.10 hdrstop 44
2.12.11 ident 45
2.12.12 init 45
2.12.13 inline 46
2.12.14 int_to_unsigned 46
2.12.15 must_have_frame 46
2.12.16 nomemorydepend 47
2.12.17 no_side_effect 47
2.12.18 opt 48
2.12.19 pack 48
2.12.20 pipeloop 49
2.12.21 rarely_called 49
2.12.22 redefine_extname 50
2.12.23 returns_new_memory 51
2.12.24 unknown_control_flow 51
2.12.25 unroll 52
2.12.26 warn_missing_parameter_info 52
2.12.27 weak 53
2.13 事前に定義されている名前 53
2.14 `errno` の値の保持 54
2.15 拡張機能 54
2.15.1 `_Restrict` キーワード 54
2.15.2 `__asm` キーワード 55
2.15.3 `__inline` と `__inline__` 55
2.15.4 `__builtin_constant_p()` 55
2.15.5 `__FUNCTION__` と `__PRETTY_FUNCTION__` 56
2.15.6 `untyped _Complex` 56
2.15.7 `__alignof__` 56
2.15.8 `__atomic` 組み込み関数 56

2.16 環境変数 56
2.16.1 SUN_PROFDATA 57
2.16.2 SUN_PROFDATA_DIR 57
2.16.3 TMPDIR 57
2.17 インクルードファイルを指定する方法 57
2.17.1 -I- オプションによる検索アルゴリズムの変更 58
2.18 フリースタンディング環境でのコンパイル 60
2.19 Intel MMX および拡張 x86 プラットフォーム組み込み関数のためのコンパイラサポート 62
2.20 SPARC64™X および SPARC64™X+ プラットフォーム組み込み関数のためのコンパイラサポート 64
2.20.1 SIMD 組み込み関数 64
2.20.2 10 進浮動小数点の組み込み関数 75

3 不可分型のサポート 81
3.1 不可分 C 型のサイズと整列 81
3.2 バンドルされている不可分ライブラリ 83
3.2.1 不可分ライブラリの選択 83
3.2.2 GCC 不可分ライブラリ libatomic との互換性 85
3.2.3 実装上の注意 86

4 C コードの並列化 89
4.1 OpenMP を使用した並列化 89
4.2 自動並列化 89
4.2.1 データの依存性と干渉 90
4.2.2 固有スカラーと固有配列 91
4.2.3 ストアバック 93
4.2.4 縮約変数 93
4.2.5 ループの変換 94
4.2.6 別名と並列化 97
4.3 環境変数 99
4.4 並列実行モデル 99
4.5 処理速度の向上 100
4.5.1 アムダールの法則 101
4.6 メモリーバリア組み込み関数 104

5 lint ソースコード検査プログラム 107
5.1 基本 lint と拡張 lint 107

5.2 lint 使用方法 108
5.3 lint のコマンド行オプション 109
5.3.1 -# 110
5.3.2 -### 110
5.3.3 -a 110
5.3.4 -b 110
5.3.5 -C *filename* 110
5.3.6 -c 111
5.3.7 -dirout=*dir* 111
5.3.8 -err=warn 111
5.3.9 -errchk=*l*(, *l*) 111
5.3.10 -errfmt=*f* 112
5.3.11 -errhdr=*h* 113
5.3.12 -erroff=*tag*(, *tag*) 113
5.3.13 -errsecurity=*level* 114
5.3.14 -errtags=*a* 115
5.3.15 -errwarn=*t* 115
5.3.16 -F 116
5.3.17 -fd 116
5.3.18 -flagsrc=*file* 116
5.3.19 -h 116
5.3.20 -I*dir* 116
5.3.21 -k 117
5.3.22 -L*dir* 117
5.3.23 -l*x* 117
5.3.24 -m 117
5.3.25 -m32|-m64 117
5.3.26 -Ncheck=*c* 118
5.3.27 -Nlevel=*n* 118
5.3.28 -n 119
5.3.29 -o*x* 120
5.3.30 -p 120
5.3.31 -R*file* 120
5.3.32 -s 120
5.3.33 -u 120
5.3.34 -V 120
5.3.35 -v 121

5.3.36 -W*file* 121
5.3.37 -XCC=*a* 121
5.3.38 -Xalias_level[=*l*] 121
5.3.39 -Xarch=v9 121
5.3.40 -Xc99[=*o*] 122
5.3.41 -Xkeeptmp=*a* 122
5.3.42 -Xtemp=*dir* 122
5.3.43 -Xtime=*a* 122
5.3.44 -Xtransition=*a* 122
5.3.45 -Xustr={ascii_utf16_ushort| no} 123
5.3.46 -x 123
5.3.47 -y 123
5.4 lint のメッセージ 123
5.4.1 メッセージを抑制するオプション 123
5.4.2 lint メッセージの形式 124
5.5 lint の指令 126
5.5.1 事前定義された値 126
5.5.2 指令 126
5.6 lint の参考情報と例 129
5.6.1 lint が行う診断 129
5.6.2 lint ライブラリ 133
5.6.3 lint フィルタ 135

6 型に基づく別名解析 137
6.1 型に基づく解析の概要 137
6.2 微調整におけるプラグマの使用 138
6.2.1 #pragma alias_level *level* (*list*) 138
6.3 lint によるチェック 141
6.3.1 構造体ポインタへのスカラーポインタのキャスト 141
6.3.2 構造体ポインタへの void ポインタのキャスト 141
6.3.3 構造体ポインタへの構造体フィールドのキャスト 142
6.3.4 明示的な別名設定が必要 142
6.4 メモリー参照の制限の例 143
6.4.1 例: 別名のレベル 143
6.4.2 例: さまざまな別名レベルでのコンパイル 145
6.4.3 例: 内部ポインタ 147
6.4.4 例: 構造体のフィールド 148
6.4.5 例: 共用体 151

6.4.6 例: 構造体の構造体 151
6.4.7 例: プラグマの使用 152

7 ISO C への移行 153
7.1 新しい形式の関数プロトタイプ 153
7.1.1 新しいコードを書く 153
7.1.2 既存のコードを更新する 154
7.1.3 併用に関する考慮点 154
7.2 可変引数を持つ関数 156
7.3 拡張: 符号なし保存と値の保持 158
7.3.1 若干の背景となる歴史 159
7.3.2 コンパイルの動作 159
7.3.3 例: キャストの使用 159
7.3.4 例: 同じ結果、警告なし 160
7.3.5 整数定数 160
7.3.6 例: 整数定数 161
7.4 トークン化と前処理 162
7.4.1 ISO C の翻訳段階 162
7.4.2 古い C の翻訳段階 163
7.4.3 論理的なソース行 163
7.4.4 マクロ置換 163
7.4.5 文字列の使用 164
7.4.6 トークンの連結 165
7.5 `const` と `volatile` 165
7.5.1 *lvalue* 専用の型 166
7.5.2 派生型の型修飾子 166
7.5.3 `const` は `readonly` を意味する 167
7.5.4 `const` の使用例 167
7.5.5 `volatile` の使用例 168
7.6 複数バイト文字とワイド文字 168
7.6.1 アジア言語は複数バイト文字を必要とする 169
7.6.2 符号化の種類 169
7.6.3 ワイド文字 169
7.6.4 C 言語の機能 170
7.7 標準ヘッダーと予約名 171
7.7.1 標準ヘッダー 171
7.7.2 実装で使用される予約名 171
7.7.3 拡張用の予約名 172
7.7.4 安全に使用できる名前 172

7.8 国際化 173
7.8.1 ロケール 173
7.8.2 `setlocale()` 関数 173
7.8.3 変更された関数 174
7.8.4 新しい関数 175
7.9 式のグループ化と評価 176
7.9.1 式の定義 176
7.9.2 K&R C の再配置の権利 176
7.9.3 ISO C の規則 177
7.9.4 括弧の使用 177
7.9.5 *as if* 規則 178
7.10 不完全な型 178
7.10.1 型 178
7.10.2 不完全な型を完全にする 179
7.10.3 宣言 179
7.10.4 式 179
7.10.5 正当性 180
7.10.6 例: 不完全な型 180
7.11 互換型と複合型 180
7.11.1 複数の宣言 181
7.11.2 分割コンパイル間の互換性 181
7.11.3 単一のコンパイルでの互換性 181
7.11.4 互換ポインタ型 181
7.11.5 互換配列型 182
7.11.6 互換関数型 182
7.11.7 特別な場合 182
7.11.8 複合型 183

8 64 ビット環境に対応するアプリケーションへの変換 185
8.1 データ型モデルの相違点 185
8.2 単一ソースコードの実現 186
8.2.1 派生型 186
8.2.2 `lint` によるチェック 189
8.3 LP64 データ型モデルへの変換 190
8.3.1 整数とポインタのサイズの変更 190
8.3.2 整数とロング整数のサイズの変更 191
8.3.3 符号拡張 191
8.3.4 整数の代わりのポインタ演算 193
8.3.5 構造体 193

8.3.6 共用体 194
8.3.7 型定数 194
8.3.8 暗黙の宣言に対する注意 194
8.3.9 sizeof( ) は符号なし long 195
8.3.10 型変換で意図を明確にする 195
8.3.11 書式文字列の変換操作を検査する 196
8.4 変換に関するその他の注意事項 196
8.4.1 注: サイズが大きくなった派生型 197
8.4.2 変更の副作用の検査 197
8.4.3 long のリテラル使用の効果持続の確認 197
8.4.4 明示的な 32 ビットと 64 ビットプロトタイプに対する #ifdef の使用 197
8.4.5 呼び出し規則の変更 197
8.4.6 アルゴリズムの変更 198
8.5 変換前の確認事項 198

9 cscope: 対話的な C プログラムの検査 199
9.1 cscope プロセス 199
9.2 基本的な使用方法 200
9.2.1 ステップ 1: 環境設定 200
9.2.2 ステップ 2: cscope プログラムの起動 201
9.2.3 ステップ 3: コード位置の確定 201
9.2.4 ステップ 4: コードの編集 206
9.2.5 コマンド行オプション 207
9.2.6 ビューパス 209
9.2.7 cscope とエディタ呼び出しのスタック 210
9.2.8 例 210
9.2.9 エディタのコマンド行構文 213
9.3 不明な端末タイプのエラー 214

A 機能別コンパイラオプション 217
A.1 機能別に見たオプションの要約 217
A.1.1 最適化とパフォーマンスのオプション 217
A.1.2 コンパイル時とリンク時のオプション 219
A.1.3 データ境界整列のオプション 220
A.1.4 数値と浮動小数点のオプション 220
A.1.5 並列化のオプション 221
A.1.6 ソースコードのオプション 221
A.1.7 コンパイル済みコードのオプション 222

A.1.8 コンパイルモードのオプション 223
A.1.9 診断のオプション 224
A.1.10 デバッグオプション 224
A.1.11 リンクとライブラリのオプション 225
A.1.12 対象プラットフォームのオプション 226
A.1.13 x86 固有のオプション 226
A.1.14 廃止オプション 226

B C コンパイラオプションリファレンス 229
B.1 オプションの構文 229
B.2 cc のオプション 230
B.2.1 -# 230
B.2.2 -### 230
B.2.3 -A*name*[(*tokens*)] 231
B.2.4 -ansi 231
B.2.5 -B[static| dynamic] 231
B.2.6 -C 232
B.2.7 -c 232
B.2.8 -D*name*[(*arg*[,*arg*])][=*expansion*] 233
B.2.9 -d[y| n] 233
B.2.10 -dalign 233
B.2.11 -E 233
B.2.12 -errfmt[=[no%]error] 234
B.2.13 -errhdr[=h] 234
B.2.14 -erroff[=*t*] 234
B.2.15 -errshort[=*i*] 235
B.2.16 -errtags[=*a*] 235
B.2.17 -errwarn[=*t*] 236
B.2.18 -fast 237
B.2.19 -fd 238
B.2.20 -features=[*v*] 238
B.2.21 -flags 240
B.2.22 -flteval[={any|2}] 240
B.2.23 -fma[={none|fused}] 241
B.2.24 -fnonstd 241
B.2.25 -fns[={no|yes}] 241
B.2.26 -fopenmp 242
B.2.27 -fPIC 242

B.2.28 -fpic 242
B.2.29 -fprecision=*p* 242
B.2.30 -fround=*r* 242
B.2.31 -fsimple[=*n*] 243
B.2.32 -fsingle 244
B.2.33 -fstore 244
B.2.34 -ftrap=*t*[,*t*...] 244
B.2.35 -G 245
B.2.36 -g 245
B.2.37 -g[*n*] 246
B.2.38 -H 247
B.2.39 -h *name* 247
B.2.40 -I[-|*dir*] 247
B.2.41 -i 248
B.2.42 -include *filename* 248
B.2.43 -KPIC 249
B.2.44 -Kpic 249
B.2.45 -keeptmp 249
B.2.46 -L*dir* 249
B.2.47 -l*name* 249
B.2.48 -library=sunperf 250
B.2.49 -m32|-m64 250
B.2.50 -mc 250
B.2.51 -misalign 250
B.2.52 -misalign2 251
B.2.53 -mr[,*string*] 251
B.2.54 -mt[={yes|no}] 251
B.2.55 -native 251
B.2.56 -nofstore 252
B.2.57 -O 252
B.2.58 -o *filename* 252
B.2.59 -P 252
B.2.60 -p 252
B.2.61 –pedantic{=[yes|no]} 253
B.2.62 –preserve_argvalues[=simple|none|complete] 253
B.2.63 –Qoption *phase option*[,*option*..] 253
B.2.64 -Q[y|n] 254

B.2.65 -qp 254
B.2.66 -R*dir*[:*dir*] 254
B.2.67 -S 255
B.2.68 -s 255
B.2.69 -staticlib=[no%]sunperf 255
B.2.70 -std=*value* 255
B.2.71 -temp=*path* 256
B.2.72 -traceback[={%none|common|*signals_list*}] 256
B.2.73 -U*name* 257
B.2.74 -V 257
B.2.75 -v 258
B.2.76 -W*c*,*arg* 258
B.2.77 -w 259
B.2.78 -X[c|a|t|s] 259
B.2.79 -x386 260
B.2.80 -x486 260
B.2.81 -Xlinker *arg* 260
B.2.82 -xaddr32[=yes|no] 261
B.2.83 -xalias_level[=*l*] 261
B.2.84 -xanalyze={code|%none} 263
B.2.85 -xannotate[=yes|no] 263
B.2.86 –xarch=*isa* 263
B.2.87 -xatomic=*a* 267
B.2.88 -xautopar 268
B.2.89 -xbinopt={prepare|off} 269
B.2.90 -xbuiltin[=(%all|%default|%none)] 269
B.2.91 -xCC 270
B.2.92 -xc99[=*o*] 270
B.2.93 -xcache[=*c*] 270
B.2.94 –xcg[89|92] 272
B.2.95 -xchar[=*o*] 272
B.2.96 -xchar_byte_order[=*o*] 273
B.2.97 -xcheck[=*o*[,*o*]] 273
B.2.98 -xchip[= *c*] 276
B.2.99 -xcode[=*v*] 278
B.2.100 -xcrossfile 280
B.2.101 -xcsi 280

B.2.102 -xdebugformat=[stabs|dwarf] 280
B.2.103 -xdebuginfo=*a*[,*a*...] 281
B.2.104 -xdepend=[yes|no] 282
B.2.105 -xdryrun 283
B.2.106 -xdumpmacros[=*value*[,*value*...]] 283
B.2.107 -xe 285
B.2.108 -xF[=*v*[,*v*...]] 286
B.2.109 -xglobalize[={yes|no}] 287
B.2.110 -xhelp=flags 287
B.2.111 -xhwcprof 287
B.2.112 -xinline=*list* 289
B.2.113 -xinline_param=*a*[,*a*[,*a*]...] 290
B.2.114 -xinline_report[=*n*] 292
B.2.115 -xinstrument=[no%]datarace 292
B.2.116 -xipo[=*a*] 293
B.2.117 -xipo_archive=[*a*] 295
B.2.118 -xipo_build=[yes|no] 296
B.2.119 -xivdep[=*p*] 297
B.2.120 -xjobs{=*n*|auto} 297
B.2.121 -xkeep_unref[={[no%]funcs,[no%]vars}] 298
B.2.122 -xkeepframe[=[%all,%none,*name*,no%*name*]] 298
B.2.123 -xlang=*language* 299
B.2.124 -xldscope={*v*} 300
B.2.125 -xlibmieee 301
B.2.126 -xlibmil 301
B.2.127 -xlibmopt 301
B.2.128 -xlic_lib=sunperf 302
B.2.129 -xlicinfo 302
B.2.130 -xlinkopt[=*level*] 302
B.2.131 -xloopinfo 303
B.2.132 -xM 304
B.2.133 -xM1 304
B.2.134 -xMD 305
B.2.135 -xMF *filename* 305
B.2.136 -xMMD 305
B.2.137 -xMerge 306
B.2.138 -xmaxopt[=*v*] 306

B.2.139 -xmemalign=*ab* 306
B.2.140 -xmodel=[*a*] 308
B.2.141 -xnolib 309
B.2.142 -xnolibmil 309
B.2.143 -xnolibmopt 309
B.2.144 -xnorunpath 309
B.2.145 -xO[1|2|3|4|5] 309
B.2.146 -xopenmp[={parallel|noopt|none}] 312
B.2.147 -xP 313
B.2.148 -xpagesize=*n* 313
B.2.149 -xpagesize_heap=*n* 314
B.2.150 -xpagesize_stack=*n* 315
B.2.151 -xpatchpadding[={fix|patch|*size*}] 315
B.2.152 -xpch=*v* 316
B.2.153 -xpchstop=[*file*|<include>] 320
B.2.154 -xpec[={yes|no}] 321
B.2.155 -xpentium 321
B.2.156 -xpg 322
B.2.157 -xprefetch[=*val*[,*val*]] 322
B.2.158 -xprefetch_auto_type=*a* 324
B.2.159 -xprefetch_level=*l* 324
B.2.160 -xprevise={yes|no} 324
B.2.161 -xprofile=*p* 325
B.2.162 -xprofile_ircache[=*path*] 328
B.2.163 -xprofile_pathmap 328
B.2.164 -xreduction 329
B.2.165 -xregs=*r*[,*r*⋯] 329
B.2.166 -xrestrict[=*f*] 331
B.2.167 –xs[={yes|no}] 331
B.2.168 –xsafe=mem 332
B.2.169 –xsecure_code_analysis{=[yes|no]} 333
B.2.170 -xsegment_align=*n* 333
B.2.171 -xsfpconst 334
B.2.172 -xspace 334
B.2.173 -xstrconst 334
B.2.174 -xtarget=*t* 334
B.2.175 -xtemp=*path* 336

B.2.176 -xthreadvar[=*o*] 337
B.2.177 -xthroughput[={yes|no}] 337
B.2.178 -xtime 338
B.2.179 -xtransition 338
B.2.180 -xtrigraphs[={yes|no}] 338
B.2.181 -xunboundsym={yes|no} 339
B.2.182 -xunroll=*n* 340
B.2.183 -xustr={ascii_utf16_ushort|no} 340
B.2.184 -xvector[=*a*] 341
B.2.185 -xvis 342
B.2.186 -xvpara 342
B.2.187 -Y*c*, *dir* 343
B.2.188 -YA, *dir* 343
B.2.189 -YI, *dir* 343
B.2.190 -YP, *dir* 343
B.2.191 -YS, *dir* 343
B.3 リンカーに渡されるオプション 343
B.4 ユーザー指定のデフォルトオプションファイル 344

C C11 の機能 347
C.1 キーワード 347
C.2 サポートされている C11 の機能 347
C.2.1 _Alignas 指定子 348
C.2.2 _Alignof 演算子 348
C.2.3 不可分 349
C.2.4 _Noreturn 349
C.2.5 _Static_assert 349
C.2.6 汎用文字名 (UCN) 349

D C99 の機能 351
D.1 説明と例 351
D.1.1 浮動小数点評価における精度 352
D.1.2 C99 のキーワード 353
D.1.3 __func__ のサポート 353
D.1.4 汎用文字名 (UCN) 354
D.1.5 // を使用したコードのコメント処理 354
D.1.6 暗黙の int および暗黙の関数宣言の禁止 354
D.1.7 暗黙の int を使用した宣言 355

D.1.8 柔軟な配列のメンバー 355
D.1.9 べき等修飾子 356
D.1.10 `inline` 関数 357
D.1.11 配列宣言子で使用可能な `Static` およびそのほかの型修飾子 358
D.1.12 可変長配列 (VLA) 359
D.1.13 指示付きの初期化子 359
D.1.14 型宣言とコードの混在 360
D.1.15 `for` ループ文での宣言 360
D.1.16 可変数の引数をとるマクロ 361
D.1.17 _Pragma 361

E ISO/IEC C 99 の処理系定義の動作 363
E.1 処理系定義の動作 (J.3) 363
E.1.1 翻訳 (J.3.1) 363
E.1.2 環境 (J.3.2) 364
E.1.3 識別子 (J.3.3) 366
E.1.4 文字 (J.3.4) 366
E.1.5 整数 (J.3.5) 367
E.1.6 浮動小数点 (J.3.6) 368
E.1.7 配列とポインタ (J.3.7) 369
E.1.8 ヒント (J.3.8) 369
E.1.9 構造体、共用体、列挙型、およびビットフィールド (J.3.9) 369
E.1.10 修飾子 (J.3.10) 371
E.1.11 前処理指令 (J.3.11) 371
E.1.12 ライブラリ関数 (J.3.12) 372
E.1.13 アーキテクチャー (J.3.13) 377
E.1.14 ロケール固有の動作 (J.4) 381

F ISO/IEC C90 の処理系定義の動作 385
F.1 ISO 規格との実装の比較 385
F.1.1 翻訳 (G.3.1) 385
F.1.2 環境 (G.3.2) 386
F.1.3 識別子 (G.3.3) 386
F.1.4 文字 (G.3.4) 386
F.1.5 整数 (G.3.5) 388
F.1.6 浮動小数点 (G.3.6) 389
F.1.7 配列とポインタ (G.3.7) 390
F.1.8 レジスタ (G.3.8) 391
F.1.9 構造体、共用体、列挙型、およびビットフィールド (G.3.9) 391

F.1.10 修飾子 (G.3.10) 393
F.1.11 宣言子 (G.3.11) 393
F.1.12 文 (G.3.12) 394
F.1.13 前処理指令 (G.3.13) 394
F.1.14 ライブラリ関数 (G.3.14) 396
F.1.15 ロケール固有の動作 (G.4) 402

G ISO C データ表現 405
G.1 記憶領域の割り当て 405
G.2 データ表現 407
G.2.1 整数表現 407
G.2.2 浮動小数点表現 408
G.2.3 極値 410
G.2.4 重要な数の 16 進数表現 410
G.2.5 ポインタ表現 411
G.2.6 配列の格納 411
G.2.7 極値の算術演算 412
G.3 引数を渡す仕組み 414
G.3.1 32 ビット SPARC 414
G.3.2 64 ビット SPARC 414
G.3.3 x86/x64 415

H パフォーマンスチューニング 417
H.1 `libfast.a` ライブラリ (SPARC) 417

I Oracle Developer Studio C: K&R C と ISO C の違い 419
I.1 非互換性 419
I.2 キーワード 423

索引 425

このドキュメントの使用法

- **概要** – Oracle Developer Studio 12.5 C コンパイラについて説明します。
- **対象読者** – アプリケーション開発者、システム開発者、アーキテクト、サポートエンジニア
- **必要な知識** – プログラミング経験、ソフトウェア開発テスト、ソフトウェア製品を構築およびコンパイルできる能力

製品ドキュメントライブラリ

この製品および関連製品のドキュメントとリソースは http://docs.oracle.com/cd/E60778_01 で入手可能です。

フィードバック

このドキュメントに関するフィードバックを http://www.oracle.com/goto/docfeedback からお聞かせください。

♦ ♦ ♦ 第 1 章

1 C コンパイラの紹介

この章では、Oracle Developer Studio C コンパイラに関する基本情報を提供します。

1.1 C バージョン 5.14 Oracle Developer Studio 12.5 リリースの新機能

C コンパイラの現在のリリースには、次の新機能と変更された機能があります。

- SPARC M6、M7、および T7 プロセッサのサポート。
- Intel Broadwell/avx2_i プロセッサのサポート。
- `SPARCACE` と `SPARCACE+` のために多くの SIMD (`__m128{d|i}`) 組み込み関数が提供されています。
- x86 データ領域プロファイリングのサポート。
- 新しいコンパイラオプション:
  - `-features=[no%]mergestrings` を指定すると、コンパイラは文字列リテラルやその他の適切な `const` または読み取り専用データを、リンカーが重複した文字列を削除するバイナリの特殊なセクションに配置します。このオプションは、SPARC でのみ使用できます。
  - `-xatomic` は、どの不可分サポート実行時ライブラリがリンクされるかを指定します。
  - `-xcheck=noreturn` は、「戻らない」として記述されているルーチンが戻った場合に実行時エラーを発生させるコードを追加するように、コンパイラに通知します。
  - `-xsecure_code_analysis` は、コンパイル時に潜在的なメモリーのセキュリティー違反を検出して表示する、コンパイラセキュアコード解析を有効にします。

1.2 x86 の特記事項

x86 Oracle Solaris プラットフォーム用にコンパイルする場合は、次の重要な問題に注意してください。

- `-xarch` を `sse`、`sse2`、`sse2a`、または `sse3` 以降に設定してコンパイルしたプログラムは、これらの拡張と機能を提供するプラットフォームでのみ実行する必要があります。

- このリリースでは、デフォルトの命令セットおよび `-xarch=generic` の意味が `sse2` に変更されました。ターゲットプラットフォームオプションを指定せずにコンパイルすると、古い Pentium III または以前のシステムと互換性がない `sse2` バイナリが生成されます。
- コンパイルとリンクを別個の手順で行う場合は、常にコンパイラを使ってリンクし、同じ `-xarch` 設定で正しい起動ルーチンがリンクされるようにしてください。
- x86 の 80 ビット浮動小数点レジスタが原因で、x86 での演算結果が SPARC の結果と異なる場合があります。この差を最小にするには、`-fstore` オプションを使用するか、ハードウェアが SSE2 をサポートしている場合は `-xarch=sse2` でコンパイルします。
- 組み込み数学ライブラリ (`sin(x)` など) が同じでないため、Oracle Solaris と Oracle Linux の間でも数値結果が異なる場合があります。

1.3 バイナリの互換性の妥当性検査

Oracle Solaris システムでは Sun Studio 11 から、Oracle Developer Studio コンパイラでコンパイルされたプログラムバイナリは、コンパイルされたバイナリが想定している命令セットを示すアーキテクチャーハードウェアフラグでマークされます。実行時にこれらのマーカーフラグがチェックされ、実行しようとしているハードウェアで、そのバイナリが実行できることが検証されます。

これらのアーキテクチャーハードウェアフラグを含まないプログラムを、適切な機能または命令セット拡張に対応していないプラットフォームで実行すると、セグメント例外、または明示的な警告メッセージなしの不正な結果が発生することがあります。

この警告はまた、`.il` インラインアセンブリ言語関数、または SSE、SSE2、SSE2a、SSE3 やさらに新しい命令および拡張機能を使用する `__asm()` アセンブラコードを採用しているプログラムにも当てはまります。

1.4 64 ビットプラットフォーム用のコンパイル

ILP32 32 ビットモデル用にコンパイルするには、`-m32` オプションを使用します。ILP64 64 ビットモデル用にコンパイルするには、`–m64` オプションを使用します。

ILP32 モデルは、C 言語の `int`、`long`、および `pointer` データ型がそれぞれ 32 ビット拡張であることを指定します。LP64 モデルは、`long` および `pointer` データ型がそれぞれ 64 ビット拡張、`int` が 32 ビット拡張であることを指定します。Oracle Solaris および Oracle Linux OS はまた、LP64 データ型モデルの下で大規模ファイルや大規模配列もサポートしています。

1.5 準拠規格

このマニュアルで使用される C11 という用語は、ISO/IEC 9899:2011 の C プログラミング言語を表します。C99 という用語は、ISO/IEC 9899:1999 の C プログラミング言語を表します。C90 という用語は、ISO/IEC 9899:1990 の C プログラミング言語を意味します。

`-std=c11` を指定した場合、このコンパイラは付録C C11 の機能で説明されている、Oracle Solaris プラットフォーム上の C11 標準の言語機能をサポートします。

`-std=c99 -pedantic` を指定した場合、このコンパイラは Oracle Solaris プラットフォーム上の C99 標準に完全に準拠します。

`-std=c89 -pedantic` を指定する場合、このコンパイラは ISO/IEC 9899:1990, Programming Languages- C 規格にも準拠します。

このコンパイラは従来の K&R C (Kernighan と Ritchie、つまり ANSI C の前段階) もサポートしているため、ISO C への移行が容易に行えます。

C90 の実装固有の動作については、付録F ISO/IEC C90 の処理系定義の動作を参照してください。

C11 機能の詳細は、付録C C11 の機能を参照してください。

C99 機能の詳細は、付録D C99 の機能を参照してください。

1.6 C Readme ファイル

C コンパイラの readme ファイルは現在、『Oracle Developer Studio 12.5 リリースの新機能』ガイドの一部になっています。これには、次のような、コンパイラに関する重要な情報の概要が強調されています。

- マニュアルの印刷後に判明した情報
- 新規および変更された機能
- ソフトウェアの修正事項
- 問題および回避方法
- 制限および互換性の問題

1.7 マニュアルページ

オンラインリファレンスマニュアル (`man`) ページは、コマンド、関数、サブルーチンなどに関する即時ドキュメントを提供します。

次のコマンドを実行することにより、C コンパイラのマニュアルページを表示できます。

```
example% man cc
```

C のドキュメント全体を通して、マニュアルページのリファレンスは、トピック名とマニュアルのセクション番号で表示されます。cc(1) にアクセスするには、man cc と入力します。たとえば ieee_flags(3M) など、ほかのセクションにアクセスするには、man コマンドに -s オプションを使用します。

```
example% man -s 3M ieee_flags
```

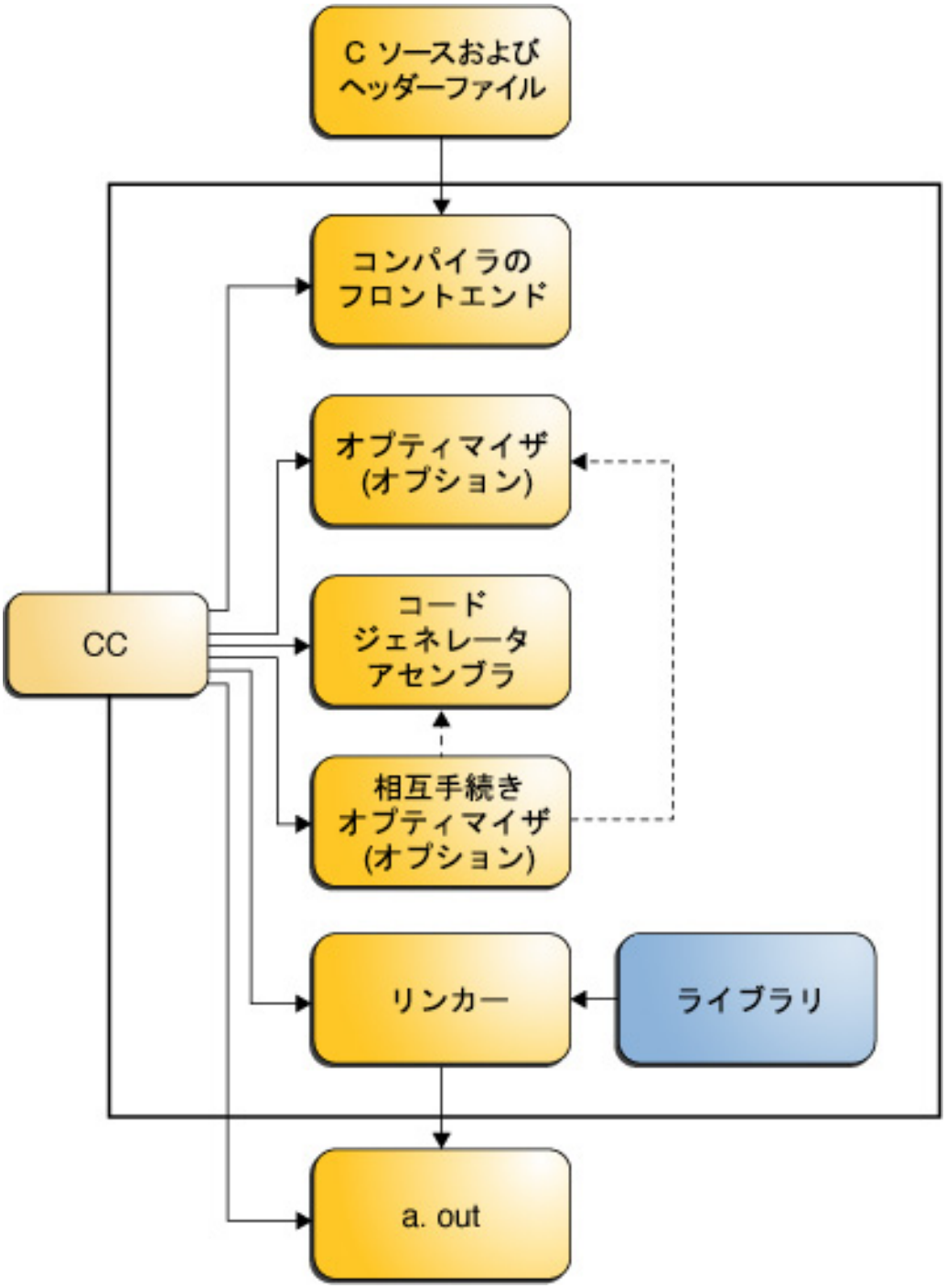
1.8 コンパイラの構成

C コンパイルシステムはコンパイラ、アセンブラ、およびリンカーから構成されます。cc コマンドは、コマンド行オプションでほかの指定をしないかぎり、この 3 つのコンポーネントをそれぞれ自動的に起動します。

表36「廃止オプションの表」では、cc で使用できるすべてのオプションについて説明しています。

次の図に C コンパイルシステムの構成を示します。

図 1 C コンパイルシステムの構成



次の表は、コンパイルシステムの構成要素を要約したものです。

表 1 C コンパイルシステムのコンポーネント

コンポーネント	説明	使用時の注意
`cpp`	プリプロセッサ	`-Xs` のみ
`acomp`	コンパイラ	
`ssbd`	静的同期バグ検出	(SPARC)
`iropt`	コードオプティマイザ	`-O`、`-xO2`、`-xO3`、`-xO4`、`-xO5`、`-fast`
`fbe`	アセンブラ	
`cg`	コード生成、インライン機能、アセンブラ	
`ipo`	内部手続きオプティマイザ	
`postopt`	ポストオプティマイザ	(SPARC)
`ube`	コードジェネレータ	(x86)
`ld`	リンカー	
`mcs`	コメントセクションの操作	`-mr`

1.9 C 関連のプログラミングツール

C プログラムの開発、保守、改良を行うときに役立つツールは多数あります。このマニュアルでは、C ともっとも密接に関係する `cscope` と `lint` の 2 つについて説明しますが、これらの各ツールにはマニュアルページも存在しています。

♦ ♦ ♦ 第 2 章

2 C コンパイラ実装に固有の情報

この章では、C コンパイラに固有の部分について説明します。言語の拡張と環境に分けて説明します。

C コンパイラは、新しい ISO C 規格である ISO/IEC 9899:2011 で規定されている C 言語のいくつかの機能と互換性があります。以前の C 規格である ISO/IEC 9899:1999 と互換性のあるコードをコンパイルする必要がある場合は、`-std=c99` を使用します。ISO/IEC 9899:1990 C 標準 (および修正 1) と互換性のあるコードをコンパイルする必要がある場合は、`-std=c89` を使用します。

2.1 SPARC Oracle Linux

Oracle Developer Studio C for SPARC Oracle Linux で提供されている `FLT_ROUNDS` の実装は、C 標準で指定されているとおりに動作します。これは、現在の丸めモードで適切な値を返します。これは、必ずしも標準 C ヘッダー `fenv.h` で定義された関数を説明するマニュアルページで指定された値 1 を返すとはかぎりません。

2.2 定数

このセクションには、Oracle Developer Studio C コンパイラに固有の定数に関連した情報が含まれています。

2.2.1 整数定数

次の表に示すように、10 進数、8 進数、16 進数の定数に接尾辞を付けて型を示すことができます。

表 2 データ型の接尾辞

接尾辞	型
`u` または `U`	`unsigned`

接尾辞	型
l または L	long
ll または LL	long long (-std=c89 -pedantic で使用できません)
lu、LU、Lu、lU、ul、uL、Ul、UL のいずれか	unsigned long
llu、LLU、LLu、llU、ull、ULL、uLL、Ull のいずれか	unsigned long long (-std=c89 -pedantic で使用できません)

-std=c99 または -std=c11 を指定すると、コンパイラは定数のサイズに応じて、その値を表すことのできる次のリストの最初の項目を使用します。

- int
- long int
- long long int

long long int で表現できる値の最大値を超えると、コンパイラは警告を発行します。

-std=c89 を指定すると、コンパイラが接尾辞を持たない定数の型を割り当てる場合、定数の大きさに応じて、コンパイラは次のリストの中から値が表現できる最初の項目を使用します。

- int
- long int
- unsigned long int
- long long int
- unsigned long long int

2.2.2 文字定数

エスケープシーケンスの発生しない複数バイト文字セットの値は、各文字の示す数値から派生しています。たとえば定数 '123' の持つ値は次のようになります。

0	'3'	'2'	'1'

あるいは 0x333231 です。

-Xs オプションを使用すると、値は次のようになります。

0	'1'	'2'	'3'

または 0x313233。

2.3 リンカースコープ指定子

次の宣言指定子は、extern シンボルの宣言と定義を隠すのに役立ちます。これらの指示子を使うと、リンカースコープのマップファイルは使用しなくてすみます。また、コマンド行で -xldscope を指定して、変数スコープのデフォルト設定を制御することもできます。詳細は、300 ページの「-xldscope={v}」を参照してください。

表 3 宣言指定子

値	意味
__global	シンボルは大域リンカースコープを持ち、このリンカースコープはもっとも制限の少ないリンカースコープです。シンボルに対する参照はすべて、シンボルを定義する最初の動的モジュール内の定義に結合します。このリンカースコープは、extern シンボルの現在のリンカースコープです。
__symbolic	シンボルはシンボリックリンカースコープを持ち、このリンカースコープは大域リンカースコープよりも制限されたリンカースコープです。リンクしている動的モジュール内のシンボルに対する参照はすべて、モジュール内に定義されたシンボルに結合します。モジュールの外側では、シンボルは大域と同じです。このリンカースコープはリンカーオプション -Bsymbolic に対応します。リンカーの詳細については、ld(1) を参照してください。
__hidden	シンボルは隠蔽リンカースコープを持ちます。隠蔽リンカースコープは、シンボリックリンカースコープや大域リンカースコープよりも制限されたリンカースコープです。動的モジュール内の参照はすべて、そのモジュール内の定義に結合します。シンボルはモジュールの外側では認識されません。

オブジェクトまたは関数は、より制限された指示子で再宣言することはできますが、制限のよりゆるやかな指示子で再宣言することはできません。シンボルは一度定義したら、異なる指示子で宣言することはできません。

__global はもっとも制限の少ないスコープ、__symbolic はより制限されたスコープ、__hidden はもっとも制限の多いスコープです。

2.4 スレッドローカルな記憶領域指示子

スレッドローカルの変数を宣言して、スレッドローカルストレージを利用します。スレッドローカルな変数の宣言は、通常の変数宣言に変数指示子 __thread を加えたものから成ります。詳細については、337 ページの「-xthreadvar[=o]」を参照してください。

__thread 指示子は、コンパイル対象のソースファイルにあるスレッド変数の最初の宣言に含める必要があります。

__thread 指示子を使用できるのは、静的記憶領域を持つオブジェクトの宣言内だけです。スレッド変数を静的に初期化する方法は、静的記憶領域のほかのオブジェクトの場合と同じです。

__thread 指示子で宣言する変数は、__thread 指示子なしで宣言する場合と同じリンカー結合を持っています。初期設定子のない宣言など、一時的な定義が含まれます。

スレッド変数のアドレスは定数ではありません。したがって、スレッド変数のアドレス演算子 (&) は実行時に評価され、現在のスレッドのスレッド変数のアドレスが返されます。結果的に、静的記憶領域のオブジェクトはスレッド変数のアドレスに動的に初期化されます。

スレッド変数のアドレスは、対応するスレッドの有効期間の間は安定しています。変数の有効期間内は、プロセス内の任意のスレッドがスレッド変数のアドレスを自由に使用できます。スレッドが終了したあとは、スレッド変数のアドレスを使用できません。スレッドの終了後は、そのスレッドの変数のアドレスはすべて無効となります。

2.5 浮動小数点 (非標準モード)

このセクションでは、IEEE 754 浮動小数点のデフォルト演算である「無停止」のサマリーを示します。アンダーフローは「段階的」です。詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: 数値計算ガイド』を参照してください。

「無停止」とは、ゼロによる除算、浮動小数点のオーバーフロー、不正演算例外などが生じても実行を停止しないことを意味します。たとえば次の式で、x はゼロ、y は正の数であるとします。

```
z = y / x;
```

デフォルトでは、z の値は +Inf になりますが、プログラムの実行は続けられます。ただし、-fnonstd オプションを指定すると、このコードはプログラムを終了させます (コアダンプなど)。

次の例では、段階的アンダーフローの動作方法を示します。次のようなコードを例として考えます。

```
x = 10;
for (i = 0; i < LARGE_NUMBER; i++)
x = x / 10;
```

ループをはじめて通ると x は 1 になり、2 回目で 0.1、3 回目で 0.01 と続き、やがてはマシンによって値を表現できる許容範囲の下限に到達します。次にループを実行すると、どうなるのでしょうか。

表現可能な最小の数が 1.234567e-38 であると仮定します。

次にループを実行すると、仮数部から「盗んだ」ものを指数部に「与える」ことによって数値が修正され、新しい値 1.23456e-39 になります。その次はさらに、1.2345e-40 と続いていきます。この動作は「段階的アンダーフロー」と呼ばれ、これがデフォルトになります。標準以外のモードでは、この「盗み」は発生せず、単に x がゼロに設定されます。

2.6 値としてのラベル

C コンパイラは、計算型 goto 文として知られる C の拡張機能を認識します。計算型 goto 文を使用すると、実行時に分岐先を判別することができます。次のように演算子 '&&' を使用して、ラベルのアドレスを取得し、void * 型のポインタに割り当てることができます。

```
void *ptr;
...
ptr = &&label1;
```

あとに続く goto 文は、ptr により label1 に分岐できます。

```
goto *ptr;
```

ptr は実行時に計算されるため、ptr は有効範囲内にある任意のラベルのアドレスを取得でき、goto 文はこのアドレスに分岐することができます。

ジャンプテーブルを実装するには、計算型 goto 文を次の方法で使用します。

```
static void *ptrarray[] = { &&label1, &&label2, &&label3 };
```

これで、次のようにインデックスを指定して配列要素を選択できます。

```
goto *ptrarray[i];
```

ラベルのアドレスは、現在の関数スコープからのみ計算できます。現在の関数以外のラベルについてアドレスを取得しようとすると、予測できない結果になります。

ジャンプテーブルは switch 文と同様の働きをしますが、ジャンプテーブルではプログラムフローの追跡がより困難になる可能性があります。顕著な相違点は、switch 文のジャンプ先はすべて、予約語 switch から見て順方向になることです。計算型 goto を使用してジャンプテーブルを実装すれば、順方向、逆方向のどちらにも分岐させることができます。

```
#include <stdio.h>
void foo()
{
  void *ptr;

  ptr = &&label1;

  goto *ptr;

  printf("Failed!\n");
  return;

  label1:
  printf("Passed!\n");
  return;
}

int main(void)
{
```

```
  void *ptr;

  ptr = &&label1;

  goto *ptr;

  printf("Failed!\n");
  return 0;

  label1:
  foo();
  return 0;
}
```

次の例では、プログラムフローの制御にジャンプテーブルを使用しています。

```
#include <stdio.h>

int main(void)
{
  int i = 0;
  static void * ptr[3]={&&label1, &&label2, &&label3};

  goto *ptr[i];

  label1:
  printf("label1\n");
  return 0;

  label2:
  printf("label2\n");
  return 0;

  label3:
  printf("label3\n");
  return 0;
}

%example: a.out
%example: label1
```

計算型 `goto` の別の利用は、スレッド化されたコードのインタプリタとしてです。高速ディスパッチを行うために、インタプリタ関数の範囲内にあるラベルアドレスを、スレッド化されたコードに格納することができます。

2.7 long long データ型

`-std=c89` を使用してコンパイルすると、Oracle Developer Studio C コンパイラは、データ型 `long` に似たデータ型 `long long` および `unsigned long long` を含めます。`-m32` を使用してコ

ンパイルすると、long long データ型には 64 ビットの情報が格納され、long には 32 ビットの情報が格納されます。-m64 を使用してコンパイルすると、long データ型には 64 ビットが格納されます。long long データ型は -std=c89 -pedantic では使用できません (警告が発行されます)。

2.7.1 long long データ型の入出力

long long データ型を出力または入力するには、変換指定子の前に ll の接頭辞を付けてください。たとえば、long long データ型を持つ変数 llvar を符号付き 10 進形式で出力するには、次のように指定します。

```
printf("%lld\n", llvar);
```

2.7.2 通常の算術変換

一部のバイナリ演算子は、結果の型でもある共通の型を生成するために、オペランドの型を変換します。これらの変換は、通常の算術変換と呼ばれます。-std=c11 の場合、通常の算術変換は 9899:2011 ISO/IEC C プログラミング言語規格に定義されています。-std=c99 の場合、通常の算術変換は 9899:1999 ISO/IEC C プログラミング言語規格に定義されています。-std=c89 -pedantic の場合、通常の算術変換は、9899:1990 ISO/IEC C プログラミング言語に定義されています。-std=c89 -pedantic=no および -Xs フラグの場合、通常の算術変換は、次のように定義されます。

- どちらか一方のオペランドが long double 型である場合、もう一方のオペランド は long double に変換されます。
- 一方のオペランドが double 型を持つ場合、もう一方のオペランドは double に変換されます。
- 一方のオペランドが float 型を持つ場合、もう一方のオペランドは float に変換されます。
- これ以外の場合は、汎整数拡張が両方のオペランドで実行されます。次の規則が適用されます。
  - 一方のオペランドが unsigned long long int 型を持つ場合、もう一方の演算子は unsigned long long int に変換されます。
  - 一方のオペランドが long long int 型を持つ場合、もう一方の演算子は long long int に変換されます。
  - 一方のオペランドが unsigned long int 型を持つ場合、もう一方の演算子は unsigned long int に変換されます。
  - それ以外の場合、-m64 でコンパイルするとき、1 つのオペランドが long int 型を持ち、もう一方が unsigned int 型を持つ場合、両方のオペランドは unsigned long int に変換されます。

- 一方のオペランドが `long int` 型を持つ場合、もう一方のオペランドは `long int` に変換されます。
- 一方のオペランドが `unsigned int` 型を持つ場合、もう一方のオペランドは `unsigned int` に変換されます。
- それ以外の場合、両方のオペランドが `int` 型を持ちます。

2.8 Switch 文内の Case 範囲

標準 C では、`switch` 文の case ラベルには 1 つの値しか関連付けることができません。Oracle Developer Studio C では、*case 範囲*と呼ばれる、一部のコンパイラにある拡張機能を使用できます。

case 範囲は、値範囲を指定し、個別の case のラベルに関連付けます。case 範囲の構文は、次のとおりです。

case *low* **...** *high* **:**

case 範囲は、*low* から *high* で指定された範囲内にある各値に対して case ラベルを指定した場合と同じ動作をします。(*low* と *high* が等しい場合は、case 範囲はただ 1 つの値を指定します)。下限と上限の値は、C 規格の要件、具体的には、有効な整数型の定数式である必要があるという要件 (C 規格 6.8.4.2) に準拠している必要があります。case 範囲と case ラベルは、自由に混在することができ、1 つの `switch` 文内で複数の case 範囲を指定できます。

次のプログラミング例は、`switch` 文に含まれる case 範囲を示しています。

```
enum kind { alpha, number, white, other };
enum kind char_class(char c)
{
     enum kind result;
     switch(c) {
         case 'a' ... 'z':
         case 'A' ... 'Z':
             result = alpha;
             break;
         case '0' ... '9':
             result = number;
             break;
         case ' ':
         case '\n':
         case '\t':
         case '\r':
         case '\v':
             result = white;
             break;
         default:
             result = other;
             break;
```

```
    }
    return result; }
```

case ラベルに関する既存の要件以外のエラー条件は、次のとおりです。

- low の値が high の値より大きい場合、コンパイラはエラーメッセージを生成してコードを拒否します 他のコンパイラの動作は一貫していないので、他のコンパイラでコンパイルするときにプログラムが異なる方法で動作するわけではないことを保証する唯一の方法は、エラー状況です。
- ある case ラベルの値が、switch 文の中ですでに使用された case 範囲内の範囲に含まれている場合、コンパイラはエラーメッセージを生成してコードを拒否します。
- case 範囲どうしの範囲が重複している場合、コンパイラはエラーメッセージを生成してコードを拒否します。

case 範囲の終点が数値リテラルである場合、省略記号 (`...`) の前後に半角スペースを残し、ピリオドのいずれかが小数点として扱われることを防止してください。

例:

```
case 0...4;   // error
case 5 ... 9; // ok
```

2.9 表明

次の書式で指定します。

`#assert` *predicate (token-sequence)*

token-sequence は、表明の名前空間 (マクロ定義用の空間から分離されている) にある述語と関連付けられます。述語は識別子トークンでなければいけません。

`#assert` *predicate*

これは*述語*が存在していることを表明しますが、それにトークン列を関連付けることはしません。

`-pedantic` が有効でない場合、コンパイラはデフォルトで、次の事前定義された述語を提供します。

```
#assert system (unix)
#assert machine (sparc)
#assert machine (i386)(x86)
#assert cpu (sparc)
#assert cpu (i386)(x86)
```

`-pedantic` が有効でない場合、`lint` はデフォルトで、次の事前定義述語を提供します。

```
#assert lint (on)
```

表明は #unassert を使用して削除できます。この場合、assert と同じ構文が使用されます。引数なしで #unassert を使用すると述語に対するすべての表明が削除され、表明を指定すればその表明だけが削除されます。

表明は、次の構文を持つ #if 文でテストすることができます。

```
#if #predicate(non-empty token-list)
```

たとえば次の行を使って、事前定義された述語 system をテストできます。これは真と評価されます。

```
#if #system(unix)
```

2.10 サポートされる属性

コンパイラには、互換性を保つために次の属性 (__attribute__ ((*keyword*))) が実装されています。属性キーワードを二重下線で囲む記法 *__keyword__* も受け入れられます。

alias	名前を、宣言された関数または変数名の別名にします
aligned	#pragma align とほぼ同等です。警告を生成し、可変長配列について使用される場合は無視されます。
always_inline	#pragma inline および -xinline と同義です
cleanup (クリーンアップ関数)	関連付けられた変数がスコープ外に出た (その変数が宣言されているブロックから出た) ときに、属性で指定されている関数が実行されるようにします。これは自動関数スコープ (ローカル) 変数にのみ適用でき、静的ストレージ存続期間を持つパラメータや変数には適用できません。この関数は、その変数と互換性のある型へのポインタである 1 つのパラメータを受け取る必要があります。この関数の戻り値 (存在する場合) は無視されます。クリーンアップ関数が正常に復帰しなかった場合の動作は未定義です。
const	#pragma no_side_effect と同等です
constructor	コンストラクタが 1 回しか呼び出されない点を除き、#pragma init と同等です。
deprecated(*msg*)	変数または関数がソースファイルの任意の場所で使用される場合は警告になります。オプションの引数 *msg* は文字列でなければならず、警告メッセージが発行された場合はそのメッセージに含まれます。
destructor	#pragma fini と同等です

`malloc`	`#pragma returns_new_memory` と同等です
`noinline`	`#pragma no_inline` および `-xinline` と同義です
`noreturn`	`#pragma does_not_return` と同義です
`pure`	`#pragma does_not_write_global_data` と同等です
`packed`	`#pragma pack()` と同等です
`returns_twice`	`#pragma unknown_control_flow` と同等です
`tls_model`	スレッドローカルなストレージモデルを設定します。`tls_model` 引数は、`global-dynamic`、`local-dynamic`、`initial-exec`、`local-exec` のいずれかにする必要があります。
`vector_size`	変数または (`typedef` を使用して作成された) 型の名前がベクトルを表していることを示します。
`visibility`	31 ページの「リンカースコープ指定子」で説明されているように、リンカースコープを提供します。構文: `__attribute__((visibility("` *visibility-type* `")))`。ここで、*visibility-type* は次のいずれかです。 `default` — `__global` リンカースコープと同じです `hidden` — `__hidden` リンカースコープと同じです `internal` — `__symbolic` リンカースコープと同じです
`weak`	`#pragma weak` と同等です

2.10.1 __has_attribute 関数形式のマクロ

事前定義された関数形式のマクロ

```
__has_attribute(attr)
```

attr がサポートされる属性の場合、1 に評価されます。それ以外の場合は 0 に評価されます。
使用例:

```
#ifndef __has_attribute // if we don't have __has_attribute, ignore it
    #define __has_attribute(x) 0
#endif
#if __has_attribute(deprecated)
   #define DEPRECATED __attribute__((deprecated))
```

```
#else
   #define DEPRECATED // attribute "deprecated" not available
#endif
void DEPRECATED old_func(int); // use the attribute if available
```

2.11 警告とエラー

#error および #warning プリプロセッサディレクティブを使用すると、コンパイル時の診断を生成できます。

#error *token-string*	エラー診断 *token-string* を発行して、コンパイルを終了します。
#warning *token-string*	警告診断 *token-string* を発行してコンパイルを続行します

2.12 プラグマ

次の形式の前処理行は、実装定義アクションを指定します。

#pragma *pp-tokens*

次の #pragmas はコンパイルシステムに認識されます。認識されなかったプラグマは無視されます。-v オプションを使用すると、認識されないプラグマに関する警告が生成されます。

2.12.1 align

#pragma align *integer* (*variable*[, *variable*])

整列プラグマで指定した変数のメモリーはデフォルト値によらず、すべて *integer* バイト境界にそろえられます。ただし、次の制限があります。

- *integer* の値は、1 から 128 までの 2 の累乗でなければいけません。有効な値は、1、2、4、8、16、32、64、および 128 です。
- *variable* は大域または静的変数です。
- 指定された境界がデフォルトより小さい場合は、デフォルトが優先します。
- プラグマ行は、それが示す変数の宣言よりも先になければいけません。それ以外の場合は無視されます。

■ プラグマ行で記述されているが、そのあとで宣言されていない変数は無視されます。例:

```
#pragma align 64 (aninteger, astring, astruct)
int aninteger;
static char astring[256];
struct astruct{int a; char *b;};
```

2.12.2 c99

```
#pragma c99(“implicit” | “no%implicit”)
```

このプラグマは、暗黙的な関数宣言の診断を制御します。c99 プラグマの値が "implicit" に設定されている場合 (引用符を使用)、コンパイラが暗黙的な関数宣言を検出すると、警告が生成されます。c99 プラグマの値が "no%implicit" に設定されている場合 (引用符を使用)、プラグマの値がリセットされるまで、コンパイラは暗黙的な関数宣言をサイレントに受け入れます。

-std オプションの値は、このプラグマのデフォルトの状態に影響を与えます。-std=c11 または -std=c99 の場合、デフォルト状態は #pragma c99(“implicit”) です。-std=c89 の場合、デフォルト状態は #pragma c99(“no%implicit”) です。

2.12.3 does_not_read_global_data

```
#pragma does_not_read_global_data (funcname [, funcname])
```

リストに指定したルーチンが直接にも間接にも大域データを読み取らないことを表明します。この動作により、そうしたルーチンへの呼び出しの前後にあるコードがより適切に最適化されます。具体的には、代入文やストア命令をそうした呼び出しの前後に移動することができます。

指定した関数は、このプラグマの前にプロトタイプまたは空のパラメータリストで宣言する必要があります。大域アクセスに関する表明が真でない場合は、プログラムの動作は未定義になります。

2.12.4 does_not_return

```
#pragma does_not_return (funcname [, funcname])
```

指定した関数への呼び出しが復帰しないことをコンパイラに表明します。この場合、コンパイラは、その仮定に一貫性を持つ最適化を実行できます。たとえば、レジスタの存続期間が呼び出し元で終了する場合は、さらに最適化率を高めることができます。

指定した関数が復帰した場合は、プログラムの動作は未定義になります。次の例に示すように、このプラグマは、指定した関数をプロトタイプまたは空のパラメータリストで宣言したあとでのみ許可されます。

```
extern void exit(int);
#pragma does_not_return(exit)

extern void __assert(int);
#pragma does_not_return(__assert)
```

2.12.5 does_not_write_global_data

```
#pragma does_not_write_global_data (funcname [, funcname])
```

リストに指定したルーチンが直接にも間接にも大域データを書き込まないことを表明します。この動作により、そうしたルーチンへの呼び出しの前後にあるコードがより適切に最適化されます。具体的には、代入文やストア命令をそうした呼び出しの前後に移動することができます。

指定した関数は、このプラグマの前にプロトタイプまたは空のパラメータリストで宣言する必要があります。大域アクセスに関する表明が真でない場合は、プログラムの動作は未定義になります。

2.12.6 dumpmacros

```
#pragma dumpmacros(value[,value...])
```

マクロがプログラム内でどのように動作しているかを調べたいときに、このプラグマを使用します。このプラグマは、定義済みマクロ、解除済みマクロ、実際の使用状況といった情報を提供します。マクロの処理順序に従って、標準エラー (`stderr`) に出力します。`dumpmacros` プラグマは、ファイルが終わるまで、または `#pragma end_dumpmacros` に到達するまで、有効です。43 ページの「end_dumpmacros」を参照してください。次の表に、*value* の可能な値を示します。

値	意味
`defs`	すべての定義済みマクロを出力します
`undefs`	すべての解除済みマクロを出力します
`use`	使用されているマクロの情報を出力します
`loc`	`defs`、`undefs`、`use` の位置 (パス名と行番号) も出力します
`conds`	条件付き指令で使用したマクロの使用情報を出力します
`sys`	システムヘッダーファイルのマクロについて、すべての定義済みマクロ、解除済みマクロ、使用状況も出力します

注記 - サブオプション loc、conds、sys は、オプション defs、undefs、use の修飾子です。loc、conds、および sys は、単独では効果はありません。たとえば #pragma dumpmacros (loc,conds,sys) には、何も効果はありません。

dumpmacros プラグマとコマンド行オプションの効果は同じですが、プラグマはコマンド行オプションをオーバーライドします。283 ページの「-xdumpmacros[=*value*[,*value*...]]」を参照してください。

dumpmacros プラグマは入れ子にならないので、次のコードでは #pragma end_dumpmacros が処理されるとマクロ情報の出力が停止します。

```
#pragma dumpmacros(defs, undefs)
#pragma dumpmacros(defs, undefs)
...
#pragma end_dumpmacros
```

dumpmacros プラグマの効果は累積的です。次のものは、

```
#pragma dumpmacros(defs, undefs)
#pragma dumpmacros(loc)
```

次と同じ効果を持ちます。

```
#pragma dumpmacros(defs, undefs, loc)
```

オプション #pragma dumpmacros(use,no%loc) を使用した場合、使用したマクロそれぞれの名前が一度だけ出力されます。オプション #pragma dumpmacros(use,loc) を使用した場合、マクロを使用するたびに位置とマクロ名が出力されます。

2.12.7 end_dumpmacros

```
#pragma end_dumpmacros
```

このプラグマは、dumpmacrospragma が終わったことを通知し、マクロ情報の出力を停止します。dumpmacros プラグマ終了時に end_dumpmacros プラグマを使用しなかった場合、dumpmacros プラグマはファイルが終わるまで出力を生成し続けます。

2.12.8 error_messages

```
#pragma error_messages (on|off|default, tag… tag)
```

error_messages プラグマは、ソースプログラム内で、C コンパイラおよび lint が発行するメッセージの制御を提供します。C コンパイラでは、警告メッセージに対してのみ有効です。

- `#pragma error_messages (on,` *tag… tag*`)`

  `on` オプションは、先行するすべての `#pragma error_messages` オプション (`off` オプションなど) のスコープを終了し、`-erroff` オプションの効果をオーバーライドします。

- `#pragma error_messages (off,` *tag… tag*`)`

  `off` オプションは、C コンパイラまたは lint プログラムが指定トークンから始まる特定のメッセージを発行することを禁止します。指定したエラーメッセージに対するプラグマのスコープは、別の `error_messages` プラグマによって無効にされるか、コンパイルが終了するまで有効なままです。

- `#pragma error_messages (default,` *tag… tag*`)`

  `default` オプションは、指定タグについて、先行する `#pragma error_messages` ディレクティブのスコープを終了します。

- `#pragma error_messages will not suppress messages issued by lint pass 2.`

  `lint` パスの詳細は、108 ページの「`lint` 使用方法」を参照してください。

2.12.9 fini

`#pragma fini (`*f1[,f2…fn]*

`main()` ルーチンを呼び出したあと、*f1* から *fn* (終了関数) までの関数を呼び出します。そのような関数では、型が `void` で、かつ引数を一切受け入れないことが期待されます。これらが呼び出されるのは、プログラムがプログラム制御下で終了したとき、または包含元の共有オブジェクトがメモリーから削除されたときです。初期化関数の場合と同様、終了関数もリンクエディタによって処理された順に実行されます。

大域プログラム状態が初期化関数の影響を受ける場合には注意が必要です。たとえばシステムライブラリ終了関数を使用したときに何が発生するかがインタフェースに明示的に規定されていないかぎり、システムライブラリ初期化関数によって変更される可能性がある `errno` の値などの大域状態情報をすべて取得し、復元するようにしてください。

このような関数は `#pragma fini` 指令の中に登場するたびに、1 回呼び出されます。

2.12.10 hdrstop

`#pragma hdrstop`

同じプリコンパイル済みヘッダーファイルを共有すべき各ソースファイルの活性文字列 (viable prefix) の最後を識別するために、hdrstop プラグマを最後のヘッダーファイルのあとに置く必要があります。たとえば次のファイルがあるとします。

```
example% cat a.c
```

```
#include "a.h"
#include "b.h"
#include "c.h"
#include <stdio.h>
#include "d.h"
.
.
.
example% cat b.h
#include "a.h"
#include "b.h"
#include "c.h"
```

活性文字列は c.h で終わるので、各ファイルの c.h のあとに #pragma hdrstop を挿入します。

#pragma hdrstop は、cc コマンドで指定されるソースファイルの活性文字列の最後にのみ出現する必要があります。#pragma hdrstop を include ファイル内に指定しないでください。

2.12.11 ident

#pragma ident *string*

実行可能プログラムの .comment セクション内に任意の *string* を格納します。

2.12.12 init

#pragma init (*f1[,f2…fn]*)

main() を呼び出す前に、*f 1* から *f n* までの関数 (初期化関数) を呼び出します。そのような関数では、型が void で、かつ引数を一切受け入れないことが期待されます。これらは、プログラムの実行開始時にそのメモリーイメージを構築している間に呼び出されます。共有オブジェクトの初期設定子は、共有オブジェクトをメモリーに入れる操作中、つまりプログラムの起動時または dlopen() などの一部の動的ロード時のいずれかに実行されます。初期化関数の呼び出しを順序付ける方法は、それがリンクエディタによって動的または静的に処理される順序に依存します。

初期化関数が大域プログラム状態に影響を与えるときは特に注意してください。たとえばシステムライブラリを終了関数として使用したときに何が発生するかがインタフェースに明示的に規定されていないかぎり、システムライブラリ初期化関数によって変更される可能性がある errno の値などの大域状態情報をすべて取得し、復元するようにしてください。

このような関数は #pragma init 指令の中に登場するたびに、1 回呼び出されます。

2.12.13 inline

```
#pragma [no_]inline (funcname[,funcname])
```

指定したルーチン名のインライン化を制御します。このプラグマはファイル全体に対して有効です。このプラグマでは、大域インライン化制御のみが許可され、呼び出し元固有の制御は許可されません。

`#pragma inline` は、現在のファイル内の呼び出しのうち、プラグマ内でリストされているルーチンのリストに一致するものをインライン化するヒントを、コンパイラに提供します。このヒントは、状況によっては無視されることがあります。たとえば、関数本体が別のモジュールに存在していて、crossfile オプションが使用されていない場合などです。

`#pragma no_inline` は、現在のファイル内の呼び出しのうち、プラグマにリストされたルーチンのリストに一致するものをインライン化しないというヒントを、コンパイラに提供します。

次の例に示すように、`#pragma inline` および `#pragma no_inline` は、関数がプロトタイプまたは空のパラメータリストで宣言されたあとでのみ許可されます。

```
static void foo(int);
static int bar(int, char *);
#pragma inline(foo, bar)
```

詳細は、コンパイラオプション `-xldscope`、`-xinline`、`-xO`、および `-xipo` の説明を参照してください。

2.12.14 int_to_unsigned

```
#pragma int_to_unsigned (funcname)
```

`-Xt` または `-Xs` モードで `unsigned` の型を返す関数について、その関数の戻り値が型 `int` になるように変更します。

2.12.15 must_have_frame

```
#pragma must_have_frame(funcname[,funcname])
```

このプラグマは、(System V ABI で定義されているとおり) 完全なスタックフレームを必ず持つように、指定した関数リストをコンパイルすることを要求します。このプラグマで関数を列挙する前に、関数のプロトタイプを宣言する必要があります。

```
extern void foo(int);
```

```
extern void bar(int);
#pragma must_have_frame(foo, bar)
```

このプラグマを使用できるのは、指定した関数のプロトタイプの宣言後のみに限定されます。プラグマは関数の最後より先に記述する必要があります。

```
void foo(int) {
  .
  #pragma must_have_frame(foo)
  .
  return;
  }
```

2.12.16 nomemorydepend

```
#pragma nomemorydepend
```

(SPARC) このプラグマは、ループのどの繰り返し内でも、同じメモリーアドレスへの参照によって引き起こされるメモリーの依存関係が発生しないように指定します。このプラグマは、コンパイラがループの 1 回の繰り返しの中で、より効率的に命令をスケジュールすることを許可します。ループの繰り返しの中でメモリーの依存があると、プログラムの実行結果は未定義になります。コンパイラはこの情報をレベル 3 以上の最適化に利用します。

このプラグマのスコープは、プラグマから始まり、次のブロックの先頭、現在のブロック内の次の `for` ループ、現在のブロックの末尾のいずれか最初に発生した状況で終わります。プラグマは、スコープの終端に到達した時点で最初に見つかった `for` ループに適用されます。

2.12.17 no_side_effect

```
#pragma no_side_effect(funcname[,funcname…])
```

funcname には、現行の翻訳単位内の関数名を指定します。関数は、プラグマの前にプロトタイプまたは空のパラメータリストで宣言する必要があります。またプラグマはその関数の定義より前に指定されていなければいけません。指定された関数 *funcname* について、このプラグマは、その関数がどのような種類の副作用も一切持たず、渡された引数のみに依存する結果値を返すことを宣言します。さらに、*funcname* とそこから呼び出されたすべての子孫関数は、次のように振る舞います。

- 呼び出し時点で呼び出し側が認識できるプログラム状態の一部に、読み出しまたは書き込みのためにアクセスすることはありません。
- 入出力を実行しません。
- 呼び出し時点で認識できるプログラム状態のどの部分も変更しません。

コンパイラはこの情報を、その関数を用いる最適化に利用することができます。関数に副作用があると、この関数を呼び出すプログラムの実行結果は未定義になります。コンパイラはこの情報をレベル 3 以上の最適化に利用します。

2.12.18 opt

`#pragma opt` *level* (*funcname[,funcname]*)

funcname には、現行の翻訳単位内で定義された関数名を指定します。*level* の値は、指定した関数に対する最適化レベルです。0、1、2、3、4、または 5 の最適化レベルを割り当てることができます。*level* を 0 に設定することで、最適化を無効にできます。関数は、プラグマの前にプロトタイプまたは空のパラメータリストで宣言する必要があります。プラグマは、最適化する関数の定義の前に存在する必要があります。

このプラグマにリストされているすべての関数の最適化のレベルが `-xmaxopt` の値に下げられます。`-xmaxopt=off` の場合、このプラグマは無視されます。

2.12.19 pack

`#pragma pack(`*n*`)`

`#pragma pack(`*n*`)` を使用すると、構造体または共用体のメンバーの pack に影響を及ぼします。構造体または共用体のメンバーはデフォルトでは、char 型の場合は 1 バイト、short 型の場合は 2 バイト、整数型の場合は 4 バイト、といった具合に、その自然境界で整列されます。*n* が存在する場合、それは、任意の構造体または共用体メンバーに対するもっとも厳格な自然整列を指定する 2 の累乗でなければいけません。ゼロは受け入れられません。

`#pragma pack(`*n*`)` 指令は、次の pack 指令までのすべての構造体または共用体の定義に適用されます。別の翻訳単位で同じ構造体または共用体に対して異なる #pragma pack の定義が行われている場合、プログラムは予期しない形でコンパイルに失敗することがあります。特に、`#pragma pack(`*n*`)` は、事前にコンパイルされたライブラリのインタフェースを定義するヘッダーをインクルードする前には使用しないでください。`#pragma pack(`*n*`)` は、プログラムコード内の境界整列を変更するすべての構造体または共用体の直前に挿入することをお勧めします。そして、その構造体の直後に `#pragma pack( )` を続けてください。

`#pragma pack(`*n*`)` を使用すると、構造体または共用体のメンバーの境界整列を指定できます。たとえば、`#pragma pack(2)` を指定すると、`int`、`long`、`long long`、`float`、`double`、`long double` およびポインタが、それぞれの自然整列境界ではなく、2 バイト境界に整列されます。

n がプラットフォームでもっとも厳密な整列を指示する値 (`-m32` の x86 では 4、`–m32` の SPARC では 8、`-m64` の SPARC では 32) か、それより大きな値の場合は、自然境界整列が有効になります。*n* が省略された場合も、メンバーは自然境界整列に戻ります。

#pragma pack を使用する場合、構造体または共用体自身の整列条件は、その構造体または共用体でより厳密に境界整列されるメンバーの整列条件と同一です。したがって、その struct または union の任意の宣言は、pack の境界整列となります。たとえば、char 型だけの struct は整列の制限はありませんが、double 型を含む struct は 8 バイトの境界上に並びます。

注記 - #pragma pack を使用して構造体または共用体のメンバーを自然境界以外の境界で整列させると、通常、これらのフィールドへのアクセスが発生した場合に SPARC 上でバスエラーが起きます。このエラーを回避するには、必ず -xmemalign オプションも指定してください。このようなプログラムをコンパイルする最適な方法については、306 ページの「-xmemalign=*ab*」を参照してください。

```
#pragma pack(push[,n])
```

現在の整列設定を内部スタックにプッシュし、オプションで *n* の指定された値で新しい整列を設定するには、#pragma pack(push[,*n*]) を使用します。

```
#pragma pack(pop)
```

整列を以前のプッシュで内部スタックに保存された最後の値に設定し、そのスタックエントリを削除 (またはポップ) するには、#pragma pack(pop) を使用します。

注記 - #pragma pack(*n*) は、内部スタックに影響を与えません。

2.12.20 pipeloop

```
#pragma pipeloop(n)
```

このプラグマは、引数 *n* に正の整定数または 0 を受け入れます。このプラグマは、ループがパイプライン化可能で、ループによる依存の最小の依存距離が *n* であることを指定します。距離が 0 の場合、そのループは実質的には Fortran 形式の doall ループで、ターゲットプロセッサ上でパイプライン処理するべきであることを意味します。距離が 0 より大きい場合、コンパイラは *n* 回だけの連続繰り返しでパイプラインを試みます。コンパイラはこの情報をレベル 3 以上の最適化に利用します。

このプラグマのスコープは、プラグマから始まり、次のブロックの先頭、現在のブロック内の次の for ループ、現在のブロックの末尾の中で最初に発生した状況で終わります。プラグマは、スコープの終端に到達した時点で最初に見つかった for ループに適用されます。

2.12.21 rarely_called

```
#pragma rarely_called(funcname[,funcname])
```

指定した関数があまり使用されないというヒントをコンパイラに与えます。この場合、コンパイラは、プロファイル収集段階のオーバーヘッドなしで、ルーチンの呼び出し元でプロファイルフィードバック方式の最適化を行うことができます。このプラグマはヒントなので、コンパイラは、このプラグマに基づく最適化を行わないことを選択できます。

指定した関数は、このプラグマの前にプロトタイプまたは空のパラメータリストで宣言する必要があります。次の例は、`#pragma rarely_called` を示したものです。

```
extern void error (char *message);
#pragma rarely_called(error)
```

2.12.22 redefine_extname

`#pragma redefine_extname` *old_extname new_extname*

このプラグマにより、オブジェクトコード中で外部定義された *old_extname* の名前が *new_extname* に置換されます。この結果、リンク時にのみリンカーは名前 *new_extname* を認識します。関数定義、初期設定子、または式のいずれかとして *old_extname* を最初に使用したあと、`#pragma redefine_extname` が指定されていると、結果は未定義になります。`-Xs` のモードではこのプラグマはサポートされていません。

`#pragma redefine_extname` を使用できる場合、コンパイラは、事前に定義されたマクロの `__PRAGMA_REDEFINE_EXTNAME` の定義を提供するため、これを使用して、`#pragma redefine_extname` の有無に関係なく機能する移植可能なコードを作成できます。

`#pragma redefine_extname` は、関数名を変更できないときに関数インタフェースを効率的に再定義する手段を提供します。たとえば、既存プログラムとの互換性のために元の関数定義と、新しいプログラムで使用するために同じ関数の新しい定義をライブラリ内で保持する必要がある場合は、その新しい関数定義を新しい名前でライブラリに追加できます。その後、その関数を宣言するヘッダーファイルが `#pragma redefine_extname` を使用するので、その関数のすべての使用は、その関数の新しい定義にリンクされます。

```
#if    defined(__STDC__)

#ifdef __PRAGMA_REDEFINE_EXTNAME
extern int myroutine(const long *, int *);
#pragma redefine_extname myroutine __fixed_myroutine
#else /* __PRAGMA_REDEFINE_EXTNAME */

static int
myroutine(const long * arg1, int * arg2)
{
    extern int __myroutine(const long *, int*);
    return (__myroutine(arg1, arg2));
}
#endif /* __PRAGMA_REDEFINE_EXTNAME */

#else /* __STDC__ */
```

```
#ifdef __PRAGMA_REDEFINE_EXTNAME
extern int myroutine();
#pragma redefine_extname myroutine __fixed_myroutine
#else /* __PRAGMA_REDEFINE_EXTNAME */

static int
myroutine(arg1, arg2)
    long *arg1;
    int *arg2;
{
    extern int __fixed_myroutine();
    return (__fixed_myroutine(arg1, arg2));
}
#endif /* __PRAGMA_REDEFINE_EXTNAME */

#endif /* __STDC__ */
```

2.12.23 returns_new_memory

```
#pragma returns_new_memory (funcname[,funcname])
```

指定した関数の戻り値が呼び出し元のどのメモリーとも別名処理されないことを表明します。つまり、この呼び出しでは、新しいメモリー位置が返されます。この情報は、オプティマイザがポインタ値の追跡やメモリー位置の明確化をより適切に行うことを可能にするため、スケジューリング、パイプライン化、およびループの並列化が改善されます。表明が偽の場合には、プログラムの動作は未定義になります。

次の例に示すように、このプラグマは、指定した関数をプロトタイプまたは空のパラメータリストで宣言したあとでのみ許可されます。

```
void *malloc(unsigned);
#pragma returns_new_memory(malloc)
```

2.12.24 unknown_control_flow

```
#pragma unknown_control_flow (funcname[,funcname])
```

呼び出し元のフローグラフを変更する手続きを記述するには、`#pragma unknown_control_flow` 指令を使用します。通常、この指令には `setjmp()` のような関数の宣言が伴います。Oracle Solaris のシステム上では、インクルードファイル `<setjmp.h>` に次のコードが含まれています。

```
extern int setjmp();
#pragma unknown_control_flow(setjmp)
```

`setjmp()` のような特性を持つほかの関数も、同様に宣言する必要があります。

原則として、この属性を認識するオプティマイザは、制御フローグラフに適切な境界を挿入できます。これによって、`setjmp()` を呼び出す関数内で関数呼び出しを安全に処理しながら、影響を受けないフローグラフ部分のコードを最適化する機能を保持します。

指定した関数は、このプラグマの前にプロトタイプまたは空のパラメータリストで宣言する必要があります。

2.12.25 unroll

```
#pragma unroll (unroll_factor)
```

このプラグマは、引数 *unroll_factor* に正の整定数を受け入れます。*unroll_factor* を 1 以外に設定することは、指定されたループを指定の係数で展開すべきである (可能なとき) という、コンパイラに対するヒントとして機能します。*unroll_factor* が 1 の場合、この指令は、コンパイラにループを展開しないよう指示します。コンパイラはこの情報をレベル 3 以上の最適化に利用します。

このプラグマのスコープは、プラグマから始まり、次のブロックの先頭、現在のブロック内の次の `for` ループ、現在のブロックの末尾のいずれか最初に発生した状況で終わります。プラグマは、スコープの終端に到達した時点で最初に見つかった `for` ループに適用されます。

2.12.26 warn_missing_parameter_info

```
#pragma [no_]warn_missing_parameter_info
```

`#pragma warn_missing_parameter_info` を指定すると、パラメータ型情報が含まれない関数宣言を持つ関数の呼び出しに対して警告が発生します。次の例を考えてみましょう。

```
example% cat -n t.c
     1    #pragma warn_missing_parameter_info
     2
     3    int foo();
     4
     5    int bar () {
     6
     7       int i;
     8
     9       i = foo(i);
    10
    11       return i;
    12    }
% cc t.c -c -errtags
"t.c", line 9: warning: function foo has no prototype (E_NO_MISSED_PARAMS_ALLOWED)
example%
```

`#pragma no_warn_missing_parameter_info` は、それ以前の `#pragma warn_missing_parameter_info` を無効にします。

デフォルトでは、`#pragma no_warn_missing_parameter_info`は有効です。

2.12.27 weak

`#pragma weak` *symbol1 [= symbol2]*

このプラグマは「*弱い大域シンボル*」を定義します。これは主に、ライブラリの構築時に使用されます。リンカーは弱いシンボルを解決できなくてもエラーメッセージを表示しません。

`#pragma weak` *symbol*

これは *symbol* を弱いシンボルとして定義しています。*symbol* の定義が見つからなくても、リンカーはエラーメッセージ等を出さなくなります。

`#pragma weak` *symbol1* `=` *symbol2*

これは *symbol1* を、*symbol2* の別名である弱いシンボルと定義します。この形式のプラグマは、ソースファイルまたはそこにインクルードされたヘッダーファイルのいずれかで、*symbol2* を定義した同じ変換ユニットの中にかぎり使用できます。それ以外で使用された場合は、コンパイルエラーになります。

プログラムが *symbol1* を呼び出すけれども定義しておらず、*symbol1* がリンクするライブラリ内で弱いシンボルの場合には、リンカーはそのライブラリからの定義を使用します。しかし、プログラムが独自のバージョンの *symbol1* を定義している場合は、プログラムでの定義が使用され、ライブラリ内の *symbol1* の弱い大域定義は使用されません。プログラムが *symbol2* を直接呼び出す場合は、ライブラリからの定義が使用されます。*symbol2* の重複定義は、エラーになります。

2.13 事前に定義されている名前

事前定義に関する現在のリストは、`cc`(1) のマニュアルページを参照してください。

`__STDC__` 識別子は次の表に示すように、オブジェクトに似たマクロとして事前に定義されます。

表 4 Oracle Solaris 上の定義済みの識別子 `__STDC__`

展開後	次のモードでコンパイルするとき
1	`-Xc` または `-pedantic`

0	-Xa、-Xt または -std (-pedantic フラグなし)
未定義	-Xs

Oracle Linux 上では、コンパイラは __STDC__ を 1 に展開されるように事前に定義します。

__STDC__ が未定義の場合 (#undef __STDC__)、コンパイラは警告を発行します。__STDC__ は、-Xs モードでは定義されていません。

2.14 errno の値の保持

-fast を使用すると、コンパイラは errno 変数を設定しない同等の最適化コードを使用して呼び出しを浮動小数点関数に自由に置き換えることができます。さらに、-fast によってマクロ __MATHERR_ERRNO_DONTCARE も定義され、これはコンパイラに対し、発行された errno や浮動小数点例外の妥当性の確認を無視するように要求します。結果として、浮動小数点関数呼び出しのあとに errno または適切な浮動小数点例外の値に依存するユーザーコードが、矛盾する結果を生成する可能性があります。

この問題を回避する 1 つの方法は、-fast を使用してそのようなコードをコンパイルしないことです。ただし、-fast の最適化が必要で、コードが浮動小数点ライブラリ呼び出しのあとに正しく設定される errno の値に依存している場合は、次のオプションを使用してコンパイルしてください。

```
-xbuiltin=none -U__MATHERR_ERRNO_DONTCARE -xnolibmopt -xnolibmil
```

コンパイラがそのようなライブラリ呼び出しの最適化を抑止し、errno が正しく処理されることを保証するには、これらのオプションをコマンド行で -fast のあとに使用すべきです。

2.15 拡張機能

C コンパイラは、C 言語に多数の拡張機能を実装しています。

2.15.1 _Restrict キーワード

C コンパイラは、C99 規格の restrict キーワードの同義語として _Restrict キーワードをサポートします。_Restrict キーワードは、-pedantic が指定されていない場合は任意の -std フラグ値で使用できますが、restrict キーワードは、-std=c99 または -std=c11 と一緒にのみ使用できます。

サポートされる C11 機能の詳細は、付録C C11 の機能を参照してください。

サポートされる C99 機能の詳細は、付録D C99 の機能を参照してください。

2.15.2 __asm キーワード

__asm キーワード (先頭の 2 つの下線に注意) は、asm キーワードと同義語です。-pedantic が有効な場合、コンパイラは asm キーワードの使用について警告を発行します。これらの警告を回避するには __asm を使用します。__asm 文の書式は次のようになります。

```
__asm("string");
```

ここで、*string* は有効なアセンブリ言語文です。

この文は、与えられたアセンブラテキストをアセンブリファイルに直接出力します。関数スコープではなくファイルスコープで宣言された基本的な asm 文は、「*グローバル asm 文*」と呼ばれます。ほかのコンパイラはこの文を*トップレベル* asm 文と呼びます。

グローバル asm 文は、指定された順に出力されます。つまり、互いの相対的な順序が維持され、周囲の関数に対する相対位置も維持されます。

より高い最適化レベルでは、参照されていないと判断した関数をコンパイラが削除することがあります。グローバルアセンブリ言語文内からどの関数が参照されているかをコンパイラは評価できないため、間違って削除される可能性があります。

テンプレートとオペランドの仕様を提供する、拡張された asm 文は、グローバルにすることは許可されません。__asm および __asm__ はキーワード asm の同義語であり、互いに入れ替えて使用できます。

アーキテクチャーに固有の命令を指定するときは、対応する -xarch 値を指定してコンパイルエラーを回避する必要がある場合があります。

2.15.3 __inline と __inline__

__inline および __inline__ はキーワード inline の同義語であり、互いに入れ替えて使用できます (C 規格、6.4.1 セクション)。

2.15.4 __builtin_constant_p()

__builtin_constant_p はコンパイラの組み込み関数です。これは単一の数値引数を取り、引数がコンパイル時の定数である場合は 1 を返します。戻り値 0 は、その引数がコンパイル時の定数であるかどうかをコンパイラが判定できないことを意味します。この組み込み関数の標準的な使用法は、マクロ内での手動のコンパイル時最適化です。

2.15.5 __FUNCTION__ と __PRETTY_FUNCTION__

__FUNCTION__ と __PRETTY_FUNCTION__ は事前に定義された識別子であり、字句を包含する関数の名前が含まれています。これらは、定義済みの識別子である __func__ に相当する機能です。Oracle Solaris プラットフォームでは、__FUNCTION__ と __PRETTY_FUNCTION__ は、-Xs および -Xc モードの場合または -pedantic が有効な場合は使用できません。

2.15.6 untyped _Complex

拡張としての untyped _Complex は、デフォルト言語規格オプションでは、double _Complex にデフォルト設定されます。-pedantic (ANSI 以外の構文に対するエラー/警告に厳密に準拠) を指定すると、警告が生成されます。

2.15.7 __alignof__

__alignof__ 演算子では、オブジェクトの整列方法またはタイプによって通常必要となる最小の整列を照会することができます。この構文は、sizeof と同じようになります。

たとえば、__alignof__ (*float*) は 4 です。

__alignof__ のオペランドが型ではなくオブジェクトの場合、その値はその型の必要な整列で、__attribute__ 拡張に関連した整列を使用して指定されたすべての最小の配列が考慮されます。

2.15.8 __atomic 組み込み関数

Oracle Developer Studio C コンパイラは、メモリーモデルを認識した不可分操作のために gcc __atomic 組み込み関数を実装しています。

2.16 環境変数

このセクションでは、コンパイルや実行時環境の制御を可能にする環境変数について説明します。

OpenMP および自動並列化に関連した環境変数については、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』も参照してください。

2.16.1 SUN_PROFDATA

-xprofile=collect コマンドが実行頻度のデータを格納しているファイルの名前を制御します。

2.16.2 SUN_PROFDATA_DIR

-xprofile=collect コマンドが実行頻度データファイルをどのディレクトリ内に配置するかを制御します。

2.16.3 TMPDIR

cc は通常 /tmp ディレクトリに一時ファイルを作成します。環境変数 TMPDIR を設定すると、別のディレクトリを指定することができます。TMPDIR が有効なディレクトリ名でない場合は、/tmp が使用されます。-xtemp オプションは、TMPDIR 環境変数より優先されます。

Bourne シェル:

```
$ TMPDIR=dir; export TMPDIR
```

C シェル:

```
% setenv TMPDIR dir
```

2.17 インクルードファイルを指定する方法

C コンパイルシステムで提供される標準ヘッダーファイルをインクルードするには、次のフォーマットを使用します。

```
#include <stdio.h>
```

角括弧 (<>) によって、プリプロセッサはシステム上のヘッダーファイルの標準の場所にあるヘッダーファイルを検索し、これは通常、/usr/include ディレクトリです。

ユーザーが自分のディレクトリに格納したヘッダーファイルの場合は、次のように書式が異なります。

```
#include "header.h"
```

書式 #include "foo.h" (二重引用符を使用) の文に対し、コンパイラは、次の順番でインクルードファイルを検索します。

1. 現在のディレクトリ (つまり、「インクルード」するファイルを含むディレクトリ)

2. -I オプションで命名されたディレクトリ
3. /usr/include ディレクトリ

ヘッダーファイルがインクルード元のソースファイルと同じディレクトリにない場合は、-I コンパイラオプションを使用して、それが格納されているディレクトリのパスを指定してください。たとえば、ソースファイル mycode.c の中で stdio.h と header.h をインクルードしたとします。

```
#include <stdio.h>
#include "header.h"
```

さらに、header.h が ../defs ディレクトリに格納されているとします。このとき、次のコマンドを使用できます:

```
% cc  –I../defs  mycode.c
```

プリプロセッサに対して、最初に mycode.c を含むディレクトリ、次に ../defs ディレクトリ、最後が標準の場所で、header.h を検索するように指示されます。stdio.h については最初が ../defs、次が標準の場所となります。相違点は、現ディレクトリを検索するのは名前を二重引用符で囲んだヘッダーファイルを検索する場合だけであることです。

-I オプションは 1 つの cc コマンド行の中で複数回指定することができます。指定したディレクトリをプリプロセッサが検索する順序は、コマンド行での指定順序と同じです。同一のコマンド行で cc に複数のオプションを指定できます。

```
% cc– o prog– I../defs mycode.c
```

2.17.1 -I- オプションによる検索アルゴリズムの変更

-I- オプションを使用すると、デフォルトの検索規則をよりきめ細かく制御できます。コマンド行にある最初の -I- オプションだけが、このセクションで説明されているように動作します。

#include "foo.h" 形式の include ファイルの場合、次の順序でディレクトリを検索します。

1. -I オプションで指定されたディレクトリ内 (-I- の前後)。
2. コンパイラで提供される C++ ヘッダーファイル、ANSI C ヘッダーファイル、および特殊な目的のファイルのディレクトリ
3. /usr/include ディレクトリ

#include <foo.h> 形式の include ファイルの場合、次の順序でディレクトリを検索します。

1. -I- のあとに現れる -I オプションで指定されているディレクトリ。
2. コンパイラで提供される C++ ヘッダーファイル、ANSI C ヘッダーファイル、および特殊な目的のファイルのディレクトリ
3. /usr/include ディレクトリ

次の例は、prog.c のコンパイル時に -I- を使用した結果を示しています。

```
prog.c
#include "a.h"

#include <b.h>

#include "c.h"


c.h
#ifndef _C_H_1

#define _C_H_1

int c1;

#endif


int/a.h
#ifndef _A_H

#define _A_H

#include "c.h"

int a;

#endif


int/b.h
#ifndef _B_H

#define _B_H

#include <c.h>

int b;

#endif
int/c.h
#ifndef _C_H_2

#define _C_H_2

int c2;

#endif
```

次のコマンドでは、#include "foo.h" 形式のインクルード文のカレントディレクトリ (インクルードしているファイルのディレクトリ) のデフォルトの検索動作を示します。inc/a.h の #include "c.h" 文を処理する際、プリプロセッサは、inc サブディレクトリから c.h ヘッダーファイルを読

み取ります。prog.c の #include "c.h" 文を処理する際、プリプロセッサは、prog.c を含むディレクトリから c.h ファイルを取り込みます。-H オプションがコンパイラに、インクルードされたファイルのパスを出力するよう指示していることに注意してください。

```
example% cc -c -Iinc -H prog.c
inc/a.h
            inc/c.h
inc/b.h
            inc/c.h
c.h
```

次のコマンドは、-I- オプションの効果を示しています。プリプロセッサは、書式 #include "foo.h" の文を処理する際に、インクルードするディレクトリを最初に検索しません。代わりに、コマンド行に配置されている順番で、-I オプションで命名されたディレクトリを検索します。inc/a.h 内にある #include "c.h" 文を処理する際、プリプロセッサは /c.h ヘッダーファイルを、inc/c.h ヘッダーファイルの代わりに取り込みます。

```
example% cc -c -I. -I- -Iinc -H prog.c
inc/a.h
            ./c.h
inc/b.h
            inc/c.h
./c.h
```

2.17.1.1 警告

コンパイラがインストールされている位置の /usr/include、/lib、/usr/lib を検索ディレクトリに指定しないでください。

詳細は、247 ページの「-I[-|*dir*]」の節を参照してください。

2.18 フリースタンディング環境でのコンパイル

Oracle Developer Studio C コンパイラは、標準 C ライブラリとリンクし、標準 C ライブラリやその他の実行時サポートライブラリが含まれる実行環境で実行されるプログラムのコンパイルをサポートしています。C 標準では、そのような環境は*ホスト*環境と呼ばれます。標準ライブラリ関数を提供しない環境は、*フリースタンディング*環境と呼ばれます。

コンパイルされたコードから呼び出される可能性のある特定の実行時サポート関数は通常、標準 C ライブラリでのみ使用可能なため、C コンパイラはフリースタンディング環境での一般的なコンパイルをサポートしません。問題は、コンパイラによるソースコードの変換によって、関数呼び出しを含まないソースコード構造体で実行時サポート関数への呼び出しが導入される場合があり、これらの関数は通常フリースタンディング環境で使用できないことです。次の例を考えてみましょう。

```
% cat -n lldiv.c
  1 void
  2 lldiv(
  3     long long *x,
  4     long long *y,
  5     long long *z)
  6 {
  7     *z = *x / *y ;
  8 }
% cc -c -m32 lldiv.c
% nm lldiv.o | grep " U "
 0x00000000 U __div64
% cc -c -m64 lldiv.c
% nm lldiv.o | grep " U "
```

この例では、-m32 オプションを使用して 32 ビットプラットフォームで実行するようにソースファイル lldiv.c がコンパイルされると、行 7 の文の変換が __div64 という名前の実行時サポート関数への外部参照となります。これは、標準 C ライブラリの 32 ビットバージョンでのみ使用できます。

同じソースファイルが -m64 オプションを使用して 64 ビットプラットフォームで実行するようにコンパイルされると、コンパイラはターゲットマシンの 64 ビット算術命令セットを使用するため、標準 C ライブラリの 64 ビットバージョンでの実行時サポート関数が不要になります。

フリースタンディング環境をターゲットとする C コンパイラの使用は一般的な事例ではサポートされませんが、特定のフリースタンディング環境 (つまり Oracle Solaris カーネルとデバイスドライバ) 用にコードをコンパイルするためにコンパイラを使用することはできます (警告が生成されます)。

デバイスドライバなど、Oracle Solaris カーネルで実行されるコードは、外部関数呼び出しがカーネル内で使用可能な関数のみ参照するように記述する必要があります。これを可能にするため、次のガイドラインが推奨されます。

- ユーザーモードでのみ実行されるライブラリのヘッダーファイルは含めないでください。
- 同じ関数がカーネルに存在していることがわかっているのでない限り、標準 C ライブラリまたはほかのユーザーモードライブラリ内の関数を呼び出さないでください。
- 浮動小数点型または複合型を使用しないでください。
- ランタイムサポートライブラリに関連付けられたコンパイラオプションを使用しないでください (-xprofile、-xopenmp、-xautopar など)。

  特定のコンパイラオプションに関連付けられた再配置可能なオブジェクトファイルは、**cc**(1) マニュアルページの FILES セクションで説明されています。C コンパイラオプションに関連付けられた実行時サポートライブラリは、関連するオプションを説明している箇所に記載されています。

前述のように、ソースコードの変換の結果、コンパイラにより実行時サポート関数への呼び出しが生成されることがあります。Oracle Solaris カーネルの特定の事例では、カーネルが浮動小数点型や複合型、数学ライブラリ関数、または実行時サポートライブラリに関連付けられたコンパイラオプションを使用しないため、呼び出される可能性のある実行時サポート関数のセットが一般的な事例より小さくなります。

次の表に、C コンパイラによるソースコード変換の結果、Oracle Solaris カーネルで実行するためにコンパイルされたコードで呼び出される可能性のある実行時サポート関数を示します。この表に、ソースコードの変換で呼び出しが生成されるプラットフォーム、呼び出される関数の名前、関数呼び出しを引き起こすソース構造体またはコンパイラ機能を示します。C コンパイラをサポートする Oracle Solaris のすべてのバージョンが 64 ビットカーネルを実行するため、64 ビットプラットフォームだけがリストされています。

32 ビット命令セット用にコンパイルすると、命令セットに固有の制限があるため、追加のマシン固有のサポート関数が呼び出されることがあります。

表 5 実行時サポート関数

関数	64 ビットプラットフォーム	参照元
`__align_cpy_`*n*	SPARC	大きい `structs` を返します。*n* は 1、2、4、8、または 16 です。
`_memcpy`	x86	大きい `structs` を返します
`_memcpy`	x86 および SPARC	ベクトル化。
`_memmove`	x86 および SPARC	ベクトル化。
`_memset`	x86 および SPARC	ベクトル化。

一部のバージョンのカーネルは、`_memmove()`、`_memcpy()`、または `_memset()` を提供しませんが、ユーザーモードルーチン `memmove()`、`memcpy()`、および `memset()` のカーネルモードアナログを提供する点に注意してください。

x86 プラットフォーム向けの Oracle Solaris カーネルコードをコンパイルする場合は、オプション `-xvector=%none` を使用する必要がある点に注意することが重要です。C コンパイラは、x86 プラットフォーム上ではデフォルトで、XMM レジスタを使用するコードを生成することにより、C の浮動小数点算術型を使用しないアプリケーションなど、一般的なユーザーアプリケーションのパフォーマンスを改善します。XMM レジスタの使用は、カーネルコードでは不適切です。

追加情報については、『*Writing Device Drivers Guide*』および『*SPARC Compliance Definition*, version 2.4』を参照してください。

2.19 Intel MMX および拡張 x86 プラットフォーム組み込み関数のためのコンパイラサポート

`mmintrin.h` ヘッダーファイル内で宣言されたプロトタイプは Intel MMX 組み込み関数をサポートし、互換性のために提供されています。

表6「MMX および拡張 x86 組み込み関数」に示すように、特定のヘッダーファイルによって追加の拡張プラットフォーム組み込み関数のプロトタイプが提供されます。ほかのシステムヘッダーファイルのように、これらのヘッダーファイルをソースコードにインクルードします。つまり、`#include <header>` とします。ここで、`header.h` は表6「MMX および拡張 x86 組み込み

関数」に示されているファイルのいずれかです。これらのヘッダーファイルの内容を検査するためにその場所を見つけるには、C コンパイラでのコンパイル時に -H フラグを使用します。例:

```
% cat t.c
#include <xmmintrin.h>
% cc -H t.c -c
/opt/studio/lib/compilers/include/cc/xmmintrin.h
        /opt/studio/lib/compilers/include/cc/sys/xmmintrin.h
                /opt/studio/lib/compilers/include/cc/sys/mmintrin.h
                        /opt/studio/lib/compilers/include/cc/sys/sunmedia_types.h
%
```

表 6 MMX および拡張 x86 組み込み関数

x86 プラットフォーム	ヘッダーファイル
SSE	mmintrin.h
SSE2	xmmintrin.h
SSE3	pmmintrin.h
SSSE3	tmmintrin.h
SSE4A	ammintrin.h
SSE4.1	smmintrin.h
SSE4.2	nmmintrin.h
AES 暗号化および PCLMULQDQ	wmmintrin.h
AVX、CORE-AVX-I、AVX2	immintrin.h

各ヘッダーファイルは、表内でそれより前にあるプロトタイプをインクルードします。たとえば、SSE4.1 プラットフォーム上で、smmintrin.h をユーザープログラムにインクルードすることで、SSE4.1、SSSE3、SSE3、SSE2、SSE、および MMX プラットフォームをサポートする組み込み関数名を宣言します。この理由は、smmintrin.h は tmmintrin.h をインクルードし、これは pmmintrin.h をインクルードし、この関係が mmintrin.h まで続くためです。

ammintrin.h は AMD が発行したものであり、Intel 組み込み関数ヘッダーからは一切インクルードされないことに注意してください。ammintrin.h は pmmintrin.h をインクルードするため、ammintrin.h をインクルードすれば、すべての AMD SSE4A だけでなく、Intel の SSE3、SSE2、SSE、および MMX 関数も宣言されます。

また、1 つの Oracle Developer Studio ヘッダーファイル sunmedia_intrin.h がすべての Intel ヘッダーファイルの宣言をインクルードしますが、AMD ヘッダーファイル ammintrin.h はインクルードされません。

ホストプラットフォーム (SSE3 など) に配備され、任意のスーパーセット組み込み関数 (AVX についてのものなど) を呼び出すコードは、Oracle Solaris プラットフォームにロードされず、Oracle Linux プラットフォーム上で未定義の動作または正しくない結果が発生し失敗することがあるので注意してください。これらのプラットフォーム固有の組み込み関数を呼び出すプログラムは、それらの関数をサポートするプラットフォームにのみ配備してください。

これらはシステムヘッダーファイルであり、次の例に示すようにプログラムに現れるようにしてください。

```
#include <nmmintrin.h>
```

これらの組み込み関数の詳細については、最新の Intel C++ コンパイラリファレンスガイドを参照してください。

2.20 SPARC64™X および SPARC64™X+ プラットフォーム組み込み関数のためのコンパイラサポート

Oracle Developer Studio コンパイラは、SPARC64™X や SPARC64™X+ が持っている特殊な機能、つまり SIMD データおよび 10 進浮動小数点数をサポートするための組み込み型と組み込み関数を提供しています。

これらの組み込み関数を使用するソースファイルをコンパイルするには、`-xarch=[sparcace|sparcaceplus]` オプションおよび `-m64` オプションを両方指定する必要があります。

2.20.1 SIMD 組み込み関数

SPARC64™X および SPARC64™X+ によって提供される SIMD データは、`double` または `unsigned long long` の値のペアを保持することができます。コンパイラには、これらのデータを処理するためのいくつかの組み込み関数タイプおよび機能があります。

2.20.1.1 型と演算

`sparcace_types.h` ヘッダーファイルで宣言されるプロトタイプは、SPARC64™X および SPARC64™X+ が提供する次の 2 つの SIMD データ型をサポートします。

`__m128d`	倍精度の浮動小数点数のペア
`__m128i`	符号付き/符号なし 64 ビット整数のペア

SIMD データ型

- 集約でなく基本型として処理され、内部構造はありません。データの一部を取得する組み込み関数を使用する必要があります。
- 型修飾子 `const` または `volatile`、あるいはその両方で変更できます。
- ストレージクラス指定子 `auto`、`static`、`register`、`extern`、および `typedef` あるいはこれらのいずれかで指定できます。

- 集合 `array`、`struct`、および `union` あるいはこれらのいずれかの要素とすることができます。

SIMD データ型の変数として次のものがあります。

- 関数の仮引数
- 関数呼び出しの実引数
- 関数の戻り値
- 代入演算子「=」の左辺または右辺
- アドレス演算子「&」のオペランド
- `sizeof` 演算子のオペランド
- `typeof` 演算子のオペランド

SIMD データ型に対してリテラル構文はサポートされていません。正しい組み込み関数を使用して SIMD データ型を構築することができます。

2.20.1.2 アプリケーションバイナリインタフェースの拡張

関数に対する SIMD 値の受け渡し

最初の 8 つまでの SIMD 引数が浮動小数点レジスタ経由で渡されます。SIMD 引数の最初の半分は、`%d0`、`%d4`、`%d8`、...、`%d28` に入ります。SIMD 引数の残り半分は、`%d256`、`%d260`、`%d264`、...、`%d284` に入ります。9 つ以上の SIMD 引数がある場合、これらはスタック領域経由で渡されます。

関数からの SIMD 戻り値

SIMD 戻り値の最初の半分は、`%d0` に表示されます。残りの半分は、`%d256` に表示されます。

メモリー内での SIMD 値の保管

SIMD `load`(*ldd*,*s*)/`store`(*std*,*s*) でロードまたは保管するには、SIMD 型の値を 16 バイトに整列されたアドレスに保管する必要があります。

2.20.1.3 組み込み関数

`sparcace_types.h` ヘッダーファイル内で宣言される組み込み関数は、次のようになります。

`__m128d __sparcace_set_m128d(double` *a*, `double` *b*)

この関数は、倍精度浮動小数点数のペアから `__m128d` 型データを構築し、オブジェクトを返します。

`__m128d _mm_set_pd(double` *z*, `double` *y*)

これは `__sparcace_set_m128d()` の別名です。

`__m128i __sparcace_set_m128i(unsigned long long` *a*, `unsigned long long` *b*)

この関数は、`unsigned long long` 型の数のペアから `__m128i` 型のデータを構築し、オブジェクトを返します。

`__m128i _mm_set_epi64x(long long` *a*, `long long` *b*)

これは `__sparcace_set_m128i()` の別名です。

`double __sparcace_extract_m128d(__m128d` *a*, `int` *imm*

この関数は、最初のパラメータとして渡された `__m128d` 型のデータから、倍精度浮動小数点数を抽出します。抽出される値は 2 番目のパラメータによって制御されます。2 番目のパラメータは整数である必要があり、0 または 1 の定数である必要があります。

`unsigned long long __sparcace_extract_m128i(__m128i` *a*, `int` *imm*)

この関数は、最初のパラメータとして渡された `__m128i` 型のデータから `unsigned long long` 型の数を抽出します。抽出される値は 2 番目のパラメータによって制御されます。2 番目のパラメータは整数である必要があり、0 または 1 の定数である必要があります。

`long long _mm_extract_epi64(__m128i` *a*, `const int` *imm*)

これは `__sparcace_extract_m128i()` の別名です。

`__m128i __sparcace_cast_m128d_m128i(__m128d` *a*)

この関数は、パラメータとまったく同じビットパターンを持つ `__m128i` 型の値を返します。

`__m128i _mm_castpd_si128(__m128d` *in*)

これは `__sparcace_cast_m128d_m128i()` の別名です。

`__m128d __sparcace_cast_m128i_m128d(__m128i` *a*)

この関数は、パラメータとまったく同じビットパターンを持つ `__m128d` 型の値を返します。

`__m128d _mm_castsi128_pd(__m128i` *in*)

これは `__sparcace_cast_m128i_m128d()` の別名です。

`__m128d __sparcace_fdivd_m128d(__m128d` *a*, `__m128d` *b*)

この関数は 2 倍精度除算を順次に実行し、最初のパラメータを 2 番目のパラメータで割った値の `__m128d` の結果を生成します。

`__m128d _mm_div_pd(__m128d` *a*, `__m128d` *b*)

これは `__sparcace_fdivd_m128d()` の別名です。

`__m128d __sparcace_fshiftorx_m128d(__m128d` *a*, `__m128d` *b*, `__m128d` *c*)

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータに対して右または左論理シフトを実行し、それらのフラグメントをマスクしてからそのビット単位の論理和をとって、`__m128d` の結果を生成します。シフト幅、マスク幅、およびマスクオフセットが 3 番目のパラメータとして指定されます。

`__m128i __sparcace_fshiftorx_m128i(__m128i a, __m128i b, __m128i c)`

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータに対して右または左論理シフトを実行し、それらのフラグメントをマスクしてからそのビット単位の論理和をとって、`__m128i` の結果を生成します。シフト幅、マスク幅、およびマスクオフセットが 3 番目のパラメータとして指定されます。

`void __sparcace_stdfr_m128d(__m128d a, __m128d b, __m128d *p)`

この関数は、2 番目のパラメータの対応する浮動小数点数の MSB が 1 である場合、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数を 3 番目のパラメータが指し示す 16 バイトに整列されたアドレスに格納します。それ以外の場合は何もしません。

`void __sparcace_stdfr_m128i(__m128i a, __m128i b, __m128i *p)`

この関数は、2 番目のパラメータの対応する `unsigned long long` 型の数値の MSB が 1 である場合、最初のパラメータの各 `unsigned long long` 型の数値を 3 番目のパラメータが指し示す 16 バイトに整列されたアドレスに格納します。それ以外の場合は何もしません。

`__m128d __sparcace_fandnot1_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、反転された最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の AND 演算を実行して、`__m128d` の結果を生成します。

`__m128d __sparcace_fandnot1_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、反転された最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の AND 演算を実行して、`__m128d` の結果を生成します。

`__m128d _mm_andnot_pd(__m128d a, __m128d b)`

これは `__sparcace_fandnot1_m128d()` の別名です。

`__m128i __sparcace_fandnot1_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、反転された最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の AND 演算を実行して、`__m128i` の結果を生成します。

`__m128i _mm_andnot_si128(__m128i a, __m128i b)`

これは `__sparcace_fandnot1_m128i()` の別名です。

`__m128i _mm_andnot_si128(__m128i a, __m128i b)`

これは `__sparcace_fandnot1_m128i()` の別名です。

`__m128d __sparcace_fand_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の AND 演算を実行して、a`__m128d` の結果を生成します。

`__m128d _mm_and_pd(__m128d a, __m128d b)`

これは `__sparcace_fand_m128d()` の別名です。

`__m128i __sparcace_fand_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の AND 演算を実行して、`__m128i` の結果を生成します。

`__m128i _mm_and_si128(__m128i a, __m128i b)`

これは `__sparcace_fand_m128i()` の別名です。

`__m128d __sparcace_fnand_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の NAND 演算を実行して、`__m128d` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fnand_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の NAND 演算を実行して、a`__m128i` の結果を生成します。

`__m128d __sparcace_fnor_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の NOR 演算を実行して、`__m128d` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fnor_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の NOR 演算を実行して、a`__m128i` の結果を生成します。

`__m128d __sparcace_fnot1_m128d(__m128d a)`

この関数は、最初のパラメータのビット単位の反転演算を実行して、`__m128d` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fnot1_m128i(__m128i a)`

この関数は、最初のパラメータのビット単位の反転演算を実行して、`__m128i` の結果を生成します。

`__m128d __sparcace_fone_m128d()`

この関数は、ビットがすべて 1 である `__m128d` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fone_m128i()`

この関数は、ビットがすべて 1 である `__m128i` の結果を生成します。

`__m128d __sparcace_fornot1_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、反転された最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の OR 演算を実行して、`__m128d` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fornot1_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、反転された最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の OR 演算を実行して、`__m128i` の結果を生成します。

__m128d __sparcace_for_m128d(__m128d *a*, __m128d *b*)

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の OR 演算を実行して、__m128d の結果を生成します。

__m128d _mm_or_pd(__m128d *a*, __m128d *b*)

これは __sparcace_for_m128d() の別名です。

__m128i __sparcace_for_m128i(__m128i *a*, __m128i *b*)

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の OR 演算を実行して、a__m128i の結果を生成します。

__m128i _mm_or_si128(__m128i *a*, __m128i *b*)

これは __sparcace_for_m128i() の別名です。

__m128d __sparcace_fxnor_m128d(__m128d *a*, __m128d *b*)

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の XNOR 演算を実行して、a__m128d の結果を生成します。

__m128i __sparcace_fxnor_m128i(__m128i *a*, __m128i *b*)

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の XNOR 演算を実行して、__m128i の結果を生成します。

__m128d __sparcace_fxor_m128d(__m128d *a*, __m128d *b*)

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の XOR 演算を実行して、__m128d の結果を生成します。

__m128d _mm_xor_pd(__m128d *a*, __m128d *b*)

これは __sparcace_fxor_m128d() の別名です。

__m128i __sparcace_fxor_m128i(__m128i *a*, __m128i *b*)

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータの間でビット単位の XOR 演算を実行して、__m128i の結果を生成します。

__m128i _mm_xor_si128(__m128i *a*, __m128i *b*)

これは __sparcace_fxor_m128i() の別名です。

__m128d __sparcace_fzero_m128d()

この関数は、ビットがすべて 0 である __m128d の結果を生成します。

__m128d _mm_setzero_pd()

これは __sparcace_fzero_m128d() の別名です。

__m128i __sparcace_fzero_m128i()

この関数は、ビットがすべて 0 である __m128i の結果を生成します。

`__m128i _mm_setzero_si128()`

これは `__sparcace_fzero_m128i()` の別名です。

`__m128d __sparcace_fcmpeqd_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数を 2 番目のパラメータの対応する倍精度浮動小数点数と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータに等しい場合は、`__m128d` の結果の対応する倍精度浮動小数点数のすべてのビットが 1 に設定されます。

`__m128d __sparcace_fcmpeqed_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数を 2 番目のパラメータの対応する倍精度浮動小数点数と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータに等しい場合は、`__m128d` の結果の対応する倍精度浮動小数点数のすべてのビットが 1 に設定されます。順序付けされていない場合は、例外が発生します。

`__m128d __sparcace_fcmpleed_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数を 2 番目のパラメータの対応する倍精度浮動小数点数と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータ以下である場合は、`__m128d` の結果の対応する倍精度浮動小数点数のすべてのビットが 1 に設定されます。順序付けされていない場合は、例外が発生します。

`__m128d __sparcace_fcmplted_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数を 2 番目のパラメータの対応する倍精度浮動小数点数と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータより小さい場合は、`__m128d` の結果の対応する倍精度浮動小数点数のすべてのビットが 1 に設定されます。順序付けされていない場合は、例外が発生します。

`__m128d __sparcace_fcmpned_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数を 2 番目のパラメータの対応する倍精度浮動小数点数と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータに等しくない場合は、`__m128d` の結果の対応する倍精度浮動小数点数のすべてのビットが 1 に設定されます。

`__m128d` `__sparcace_fcmpneed_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数を 2 番目のパラメータの対応する倍精度浮動小数点数と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータに等しくない場合は、`__m128d` の結果の対応する倍精度浮動小数点数のすべてのビットが 1 に設定されます。順序付けされていない場合は、例外が発生します。

`__m128d __sparcace_fcmpgted_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数を 2 番目のパラメータの対応する倍精度浮動小数点数と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータより大きい場合は、`__m128d` の結果の対応する倍精度浮動小数点数のすべてのビットが 1 に設定されます。順序付けされていない場合は、例外が発生します。

__m128d __sparcace_fcmpgeed_m128d(__m128d *a*, __m128d *b*)

この関数は、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数を 2 番目のパラメータの対応する倍精度浮動小数点数と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータ以上である場合は、__m128d の結果の対応する倍精度浮動小数点数のすべてのビットが 1 に設定されます。順序付けされていない場合は、例外が発生します。

__m128d __sparcace_fselmovd_m128d(__m128d *a*, __m128d *b*, __m128d *c*)

この関数は、3 番目のパラメータの MSB に関して、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数または 2 番目のパラメータの各倍精度浮動小数点数をコピーすることによって __m128d の結果を生成します。

__m128i __sparcace_fselmovd_m128i(__m128i *a*, __m128i *b*, __m128i *c*)

この関数は、3 番目のパラメータの MSB に関して、最初のパラメータの各 unsigned long long 型の数値または 2 番目のパラメータの同様の数値をコピーすることによって __m128d の結果を生成します。

__m128d __sparcace_fabsd_m128d(__m128d *a*)

この関数は、パラメータの絶対値を持つ __m128d の結果を生成します。

__m128d __sparcace_faddd_m128d(__m128d *a*, __m128d *b*)

この関数は、加算を実行して __m128d の結果を生成します。

__m128d _mm_add_pd(__m128d *a*, __m128d *b*)

これは __sparcace_faddd_m128d() の別名です。

__m128d __sparcace_fmaddd_m128d(__m128d *a*, __m128d *b*, __m128d *c*)

この関数は、最初のパラメータ、2 番目のパラメータ、および 3 番目のパラメータ内の倍精度浮動小数点数のペアで (a * b + c) 演算を実行して、__m128d の結果を生成します。

__m128d _mm_fmadd_pd(__m128d *a*, __m128d *b*, __m128d *c*)

これは __sparcace_fmaddd_m128d() の別名です。

__m128d __sparcace_fmsubd_m128d(__m128d *a*, __m128d *b*, __m128d *c*)

この関数は、最初のパラメータ、2 番目のパラメータ、および 3 番目のパラメータ内の倍精度浮動小数点数のペアで (a * b - c) を実行して、__m128d の結果を生成します。

__m128d _mm_fmsub_pd(__m128d *a*, __m128d *b*, __m128d *c*)

これは __sparcace_fmsubd_m128d() の別名です。

__m128d __sparcace_fnmsubd_m128d(__m128d *a*, __m128d *b*, __m128d *c*)

この関数は、最初のパラメータ、2 番目のパラメータ、および 3 番目のパラメータ内の倍精度浮動小数点数のペアで -(a * b - c) を実行して、__m128d の結果を生成します。

`__m128d _mm_fnmadd_pd(__m128d a, __m128d b, __m128d c)`

これは `__sparcace_fnmsubd_m128d()` の別名です。注意: これは `__sparcace_fnmaddd_m128d()` の別名ではありません。

`__m128d __sparcace_fnmaddd_m128d(__m128d a, __m128d b, __m128d c)`

この関数は、最初のパラメータ、2 番目のパラメータ、および 3 番目のパラメータ内の倍精度浮動小数点数のペアで -(a * b + c) を実行して、`__m128d` の結果を生成します。

`__m128d _mm_fnmsub_pd(__m128d a, __m128d b, __m128d c)`

これは `__sparcace_fnmaddd_m128d()` の別名です。注意: これは `__sparcace_fnmsubd_m128()` の別名ではありません。

`__m128d __sparcace_fmaxd_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数の最大値、または 2 番目のパラメータの同様の数値をコピーすることによって __m128d の結果を生成します。

`__m128d _mm_max_pd(__m128d a, __m128d b)`

これは `__sparcace_fmaxd_m128d()` の別名です。

`__m128d __sparcace_fmind_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータの各倍精度浮動小数点数の最小値、または 2 番目のパラメータの同様の数値をコピーすることによって `__m128d` の結果を生成します。

`__m128d _mm_min_pd(__m128d a, __m128d b)`

これは `__sparcace_fmind_m128d()` の別名です。

`__m128d __sparcace_fmuld_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、乗算を実行して `__m128d` の結果を生成します。

`__m128d _mm_mul_pd(__m128d a, __m128d b)`

これは `__sparcace_fmuld_m128d()` の別名です。

`__m128d __sparcace_fnegd_m128d(__m128d a)`

この関数は、パラメータの値を否定します。

`__m128d __sparcace_fsubd_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、減算を実行して `__m128d` の結果を生成します。

`__m128d _mm_sub_pd(__m128d a, __m128d b)`

これは `__sparcace_fsubd_m128d()` の別名です。

`__m128d __sparcace_fxtod_m128i_m128d(__m128i a)`

この関数は、`__m128i` 型パラメータ内の `unsigned long long` 型の値のペアを `__m128d` 型の結果内の倍精度浮動小数点数のペアに変換します。

`__m128i __sparcace_fdtox_m128d_m128i(__m128d a)`

この関数は、`__m128d` 型の値内の倍精度浮動小数点数のペアを `__m128i` 型パラメータの型の結果内の `unsigned long long` のペアに変換します。

`__m128i __sparcace_fpmaddx_m128i(__m128i a, __m128i b, __m128i c)`

この関数は、最初のパラメータ、2 番目のパラメータ、および 3 番目のパラメータ内の `unsigned long long` 数値のペアで (*a* * *b* + *c*) 演算を実行し、結果のペアの下位 8 バイトを取って `__m128d` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fpmaddxhi_m128i(__m128i a, __m128i b, __m128i c)`

この関数は、最初のパラメータ、2 番目のパラメータ、および 3 番目のパラメータ内の `unsigned long long` 数値のペアで (*a* * *b* + *c*) 演算を実行し、結果のペアの上位 8 バイトを取って `__m128d` の結果を生成します。

`__m128d __sparcace_fnaddd_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータ内の倍精度浮動小数点数のペアで -(*a* - *b*) 演算を実行して、`__m128d` の結果を生成します。

`__m128d __sparcace_fnmuld_m128d(__m128d a, __m128d b)`

この関数は、最初のパラメータと 2 番目のパラメータ内の倍精度浮動小数点数のペアで -(*a* * *b*) 演算を実行して、`__m128d` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fpmax64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `signed long long` 型の数値の最大値、または 2 番目のパラメータの同様の数値をコピーすることによって `__m128i` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fpmin64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `signed long long` 型の数値の最小値、または 2 番目のパラメータの同様の数値をコピーすることによって `__m128i` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fpmin64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `signed long long` 型の数値の最小値、または 2 番目のパラメータの同様の数値をコピーすることによって `__m128i` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fpminu64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `unsigned long long` 型の数値の最小値、または 2 番目のパラメータの同様の数値をコピーすることによって __m128i の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fpsll64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `unsigned long long` 型の数値を 2 番目のパラメータの `unsigned long long` 型の数値によって示されているシフト量で左に論理シフトすることによって `__m128i` の結果を生成します。

`__m128i _mm_sll_epi64(__m128i a, __m128i b)`

これは `__sparcace_fpsll64x_m128i()` の別名です。

`__m128i __sparcace_fpsrl64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `unsigned long long` 型の数値を 2 番目のパラメータの `unsigned long long` 型の数値によって示されているシフト量で右に論理シフトすることによって `__m128i` の結果を生成します。

`__m128i _mm_srl_epi64(__m128i a, __m128i b)`

これは `__sparcace_fpsrl64x_m128i()` の別名です。

`__m128i __sparcace_fpsra64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `signed long long` 型の数値を 2 番目のパラメータの `unsigned long long` 型の数値によって示されているシフト量で右に算術シフトすることによって `__m128i` の結果を生成します。

`__m128i __sparcace_fpcmple64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `signed long long` 型の数値を 2 番目のパラメータの対応する `signed long long` 型の数値と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータ以下である場合は、`__m128i` の結果の対応する `signed long long` 型の数値の MSB が 1 に設定されます。ビット 0 からビット 62 までは 0 に設定されます。

`__m128i __sparcace_fpcmpgt64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `signed long long` 型の数値を 2 番目のパラメータの対応する `signed long long` 型の数値と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータより大きい場合は、`__m128i` の結果の対応する `signed long long` 型の数値の MSB が 1 に設定されます。ビット 0 からビット 62 までは 0 に設定されます。

`__m128i __sparcace_fpcmpule64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `unsigned long long` 型の数値を 2 番目のパラメータの対応する `unsigned long long` 型の数値と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータ以下である場合は、`__m128i` の結果の対応する `unsigned long long` 型の数値の MSB が 1 に設定されます。ビット 0 からビット 62 までは 0 に設定されます。

`__m128i __sparcace_fpcmpune64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `unsigned long long` 型の数値を 2 番目のパラメータの対応する `unsigned long long` 型の数値と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータに等しくない場合は、`__m128i` の結果の対応する `unsigned long long` 型の数値の MSB が 1 に設定されます。ビット 0 からビット 62 までは 0 に設定されます。

`__m128i __sparcace_fpcmpugt64x_m128i(__m128i a, __m128i b)`

この関数は、最初のパラメータの各 `unsigned long long` 型の数値を 2 番目のパラメータの対応する `unsigned long long` 型の数値と比較します。最初のパラメータが 2 番目の

パラメータより大きい場合は、__m128i の結果の対応する unsigned long long 型の数値の MSB が 1 に設定されます。ビット 0 からビット 62 までは 0 に設定されます。

__m128i __sparcace_fpcmpueq64x_m128i(__m128i *a*, __m128i *b*)

この関数は、最初のパラメータの各 unsigned long long 型の数値を 2 番目のパラメータの対応する unsigned long long 型の数値と比較します。最初のパラメータが 2 番目のパラメータに等しい場合は、__m128i の結果の対応する unsigned long long 型の数値の MSB が 1 に設定されます。ビット 0 からビット 62 までは 0 に設定されます。

__m128i __sparcace_fpadd64_m128i(__m128i *a*, __m128i *b*)

この関数は、最初のパラメータの各 unsigned long long 型の数値と 2 番目のパラメータの unsigned long long 型の数値を加算することによって __m128i の結果を生成します。

__m128i _mm_add_epi64(__m128i *a*, __m128i *b*)

これは __sparcace_fpadd64_m128i() の別名です。

__m128i __sparcace_fpsub64_m128i(__m128i *a*, __m128i *b*)

この関数は、最初のパラメータの各 unsigned long long 型の数値から 2 番目のパラメータの unsigned long long 型の数値を減算することによって __m128i の結果を生成します。

__m128i _mm_sub_epi64(__m128i *a*, __m128i *b*)

これは __sparcace_fpsub64_m128i() の別名です。

2.20.2 10 進浮動小数点の組み込み関数

SPARC64™X および SPARC64™X+ は、10 進浮動小数点のデータ型および演算をサポートします。データフォーマットは、IEEE 754-2008 に定義されている 64 ビット DPD に準拠します。コンパイラは、データを処理するための型およびさまざまな関数を提供します。

2.20.2.1 型と演算

10 進浮動小数点数を表すために、_Decimal64 組み込み型が dpd_conf.h 内で宣言されます。次の例に示す型を使用する前に、ヘッダーファイルをインクルードする必要があります。

```
#include <dpd_conf.h>
int main(void) {
  _Decimal64 dd;
  ...
  return 0;
}
```

_Decimal64 型

- 型修飾子 `const` または `volatile`、あるいはその両方で変更できます。
- ストレージクラス指定子 `auto`、`static`、`register`、`extern`、および `typedef` あるいはこれらのいずれかで指定できます。
- 集合 `array`、`struct`、および `union` あるいはこれらのいずれかの要素とすることができます。

`_Decimal64` 型変数

- 関数の仮パラメータとなることができます。
- 関数呼び出しの実引数となることができます。
- 関数の戻り値となることができます。
- 代入演算子「=」の左辺または右辺となることができます。
- アドレス演算子「&」のオペランドとなることができます。
- `sizeof` 演算子のオペランドとなることができます。
- `typeof` 演算子のオペランドとなることができます。

組み込み関数は、算術、比較、型の変換などのほかの操作に対して提供されます。

`_Decimal64` 用のリテラル構文はサポートされていません。型変換用の組み込み関数を代わりに使用できます。

`_Decimal64` 型のデータのメモリー境界整列は、64 ビットのバイナリ浮動小数点数と同じです。

2.20.2.2 マクロおよびプラグマ

`-xarch=[sparcace|sparcaceplus]` および `-m64` が指定された場合、`__DEC_FP_INTR` マクロは 1 に定義されます。このマクロは、コンパイラが 10 進浮動小数点組み込み関数をサポートするかどうかを判別する場合に役立ちます。

`dpd_conf.h` がインクルードされたとき、IEEE 754-2008 で必要な `DEC_EVAL_METHOD` マクロは 1 に定義されます。

コンパイラは ISO/IEC TR 24732 に記載されている機能を完全にサポートするわけではないため、`__STDC_DEC_FP__` マクロは定義されません。

IEEE 754-2008 で必要な `#pragma FLOAT_CONST_DECIMAL_64` はサポート*されません*。

2.20.2.3 組み込み関数

以下の一覧に示す組み込み関数は、`dpd_conf.h` で宣言されます。これらは `_Decimal64` 型の変数を操作する場合に便利です。

`void __dpd64_store(const _Decimal64 src, _Decimal64 * const addr)`

この関数は、*addr* によってアドレス指定されるメモリーに *src* を保管します。*addr* は 8 バイト境界に整列されている必要があり、そうでない場合は `-xmemalign` 設定に関係なく動作は未定義になります。

`_Decimal64 __dpd64_load(const _Decimal64 * const addr)`

この関数は、*addr* によってアドレス指定されるメモリーから `_Decimal64` 型の値をロードし、これを返します。*addr* は 8 バイト境界に整列されている必要があり、そうでない場合は `-xmemalign` 設定に関係なく動作は未定義になります。

`_Decimal64 __dpd64_add(_Decimal64 src1, _Decimal64 src2)`

この関数は、*src1* と *src2* を加算して結果を返します。IEEE 754-2008 規格に従って、浮動小数点例外がスローされます。

`_Decimal64 __dpd64_sub(_Decimal64 src1, _Decimal64 src2)`

この関数は、*src1* から *src2* を減算して結果を返します。IEEE 754-2008 規格に従って、浮動小数点例外がスローされます。

`_Decimal64 __dpd64_mul(_Decimal64 src1, _Decimal64 src2)`

この関数は、*src1* と *src2* を乗算して結果を返します。IEEE 754-2008 規格に従って、浮動小数点例外がスローされます。

`_Decimal64 __dpd64_div(_Decimal64 src1, _Decimal64 src2)`

この関数は、*src1* を *src2* で除算して結果を返します。IEEE 754-2008 規格に従って、浮動小数点例外がスローされます。

`_Decimal64 __dpd64_abs(_Decimal64 src)`

この関数は、*src* の絶対値を計算して結果を返します。*src* から NaN のシグナルが生成される場合でも、浮動小数点例外はスローされません。

`_Decimal64 __dpd64_neg(_Decimal64 src)`

この関数は、*src* の符号を逆にして結果を返します。*src* から NaN のシグナルが生成される場合でも、浮動小数点例外はスローされません。

`int __dpd64_cmpeq(_Decimal64 src1, _Decimal64 src2)`

この関数は、*src1* が *src2* に等しいときは非 0 を返し、そうでない場合は 0 を返します。NaN、Inf、および負の符号が付いたゼロの処理は、IEEE 754-2008 に準拠します。

`int __dpd64_cmpne(_Decimal64 src1, _Decimal64 src2)`

この関数は、*src1* が *src2* に等しくないときは非 0 を返し、そうでない場合は 0 を返します。NaN、Inf、および負の符号が付いたゼロの処理は、IEEE 754-2008 に準拠します。

`int __dpd64_cmpgt(_Decimal64 src1, _Decimal64 src2)`

この関数は、*src1* が *src2* より大きいときは非 0 を返し、そうでない場合は 0 を返します。NaN、Inf、および負の符号が付いたゼロの処理は、IEEE 754-2008 に準拠します。

`int __dpd64_cmpge(_Decimal64 src1, _Decimal64 src2)`

この関数は、*src1* が *src2* より大きいか等しいときは非 0 を返し、そうでない場合は 0 を返します。NaN、Inf、および負の符号が付いたゼロの処理は、IEEE 754-2008 に準拠します。

`int __dpd64_cmplt(_Decimal64 src1, _Decimal64 src2)`

この関数は、*src1* が *src2* より小さいときは非 0 を返し、そうでない場合は 0 を返します。NaN、Inf、および負の符号が付いたゼロの処理は、IEEE 754-2008 に準拠します。

`int __dpd64_cmple(_Decimal64 src1, _Decimal64 src2)`

この関数は、*src1* が *src2* より小さいか等しいときは非 0 を返し、そうでない場合は 0 を返します。NaN、Inf、および負の符号が付いたゼロの処理は、IEEE 754-2008 に準拠します。

`_Decimal64 __dpd64_convert_from_int64(int64_t src)`

この関数は、*src* 内の 64 ビット符号付き整数値を 10 進浮動小数点値に変換して結果を返します。

`_Decimal64 __dpd64_convert_from_uint64(uint64_t src)`

この関数は、*src* 内の 64 ビット符号なし整数値を 10 進浮動小数点値に変換して結果を返します。

`_Decimal64 __dpd64_convert_from_double(double src)`

この関数は、*src* 内の 2 進浮動小数点値を 10 進浮動小数点値に変換して結果を返します。

`_Decimal64 __dpd64_convert_from_str(const char * restrict nptr, char ** restrict endptr);`

この関数は、丸め方向が「最近接偶数」に固定されている点を除き、「ISO/IEC TR 24732」で定義されている関数 `strtod64()` とまったく同様に動作します。

`int64_t __dpd64_convert_to_int64(_Decimal64 src)`

この関数は、*src* 内の 10 進浮動小数点値を 64 ビット符号付き整数値に変換して結果を返します。

`uint64_t __dpd64_convert_to_uint64(_Decimal64 src)`

この関数は、*src* 内の 10 進浮動小数点値を 64 ビット符号なし整数値に変換して結果を返します。

`double __dpd64_convert_to_double(_Decimal64 src)`

この関数は、*src* 内の 10 進浮動小数点値を 2 進浮動小数点値に変換して結果を返します。

`char *__dpd64_convert_to_stre(_Decimal64 dec, char *buf, size_t n);`

この関数は、*dec* を *buf* でアドレス指定されているメモリーに `%He` 形式で出力します。精度は *dec* の係数と同じ長さです。出力文字列は、その文字列が *n* に等しいか、これより長い

場合は (*n*-1) 番目の文字、それ以外の場合は文字列の最後を null 文字で終了します。この関数は、*dec* が正常に文字列に変換された場合は *buf* を、それ以外の場合は null ポインタを返します。

`char *__dpd64_convert_to_strf(_Decimal64` *dec*, `char *`*buf*, `size_t` *n*);

この関数は、*dec* を *buf* でアドレス指定されているメモリーに `%Hf` 形式で出力します。精度は *dec* の係数と同じ長さです。出力文字列は、その文字列が *n* に等しいか、これより長い場合は (*n*-1) 番目の文字、それ以外の場合は文字列の最後を null 文字で終了します。この関数は、*dec* が正常に文字列に変換された場合は *buf* を、それ以外の場合は null ポインタを返します。

`int __dpd_getround(void)`

この関数は、`_Decimal64` の現在の丸めモードを取得します。この値は、次のように `dpd_conf.h` 内で定義されます。

`__DPD_ROUND_NEAREST`
: 最近接偶数に丸めます

`__DPD_ROUND_TOZERO`
: ゼロの方向に丸めます

`__DPD_ROUND_POSITIVE`
: 正の無限の方向に丸めます

`__DPD_ROUND_NEGATIVE`
: 負の無限の方向に丸めます

`__DPD_ROUND_NEARESTFROMZERO`
: 絶対値で四捨五入して最近接値へ丸めます

`_Decimal64` の丸めモードの初期値は `__DPD_ROUND_NEAREST` です。`-fround` オプションは、`_Decimal64` の丸めモードを変更しないことに注意してください。

`int __dpd_setround(int` *r*`)`

この関数は、`_Decimal64` の丸めモードを *r* に設定します。*r* は上記に示されているものである必要があります。成功時は 0、失敗時は非 0 を返します。

♦ ♦ ♦ 第 3 章

3 不可分型のサポート

この章では、不可分 C 型のサイズと整列について説明します。

3.1 不可分 C 型のサイズと整列

次の表は、不可分データ型とそれらがどのように表されるかを示しています。整列 (`align` 列) はバイト単位です。

表 7 不可分 C 型のサイズと整列

C の型	LP64 (AMD64) のサイズ	LP64 (AMD64) の整列	ILP32 (i386) のサイズ	ILP32 (i386) の整列	LP64 (v9) のサイズ	LP64 (v9) の整列	ILP32 (SPARC) のサイズ	ILP32 (SPARC) の整列
整数								
`_Atomic _Bool`	1	1	1	1	1	1	1	1
`_Atomic char` `_Atomic signed char`	1	1	1	1	1	1	1	1
`_Atomic unsigned char`	1	1	1	1	1	1	1	1
`_Atomic short` `_Atomic signed short`	2	2	2	2	2	2	2	2
`_Atomic unsigned short`	2	2	2	2	2	2	2	2

`_Atomic int`
`_Atomic signed int`
`_Atomic enum`
	4	4	4	4	4	4	4	4

`_Atomic unsigned int`	4	4	4	4	4	4	4	4

`_Atomic long`
`_Atomic signed long`
`_Atomic unsigned long`
	8	8	4	4	8	8	4	4

`_Atomic long long`	8	8	8	8	8	8	8	8

C の型	LP64 (AMD64) のサイズ	LP64 (AMD64) の整列	ILP32 (i386) のサイズ	ILP32 (i386) の整列	LP64 (v9) のサイズ	LP64 (v9) の整列	ILP32 (SPARC) のサイズ	ILP32 (SPARC) の整列

`_Atomic signed long long`
 	
`_Atomic unsigned long long`								

ポインタ								
any-type `_Atomic *` `_Atomic( any-type (*) () )`	8	8	4	4	8	8	4	4
浮動小数点								
`_Atomic float`	4	4	4	4	4	4	4	4
`_Atomic double`	8	8	8	8	8	8	8	8
`_Atomic long double`	16	16	12	4	16	16	16	8
複素数								
`_Atomic float _Complex`	8	8	8	8	8	8	8	8
`_Atomic double _Complex`	16	16	16	16	16	16	16	8
`_Atomic long double _Complex`	32	16	24	4	32	16	32	8
虚数								
`_Atomic float _Imaginary`	4	4	4	4	4	4	4	4
`_Atomic double _Imaginary`	8	8	8	8	8	8	8	8
`_Atomic long double _Imaginary`	16	16	12	4	16	16	16	8
構造体 (選択的な例)								
`_Atomic struct {char a[2];}`	2	2	2	2	2	2	2	2
`_Atomic struct {short a[2];}`	4	4	4	4	4	4	4	4
`_Atomic struct {int a[2];}`	8	8	8	8	8	8	8	8
`_Atomic struct {char a[16];}`	16	16	16	16	16	16	16	8

不可分 `struct` 型の一般的な整列規則では、`struct` 型のサイズが 2、4、8、16 のいずれかであり、かつ対応する非不可分型の整列がこのサイズより小さい場合は、このサイズに一致するように不可分 `struct` 型の整列が増やされます。

不可分型は、ビットフィールドでは許可されません。

3.2 バンドルされている不可分ライブラリ

不可分機能はオペレーティングシステムからの実行時サポートを必要とする C11 および C++11 標準の新しい言語機能です。不可分機能の使用については、atomic_fence(3A)、atomic_flag(3A)、および stdatomic.h(3A) のマニュアルページを参照してください。

この実行時サポートの標準インタフェースはまだ存在しないため、gcc 不可分ライブラリと Oracle Developer Studio 不可分ライブラリの間にわずかな違いがあります。

GCC は、Oracle Solaris 11.3 および Oracle Linux 7.*x* 上の `/usr/lib` に含まれている `libatomic.so` と呼ばれる実行時ライブラリで不可分機能をサポートします。

Oracle Developer Studio 12.5 コンパイラは、`libstatomic.so` と呼ばれる新しい実行時ライブラリで不可分機能をサポートします。このライブラリは Oracle Developer Studio リリースにバンドルされていて、Oracle Solaris または Oracle Linux には含まれていません。これは、GCC および Oracle Developer Studio ライブラリをマージして Oracle Solaris に組み込むことができ、さらに Linux にバンドルされたライブラリが標準インタフェースに準拠するまでの暫定的な解決方法です。

`libstatomic.so` ライブラリはテスト済みであり、85 ページの「GCC 不可分ライブラリ libatomic との互換性」で説明されているいくつかの例外を除き、`libstatomic.so` の GCC 4.8、4.9、および 5.1 リリースと互換性があります。

新しいコンパイラオプション `-xatomic` によって、プログラムおよびライブラリをリンクするときに GCC `libatomic` ライブラリまたは Oracle Developer Studio の `libstatomic` ライブラリのどちらを使用するかを指定できます。

3.2.1 不可分ライブラリの選択

Oracle Developer Studio 不可分ライブラリ (`libstatomic.so`) または GCC 不可分ライブラリ (`libatomic.so`) のいずれかを使用できますが、一緒にリンクされる実行可能ファイルおよびライブラリの間で一貫性を保つことが重要です。実行中のプロセスで使用される不可分ライブラリは 1 つだけにします。

注記 - 不可分機能を使用する gcc 組み込みライブラリとの互換性を確保する必要がない場合、Oracle Developer Studio コンパイラと一緒に `libstatomic.so` を使用します。

リンク時に使用されるライブラリを制御するには、`-xatomic` オプションを使用します。Oracle Developer Studio のライブラリ `libstatomic` にリンクするには `-xatomic=studio` を使用し、

GCC のライブラリ libatomic にリンクするには -xatomic=gcc を使用します。ライブラリとのリンクを行わない場合は、-xatomic=none を使用します。

GCC コンパイラを使用する既存のメイクファイルまたはソースコードの移植に役立つように、-latomic がコンパイラに渡された場合、そのオプションは -xatomic=studio に変換されます。

C++ プログラムの場合、不可分サポートライブラリは必要なときにデフォルトでリンクされます。

注記 - -xatomic=none オプションにより、アプリケーションは Oracle Developer Studio libstatomic インストールディレクトリを実行パスとして持たなくなります。-xatomic=none でライブラリ関数を呼び出すアプリケーションを構築するには、libstatomic.so を構築時に明示的にリンクするようにします。

▼ libstatomic.so を使用するアプリケーションの配備

バンドルされている不可分ライブラリ libstatomic.so は、Oracle Developer Studio 製品の一部として完全にサポートされています。ライブラリを使用するアプリケーションを配備できますが、Oracle Developer Studio がインストールされているシステム上でアプリケーションが実行される場合を除き、ライブラリを含める必要があります。

1. **実行可能ファイルから listatomic.so への実行時パスを決定します。**

   例:

   ```
   ./lib
   ```

2. **libstatomic.so への構築時パスを決定します。**

   例:

   build-path/import/libstatomic.so

3. **リンク手順に -xatomic=none を追加します。**

4. **新しいリンク時オプションを追加します。**

   例:

   -R *runtime-path build-path-to-atomics*/libstatomic.so.1

5. **libstatomic ライブラリを独自の製品インストールツリーにコピーします。**

例 1 myprog 実行可能ファイルでの libstatomic.so の追加

次の例では、Oracle Developer Studio がインストールされていない 64 ビット SPARC プラットフォーム上にアプリケーションを配備します。

アプリケーションを構築マシン上に構築する前に、実行可能ファイルを基準にして libstatomic が配置される場所を決定します。たとえば、アプリケーションが app_root に配置されており、libstatomic ライブラリが app_root/lib にある場合、ライブラリの相対的なディレクトリは ./lib です。

```
bash-4.1$ ls app_root/
lib     myprog
bash-4.1$ ls app_root/lib/
libstatomic.so    libstatomic.so.1
```

構築マシン上で libstatomic.so が配置される場所を決定します。たとえば、Oracle Developer Studio が *install-dir*/ にインストールされる場合、libstatomic.so は *install-dir*/lib/compilers/atomic/sparcv9/libstatomic.so に配置されます。

次のコマンドを使用して、プログラムをコンパイルします。

```
$ install-dir/bin/CC -m64 [compiler-options] -xatomic=none myprog.cc -o myprog -R./lib install-dir/lib/compilers/atomic/sparcv9/libstatomic.so
```

配備マシン上にパッケージディレクトリを作成します。

次に、64 ビットの libstatomic.so ライブラリを app_root/lib にコピーします。

```
$ cp install-dir/lib/compilers/atomic/sparcv9/libstatomic.so app_root/lib
```

myprog について生成された実行可能ファイルを app_root ディレクトリにコピーします。これにより、実行時リンカーは myprog が実行されたときに ./lib の下に libstatomic.so を見つけます。

```
$ cp myprog.out app_root
```

3.2.2 GCC 不可分ライブラリ libatomic との互換性

使用するアプリケーションまたはライブラリが不可分機能を使用し、そのアプリケーションまたはライブラリが GCC バージョンの libatomic を使用する実行可能ファイルおよびライブラリと相互運用する必要がある場合、Oracle Developer Studio プログラムを GCC バージョンの libatomic とリンクする必要があります。プログラム内の不可分実行時ライブラリのバージョンが 1 つだけになるよう注意する必要があります。

Oracle Developer Studio の C および C++ プログラムを GCC バージョンの libatomic とリンクするには、コンパイラオプション -xatomic=gcc を使用します。

GCC バージョンの libatomic が /usr/lib に存在しない古いシステムでリンクおよび実行する場合、不可分機能のサポートの非互換性について懸念する必要はありません。そのような状況では、使用される不可分ライブラリがほかに存在しないため、libstatomic を GCC バイナリと組み合わせてシステム上で使用できます。

Oracle Developer Studio コンパイラは libstatomic ライブラリと一緒に使用すると最適に動作しますが、GCC の libatomic バージョン 1.1 と互換性があり、次に示すような既知の課題があります。

- **libatomic 1.0.0 を含む GCC 4.8** - このバージョンの libatomic は、C 11 プログラムの浮動小数点不可分機能を使用しない場合、C11 および C++11 の不可分機能をサポートします。GCC 4.8 コンパイラ自体は、将来のリリースまで C11 をサポートしません。
- **libatomic 1.1 を含む GCC 4.9 および 5.1** - このバージョンは、C11 用の浮動小数点不可分機能を含み、これらのバージョンを持つ GCC コンパイラは C11 の不可分機能のキーワードをサポートします。

注記 - 使用する C11 プログラムが不可分関数のアドレスを取得する場合があり、これは非汎用関数についてのみ有効です。これは libatomic 1.0.0 または libatomic 1.1 では、すべての atomic 関数がコンパイラによって常にインライン化され、ライブラリ内にコードは必要ないことを前提にしているため、これらのライブラリではこれが正しく機能しません。これらの関数のリストは不可分機能のマニュアルページで確認できます。これらの関数ポインタを取得する必要がある場合は、libstatomic を使用するようにしてください。

Oracle Linux 7.x および Oracle Solaris 11.3 には libatomic 1.0.0 を含む GCC 4.8 が含まれています。

3.2.3 実装上の注意

実行可能ファイルや共有ライブラリなどの複数のコンポーネントが不可分実行時を必要とするとき、各コンポーネントを適切な -xatomic オプションで動的にリンクして、正しい動的依存関係を作成するようにしてください。ライブラリがリンクされるときに不可分オプションの提供を必要とする共有ライブラリを生成しないようにしてください。

同じプロセス内で両方の実行時ライブラリを使用することは、次の理由によりお勧めしません。

- 一部の不可分型では、同期を実行するために実行時サポートライブラリの呼び出しが必要です。2 つの実行時システムは内部データ構造が異なるため、2 つのライブラリは同じオブジェクトを同期できません。
- Oracle Developer Studio ライブラリ libstatomic は libatomic と同じ関数の大域シンボル名を使用します。同じプロセス内で両方のライブラリが使用された場合、実行可能ファイルまたはライブラリが予期しないライブラリ内の関数を呼び出す可能性があります。

両方の実行時ライブラリを使用しようとするプログラムは最初は動作するようにみえますが、失敗する可能性が高くサポートできません。

注記 - -latomic を使用したリンクは、/usr/lib/libatomic.so.1 を使用したリンクになりません。このライブラリは GCC 実装で、主として、互換性のあるライブラリが Oracle Solaris および Linux でリリースされるまで GCC で使用されるためのものです。

不可分演算の多くはインライン化されるため、アプリケーションは不可分実行時ライブラリに依存せずに不可分機能を使用できる可能性があります。動作は実装に固有となるため、コンパイラをアップグレードした場合に結果が変化する可能性があります。使用するアプリケーションがスカラー型の不可分型 (`flags`、`char`、`int`、`long`、または `pointers`) のみ使用し、x86 プラットフォーム上で構築される場合、生成されるバイナリで `libstatomic` が不要となることがあります。そのようなアプリケーションまたはライブラリを `-xatomic=none` オプションでコンパイルしてみて、正しくリンクされ実行されるか確認することもできます。

♦ ♦ ♦ 第 4 章

4 C コードの並列化

Oracle Developer Studio C コンパイラは、メモリー共有型マルチプロセッサ、マルチコア、またはマルチスレッドシステム上で実行されるコードを最適化できます。コンパイルされたコードは、システム上の複数のプロセッサを使用して並列に実行できます。明示的な並列化 (OpenMP を使用) および自動並列化の両方の方法が使用可能です。この章では、このコンパイラの並列化機能を利用する方法について説明します。

4.1 OpenMP を使用した並列化

C コンパイラでは、並列化で OpenMP API がサポートされています。この API は、一連のプラグマ、実行時ルーチン、および環境変数で構成されています。OpenMP API の仕様の情報は、OpenMP Web サイト (`http://www.openmp.org`) にあります。

コンパイラの OpenMP サポートと OpenMP プラグマの認識を有効にするには、`-xopenmp` オプションを使用してコンパイルします。`-xopenmp` を使用しないと、コンパイラは OpenMP プラグマをコメントとして扱います。312 ページの「`-xopenmp[={parallel|noopt|none}]`」を参照してください。

OpenMP のこの実装 (プラグマ、環境変数、および実行時ルーチンを含む) に固有の情報については、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。

4.2 自動並列化

C コンパイラは、並列化しても安全であると判断したループに対して並列コードを生成します。通常、これらのループは、独立して実行可能な繰り返しを持っています。そのようなループでは、各繰り返しを実行する順番や、繰り返しを並列実行するかどうかは、問題ではありません。すべてではありませんが、ほとんどのベクトル処理用ループはこのような種類のループです。

C では別名が存在する可能性があるため、並列化の安全性を判断することは困難です。コンパイラに役立つように、Oracle Developer Studio C はプラグマおよび追加のポインタ修飾

子を提供して、コンパイラが判定できない、プログラマには既知の別名情報を示します。詳細は、第6章「型に基づく別名解析」を参照してください。

次の例は、C を並列化し、制御する方法を示しています。

```
% cc -fast -xO4 -xautopar example.c -o example
```

このコンパイラコマンドでは、通常の方法で実行できる example という実行可能ファイルが生成されます。マルチプロセッサ実行を活用する方法については、268 ページの「-xautopar」を参照してください。

4.2.1 データの依存性と干渉

C コンパイラは、プログラム中のループの解析を実行することで、ループのさまざまな繰り返しを並列で実行することが安全であるかどうかを判断します。この解析の目的は、ループ中の任意の 2 個の繰り返しが、互いに干渉する可能性があるかどうかを調べることです。通常、この問題は、ループの一方の繰り返しが変数を読み取っている可能性があるときに、別の繰り返しがその同じ変数を書き込んでいる場合に発生します。次に示すプログラムの一部を考えてみましょう。

例 2 依存関係があるループ

```
for (i=1; i < 1000; i++) {
    sum = sum + a[i]; /* S1 */
}
```

この例では、2 つの連続する繰り返し、i および i+1 が、同じ変数 sum に対して書き込みと読み取りを実行します。したがって、このような 2 個の繰り返しを並列に実行するには、なんらかの方法で変数をロックすることが必要になります。そうしない場合、2 つの繰り返しを並列で実行するのを許可することは安全ではありません。

ところが、このロック機構を使用すると、オーバーヘッドが発生してプログラムの実行を遅くすることになります。C コンパイラは通常、前述の例のループを並列化しません。ループの 2 つの繰り返しの間にデータの依存関係があるからです。別の例を考えてみましょう。

例 3 依存関係を持たないループ

```
for (i=1; i < 1000; i++) {
    a[i] = 2 * a[i]; /* S1 */
}
```

この場合、ループの各繰り返しは、異なる配列要素を参照します。したがって、ループ中の繰り返しを実行する順番を守る必要がありません。また、異なる繰り返しでアクセスするデータが互いに干渉しないため、ロックを使用せずに並列実行することが可能になります。

ループの 2 つの異なる繰り返しが同じ変数を参照している可能性があるかどうかを判断するためにコンパイラが実行する解析はデータ依存性解析と呼ばれます。1 回でも変数に書き込み

を実行している場合には、データ依存性によって並列化することができなくなります。コンパイラが実行する依存性解析の結果、次のいずれかの解答が得られます。

- 依存性があります。この場合、ループを並列で実行することは安全ではありません。
- 依存性がありません。この場合、任意の数のプロセッサを使用してループを並列で安全に実行する可能性があります。
- 依存性を確認できません。コンパイラは、安全のために、依存関係がループの並列実行を妨げる可能性があると仮定し、ループを並列化しません。

この例では、ループの 2 つの繰り返しが配列 a の同じ要素に書き込むかどうかは、配列 b が重複要素を含んでいるかどうかによって決まります。コンパイラは、この事実を判断できないかぎり、依存性が存在する可能性があると仮定し、ループを並列化しないようにする必要があります。

例 4 依存性を含んでいる可能性のあるループ

```
for (i=1; i < 1000; i++) {
    a[b[i]] = 2 * a[i];
}
```

4.2.2 固有スカラーと固有配列

データ依存性によっては、コンパイラがループを並列化できる場合があります。次の例を考えてみましょう。

例 5 並列化可能な依存性ありのループ

```
for (i=1; i < 1000; i++) {
    t = 2 * a[i];           /* S1 */
    b[i] = t;               /* S2 */
}
```

この例では、配列 a と b が重なりあっていないと仮定すると、2 回の繰り返しの間に、変数 t による明らかなデータ依存性が存在します。繰り返しの 1 回目と 2 回目に注目すると、次のような文が実行されることになります。

例 6 繰り返し 1 と 2

```
t = 2*a[1];  /* 1 */
b[1] = t;    /* 2 */
t = 2*a[2];  /* 3 */
b[2] = t;    /* 4 */
```

文 1 および 3 によって変数 t が変更されるので、これらを並列実行することはできません。しかし、変数 t の値は常に同じ繰り返しの中で計算されて使用されるので、コンパイラは繰り返

しごとに変数 t の別々のコピーを使用できます。この方法により、このような変数による異なる繰り返し間での干渉が回避されます。事実上、変数 t は次の例に示すように、繰り返しを実行するスレッドごとのスレッド固有変数として使用されます。

例 7 各スレッドに固有の変数としての変数 t

```
for (i=1; i < 1000; i++) {
    pt[i] = 2 * a[i];       /* S1 */
    b[i] = pt[i];           /* S2 */
}
```

この例では、各スカラー変数参照 t が、配列参照 pt で置き換えられています。各繰り返しが pt の異なる要素を使用するようになり、任意の 2 つの繰り返し間でのデータ依存性がなくなります。これの問題の 1 つは、さらに大きな配列になる可能性があることです。実際には、コンパイラによってスレッドごとに 1 個の変数だけが割り当てられ、その変数をループの実行で使用します。つまりこのような変数は、スレッドごとに固有であるといえます。

コンパイラは、配列変数を固有化してループを並列実行することもできます。次の例を考えてみましょう。

例 8 配列変数を使用した並列化可能なループ

```
for (i=1; i < 1000; i++) {
    for (j=1; j < 1000; j++) {
            x[j] = 2 * a[i];        /* S1 */
            b[i][j] = x[j];         /* S2 */
    }
}
```

この例では、外側のループの異なる繰り返しが配列 x の同じ要素を変更するので、外側のループは並列化できません。しかし、外側のループの繰り返しを実行するそれぞれのスレッドに配列 x 全体のスレッド固有コピーがある場合は、外側ループの任意の 2 つの繰り返し間の干渉は発生しません。次の例はこの点を示しています。

例 9 スレッド固有化された配列を使用した並列化可能なループ

```
for (i=1; i < 1000; i++) {
    for (j=1; j < 1000; j++) {
            px[i][j] = 2 * a[i];    /* S1 */
            b[i][j] = px[i][j];     /* S2 */
    }
}
```

スレッド固有スカラーの場合と同じく、システムで実行されるスレッドの数までしかこの配列を展開する必要はありません。この展開は、各スレッドのスレッド固有領域にオリジナル配列の 1 つのコピーを割り当てることで、コンパイラによって自動的に行われます。

4.2.3 ストアバック

変数のスレッド固有化は、プログラムの並列化を向上させる上で便利な方法です。しかし、プライベート変数がループの外側で参照される場合には、コンパイラが正しい値を持つことを確認する必要があります。次の例を考えてみましょう。

例 10 ストアバック変数を使用した並列化ループ

```
for (i=1; i < 1000; i++) {
    t = 2 * a[i];           /* S1 */
    b[i] = t;               /* S2 */
}
x = t;                      /* S3 */
```

この例では、文 S3 で参照されている t の値が、ループで計算される t の最終値です。変数 t がスレッド固有化され、ループの実行が終了したあと、t の正しい値をオリジナルの変数に戻すことが必要になります。このプロセスは「*ストアバック*」と呼ばれ、最後の繰り返しでの t の値を変数 t のコピーを元の場所に戻すことで実現されます。多くの場合、コンパイラはこれを自動的に行うことができますが、最後の値を容易に計算できない場合があります。

例 11 ストアバックを使用できないループ

```
for (i=1; i < 1000; i++) {
    if (c[i] > x[i] ) {         /* C1 */
            t = 2 * a[i];           /* S1 */
            b[i] = t;               /* S2 */
    }
}
x = t*t;                        /* S3 */
```

正しい実行の場合、文 S3 の t の値は通常、ループの最後の繰り返しでの t の値ではありません。実際には、条件 C1 が真なのは、最後の繰り返しです。一般に、t の最終値の計算は困難である可能性があります。この例のような場合には、コンパイラはループを並列化しません。

4.2.4 縮約変数

ループの繰り返し間に実際の依存性が存在しており、依存性の原因となる変数をスレッド固有化するだけでは依存性を除去できない場合があります。たとえば、ある繰り返しから別の繰り返しへ値が累積される次のコードを見てみます。

例 12 並列化される可能性のあるループ

```
for (i=1; i < 1000; i++) {
    sum += a[i]*b[i]; /* S1 */
}
```

この例では、ループは 2 つの配列のベクトル積を計算して、sum と呼ばれる共通変数に入れます。このループを単純な方法で並列化することはできません。ここでは、文 S1 の計算式に結合の法則を適用し、各スレッドに対して psum[i]というスレッド固有変数を割り当てることができます。変数 psum[i] のコピーはそれぞれ 0 に初期化されます。各スレッドは、スレッド固有の変数 psum[i] に自分で計算した部分和を代入します。バリアに達したら、すべての部分和を合計してオリジナルの変数 sum に代入します。この例では、和の縮約をしているので、変数 sum を縮約変数といいます。しかし、スカラー変数を縮約変数にした場合には、丸め誤差が累積されて、sum の最終値に影響する可能性があることに注意してください。コンパイラは、ユーザーによる明確な指示がされた場合に、この操作を実行します。

4.2.5 ループの変換

コンパイラは、プログラム中のループを並列に実行できるようにするために、ループ再構成のための変換を数回実行します。この変換のいくつかは、シングルプロセッサ上でのループの実行速度も向上させます。このセクションでは、コンパイラによって実行される変換について説明します。

4.2.5.1 ループの分散

ループには多くの場合、並列で実行できないいくつかの文と、並列で実行できる多くの文が含まれます。ループの分散によって、これらの文を別のループに移動し、並列実行可能な文だけから成るループを作ります。このプロセスを次の例で説明します。

例 13 ループの候補

```
for (i=0; i < n; i++) {
    x[i] = y[i] + z[i]*w[i];               /* S1 */
    a[i+1] = (a[i-1] + a[i] + a[i+1]/3.0;  /* S2 */
    y[i] = z[i] - x[i];                    /* S3 */
}
```

配列 x、y、w、a、z が重なりあっていないと仮定すると、文 S1 および S3 を並列実行することはできますが、文 S2 はできません。次の例は、異なる 2 つのループに分割または分散されたあとにループがどのようになるかを示しています。

例 14 分散されたループ

```
/* L1: parallel loop */
for (i=0; i < n; i++) {
    x[i] = y[i] + z[i]*w[i];              /* S1 */
    y[i] = z[i] - x[i];                   /* S3 */
}
/* L2: sequential loop */
for (i=0; i < n; i++) {
```

```
    a[i+1] = (a[i-1] + a[i] + a[i+1]/3.0; /* S2 */
}
```

この変換のあと、前述のループ L1 には並列実行を妨害する文が含まれていないので、これを並列実行できるようになります。ところが、2 番目のループ L2 は元のループの並列実行できない部分を引き継いだままです。

ループの分散は、常に効果があって安全に実行できるとはかぎりません。コンパイラは、この効果と安全性を確認するための解析を実行します。

4.2.5.2 ループの融合

ループの粒度、つまりループで実行される作業が小さい場合は、分散からのパフォーマンスの利点がわずかである可能性があります。並列ループ起動のオーバーヘッドがループ作業負荷に比べて高すぎるためです。このような状況では、コンパイラはループの融合を使用して、いくつかのループを 1 つの並列ループに結合することで、ループの粒度を大きくします。同じ回数の繰り返しを行うループが隣接していると、ループの融合は簡単にしかも安全に行われます。次の例を考えてみましょう。

例 15 作業量の少ないループ

```
/* L1: short parallel loop */
for (i=0; i < 100; i++) {
    a[i] = a[i] + b[i];        /* S1 */
}
/* L2: another short parallel loop */
for (i=0; i < 100; i++) {
    b[i] = a[i] * d[i];        /* S2 */
}
```

この例では、2 個の小さなループが隣どうしに記述されていて、次のように安全に融合することができます。

例 16 融合された 2 つのループ

```
/* L3: a larger parallel loop */
for (i=0; i < 100; i++) {
    a[i] = a[i] + b[i];       /* S1 */
    b[i] = a[i] * d[i];       /* S2 */
}
```

これによって、並列ループの実行によるオーバーヘッドを半分にすることができます。ループの融合は、別の場合にも役に立ちます。たとえば、同じデータが 2 個のループで参照されている場合には、この 2 個のループを融合すると、参照を局所的なものにすることができます。

ただし、ループの融合は常に安全に実行できるとはかぎりません。ループの融合が、それまで存在しなかったデータ依存性を作り出す場合は、融合によって間違った実行になることがあります。次の例を考えてみましょう。

例 17 安全でない融合の候補

```
/* L1: short parallel loop */
for (i=0; i < 100; i++) {
    a[i] = a[i] + b[i];      /* S1 */
}
/* L2: a short loop with data dependence */
for (i=0; i < 100; i++) {
    a[i+1] = a[i] * d[i];    /* S2 */
}
```

この例のループが融合されると、文 S2 から S1 へのデータ依存性が作成されます。実際には、文 S1 の右辺の `a[i]` の値は、文 S2 で計算されます。ループが融合されない場合は、この依存性は発生しません。コンパイラは、ループの融合を実行すべきかどうかを判断するために、安全性と利点の解析を実行します。場合によっては、任意の数のループを融合できることがあります。このような方法でループの作業量を多くすると、並列実行が十分に有効であるようなループを生成することができます。

4.2.5.3 ループの交換

ループのネストでもっとも外側のループを並列化することは通常、発生するオーバーヘッドが小さいために、より多くの利点が得られます。ただし、もっとも外側のループを並列化することは、そのようなループによってもたらされる可能性のある依存性のために、常に安全とは限りません。次の例はこの状況を示しています。

例 18 並列化できない入れ子のループ

```
for (i=0; i <n; i++) {
    for (j=0; j <n; j++) {
            a[j][i+1] = 2.0*a[j][i-1];
    }
}
```

この例では、添字変数 `i` を持つループは、ループの後続の 2 回の繰り返しの間に依存性のために、並列化できません。ただし、2 つのループを交換することができるため、交換すると並列ループ (`j` のループ) が今度は外側のループになります。

例 19 交換されたループ

```
for (j=0; j<n; j++) {
    for (i=0; i<n; i++) {
            a[j][i+1] = 2.0*a[j][i-1];
    }
}
```

結果のループが並列作業分散のオーバーヘッドを 1 回だけ発生するのに対して、以前はオーバーヘッドが `n` 回発生していました。コンパイラは、これまで説明したように、ループの交換をするかどうか決定するための解析を行い、安全性と有効性を確認します。

4.2.6 別名と並列化

ISO C の別名を使用すると、ループを並列化できなくなることがあります。別名とは、2 個の参照が記憶領域の同じ位置を参照する可能性のある場合に発生します。次の例を考えてみましょう。

例 20 同じメモリー位置への 2 つの参照を持つループ

```
void copy(float a[], float b[], int n) {
    int i;
    for (i=0; i < n; i++) {
            a[i] = b[i]; /* S1 */
    }
}
```

変数 a と b は引数であるため、a と b がメモリーの重なり合う領域を指している可能性があります。たとえば、copy が次のように呼び出された場合:

```
copy (x[10], x[11], 20);
```

呼び出されたルーチンでは、copy ループの後続の 2 回の繰り返しが、配列 x の同じ要素を読み書きしている可能性があります。しかし、ルーチン copy が次のように呼び出された場合には、ループの 20 回の繰り返しのいずれかで重なり合う可能性がなくなります。

```
copy (x[10], x[40], 20);
```

ルーチンの呼び出し方法に関する情報なしで、コンパイラはこの状況を正しく解析できません。ただし、Oracle Developer Studio C コンパイラには、この種の別名情報を伝えるための、標準 ISO C に対するキーワード拡張が用意されています。詳細については、97 ページの「制限付きポインタ」を参照してください。

4.2.6.1 配列およびポインタの参照

別名の問題の一因は、配列参照とポインタ計算演算を定義できる C 言語の性質にあります。コンパイラが効率的にループを自動並列化できるようにするためには、配列として配置されているすべてのデータを、ポインタではなく C の配列参照の構文を使用して参照する必要があります。ポインタ構文が使用されると、コンパイラはループの異なる繰り返し間でのデータの関係を解析できなくなります。そのため、コンパイラは用心深くなり、ループを並列化しません。

4.2.6.2 制限付きポインタ

コンパイラが効率的にループの並列化を実行するためには、特定の左辺値が記憶領域の別々の領域を指定しているかどうかを判断する必要があります。別名とは、記憶領域の決まった位置を示していない左辺値のことです。オブジェクトへの 2 個のポインタが別名であるかどうか

を判断することは、困難で非常に時間がかかります。プログラム全体の解析が必要になることがあるためです。次の例の関数 vsq() を考えます。

例 21 2 つのポインタを持つループ

```
void vsq(int n, double * a, double * b) {
    int i;
    for (i=0; i<n; i++) {
            b[i] = a[i] * a[i];
    }
}
```

ポインタ a と b が異なるオブジェクトにアクセスしていると判断した場合、コンパイラはループの異なる繰り返しの実行を並列化できます。ポインタ a と b からアクセスされるオブジェクトで重なり合いがある場合は、コンパイラがループを並列で実行するのは安全ではありません。コンパイラはコンパイル時に、関数 vsq() を分析するだけでは、a と b からアクセスされるオブジェクトが重なり合っているかどうかを判断できません。コンパイラがこの情報を得るために、プログラム全体の解析が必要になることがあります。

別々のオブジェクトを指定するポインタを指定するために、制限付きポインタが使用されます。そうすることで、コンパイラはポインタ別名解析を実行できます。次の例に示す関数 vsq() は、関数パラメータが制限付きポインタとして宣言されています。

```
void vsq(int n, double * restrict a, double * restrict b)
```

ポインタ a および b が制限付きポインタとして宣言されているので、a および b で示された記憶領域が区別されていることがわかります。この別名情報によって、コンパイラはループの並列化を実行することができます。

キーワード restrict は volatile のような型修飾子であり、ポインタ型のみを修飾します。ソースコードを変更しない場合があります。その場合、次のコマンド行オプションを使用して、ポインタ型の値をとる関数の引数を restrict ポインタとして扱うように指定できます。

-xrestrict=[*func1*,…,*funcn*]

関数リストが指定されている場合、指定された関数内のポインタパラメータは制限付きとして扱われます。指定されていない場合は、C ファイル全体のすべてのポインタパラメータが制限付きとして扱われます。たとえば、-xrestrict=vsq を使用すると、前述の関数 vsq() についての最初の例では、ポインタ a および b がキーワード restrict によって修飾されます。

restrict を正しく使用することはとても重要です。区別できないオブジェクトを指しているポインタを制限付きポインタにしてしまうと、ループを正しく並列化することができなくなり、不定な動作をすることになります。たとえば、関数 vsq() のポインタ a および b が重なりあっているオブジェクトを指している場合には、b[i] と a[i+1] などが同じオブジェクトである可能性があります。このとき a および b が制限付きポインタとして宣言されていなければ、ループは順次実行されます。a および b が間違って制限付きであると宣言されていれば、コンパイラはループを並列実行するようになりますが、この場合 b[i+1] の結果は b[i] を計算したあとでなければ得られないので、安全に実行することはできません。

4.3 環境変数

並列化された C に関係する環境変数の一部を次に示します。これ以外に、OpenMP API 仕様によって定義されている環境変数や、Oracle Developer Studio 実装に固有の環境変数が存在します。並列化に関連するすべての環境変数については、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。

- `OMP_NUM_THREADS`

  プログラムで使用するスレッドの数を指定するには、`OMP_NUM_THREADS` 環境変数を設定します。この環境変数が設定されていない場合のデフォルトのスレッド数については、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。

- `SUNW_MP_THR_IDLE`

  バリアーで待機しているか、または作業対象となる新しい並列領域を待っている OpenMP プログラム内のアイドル状態のスレッドのステータスを制御します。詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。

- `SUNW_MP_WARN`

  この環境変数を `TRUE` に設定すると、OpenMP やその他の並列化実行時システムからの警告メッセージが出力されます。詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。

- `OMP_STACKSIZE`

  実行中のプログラムは、マスタースレッド用のメインメモリースタックと、各スレーブスレッド用の個別のスタックを保持します。スタックとは、サブプログラムの実行中に、引数と自動変数を保持するために使用される一時的なメモリーアドレス空間です。`OMP_STACKSIZE` 環境変数を使用すると、スレーブスレッド用のスタックのサイズを制御できます。この環境変数が設定されていない場合のデフォルトのスレーブスレッドスタックサイズについては、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。

  `OMP_STACKSIZE` 環境変数を設定しても、Oracle Solaris Pthreads API を使用しているプログラムには影響を与えないので注意してください。

  スレッドのスタックのサイズが小さすぎる場合は、スタックオーバーフローが発生して、通知なしでデータが壊れたり、セグメント例外が発生したりすることがあります。スタックオーバーフローを検出および診断する方法については、`-xcheck=stkovf` コンパイラオプションを参照してください。

4.4 並列実行モデル

並列ループの実行はスレッドによって行われます。プログラムの初期実行を行うスレッドをマスタースレッドといいます。マスタースレッドは並列ループを検出すると、マスタースレッド自体と複数のスレーブスレッドで構成されるスレッドチームを作成します。ループの反復がチャンクに分割され、チャンクがチーム内のスレッドに分散されます。スレッドによるチャンクの実行が完了すると、チームの残りのスレッドと同期が行われます。この同期はバリアと呼ばれます。すべてのス

レーブスレッドが並列ループでの処理を完了し、バリアに達するまでは、マスタースレッドはプログラムの残りの部分を実行できません。バリアの終わりで、マスタースレッドは別の並列ループを検出するまで、引き続きプログラムを順次実行します。

この処理中に、次に関連するオーバーヘッドなどのさまざまなオーバーヘッドが発生する可能性があります。

- スレッドの作成
- 作業配布
- バリア同期

並列ループの中には、実行される有用な作業の量が少ないためにオーバーヘッドを正当化できないものもあります。このようなループでは、実行速度が並列化よりも大きく低下することがあります。ループでの有用な作業の量がそれほど多くない場合、ループを並列実行することでプログラムの速度が向上します。

4.5 処理速度の向上

コンパイラがプログラムの大量の時間が消費される部分を並列化しない場合、速度の向上は発生しません。たとえば、プログラム実行の 5% 部分に相当するループしか並列化できない場合、全体的に速度を向上できる限界は 5% です。ただし、改善は、負荷のサイズと並列実行オーバーヘッドに依存します。

したがって、一般的な規則として、プログラムの並列化される部分が大きくなればなるほど、大幅な速度の向上を期待できます。

それぞれの並列ループは、起動時と終了時に小さなオーバーヘッドを招きます。起動時のオーバーヘッドには作業を分散するためのものがあり、終了時には、バリアでの同期によるものがあります。ループによって実行される作業量が比較的小さい場合には、速度の向上を期待できません。実際には、ループが遅くなる可能性さえあります。プログラム実行の大部分が大量の小さな並列ループで占められている場合には、プログラム全体の速度が上がる代わりに遅くなることがあります。

コンパイラは、いくつかのループ変換を実行することで、ループの規模を大きくしようとします。この変換には、ループの交換およびループの融合が含まれます。プログラム内の並列化が少ない場合や小さな並列領域に分割されている場合、速度の向上は通常は少なくなります。

問題サイズを大きくすると、多くの場合、プログラム内の並列化の分割が改善されます。たとえば、あるプログラムが順次実行する部分がプログラムサイズの 2 乗に増加し、並列化可能な部分が 3 乗に増加するものとします。この問題の場合、並列化部分の作業負荷は順次部分より速い速度で増加します。リソースの限界に達しないかぎり、ある時点で問題の速度が向上します。

並列 C の利点を最大限に引き出すには、指令、問題のサイズ、およびプログラムの再構成に関して何らかのチューニングや実験を試みてください。

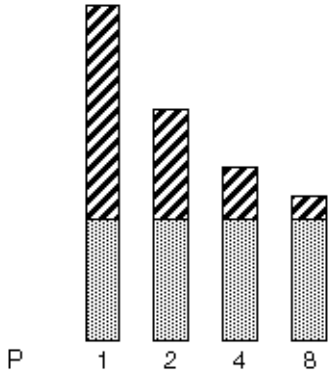
4.5.1 アムダールの法則

決まったサイズの問題の処理速度の向上は一般に、特定の問題の並列処理速度の向上は、問題の逐次処理部分によって制限されるというアムダールの法則に基づきます。次の等式は、問題の処理速度向上を S とし、その問題で順次コードにかかった時間を F とし、それ以外の時間 (1-F) をプロセッサの数である P で均一に除算します。式 ((1 - F) / P) の 2 番目の項の値がゼロになると、値が決まっている 1 番目の項によって全体的な速度の向上度が制限されます。

$$\frac{1}{S} = F + \frac{(1-F)}{P}$$

次の図に、この概念を示します。暗い陰影の付いた部分は、プログラムの順次部分を表しており、プロセッサ数が 1、2、4、8 個の場合でも一定のままです。明るい陰影の付いた部分はプログラムの並列部分を表しており、任意の数のプロセッサ間で均等に分散できます。

図 2 固定の問題の速度向上

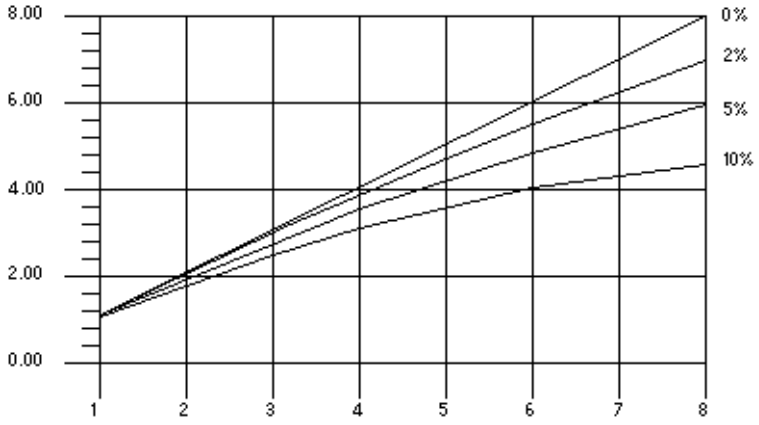


プロセッサの数が増加するにつれ、各プログラムの並列処理部分の所要時間は減少していますが、各プログラムの逐次処理部分は同じままです。

ただし実際には、複数のプロセッサに対する通信と作業分散によりオーバーヘッドを招く場合があります。これらのオーバーヘッドは、使用される任意の数のプロセッサのために固定されない可能性があります。

次の図には、プログラムに逐次処理部分がそれぞれ 0%、2%、5%、10% 含まれる場合の理想的な速度向上が示されています。オーバーヘッドは想定されていません。

図 3 アムダールの法則による処理速度向上の曲線



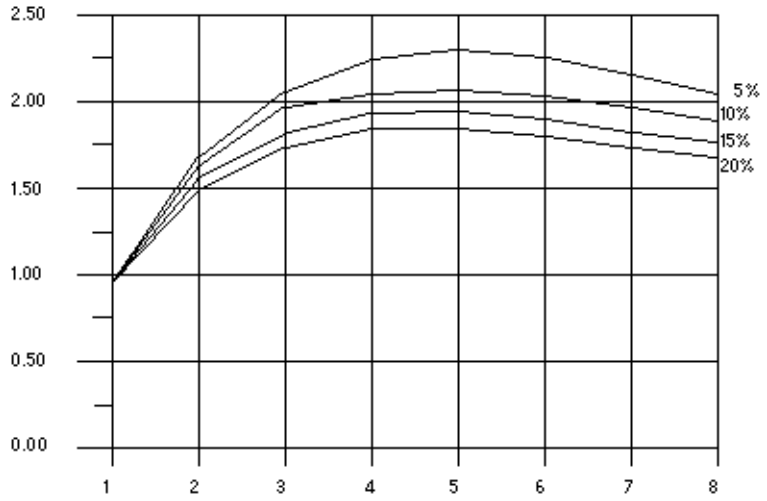
4.5.1.1 オーバーヘッド

モデルにオーバーヘッドの影響を取り入れると、速度向上の曲線は大幅に変わります。説明の目的のために、オーバーヘッドが 2 つの部分で構成されることを想定します: プロセッサの数に依存しない固定部分と、使用されるプロセッサの数に 2 乗で増加する固定でない部分です。

$$\frac{1}{S} = \frac{1}{F + \left(1 - \frac{F}{P}\right) + K_1 + K_2 P^2}$$

この式で K_1 と K_2 は一定の係数です。この仮定では、速度向上の曲線は次の図のようになります。この場合、速度向上はピークアウトします。特定のポイント後は、より多くのプロセッサを追加するとはパフォーマンスに悪影響を与えます。

図 4 オーバーヘッドがある場合の速度向上の曲線



グラフは、すべてのプログラムが 5 つのプロセッサで最大の速度向上に達し、最大の 8 個のプロセッサが追加されるとこの利点が失われることを示しています。横軸はプロセッサの数、縦軸は速度を表しています。

4.5.1.2 ガスタフソンの法則

アムダールの法則は、実際の問題で並列化速度向上を予測する場合に、誤った方向に導かれる可能性があります。プログラムの逐次処理部分に費やされる時間の割合は、問題のサイズに依存することがあります。つまり、次の例に示すように、問題のサイズを大きくすることで、速度向上の可能性が改善する場合があります。

例 22 問題サイズの拡大により速度向上の可能性が改善されることがある

```
/*
* initialize the arrays
*/
for (i=0; i < n; i++) {
    for (j=0; j < n; j++) {
            a[i][j] = 0.0;
            b[i][j] = ...
            c[i][j] = ...
    }
}
/*
```

```
* matrix multiply
*/
for (i=0; i < n; i++) {
    for(j=0; j < n; j++) {
            for (k=0; k < n; k++) {
                a[i][j] = b[i][k]*c[k][j];
            }
    }
}
```

理想的なオーバーヘッドゼロ、2 番目のループネストが並列で実行されることを想定します。問題のサイズが小さい場合 (つまり、小さい値の `n`)、プログラムの順次部分と並列化部分はそれほどかけ離れていません。ただし、`n` が大きくなると、並列実行部分に費やされる時間が順次実行の部分に対するものよりも早い勢いで大きくなります。この問題の場合は、問題のサイズが大きくなるにつれてプロセッサの数を増やすことは利点です。

4.6 メモリーバリア組み込み関数

コンパイラには、SPARC プロセッサと x86 プロセッサ用のさまざまなメモリーバリアー組み込み関数を定義する、ヘッダーファイル `mbarrier.h` が用意されています。これらの組み込み関数は、独自の同期プリミティブを使用してマルチスレッドコードを記述する開発者に役立つ場合があります。開発者は、プロセッサの資料を参照して、特定の状況でこれらの組み込み関数が必要となる時点と、必要であるかどうかを判別してください。

`mbarrier.h` によってサポートされるメモリーオーダリング組み込み関数を次に示します。

- `__machine_r_barrier()` — これは、*read* バリアーです。これにより、バリアー前のすべてのロード操作が、バリアー後のすべてのロード操作の前に完了します。
- `__machine_w_barrier()` — これは、*write* バリアーです。これにより、バリアー前のすべての格納操作が、バリアー後のすべての格納操作の前に完了します。
- `__machine_rw_barrier()` — これは、*read—write* バリアーです。これにより、バリアー前のすべてのロードおよび格納操作が、バリアー後のすべてのロードおよび格納操作の前に完了します。
- `__machine_acq_barrier()` — これは、*acquire* セマンティクスを持つバリアーです。これにより、バリアー前のすべてのロード操作が、バリアー後のすべてのロードおよび格納操作の前に完了します。
- `__machine_rel_barrier()` — これは、*release* セマンティクスを持つバリアーです。これにより、バリアー前のすべてのロードおよび格納操作が、バリアー後のすべての格納操作の前に完了します。
- `__compiler_barrier()` — コンパイラが、バリアーを越えてメモリーアクセスを移動しないようにします。

`__compiler_barrier()` 組み込み関数以外のバリアー組み込み関数はすべて、メモリーオーダリング命令を生成します。x86 プラットフォームの場合、これらは `mfence`、`sfence`、または `lfence` 命令です。SPARC プラットフォームの場合、これらは `membar` 命令です。

__compiler_barrier() 組み込み関数は、命令を生成せず、代わりに今後メモリー操作を開始する前にそれまでのメモリー操作をすべて完了する必要があることをコンパイラに通知します。実際の結果としては、非局所変数と、static 記憶クラス指定子を持つ局所変数はすべて、バリア前にメモリーに戻され、バリア後に再ロードされます。コンパイラがバリアー前からのメモリー操作とバリアー後からのメモリー操作を混在させることはありません。ほかのすべてのバリアーには、__compiler_barrier() 組み込み関数の動作が暗黙的に含まれています。

次の例では、__compiler_barrier() 組み込み関数が存在しているため、コンパイラによる 2 つのループのマージが止まります。

```
#include "mbarrier.h"
int thread_start[16];
void start_work()
{
/* Start all threads */
   for (int i=0; i<8; i++)
   {
     thread_start[i]=1;
   }
   __compiler_barrier();
/* Wait for all threads to complete */
   for (int i=0; i<8; i++)
   {
      while (thread_start[i]==1){}
   }
}
```

♦ ♦ ♦ 第 5 章

5 lint ソースコード検査プログラム

この章では、lint プログラムを使用して C のコードを検査し、コンパイルの失敗や、実行時に予期しない結果を招く可能性のあるエラーを見つける方法を説明します。多くの場合 lint は、コンパイラが必ずしも検出しない誤ったコード、エラーを起こしやすいコード、あるいは標準外コードについて警告を出します。

lint プログラムは C コンパイラにより生成されるすべてのエラーと警告のメッセージを表示します。さらに潜在的バグと移植上の問題に関する警告も表示します。多くの場合、lint から表示されたメッセージは、プログラムのサイズと必要な記憶領域を縮小し、全体の効率を改善する手助けとなります。

lint プログラムはコンパイラと同じロケールを使用し、lint の出力は stderr に送られます。型に基づく別名の明確化を実行する前に、135 ページの「lint フィルタ」を使用してコードをチェックする方法の詳細について、lint Filtersを参照してください。

5.1 基本 lint と拡張 lint

lint プログラムは次の 2 つのモードで動作します。

- *基本モード* - デフォルトの lint プログラムです。
- *拡張モード* - 追加の詳細コード解析を提供します

基本 lint でも拡張 lint でも、ファイル全域 (ライブラリを含む) で矛盾した定義や使用を検出し、ファイルを個別に独立して処理する C コンパイラの不足を補います。さまざまなプログラマによって同じ関数が何百ものコードのモジュールで使用される可能性のある大きなプロジェクト環境では、lint は、ほかの方法で探し出すことが困難なバグを発見するのに役立ちます。たとえば、期待しているよりも 1 つ少ない引数で呼び出された関数は、呼び出し時にプッシュされなかった値をスタックから取り出し、そのスタック位置のメモリーの状態によって正しい結果や間違った結果を返します。このような依存性やマシンアーキテクチャーへの依存性を検出することにより、lint はユーザー自身のマシンや別のマシンで実行されるコードを確かなものにすることができます。

拡張モードでは、lint は基本モードの場合よりさらに詳しい報告を出します。基本モードの lint には次の機能が含まれています。

- ソースプログラムの構造およびフロー解析
- 定数の伝播と定数式の評価
- 制御フローとデータフローの解析
- データ型使用状況の解析

拡張モードでは、lint は次の問題を検出することができます。

- 使用されていない #include 指令、変数、手続き
- 解放後のメモリー使用
- 使用されていない割り当て
- 初期化前の変数値の使用
- 割り当てられていないメモリーの解放
- 定数データセグメントへの書き込み時のポインタの使用
- 等しくないマクロの再定義
- 到達しないコード
- 共用体での値の型利用の適合性
- 実際の引数の暗黙の型変換

5.2 lint 使用方法

lint プログラムとそのオプションはコマンド行から起動します。基本モードで lint を起動するには、次のコマンドを使用します。

```
% lint file1.c file2.c
```

拡張された lint は、-Nlevel または -Ncheck オプションを指定して呼び出されます。たとえば、次のようにして拡張 lint を起動できます。

```
% lint -Nlevel=3 file1.c file2.c
```

lint は、2 つの*パスでコード*の検査をします。lint は、最初のパスでは C ソースファイルに個別のエラー条件を、第 2 のパスでは C ソースファイル間の不整合を検査します。このプロセスは、lint が -c を指定して呼び出されていなければユーザーには見えません。

```
% lint -c file1.c file2.c
```

このコマンドは、最初のパスのみを実行し、第 2 のパスに関連する情報を *file1*.ln および *file2*.ln という名前の中間ファイル内に集めるように、lint に指示します。第 2 のパスは、*file1*.c と *file2*.c 間での定義や使用法の不一致をカバーします。

```
% ls
file1.c
file1.ln
file2.c
file2.ln
```

このように、lint の -c オプションは cc の -c オプションに似ており、コンパイルのリンク編集段階を抑制します。lint のコマンド行構文は cc に密接に従っています。

.ln ファイルが lint されると、第 2 のパスが実行されます。

```
% lint file1.ln file2.ln
```

lint は、任意の数の .c または .ln ファイルを、コマンド行の順に処理します。たとえば、次のコマンドは、*file3*.c にエラーが含まれているかどうかと、3 つすべてのファイル間の整合性が取れているかどうかを検査するように、lint に指示します。

```
% lint file1.ln file2.ln file3.c
```

lint は、cc と同じ順序でインクルードヘッダーファイル用のディレクトリを検索します。cc の -I オプションを使用するように、lint の -I オプションを使用できます。57 ページの「インクルードファイルを指定する方法」を参照してください。

lint コマンド行には、複数のオプションを指定することができます。いずれかのオプションが引数を取るか、またはオプションが複数の文字を持つ場合を除いて、オプションは連結できます。

```
% lint -cp -Idir1 -Idir2 file1.c file2.c
```

このコマンドは、次のアクションを実行するように lint に指示します。

- 第 1 のパスのみを実行する
- 移植性検査も実行する
- 指定されたディレクトリでインクルードするヘッダーファイルを検索する

lint には多数のオプションがあり、これらのオプションを使うと、lint で特定のタスクを実行し、特定の条件について報告することができます。

lint に対する一連のデフォルトオプションを定義するには、環境変数 LINT_OPTIONS を使用します。LINT_OPTIONS は、コマンド行で lint の呼び出しに使用された名前の直後にその値が配置されていた場合と同様に、lint によって読み取られます。

```
lint $LINT_OPTIONS ... other-arguments ...
```

lint コマンドは、ユーザー提供のデフォルトオプションファイル lint.defaults を検索するための SPRO_DEFAULTS_PATH 環境変数も認識します。344 ページの「ユーザー指定のデフォルトオプションファイル」を参照してください。

5.3 lint のコマンド行オプション

lint プログラムは、静的なアナライザです。そのため、検出した依存性に関する実行時の結果を評価できません。たとえば、特定のプログラム内に到達不可能な break 文が数百個含まれており、それらは重要度が低いにもかかわらず、lint によってフラグが付けられるものとします。

たとえば、lint のコマンド行オプションやソーステキスト内にコメントとして埋め込まれる特殊な指令を、次のように使用できます。

- 柑-b オプションを指定して lint を呼び出すと、到達不可能な break 文に関するすべてのエラーメッセージが抑制されます。
- 到達不可能な文に対する診断を抑制するには、コメント /*NOT REACHED*/ をその文の前に付けます。

lint のオプションを次にアルファベット順に説明します。いくつかの lint オプションは、lint 診断メッセージの抑制に関連しています。これらのオプションはまた、表15「メッセージを抑制する lint オプション」でも、アルファベット順のオプションのあとに、それらが抑制する特定のメッセージとともに一覧表示されています。拡張 lint を呼び出すオプションは -N で始まります。

lint は、-A、-D、-E、-g、-H、-O、-P、-U、-ansi、-std=*value*、-pedantic、-Xa、-Xc、-Xs、-Xt、-Y などの多くの cc コマンド行オプションを認識しますが、-g と -O は無視されます。認識されないオプションがあると警告が出され、そのオプションは無視されます。

5.3.1 -#

冗長モードを有効にし、呼び出されるときに各コンポーネントを表示します。

5.3.2 -###

呼び出すごとに各コンポーネントを表示しますが、実際には実行しません。

5.3.3 -a

一定のメッセージを抑制します。表15「メッセージを抑制する lint オプション」を参照してください。

5.3.4 -b

一定のメッセージを抑制します。表15「メッセージを抑制する lint オプション」を参照してください。

5.3.5 -c *filename*

指定されたファイル名を持つ .ln ファイルを作成します。これらの .ln ファイルは lint の最初のパスだけで作成されます。*filename* は絶対パス名でもかまいません。

5.3.6 -c

コマンド行で指定された .c ファイルごとに、lint の第 2 パスに関連する情報からなる .ln ファイルを作成します。第 2 パスは実行されません。

5.3.7 -dirout=*dir*

lint 出力ファイル (.ln ファイル) を入れる*ディレクトリ*を指定します。このオプションは -c オプションに影響を与えます。

5.3.8 -err=warn

-err=warn は、-errwarn=%all 用のマクロです。115 ページの「-errwarn=*t*」を参照してください。

5.3.9 -errchk=*l*[, *l*]

l で指定した追加の検査を実行します。デフォルトは、-errchk=%none です。-errchk を指定することは、-errchk=%all を指定することと同等です。*l* は、次の表にあるフラグ (-errchk=longptr64,structarg など) のうちの 1 つまたは複数で構成される検査のコンマ区切りリストです。

表 8 -errchk のフラグ

値	意味
%all	-errchk による検査をすべて実行します。
%none	-errchk による検査を行いません。これはデフォルト値です。
[no%]locfmtchk	printf のような書式文字列を lint の第 1 のパスで検査します。-errchk=locfmtchk を使用するかどうかには関係なく、lint は常に、printf のような書式文字列をその第 2 のパスで検査します。
[no%]longptr64	long 整数およびポインタのサイズが 64 ビットで標準整数のサイズが 32 ビットの環境への移植性を検査します。明示的なキャストが使用されているときでも、ポインタ式と long 整数式の標準整数への代入を検査します。 システムヘッダーファイルによって、ポインタの操作を目的とした型が定義されることに注意してください。-m32 フラグを使用すると、これらの型は、ポインタを安全に操作できない int などの基底の型として定義され、誤った警告が発行される場合があります。たとえば、size_t の使用法は次のようになります。 #include <stdlib.h>

値	意味

	size_t
	myfiunk(uint32_t param)
	{
	　　return sizeof(uint64_t) * param;
	}
	.
	$ lint -m32 -mux -errchk=longptr64 bug.c
	(5) warning: assignment of 64-bit integer to 32-bit integer
	$

[no%]structarg	値渡しされた構造体引数を検査します。仮引数の型が不明の場合は、その旨が報告されます。
[no%]parentheses	コード内の優先順位を明確に検査します。このオプションは、コードの保守性を高めるために使用します。-errchk=parentheses で警告が返された場合は、さらに括弧を使用して、コード内の演算の優先順位を明確に指示することを検討してください。
[no%]signext	符号なし整数型の式における符号付き整数値の符号拡張を、ISO C の通常の値保持規則が認める状態について検査します。このオプションは、-errchk=longptr64 が一緒に指定された場合にはエラーメッセージを出力するだけです。
[no%]sizematch	小さな整数に大きな整数が代入される場合について検査し、警告します。これらの警告は、サイズが同じであっても符号が異なる整数間の代入 (unsigned int が signed int を取得する) についても発行されます。

5.3.10 -errfmt=*f*

lint 出力の書式を指定します。*f* には、macro、simple、src、tab のいずれか 1 つを指定できます。

表 9 -errfmt のフラグ

値	意味
macro	マクロを展開して、エラーのあるソースコード、行番号、場所を表示します。
simple	エラーのある行番号と場所番号 (大括弧内) を表示し、1 行の (簡単な) 診断メッセージを示します。-s オプションと同様ですが、エラー位置に関する情報が入っています。
src	エラーのあるソースコード、行番号、場所を表示します。マクロは展開しません。
tab	表形式で表示します。これはデフォルト値です。

デフォルトは -errfmt=tab です。-errfmt を指定することは、-errfmt=tab を指定することと同等です。

複数の書式を指定すると最後に指定した書式が使用され、lint は使用されない書式について警告を出します。

5.3.11 -errhdr=*h*

-Ncheck も指定した場合に、lint でヘッダーファイルの特定のメッセージを報告できるようにします。*h* は、*dir*、no%*dir*、%all、%none、%user のうちの 1 つまたは複数で構成されるコンマ区切りリストです。

表 10 -errhdr のフラグ

値	意味
dir	ディレクトリ *dir* からインクルードされたヘッダーファイル用の -Ncheck のメッセージを報告します。
no%*dir*	ディレクトリ *dir* からインクルードされたヘッダーファイル用の -Ncheck のメッセージを報告しません。
%all	使用されているすべてのヘッダーファイルを検査します。
%none	ヘッダーファイルを検査しません。
%user	使用されているすべてのユーザー定義のヘッダーファイル、すなわち /usr/include およびそのサブディレクトリに入っているヘッダーファイルとコンパイラが提供しているヘッダーファイルを除く、すべてのヘッダーファイルを検査します。これはデフォルト値です。

例:

```
% lint -errhdr=inc1 -errhdr=../inc2
```

ディレクトリ inc1 と ../inc2 内で使用されているヘッダーファイルを検査します。

```
% lint -errhdr=%all,no%../inc
```

ディレクトリ ../inc 内のものを除き、使用されているすべてのヘッダーファイルを検査します。

5.3.12 -erroff=*tag*(, *tag*)

lint エラーメッセージを抑制するか、または有効にします。

t には、次の 1 つまたは複数の項目をコンマで区切って指定します。*tag*、no%*tag*、%all、%none。

表 11 -erroff のフラグ

値	意味
tag	*tag* で指定したメッセージを抑制します。-errtags=yes オプションで、メッセージのタグを表示できます。
no%*tag*	*tag* で指定したメッセージを使用可能にします。
%all	すべてのメッセージを抑制します。

値	意味
%none	すべてのメッセージを使用可能にします。これはデフォルト値です。

デフォルトは -erroff=%none です。-erroff と指定すると、-erroff=%all を指定した場合と同等の結果が得られます

例:

```
% lint -erroff=%all,no%E_ENUM_NEVER_DEF,no%E_STATIC_UNUSED
```

「列挙型が定義されていません」と「静的シンボルが使用されていません」のメッセージだけを出力し、その他のメッセージは抑制します。

```
% lint -erroff=E_ENUM_NEVER_DEF,E_STATIC_UNUSED
```

「列挙型が定義されていません」と「静的シンボルが使用されていません」のメッセージだけを抑制します。

5.3.13 -errsecurity=*level*

-errsecurity オプションを使用して、コードのセキュリティーに問題がないか検査することができます。

level は、次の表に示す値のいずれかでなければいけません。

表 12 -errsecurity のフラグ

level の値	意味
core	このレベルでは、たいていの場合で安全でない、または検査することの難しいソースコードの構文がないかどうかを検査します。このレベルで行われる検査には次のものがあります。 ■ printf() および scanf() 系の関数での変数書式文字列の使用 ■ scanf() 関数における非結合文字列 (%s) 形式の使用 ■ 安全な使用法のない関数の使用: gets()、cftime()、ascftime()、creat() ■ O_CREAT と組み合わせた open() の不正使用 このレベルで警告が生成されるソースコードはバグと考えてください。問題のコードを変更することを推奨します。どんな場合でも、単純明快でより安全な別の方法があります。
standard	このレベルには、core レベルのすべての検査に加えて、安全かもしれないが、より良い別の方法がある構文のすべての検査が含まれます。新しく作成したコードを検査をするときは、このレベルを推奨します。このレベルで追加される検査には、次のものがあります。 ■ strlcpy() 以外の文字列コピー関数の使用 ■ 脆弱な乱数関数の使用 ■ 安全でない関数を使った一時ファイルの生成 ■ fopen() を使ったファイルの作成

level の値	意味
	■ シェルを呼び出す関数の使用 このレベルで警告を生成するソースコードは、新しいコードまたは大幅に修正したコードに書き換えてください。従来のコードに含まれるこうした警告に対処することと、アプリケーションを不安定にするリスクとのバランスを検討してください。
extended	このレベルには、core および standard レベルのすべての検査など、もっとも完全な検査セットが含まれます。また、状況によっては安全でない可能性がある構文について、多数の警告が生成されます。このレベルの検査は、コードを見直す際の一助になりますが、許容しうるソースコードが守る必要のある基準と考える必要はありません。このレベルで追加される検査には、次のものがあります。 ■ ループ内での `getc()` または `fgetc()` の呼び出し ■ パス名競合になりがちな関数の使用 ■ `exec()` 系の関数の使用 ■ `stat()` とほかの関数との間の競合 安全上の潜在的な問題があるかどうかを判定するために、警告を生成するコードをこのレベルで見直してください。
%none	`-errsecurity` の検査を無効にします。

`-errsecurity` の値が指定されていない場合は、`-errsecurity=%none` に設定されます。`-errsecurity` は指定されているが、引数が指定されていない場合は、`-errsecurity=standard` に設定されます。

5.3.14 `-errtags=`*a*

各エラーメッセージのメッセージタグを表示します。*a* には、`yes` または `no` のどちらかを指定できます。デフォルトは `-errtags=no` です。`-errtags` を指定することは、`-errtags=yes` を指定することと同等です。

すべての `-errfmt` オプションとともに使用できます。

5.3.15 `-errwarn=`*t*

指定された警告メッセージが表示された場合、`lint` はエラーステータスを返して終了します。*t* は、*tag*、`no%`*tag*、`%all`、`%none` の 1 つまたは複数をコンマで区切って指定したリストです。タグの順番が重要です。たとえば `%all,no%`*tag* では、*tag* 以外の警告が発行されると、`lint` が致命的なステータスで終了します。次の表は、`-errwarn` 値の一覧を示しています。

表 13 `-errwarn` のフラグ

tag 値	意味
tag	*tag* に指定されたメッセージが警告メッセージとして発行された場合、`lint` は致命的なエラーステータスで終了します。*tag* に指定されたメッセージが発行されない場合は無効です。

tag 値	意味
no%*tag*	*タグ*に指定されたメッセージが警告メッセージとしてだけ発行された場合に、lint が致命的なエラーステータスで終了することがないようにします。*tag* に指定されたメッセージが発行されない場合は無効です。このオプションは、*tag* または %all を使用して以前に指定されたメッセージが警告メッセージとして発行されても lint が致命的なエラーステータスで終了しないようにする場合に使用してください。
%all	どのような警告メッセージが発行されても、lint が致命的なエラーステータスで終了するようにします。%all に続いて no%*tag* を使用して、特定の警告メッセージを対象から除外することもできます。
%none	どの警告メッセージが発行されても lint が致命的なエラーステータスで終了することがないようにします。

デフォルトは -errwarn=%none です。-errwarn のみを指定することは、-errwarn=%all と同義です。

5.3.16 -F

コマンド行で指定された .c ファイルを参照するとき、そのベース名ではなくコマンド行に指定されたパス名を出力します。

5.3.17 -fd

古い形式の関数定義または宣言について報告します。

5.3.18 -flagsrc=*file*

ファイル *file* に含まれているオプションを使用して lint を実行します。*ファイル*には、1 行に 1 つずつ、複数のオプションを指定できます。

5.3.19 -h

一定のメッセージを抑制します。表15「メッセージを抑制する lint オプション」を参照してください。

5.3.20 -I*dir*

インクルード用ヘッダーファイルをディレクトリ *dir* から検索します。

5.3.21 -k

/* LINTED [*メッセージ*] */ 指令または注釈 NOTE(LINTED(*message*)) の動作を変更します。通常 lint は、前述のような指令のあとにコードが続く場合、警告メッセージを抑制します。lint は、メッセージを抑制する代わりに、指令または注釈の中のコメントを含むメッセージを出力します。

5.3.22 -L*dir*

-l とともに使用された場合は、ディレクトリ *dir* 内の lint ライブラリを検索します。

5.3.23 -l*x*

lint ライブラリ llib-l*x*.ln にアクセスします。

5.3.24 -m

一定のメッセージを抑制します。表15「メッセージを抑制する lint オプション」を参照してください。

5.3.25 -m32|-m64

分析されるプログラムのデータ型モデルを指定します。また、選択されたデータ型モデル (32 ビットまたは 64 ビット) に対応する lint ライブラリを検索します。

32 ビット C プログラムの確認には -m32 を使用し、64 ビット C プログラムの確認には -m64 を使用します。

ILP32 データ型モデル (32 ビット int、long、ポインタデータ型) は、すべての Oracle Solaris プラットフォームと、64 ビットに対応していない Oracle Linux プラットフォームでのデフォルトです。LP64 データ型モデル (64 ビット long、ポインタデータ型) は、64 ビットに対応している Oracle Linux プラットフォームでのデフォルトです。-m64 は、LP64 モデルに対応しているプラットフォームでのみ許可されます。

注記 - Sun Studio 12 のリリースの前は、-Xarch オプションの選択によって、データ型モデル (ILP32 または LP64) が暗黙的に指定されました。この動作は行われなくなりました。ほとんどのプラットフォームでは、コマンド行に -m64 を追加するだけで 64 ビットプログラムで lint を実行することができます。

5.3.26 -Ncheck=*c*

ヘッダーファイル内で対応する宣言を検査し、マクロを検査します。*c* は、macro、extern、%all、%none、no%macro、no%extern の 1 つまたは複数をコンマで区切って指定したリストです。

表 14 -Ncheck フラグ

値	意味
macro	ファイル間でのマクロ定義の一貫性を検査します。
extern	ソースファイルとそれに関連するヘッダーファイルとの間の宣言の 1 対 1 対応を検査します (たとえば file1.c と file1.h)。ヘッダーファイル内で余分なまたは見つからない extern 宣言がないことを確認します。
%all	-Ncheck のすべての検査を実行します
%none	-Ncheck のどの検査も実行しません。これはデフォルト値です。
no%macro	-Ncheck のどの macro 検査も実行しません
no%extern	-Ncheck のどの extern 検査も実行しません

デフォルトは -Ncheck=%none です。-Ncheck を指定することは、-Ncheck=%all を指定することと同等です。

各値をコンマで結合できます (-Ncheck=extern,macro など)。

次の例は、マクロ検査以外のすべての検査を実行します。

```
% lint -Ncheck=%all,no%macro
```

5.3.27 -Nlevel=*n*

(廃止) -Nlevel オプションは、将来のリリースで削除される予定です。

拡張 lint 解析のレベルを指定することによって、問題報告の拡張 lint モードを有効にします。このオプションは、検出されるエラーの量の制御を提供します。レベルが高いほど検証にかかる時間は長くなります。*n* は数値で、1、2、3、4 のいずれかです。デフォルトはありません。-Nlevel が指定されなかった場合は、lint の基本解析モードが使用されます。引数なしで -Nlevel が指定された場合は、-Nlevel=4 に設定されます。

基本および拡張 108 ページの「lint 使用方法」 モードについては、Using lintを参照してください。

5.3.27.1 -Nlevel=1

個々の手続きを解析します。いくつかのプログラムの実行パスで発生する無条件エラーを報告します。大域的なデータおよび制御のフロー解析は行いません。

5.3.27.2 -Nlevel=2

大域的なデータおよびフローを含め、プログラム全体を解析します。いくつかのプログラムの実行パスで発生する無条件エラーを報告します。

5.3.27.3 -Nlevel=3

-Nlevel=2 の下で実行される解析に加えて、定数の伝播 (定数が実引数として使用されている場合) を含め、プログラム全体を解析します。

この解析レベルでの C プログラムの検査は、前述のレベルより 2 倍から 4 倍長い時間がかかります。これは、lint がプログラムの変数に対して取り得る値の集合を作成し、プログラムの部分解釈を行うためです。これらの変数値の集合は、定数と、プログラムで使用可能な定数オペランドを含む条件文に基づいて作成され、ほかの集合 (定数伝播の形式) を作成するときの基準になります。

そのあと、解析の結果として受け取った集合は、次のアルゴリズムに従って誤りがないか評価されます。

オブジェクトが取り得る値の集合の中に正しい値が存在する場合は、その値が次の伝搬の基準として使用されます。正しい値が存在しない場合は、エラーと診断されます。

5.3.27.4 -Nlevel=4

-Nlevel=3 の下で実行される解析に加えて、プログラム全体を解析し、特定のプログラム実行パスが使用された場合に発生する可能性のある条件付きエラーを報告します。

この解析レベルでは、さらに多くの診断メッセージが出力されます。一般的に、この解析アルゴリズムは、不正な値に対してエラーメッセージが生成されることを除けば、-Nlevel=3 の解析アルゴリズムと同じです。このレベルでの解析に要する時間は、2 桁ほど増加する可能性があります (約 20 倍から 100 倍遅い)。この場合、余分な所要時間は、再帰や条件文などで特徴づけられるプログラムの複雑さに直接比例します。結果として、100,000 行を超えるプログラムでこのレベルの解析を使用するのは困難である可能性があります。

5.3.28 -n

デフォルトの lint 標準ライブラリとの互換性検査を抑制します。

5.3.29 -o*x*

lint は llib-lx.*ln* という名前の lint ライブラリを作成します。このライブラリは、lint が第 2 パスで使用する .ln ファイルから作成されます。-c オプションを使用すると、すべての -o オプションが無効になります。不要なメッセージを表示しないで llib-l*x*.ln を作成するには、-x オプションを使用します。lint ライブラリのソースファイルが外部インタフェースのみの場合は、-v オプションが役立ちます。生成された lint ライブラリは、あとで lint が -l*x* を指定して呼び出された場合に使用できます。

デフォルトでは、ライブラリは lint の基本形式で作成されます。拡張 lint モードを使用した場合は、ライブラリは拡張モードで作成されるため、それ以外のモードでは使用できなくなります。

5.3.30 -p

移植性の問題に関連する一定のメッセージを使用可能にします。

5.3.31 -R*file*

cxref(1) で使用する .ln ファイルを *file* に書き込みます。拡張モードがオンに切り替えられている場合、このオプションは無効にします。

5.3.32 -s

"警告:" または "エラー:" で始まる単一の診断メッセージを生成します。デフォルトでは、lint は複合的な出力を生成するためにいくつかのメッセージをバッファリングします。

5.3.33 -u

一定のメッセージを抑制します。表15「メッセージを抑制する lint オプション」を参照してください。このオプションは、大型プログラムのファイルの一部分に対して lint を実行する場合に適しています。

5.3.34 -V

製品名とリリース時期を標準エラーに書き込みます。

5.3.35 -v

一定のメッセージを抑制します。表15「メッセージを抑制する lint オプション」を参照してください。

5.3.36 -W*file*

cflow(1) で使用する .ln ファイルを *file* に書き込みます。拡張モードがオンに切り替えられている場合、このオプションは無効にします。

5.3.37 -XCC=*a*

C++ 形式のコメントを受け入れます。このオプションを使用すると、// を使用してコメントの始まりを示すことができます。*a* には yes または no のいずれかを指定します。デフォルトは -XCC=no です。-XCC を指定することは、-XCC=yes を指定することと同等です。

注記 - このオプションは、-std=c89 が有効な場合にだけ使用する必要があります。

5.3.38 -Xalias_level[=*l*]

このオプションでは、*l* は any、basic、weak、layout、strict、std、strong のいずれかです。さまざまなレベルの明確化の詳細な説明については、表49「別名明確化のレベル」を参照してください。

-Xalias_level を指定しない場合、このフラグのデフォルトは -Xalias_level=any です。これは、型に基づく別名の解析が実行されないことを示します。-Xalias_level を指定してもレベルを設定しない場合、デフォルトは -Xalias_level=layout になります。

lint を実行するときの明確化のレベルは、コンパイラを実行するときのレベルよりも緩やかにしてください。明確化のレベルをコンパイルするときのレベルより厳しくして lint を実行すると、結果は解釈するのが困難になり、誤解を招く恐れがあります。

明確化の詳細と、明確化を支援するために作成されたプラグマのリストについては、135 ページの「lint フィルタ」を参照してください。

5.3.39 -Xarch=v9

(Oracle Solaris) 非推奨。使用しないでください。117 ページの「-m32|-m64」を参照してください。

5.3.40 -Xc99[=*o*]

-Xc99 フラグは、C99 規格 (『Programming Language - C (ISO/IEC 9899:1999)』) からの実装機能に対するコンパイラの認識状況を制御します。

o には、all、none のいずれかを指定します。

-Xc99=none は、C99 機能の認識を無効にします。-Xc99=all は、サポートされている C99 機能の認識を有効にします。

引数を付けずに -Xc99 を指定すると、-Xc99=all と同等の結果になります。

-std または -xlang フラグが指定されている場合、-Xc99 フラグは使用できません。

5.3.41 -Xkeeptmp=*a*

lint の実行中、一時ファイルを自動的に削除せず、作成した状態のままにします。*a* には yes または no のいずれかを指定します。デフォルトは -Xkeeptmp=no です。-Xkeeptmp を指定することは、-Xkeeptmp=yes を指定することと同等です。

5.3.42 -Xtemp=*dir*

一時ファイルのディレクトリを *dir* に設定します。このオプションを指定しないと、一時ファイルは /tmp に格納されます。

5.3.43 -Xtime=*a*

各 lint パスの実行時間を報告します。*a* には yes または no のいずれかを指定します。デフォルトは -Xtime=no です。-Xtime を指定することは、-Xtime=yes を指定することと同等です。

5.3.44 -Xtransition=*a*

K&R C と Oracle Developer Studio ISO C の違いに関する警告を発行します。*a* には、yes または no のどちらかを指定できます。デフォルトは -Xtransition=no です。-Xtransition を指定することは、-Xtransition=yes を指定することと同等です。

5.3.45 -Xustr={ascii_utf16_ushort| no}

このオプションは、U"*ASCII 文字列*" 書式の文字列リテラルの認識を unsigned short int の配列として有効にします。デフォルトは -Xustr=no で、U"*ASCII 文字列*" 文字列リテラルのコンパイラ認識を無効にします。-Xustr=ascii_utf16_ushort は、U"*ASCII 文字列*" 文字列リテラルのコンパイラ認識を有効にします。

5.3.46 -x

一定のメッセージを抑制します。表15「メッセージを抑制する lint オプション」を参照してください。

5.3.47 -y

コマンド行で指定されたすべての .c ファイルを、/* LINTLIBRARY */ 指令で開始した場合または注釈 NOTE(LINTLIBRARY) が付いている場合と同じように扱います。lint ライブラリは通常、/* LINTLIBRARY */ 指令または注釈 NOTE(LINTLIBRARY) を使用して作成します。

5.4 lint のメッセージ

大部分の lint のメッセージは簡単な 1 行の文で、問題が起こって診断されるたびに出力されます。インクルードファイルで検出されたエラーはコンパイラによって複数回報告されますが、lint によってはそのファイルがほかのソースファイルに何度インクルードされても一度報告されるだけです。複合メッセージは、ファイル全域の矛盾に対して、また時にはファイル内の問題に対しても表示されます。単一メッセージは、検査しているファイルで問題が発生するごとに知らせます。lint フィルタの使用で発生のたびにメッセージを出力する必要がある場合は、-s オプションを指定して lint を呼び出すことによって、複合診断を単純な型に変換できます。詳細は、133 ページの「lint ライブラリ」を参照してください。

lint のメッセージは stderr に書き込まれます。

5.4.1 メッセージを抑制するオプション

lint 診断メッセージは、いくつかの lint オプションを使用して抑制できます。メッセージは、-erroff オプションのあとに 1 つ以上の *tags* を指定することによって抑制できます。これらのニーモニックタグは、-errtags=yes オプションで表示できます。

次の表に lint のメッセージを抑制するオプションを示します。

表 15　メッセージを抑制する lint オプション

オプション	抑制されるメッセージ
-a	代入によって暗黙的により小さい型に変換されます より大きな整数型への変換は符号拡張が不正確になる可能性があります
-b	到達できない文です
-h	等価演算子 "==" の使用が想定される場所に代入演算子 "=" が使用されています 演算子のオペランドが定数です: "!" case 文を通り抜けます ポインタのキャストによって境界整列が不正確になる可能性があります 優先度が混乱する可能性があります; 括弧 文が帰結していません: if 文が帰結していません: else
-m	大域的に宣言されていますが静的 (static) にすることができます
-erroff=*tag*	*tag* で指定した 1 つまたは複数の lint メッセージ
-u	名前が定義されていますが使用されていません 未定義の名前が使用されています
-v	引数が関数中で使用されていません
-x	名前が宣言されていますが使用も定義もされていません

5.4.2 lint メッセージの形式

lint プログラムは、特定のオプションが指定されている場合、エラーが発生した位置にポインタが表示されている状態で正確なソースファイルの行を表示できます。この機能を有効にするオプションは -errfmt=*f* で、これによって lint は次の情報を表示します。

- ソースの行と位置
- マクロの展開
- エラーを起こしやすいスタック

たとえば、次に示すプログラム Test1.c にはエラーがあります。

```
1 #include <string.h>
2 static void cpv(char *s, char* v, unsigned n)
3 { int i;
4   for (i=0; i<=n; i++){
5        *v++ = *s++;}
6 }
7 void main(int argc, char* argv[])
8 {
9     if (argc != 0){
```

```
10        cpv(argv[0], argc, strlen(argv[0]));}
11}
```

Test1.c に対して lint を –errfmt=src オプション付きで使用すると、次の出力が生成されます。

```
% lint -errfmt=src-Nlevel=2 Test1.c
      |static void cpv(char *s, char* v, unsigned n)
      |            ^  line 2, Test1.c
      |
      |         cpv(argv[0], argc, strlen(argv[0]));
      |                      ^  line 10, Test1.c
warning: improper pointer/integer combination: arg #2
      |
      |static void cpv(char *s, char* v, unsigned n)
      |                               ^  line 2, Test1.c
      |
      |cpv(argv[0], argc, strlen(argv[0]));
      |                       ^ line 10, Test1.c
      |
      |        *v++ = *s++;
      |         ^  line 5, Test1.c
warning: use of a pointer produced in a questionable way
    v defined at Test1.c(2)    ::Test1.c(5)
      call stack:
          main()               ,    Test1.c(10)
          cpv()                ,    Test1.c(5)
```

1 つめの警告は、2 つのコード行の間で矛盾があることを示しています。2 つめの警告には、コールスタックとエラーになるまでの制御フローが表示されます。

次に示すプログラム Test2.c には、前述のものとは異なる種類のエラーがあります。

```
1 #define AA(b) AR[b+l]
2 #define B(c,d) c+AA(d)
3
4 int x=0;
5
6 int AR[10]={1,2,3,4,5,6,77,88,99,0};
7
8 main()
9  {
10  int y=-5, z=5;
11  return B(y,z);
12 }
```

Test2.c に対して –errfmt=macro オプションを指定して lint を使用すると、マクロ置換の手順を示す次の出力が生成されます。

```
% lint -errfmt=macro Test2.c
      | return B(y,z);
      |        ^  line 11, Test2.c
      |
      |#define B(c,d) c+AA(d)
      |                ^  line 2, Test2.c
```

```
      |
      |#define AA(b) AR[b+l]
      |                   ^  line 1, Test2.c
error: undefined symbol: l
|
      |    return B(y,z);
      |           ^  line 11, Test2.c
      |
      |#define B(c,d) c+AA(d)
      |                 ^  line 2, Test2.c
      |
      |#define AA(b) AR[b+l]
      |                   ^  line 1, Test2.c
variable may be used before set: l
lint: errors in Test2.c; no output created
lint: pass2 not run - errors in Test2.c
```

5.5 lint の指令

5.5.1 事前定義された値

lint を実行すると、lint トークンが事前定義されます。事前定義されたトークンのリストについては、cc(1) のマニュアルページも参照してください。

5.5.2 指令

/*...*/ の形式での lint 指令は、既存の注釈ではサポートされていますが、将来の注釈ではサポートされなくなる予定です。指令を注釈として挿入する際は、ソースコードの注釈 NOTE(...) として表記することをお勧めします。

次のようにファイル note.h をインクルードして、lint 指令をソースコードの注釈として指定してください。

```
#include <note.h>
```

lint は、ソースコード注釈方式をほかのいくつかのツールと共有します。Oracle Developer Studio C コンパイラをインストールすると、ファイル /usr/lib/note/SUNW_SPRO-lint も自動的にインストールされます。これには、LockLint が理解するすべての注釈の名前が含まれています。ただし、Oracle Developer Studio C ソースコード検査プログラム (lint) は /usr/lib/note および Oracle Developer Studio のデフォルトの場所 *install-directory*/prod/lib/note にあるすべてのファイルも検査して、有効なすべての注釈を取得します。

次のように、環境変数 NOTEPATH を設定することによって /usr/lib/note 以外の場所を指定できます。

```
setenv NOTEPATH $NOTEPATH:other_location
```

次の表に、lint 指令と動作を示します。

表 16 lint の指令

指令	アクション
NOTE(ALIGNMENT(*fname*,*n*)) *n*=1, 2, 4, 8, 16, 32, 64, 128	lint に関数結果を *n* バイトで整列させます。たとえば、malloc() は、char* または void* を返すように定義されていますが、実際には word、または場合によっては doubleword で整列されたポインタを返します。 不正な境界整列に関するメッセージが抑制されます。 ■ 不正確な境界整列
NOTE(ARGSUSED(n)) /*ARGSUSEDn*/	このディレクティブは、次の関数に対して -v オプションのように機能します。 そのあとに来る関数定義の最初の *n* 個以降のすべての引数を対象として、次のメッセージが抑制されます。デフォルトは 0 です。NOTE 形式の場合は、必ず *n* を指定します。 ■ 引数が関数中で使用されていません
NOTE(ARGUNUSED (*par_name[,par_name...]*))	lint が、指定した引数の使用状況を検査しないようにします (このオプションは、指令の次に来る関数に対してのみ有効です)。 NOTE または指令で指定された引数すべてを対象して、次のメッセージが抑制されます。 ■ 引数が関数中で使用されていません
NOTE(CONSTCOND) /*CONSTCOND*/	条件式中の定数オペランドに関する警告を抑制します。次のメッセージが抑制されます。 NOTE(CONSTANTCONDITION) や /* CONSTANTCONDITION */ も使用できます。 条件のコンテキストに定数があります 演算子のオペランドが定数です: "!" 論理式が常に偽です:演算子 "&&" 論理式が常に真です:演算子 "||"
NOTE(EMPTY) /*EMPTY*/	if 文に続く null 文の内容に関する警告を抑制します。この指令は、条件式のあと、セミコロンの前に置くべきです。この指令は、有効な else 文を持つ空の if 文をサポートするためにあります。また、空の else 文に対するメッセージも抑制します。 次のメッセージが抑制されます (if の条件式とセミコロンの間に挿入された場合)。 ■ 文が帰結していません: else (else 文とセミコロンの間に挿入された場合) ■ 文が帰結していません: if

指令	アクション
NOTE(FALLTHRU) /*FALLTHRU*/	case 文または default ラベルの文までの通り抜けに関する警告を抑制します。この指令は、ラベルの直前で指定します。 次のメッセージが抑制されます。指令のあとに来る case 文が対象となります。NOTE(FALLTHROUGH) または /* FALLTHROUGH */ も使用できます。 ■ case 文を通り抜けます
NOTE(LINTED (メッセージ)) /*LINTED [メッセージ]*/	未使用の変数または関数に関する警告を除く、ファイル内のすべての警告 (lint パス 1 によって発行されたもの) を抑制します。ファイル間の解析が必要なメッセージや、lint パス 2 によって発行されたメッセージは LINTED ディレクティブでは抑制できず、LINTED 抑制ディレクティブが使用されなかった警告メッセージは通常、それを示すために指定されます。この指令は、lint の警告が表示された行の直前で指定します。-k オプションは、lint がこの指令を扱う方法を変更します。lint は、メッセージを抑制する代わりに、コメントに含まれているメッセージがある場合は、そのメッセージを表示します。この指令は、lint 実行後にフィルタを行うための -s オプションと組み合わせて使用すると便利です。 -k が呼び出されなかった場合は、ファイル内の問題に関連するすべての警告を抑制します。ただし、次を除きます。 ■ 引数が関数中で使用されていません ■ 宣言がブロック中で使用されていません ■ 変数が関数中で設定されていますが使用されていません ■ 静的シンボルが使用されていません ■ 変数が関数中で使用されていません 先行するコード行では、メッセージは無視されます。
NOTE(LINTLIBRARY) /*LINTLIBRARY*/	-o が呼び出された場合は、それが先頭にある .c ファイル内の定義のみをライブラリ .ln ファイルに書き込みます。この指令は、このファイル内で使用されていない関数および関数引数に関するメッセージを抑制します。
NOTE(NOTREACHED) /*NOTREACHED*/	到達不可コードに関するコメントを適切な時点で停止します。このコメントは、通常、exit(2) などの、関数に対するコールの直後に位置します。 次のメッセージが抑制されます。 ■ 到達できない文です 指令のあとに来る到達されない文が対象の場合。 ■ case 文を通り抜けます そのあとの case 文で、その前の case 文から到達されないものが対象の場合。 ■ 関数が値を返さずに終了しています
NOTE(PRINTFLIKE(*n*)) NOTE(PRINTFLIKE(*fun_name*,*n*)) /*PRINTFLIKE*n**/	指令のあとに来る関数定義の第 *n* 番目の引数を [fs]printf() の書式文字列として扱い、後述のメッセージを有効にします。残りの引数と変換指示子の間の不整合も対象にします。lint はデフォルトで、標準 C ライブラリで提供される [fs]printf() 関数を呼び出すときのエラーに対してこれらの警告を出します。

指令	アクション
	NOTE 形式の場合は、必ず *n* を指定します。 ■ 書式文字列の形式が正しくありません その引数に指定されている変換が無効な場合、および書式に矛盾する関数引数型の場合 ■ 書式から参照される引数が足りません ■ 書式から参照される引数が多すぎます
NOTE(PROTOLIB(*n*)) /*PROTOLIB*n**/	*n* が 1 で NOTE(LINTLIBRARY) または /* LINTLIBRARY */ が使用されるとき、それが先頭にある .c ファイル内の関数プロトタイプ宣言だけをライブラリ .ln ファイルに書き込みます。デフォルトは処理を取り消す 0 です。 NOTE 形式の場合は、必ず *n* を指定します。
NOTE(SCANFLIKE(*n*)) NOTE(SCANLIKE*(fun_name,n)*) /*SCANFLIKE*n**/	関数定義の第 n 番目の引数が *[fs]scanf()* の書式文字列として扱われること以外は NOTE(PRINTFLIKE(n*))* または /* PRINTFLIKE*n* */ と同じです。デフォルトでは、lint は標準 C ライブラリで提供される [fs]scanf() 関数を呼び出すときのエラーに対し警告を出します。 NOTE 形式の場合は、必ず *n* を指定します。
NOTE(VARARGS(*n*)) NOTE(VARARGS(*fun_name,n*)) /*VARARGS*n**/	指令のあとに来る関数宣言の中の可変数の引数を検査する通常の処理を抑制します。最初の *n* 個の引数のデータ型を検査します。*n* が指定されていない場合は、n= 0 とみなします。新規のコードを書く場合やコードを更新する場合、定義の中で末尾に省略記号 (...) を使用することを推奨します。 この指令の直後で定義されている関数に関しては、次のメッセージが抑制されます。*n* 以上の引数を持つ関数に対する呼び出しを対象にします。NOTE 形式の場合は、必ず *n* を指定します。 ■ 可変数の引数で関数が呼び出されています

5.6 lint の参考情報と例

lint が行う検査、lint ライブラリ、および lint フィルタなどに関する lint の参考情報について説明します。

5.6.1 lint が行う診断

矛盾した使用、移植不可能なコード、疑わしい構造という 3 つの広範な条件カテゴリについての lint 固有の診断が発行されます。このセクションでは、これらのそれぞれの領域での lint の動作の例を確認し、それらが発生させる問題に可能な対応を推奨します。

5.6.1.1 整合性の検査

ファイル全域とファイル内部における変数、引数、関数の矛盾した使用を検査します。概して lint が古いスタイルの関数に対して検査していたのと同様に、プロトタイプの使用、宣言、引数を検査します。プログラムが関数プロトタイプを使用していない場合、lint は関数の呼び出しごとにコンパイラより厳しく引数の数と型を検査します。lint は、[fs]printf() と [fs]scanf() の制御文字列の変換指示子と引数の不一致も識別します。

例:

- lint はファイル内で、呼び出し元の関数に値を提供することなく終了する void でない関数に、フラグを設定します。以前、プログラマは fun() {} のように戻り型を省略することによって「関数は値を返さない」ということを示しました。この規約はこのコンパイラにとって意味がなく、fun() が戻り値の型 int を持つとみなします。この問題を解決するには、戻り型 void の関数として宣言します。
- lint はファイルから、void でない関数が値を戻さないけれどもあたかもそうしたかのように式内で使用されている場合や、関数がときどきまたは常に無視される値を戻すという反対の問題を検出します。値が*常に*無視される場合は、関数定義内に非効率性が存在している可能性があり、値が*ときどき*無視されることは、不適切なプログラミングスタイル (典型的には、for エラー条件を検査しない) である可能性があります。strcat()、strcpy()、および sprintf() のような文字列関数や、printf() と putchar() のような出力関数の戻り値を検査する必要がない場合、問題となる呼び出しは void にキャストしてください。
- lint は、宣言されているけれども定義または使用されていない、使用されているけれども定義されていない、または定義されているけれども使用されていない変数や関数を洗い出します。一緒に読み込まれる一部のしかしすべてではないファイル群に lint が適用されると、次の状況の関数または変数についてエラーメッセージを発行します。
  - それらのファイルで宣言されているけれどもほかの場所で定義または使用されている。
  - それらのファイルで使用されているけれどもほかの場所で定義されている。
  - それらのファイルで定義されているけれどもほかの場所で使用されている。

  1 つ目の状況を抑制するには -x オプションを、後者の 2 つを抑制するには -u を呼び出します。

5.6.1.2 移植性の検査

移植性がない一部のコードはデフォルトの動作として lint によってフラグが付けられ、その他のいくつかのケースは -p または -pedantic を指定して lint が呼び出された場合に診断されます。lint は ISO C 規格に一致しない言語構造を検査します。-p および -pedantic の下で発行されるメッセージについては、133 ページの「lint ライブラリ」を参照してください。

例:

- 一部の C 言語の実装では、signed または unsigned のどちらも明示的に宣言されていない文字変数は、符号付き (signed) の量として扱われ、通常は -128 ～ 127 の範囲になり

ます。ほかの実装では、これらは負にならない量として扱われ、通常は 0 ～ 255 の範囲になります。文字変数が負でない値を取るマシンでは、次のテスト (EOF の値が -1) は常に失敗します。

```
char c;
c = getchar();
if (c == EOF) ...
```

-p を指定して呼び出された lint は、*単純な* char が負の値を持つ可能性があることを暗示する比較をすべて検査します。ただし、この例で c を signed char として宣言すると、問題ではなく診断が除去されます。getchar() は可能なすべての文字と独自の EOF 値を戻す必要があるため、char には値を格納できません。この例は、処理系ごとに定義される符号拡張から生ずるおそらくもっとも一般的なものですが、lint の移植性オプションを注意深く使用すると移植性に関係しないバグを発見するのに役立つ可能性があることを示しています。ここでは c を int で宣言します。

- 同様の問題がビットフィールドにもあります。定数値がビットフィールドに代入される場合、その値を保持するにはフィールドが小さすぎる場合があります。int 型のビットフィールドを符号なし (unsigned) の量として取り扱うマシンでは、int x:3 の範囲で許可される値が 0 から 7 であるのに対し、符号付き (signed) の量として取り扱うマシンでは -4 から 3 になります。ただし、型 int として宣言された 3 ビットのフィールドは、後者のマシン上で値 4 を保持できません。-p を指定して呼び出された lint は、unsigned int または signed int 以外のすべてのビットフィールド型にフラグを付けます。これらのみが、*移植可能*なビットフィールド型です。コンパイラは、ビットフィールドの型 int、char、short、および long をサポートしますが、これらは unsigned、signed または*そのどちらでもない* 場合があります。さらに enum のビットフィールドの型もサポートします。
- 大きなサイズの型が小さなサイズの型に代入されると、問題が発生することがあります。有効なビットが切り捨てられると正確な値を保持できなくなります。

```
short s;
long l;
s = l;
```

lint は、デフォルトでは、このようなすべての代入にフラグを付けます。この診断は、-a オプションを呼び出すことによって抑制できます。どのオプションを指定して lint を呼び出しても、ほかの診断をも抑制する可能性があることに注意してください。2 つ以上の診断を抑制するオプションについては、133 ページの「lint ライブラリ」にあるリストを参照してください。

- あるオブジェクト型へのポインタをより厳格な整列要件を持つオブジェクト型へのポインタにキャストすると、移植性が損なわれる可能性があります。大部分のマシンでは、char が任意のバイト境界から開始できるのに対し、int はそうできないため、lint は次の例にフラグを付けます。

```
int *fun(y)
char *y;
{
```

```
    return(int *)y;
}
```

この診断は、-h を指定して lint を呼び出すことによって抑制できますが、この場合も、ほかのメッセージを無効にしている可能性があります。この場合もまた、ほかのメッセージを抑制する可能性があります。汎用ポインタ void * を使用すればほかの影響を回避することができます。

- ISO C は、複雑な式の評価順序を定義していません。この意味は、関数呼び出し、入れ子になった代入文、またはインクリメントとデクリメント演算子から副作用が生じる場合 (すなわち、式評価の副作用として変数が変更される時)、副作用の生じる順序はマシンへの依存度が高いということです。デフォルトでは、lint は副作用で変更された変数と同一式内でほかの場所に使用される変数にフラグを付けます。

```
int a[10];
main()
{
    int i = 1;
    a[i++] = i;
}
```

この例では、a[1] の値は、あるコンパイラでは 1 になり、別のコンパイラでは 2 になる可能性があります。ビット単位の論理演算子 & を演算子 && の代わりに誤って使用すると、この診断が呼び出されることがあります。論理

```
if ((c = getchar()) != EOF & c != '0')
```

5.6.1.3 疑わしい言語構造

lint は、適正であるが、プログラマが意図した内容を表現していない可能性がある構造の集まりにフラグを付けます。例:

- unsigned 変数は常に負ではない値を持ちます。このため、次のテストは常に失敗します。

```
unsigned x;
if (x < 0) ...
```

次のテスト:

```
unsigned x;
if (x > 0) ...
```

これは次と同義です。

```
if (x != 0) ...
```

この結果は意図したアクションではない可能性があります。lint は、unsigned 変数と、負の定数または 0 との疑わしい比較にフラグを付けます。unsigned 変数を負数のビットパターンと比較するには、その負数を unsigned にキャストします。

```
if (u == (unsigned) -1) ...
```

または、接尾辞 U を使用します。

```
if (u == -1U) ...
```

- lint は、副作用が予想されるコンテキストで使用される副作用のない式、すなわちプログラマが意図したことを表現していない式にフラグを付けます。代入演算子が予想されるところ、つまり副作用が予想されたところで等価演算子が見つかるときは追加の警告が発行されます。

```
int fun()
{
    int a, b, x, y;
    (a = x) && (b == y);
}
```

- 演算子の優先度を間違って解釈することにより、不正確な結果になる可能性があるため、lint は、論理演算子とビット単位の演算子 (具体的には、&、|、^、<<、>>) の両方が混在する式に括弧を入れるように注意を与えます。たとえば、ビット単位 & の優先度は論理 == より低いため、次の式:

```
if (x & a == 0) ...
```

は次のように評価されます。

```
if (x & (a == 0)) ...
```

この結果はおそらく、意図されたものではありません。-h を指定して lint を呼び出すと、診断が無効になります。

5.6.2 lint ライブラリ

lint ライブラリを使用して、呼び出したライブラリ関数とプログラムとの互換性 (関数戻り型の宣言、関数が期待する引数の数と型など) を検査できます。標準 lint ライブラリは、C 言語処理系で供給されるライブラリに対応し、一般にはシステムの標準位置であるディレクトリに格納されています。慣例では、lint ライブラリは llib-lx.ln という形の名前を持ちます。

lint 標準 C ライブラリ、llib-lc.ln は、lint コマンド行の末尾にデフォルトで追加されます。それを使用した互換性の検査は、-n オプションを呼び出すことによって抑制できます。その他の lint ライブラリは、-l への引数としてアクセスされます。この例では、lint ライブラリ llib-

l*x*.ln との互換性について、file1.c と file2.c 内の関数と変数の使用法を調べるよう lint に指示します。

```
% lint -lx file1.c file2.c
```

定義だけからなるライブラリファイルは、厳密に通常のソースファイルおよび通常の .ln ファイルとして処理されます。ただし、ライブラリファイル内で関数と変数が矛盾した状態で使用されるか、またはライブラリファイルで定義されているけれどもソースファイルで使用されない関数と変数に対しては警告を出しません。

独自の lint ライブラリを作成するには、C ソースファイルの先頭にディレクティブ NOTE(LINTLIBRARY) を挿入してから、-o オプションを指定し、さらに -l にライブラリ名を指定してそのファイルに対して lint を呼び出します。次の例では、NOTE(LINTLIBRARY) が先頭にあるソースファイル内の定義のみが、ファイル llib-l*x*.ln に書き込まれます。

```
% lint -ox file1.c file2.c
```

lint -o と cc -o は類似しています。ライブラリは、同様に関数プロトタイプ宣言のファイルから作成できますが、NOTE(LINTLIBRARY) と NOTE(PROTOLIB(*n*)) の両方が宣言ファイルの先頭に挿入されている必要があります。*n* が 1 の場合、プロトタイプ宣言は古いスタイルの定義と同様にライブラリ .ln ファイルに書き込まれます。*n* がデフォルトの 0 の場合、処理はキャンセルされます。-y を指定した lint の呼び出しは、lint ライブラリを作成するためのもう 1 つの方法です。次のコマンド行の場合は、その行に指定された各ソースファイルが NOTE(LINTLIBRARY) で開始しているかのように扱われ、その定義だけが llib-l*x*.ln に書き込まれます。

```
% lint -y -ox file1.c file2.c
```

デフォルトでは、lint は標準位置で lint ライブラリを検索します。標準の場所以外のディレクトリで lint ライブラリを検索するよう lint に指示するには、-L オプションでそのディレクトリのパスを指定します。

```
% lint -Ldir -lx file1.c file2.c
```

拡張モードでは、lint は基本モードで生成される .ln ファイルより多くの情報が格納された .ln ファイルを生成します。拡張モードの lint は、基本モードまたは拡張モードのどちらの lint で生成された .ln ファイルでもすべて読み取って理解できます。基本モードの lint は、基本モードの lint を用いて生成された .ln ファイルだけを読み取って理解できます。

デフォルトでは、lint は /lib および /usr/lib ディレクトリのライブラリを使用します。これらのライブラリは基本 lint 形式です。makefile を一度実行して新しい形式の拡張 lint ライブラリを作成すれば、拡張 lint をより効率的に利用することができます。makefile を実行して新しいライブラリを作成するには、次のコマンドを使用してください。

```
% cd install-directory/prod/src/lintlib; make
```

ここで、*install-directory* はインストールディレクトリです。makefile の実行後、lint は /lib または /usr/lib ディレクトリ内のライブラリの代わりに、拡張モードの新しいライブラリを使用します。

指定されたディレクトリが標準の場所の前に検索されます。

5.6.3 lint フィルタ

lint フィルタは、プロジェクト固有のポストプロセッサで、通常は awk スクリプトや類似のプログラムを使用して lint の出力を読み取り、プロジェクトが特に真の問題を識別していないと判断したメッセージを捨てます (たとえば、ときどきまたは常に無視される値を返す文字列関数などです)。lint オプションと指令が出力に対して十分な制御が提供しないときは、lint フィルタはカスタマイズされた診断レポートを生成します。

lint の 2 つのオプションはフィルタを開発する際に特に役立ちます。

- -s オプションを指定すると、複合診断が、診断された問題が発生するたびに発行される 1 行の単純なメッセージに変換されます。この解析されたメッセージ書式は awk スクリプトによる分析に適しています。
- -k オプションを指定すると、ソースファイル内に記述した特定のコメントが出力されます。これは、プロジェクトの決定をドキュメント化する場合とポストプロセッサの動作を指定する場合の両方で役立つ可能性があります。コメントが予想される lint メッセージを示していて、報告されたメッセージがそれと同一であった場合、メッセージは除かれます。-k を使用するには、コメントを付けるコードの直前の行に NOTE(LINTED(*msg*)) ディレクティブを挿入します。ここで、*msg* は、-k を指定して lint が呼び出されたときに出力されるコメントを示します。

  NOTE(LINTED(*msg*)) が含まれているファイルに対して -k が呼び出されない場合の lint の動作については、表16「lint の指令」にあるディレクティブのリストを参照してください。

♦ ♦ ♦ 第 6 章

6 型に基づく別名解析

この章では、-xalias_level オプションおよびいくつかのプラグマを使用して、型に基づく別名解析および最適化をコンパイラで実行できるようにする方法について説明します。これらの拡張機能を使用すると、ユーザーの C 言語プログラムでのポインタの使用方法について、型に基づく情報を示すことができます。次に、C コンパイラはこの情報を使用することで、プログラム内のポインタベースのメモリー参照の別名明確化を行います。

このコマンドの構文の詳細については、261 ページの「-xalias_level[=*l*]」を参照してください。また、lint プログラムの型に基づく別名解析機能については、121 ページの「-Xalias_level[=*l*]」を参照してください。

6.1 型に基づく解析の概要

-xalias_level オプションを使用すると、7 つの別名レベルのいずれか 1 つを指定できます。各レベルは、C 言語プログラムでのポインタの使用方法に関係する特定のプロパティーセットを指定します。

コンパイル時に -xalias_level オプションを上位に設定していくと、コンパイラは、コードのポインタに関する仮定を徐々に拡張していきます。コンパイラの作成する仮定が少ないと、それだけプログラミングの自由度が向上します。ただし、これらの狭い仮定からもたらされた最適化により、実行時のパフォーマンスが大きく向上しないことがあります。コードが、より高度なレベルの -xalias_level オプションのコンパイラ仮定に準拠していれば、結果の最適化によって実行時のパフォーマンスが向上する可能性が高くなります。

-xalias_level オプションでは、翻訳単位ごとにどの別名レベルが適用されるかを指定します。より詳細に設定したほうがよい場合、新しいプラグマを使用すると、適用されている別名レベルを無効にし、個々の型または翻訳単位のポインタ変数間の別名設定の関係性を明示的に指定できます。

6.2 微調整におけるプラグマの使用

より詳細なほうが型に基づいた解析に有利な場合は、このセクションで説明するプラグマを使用すると、適用されている別名レベルを無効にし、個々の型またはポインタ変数間の別名関係を変換単位で指定できます。これらのプラグマは、いくつかの特定のポインタ変数がいずれかの使用可能なレベルで許可されていない不規則な方法で使用されていても、変換単位でのポインタの使用がいずれかの使用可能な別名レベルと一貫していているときに、最大の利益を提供します。

注記 - プラグマより先に命名済みの型または変数を宣言しない場合、警告メッセージが発行され、プラグマが無視されます。プラグマの意味の適用される最初のメモリー参照のあとにプラグマを配置した場合、プログラムは未定義の結果を生成します。

プラグマの定義では、次の表に示す用語を使用します。

用語	意味
level	261 ページの「`-xalias_level[=l]`」に一覧表示されている任意の別名レベル。
type	次のいずれかです。 ■ `char`、`short`、`int`、`long`、`long long`、`float`、`double`、`long double` ■ `void`。すべてのポインタの型を示します。 ■ `typedef` *name*。`typedef` 宣言で定義される型の名前。 ■ `struct` *name*。`struct` *tag* 名が後続するキーワード *struct* のことです。 ■ `union`。`union` *tag* 名が後続するキーワード *union* のことです。
pointer_name	翻訳単位におけるポインタ型の変数の名前

6.2.1 `#pragma alias_level` *level* `(`*list*`)`

level は、次の別名レベルのいずれかと置き換えます。`any`、`basic`、`weak`、`layout`、`strict`、`std`、または `strong`。*list* は、単一の型またはポインタで置き換えることも、型またはポインタのコンマ区切りリストで置き換えることもできます。たとえば、`#pragma alias_level` を次のように発行できます。

- `#pragma alias_level` *level* `(type [, type])`
- `#pragma alias_level` *level* `(pointer [, pointer])`

このプラグマは、指定の別名レベルがリストの型に対応する翻訳単位のすべてのメモリー参照、または命名済みのポインタ変数が参照解除されている翻訳単位のすべての参照解除に適用されることを指定します。

特定の参照解除に対し複数の別名レベルを指定した場合、ポインタ名によって適用されたレベルがほかのすべてのレベルに優先します。型名によって適用されたレベルは、オプションによって適用されたレベルに優先します。次の例では、`#pragma alias_level` を `any` より上位に設定してプログラムをコンパイルした場合に、`std` レベルが *p* に適用されます。

```
typedef int * int_ptr;
int_ptr p;
#pragma alias_level strong (int_ptr)
#pragma alias_level std (p)
```

6.2.1.1 #pragma alias (type, type [, type]…)

このプラグマは、リストされているすべての型が相互に別名設定することを指定します。次の例では、コンパイラは、間接アクセス `*pt` が間接アクセス `*pf` を別名設定することを仮定します。

```
#pragma alias (int, float)
int *pt;
float *pf;
```

6.2.1.2 #pragma alias (pointer, pointer [, pointer]…)

このプラグマは、命名済みのポインタ変数の参照解除の地点で、参照解除されているポインタ値がそのほかの命名済みポインタ変数と同じオブジェクトをポイントできることを指定します。ただし、ポインタは、命名済みの変数に含まれるオブジェクトだけに制限されず、リストに含まれていないオブジェクトをポイントできます。このプラグマは、適用される別名レベルの別名設定仮定を無効にします。次の例では、プラグマに続く間接アクセス `p` と `q` が (2 つのポインタの型に関係なく) 別名設定すると見なされます。

```
#pragma alias(p, q)
```

6.2.1.3 #pragma may_point_to (pointer, variable [, variable]…)

このプラグマは、命名済みのポインタ変数の参照解除の地点で、参照解除されているポインタ値が命名済みの変数に含まれているオブジェクトにポイントできることを指定します。ただし、ポインタは、命名済みの変数に含まれるオブジェクトだけに制限されず、リストに含まれていないオブジェクトをポイントできます。このプラグマは、適用される別名レベルの別名設定仮定を無効にします。次の例では、コンパイラは、間接アクセス `*p` が直接アクセス `a`、`b`、および `c` を別名設定すると仮定します。

```
#pragma alias may_point_to(p, a, b, c)
```

6.2.1.4 #pragma noalias (type, type [, type]…)

このプラグマは、リストされている型が相互に別名設定しないことを指定します。次の例では、コンパイラは、間接アクセス *p が間接アクセス *ps を別名設定しないと仮定します。

```
struct S {
   float f;
   ...} *ps;

#pragma noalias(int, struct S)
int *p;
```

6.2.1.5 #pragma noalias (pointer, pointer [, pointer]…)

このプラグマは、命名済みのポインタ変数の参照解除の地点で、参照解除されているポインタがそのほかの命名済みポインタ変数と同じオブジェクトをポイントしないことを指定します。このプラグマは、適用されているそのほかすべての別名レベルを無効にします。次の例では、コンパイラは、間接アクセス *p が間接アクセス *q を (2 つのポインタの型に関係なく) 別名設定しないことを仮定します。

```
#pragma noalias(p, q)
```

6.2.1.6 #pragma may_not_point_to (pointer, variable [, variable]…)

このプラグマは、命名済みのポインタ変数の参照解除の地点で、参照解除されているポインタ値が命名済みの変数に含まれているオブジェクトをポイントしないことを指定します。このプラグマは、適用されているそのほかすべての別名レベルを無効にします。次の例では、コンパイラは、間接アクセス *p が直接アクセス a、b、または c を別名設定しないことを仮定します。

```
#pragma may_not_point_to(p, a, b, c)
```

6.2.1.7 #pragma ivdep

ivdep プラグマは、最適化の目的でループ内で検出された、配列参照へのループがもたらす依存関係の一部またはすべてを無視するようにコンパイラに指示します。これにより、指定しない場合には実行不可能なマイクロベクトル化、分散、ソフトウェアパイプライン化などの各種ループ最適化を、コンパイラが実行できるようになります。これは、依存関係が重要ではない、または依存関係が実際に発生しないことをユーザーが把握している場合に使用されます。

#pragma ivdep 指令の解釈は、–xivdep オプションの値に応じて異なります。

6.3 lint によるチェック

lint プログラムは、同一レベルの型に基づく別名の明確化を、コンパイラの -xalias_level コマンドとして認識します。また、lint プログラムは、この章で説明されている型に基づく別名の明確化に関連するプラグマも認識します。-Xalias_level コマンドの詳細は、121 ページの「-Xalias_level[=*l*]」を参照してください。

lint が検出して警告を生成する 4 つの状況を、次に示します。

- struct ポインタへスカラーポインタをキャストする
- struct ポインタへ void ポインタをキャストする
- スカラーポインタへ構造体フィールドをキャストする
- 明示的な別名設定を行わずに、-Xalias_level=strict レベルの struct ポインタへ struct ポインタをキャストする

6.3.1 構造体ポインタへのスカラーポインタのキャスト

次の例では、integer 型のポインタ *p* が struct foo 型のポインタとしてキャストされます。この例で lint -Xalias_level=weak (またはそれ以上) を指定すると、エラーが生成されます。

```
struct foo {
    int a;
    int b;
  };

struct foo *f;
int *p;

void main()
{
    f = (struct foo *)p; /* struct pointer cast of scalar pointer error */
}
```

6.3.2 構造体ポインタへの void ポインタのキャスト

次の例では、void ポインタ *vp* が構造体ポインタとしてキャストされます。この例で lint -Xalias_level=weak (またはそれ以上) を指定すると、警告が生成されます。

```
struct foo {
    int a;
    int b;
  };

struct foo *f;
```

```
void *vp;

void main()
{
    f = (struct foo *)vp; /* struct pointer cast of void pointer warning */
}
```

6.3.3 構造体ポインタへの構造体フィールドのキャスト

次の例では、構造体メンバーのアドレス foo.b は構造体ポインタとしてキャストされ、f2 に割り当てられます。この例で lint -Xalias_level=weak (またはそれ以上) を指定すると、エラーが生成されます。

```
struct foo{
    int a;
    int b;
  };

struct foo *f1;
struct foo *f2;

void main()
{
    f2 = (struct foo *)&f1->b; /* cast of a scalar pointer to struct pointer error*/
}
```

6.3.4 明示的な別名設定が必要

次の例では、struct fooa 型のポインタ *f1* が struct foob 型のポインタとしてキャストされています。lint で -Xalias_level=strict (またはそれ以上) を指定する場合、struct の型がまったく同じ (同じ型で同数の構造体フィールド) でないかぎり、このようなキャストは明示的な別名設定を必要とします。また、別名レベルが standard と strong の場合、別名設定を実行するにはタグの一致が必要であると仮定されます。*f1* への割り当て前に #pragma alias (struct fooa、struct foob) を使用すると、lint は警告の生成を停止します。

```
struct fooa {
    int a;
};

struct foob {
    int b;
};

struct fooa *f1;
struct foob *f2;

void main()
{
```

```
    f1 = (struct fooa *)f2; /* explicit aliasing required warning */
}
```

6.4 メモリー参照の制限の例

ここでは、実際のソースファイルに登場する可能性の高いコードの例を説明します。それぞれの例のあとに、コンパイラの仮定について説明します。これらの仮定は、適用レベルの型に基づいた解析によって作成されます。

6.4.1 例: 別名のレベル

次のコードを考えてみましょう。さまざまなレベルの別名設定でコンパイルすることにより、それぞれの型の別名設定の関係性を理解できます。

```
struct foo {
    int f1;
    short f2;
    short f3;
    int f4;
} *fp;

struct bar {
    int b1;
    int b2;
    int b3;
} *bp;

int *ip;
short *sp;
```

この例が `-xalias_level=any` オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは次の間接アクセスを相互の別名とみなします。

`*ip`、`*sp`、`*fp`、`*bp`、`fp->f1`、`fp->f2`、`fp->f3`、`fp->f4`、`bp->b1`、`bp->b2`、`bp->b3`

この例が `-xalias_level=basic` オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは次の間接アクセスを相互の別名とみなします。

`*ip`、`*bp`、`fp->f1`、`fp->f4`、`bp->b1`、`bp->b2`、`bp->b3`

また、`*sp`、`fp->f2`、および `fp->f3` は相互に別名設定でき、`*sp` および `*fp` も相互に別名設定できます。

しかし、`-xalias_level=basic` を指定した場合、コンパイラは次のように仮定します。

- *ip は *sp を別名設定しません。
- *ip は fp->f2 および fp->f3 を別名設定しません。
- *sp は、fp->f1、fp->f4、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 を別名設定しません。

2 つの間接アクセスの基本型が異なるため、コンパイラはこれらの仮定を作成します。

この例が -xalias_level=weak オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは、次の別名情報を仮定します。

- *ip は、*fp、fp->f1、fp->f4、*bp、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 を別名設定できます。
- *sp は、*fp、fp->f2、および fp->f3 を別名設定できます。
- fp->f1 は、bp->b1 を別名設定できます。
- fp->f4 は、bp->b3 を別名設定できます。

コンパイラは、fp->fp1 が bp->b2 を別名設定しないと仮定します。これは、f1 が構造体に 0 のオフセットを保持するフィールドである一方で、b2 が構造体に 4 バイトのオフセットを保持するフィールドであるからです。同様に、コンパイラは fp->f1 が bp->b3 を別名設定せず、fp->f4 が bp->b1 または bp->b2 を別名設定しないと仮定します。

この例が -xalias_level=layout オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは、次の情報を仮定します。

- *ip は、*fp、*bp、fp->f1、fp->f4、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 を別名設定できます。
- *sp は、*fp、fp->f2、および fp->f3 を別名設定できます。
- fp->f1 は、bp->b1 および *bp を別名設定できます。
- *fp および *bp は相互に別名設定できます。

fp->f4 は bp->b3 を別名設定しません。これは、f4 と b3 は、foo および bar の共通の初期シーケンスの対応するフィールドでないためです。

この例が -xalias_level=strict オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは、次の別名情報を仮定します。

- *ip は、*fp、fp->f1、fp->f4、*bp、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 を別名設定できます。
- *sp は、*fp、fp->f2、および fp->f3 を別名設定できます。

-xalias_level=strict を指定すると、コンパイラは、*fp、*bp、fp->f1、fp->f2、fp->f3、fp->f4、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 が相互に別名設定しないと仮定します。これは、フィールド名が無視されるときに、foo および bar が同じではないためです。ただし、fp は fp->f1 を別名設定し、bp は bp->b1 を別名設定します。

この例が -xalias_level=std オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは、次の別名情報を仮定します。

- *ip は、*fp、fp->f1、fp->f4、*bp、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 を別名設定できます。

- *sp は、*fp、fp->f2、および fp->f3 を別名設定できます。

ただし、fp->f1 は bp->b1、bp->b2、または bp->b3 を別名設定しません。これは、フィールド名を考慮したときに foo および bar が同じではないためです。

この例が -xalias_level=strong オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは、次の別名情報を仮定します。

- *ip は、fp->f1、fp->f4、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 を別名設定しません。これは、*ip などのポインタが、構造の内部を指定しないためです。
- 同様に、*sp は fp->f1 および fp->f3 を別名設定しません。
- 型が異なるため、*ip は、*fp、*bp、および *sp を別名設定しません。
- 型が異なるため、*sp は、*fp、*bp、および *ip を別名設定しません。

6.4.2 例: さまざまな別名レベルでのコンパイル

次の例のソースコードを考えてみましょう。さまざまなレベルの別名設定でコンパイルすることにより、それぞれの型の別名設定の関係性を理解できます。

```
struct foo {
    int f1;
    int f2;
    int f3;
} *fp;

struct bar {
    int b1;
    int b2;
    int b3;
} *bp;
```

この例が -xalias_level=any オプションでコンパイルされる場合、コンパイラでは、次の別名情報を仮定します。

*fp、*bp、fp->f1、fp->f2、fp->f3、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 はすべて相互に別名設定できます。これは、2 つのメモリーアクセスが -xalias_level=any レベルで相互に別名設定するためです。

この例が -xalias_level=basic オプションでコンパイルされる場合、コンパイラでは、次の別名情報を仮定します。

*fp、*bp、fp->f1、fp->f2、fp->f3、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 はすべて相互に別名設定できます。すべての構造体フィールドが同じ基本型であるため、ポインタ *fp および *bp を使用する 2 つのフィールドアクセスは、この例において相互に別名設定できます。

この例が -xalias_level=weak オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは、次の別名情報を仮定します。

- *fp および *fp は相互に別名設定できます。
- fp->f1 は、bp->b1、*bp、および *fp を別名設定できます。
- fp->f2 は、bp->b2、*bp、および *fp を別名設定できます。
- fp->f3 は、bp->b3、*bp、および *fp を別名設定できます。

ただし、-xalias_level=weak を指定すると、次の制限が課されます。

- fp->f1 は、bp->b2 または bp->b3 を別名設定しません。これは、f1 がゼロのオフセットを保持し、b2 のオフセット (4 バイト) および b3 のオフセット (8 バイト) と異なるためです。
- fp->f2 は、bp->b1 または bp->b3 を別名設定しません。これは、f2 が 4 バイトのオフセットを保持し、b1 のオフセット (0 バイト) および b3 のオフセット (8 バイト) と異なるためです。
- fp->f3 は、bp->b1 または bp->b2 を別名設定しません。これは、f3 が 8 バイトのオフセットを保持し、b1 のオフセット (0 バイト) および b2 のオフセット (4 バイト) と異なるためです。

この例が -xalias_level=layout オプションでコンパイルされる場合、コンパイラでは、次の別名情報を仮定します。

- *fp および *bp は相互に別名設定できます。
- fp->f1 は、bp->b1、*bp、および *fp を別名設定できます。
- fp->f2 は、bp->b2、*bp、および *fp を別名設定できます。
- fp->f3 は、bp->b3、*bp、および *fp を別名設定できます。

ただし、-xalias_level=layout を指定すると、次の制限が課されます。

- fp->f1 は、bp->b2 または bp->b3 を別名設定しません。これは、フィールド f1 が、foo および bar の共通の初期シーケンス内でフィールド b1 に対応するためです。
- fp->f2 は、bp->b1 または bp->b3 を別名設定しません。これは、f2 が、foo および bar の共通の初期シーケンス内でフィールド b2 に対応するためです。
- fp->f3 は、bp->b1 または bp->b2 を別名設定しません。これは、f3 が、foo および bar の共通の初期シーケンス内でフィールド b3 に対応するためです。

この例が -xalias_level=strict オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは、次の別名情報を仮定します。

- *fp および *bp は相互に別名設定できます。
- fp->f1 は、bp->b1、*bp、および *fp を別名設定できます。
- fp->f2 は、bp->b2、*bp、および *fp を別名設定できます。
- fp->f3 は、bp->b3、*bp、および *fp を別名設定できます。

ただし、-xalias_level=strict を指定すると、次の制限が課されます。

- fp->f1 は、bp->b2 または bp->b3 を別名設定しません。これは、フィールド f1 が、foo および bar の共通の初期シーケンス内でフィールド b1 に対応するためです。

- fp->f2 は、bp->b1 または bp->b3 を別名設定しません。これは、f2 が、foo および bar の共通の初期シーケンス内でフィールド b2 に対応するためです。
- fp->f3 は、bp->b1 または bp->b2 を別名設定しません。これは、f3 が、foo および bar の共通の初期シーケンス内でフィールド b3 に対応するためです。

この例が -xalias_level=std オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは、次の別名情報を仮定します。

fp->f1、fp->f2、fp->f3、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 は、相互に別名設定しません。

この例が -xalias_level=strong オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは、次の別名情報を仮定します。

fp->f1、fp->f2、fp->f3、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 は、相互に別名設定しません。

6.4.3 例: 内部ポインタ

次の例のソースコードは、特定レベルの別名設定が内部ポインタを処理できないことを示します。内部ポインタの定義については、表49「別名明確化のレベル」を参照してください。

```
struct foo {
        int f1;
        struct bar *f2;
        struct bar *f3;
        int f4;
        int f5;
        struct bar fb[10];
} *fp;

struct bar
        struct bar *b2;
        struct bar *b3;
        int b4;
} *bp;

bp=(struct bar*)(&fp->f2);
```

この例の参照解除は、weak、layout、strict、または std でサポートされません。ポインタ割り当て bp=(struct bar*)(&fp->f2) の実行後、対になった次のメモリーアクセスは同じメモリー位置に接触します。

- fp->f2 および bp->b2 は、同じメモリー位置にアクセスします
- fp->f3 および bp->b3 は、同じメモリー位置にアクセスします
- fp->f4 および bp->b4 は、同じメモリー位置にアクセスします

ただし、オプション weak、layout、strict、および std を指定する場合、コンパイラは、fp->f2 および bp->b2 が別名設定しないことを仮定します。コンパイラがこのように仮定する理由は、b2

のオフセットが 0 である一方で f2 が 4 バイトのオフセットを保持することと、foo および bar が共通の初期シーケンスを保持しないことにあります。同様に、コンパイラは bp->b3 が fp->f3 を別名設定せず、bp->b4 が fp->f4 を別名設定しないと仮定します。

そのため、ポインタ割り当て bp=(struct bar*)(&fp->f2) により、別名情報に関するコンパイラの仮定が正しくない状況が作成されます。この状況は不正な最適化につながる可能性があります。

次の例に示されている変更を行なったあとで、コンパイルを実行してください。

```
struct foo {
        int f1;
        struct bar fb;   /* Modified line */
#define f2 fb.b2         /* Modified line */
#define f3 fb.b3         /* Modified line */
#define f4 fb.b4         /* Modified line */
        int f5;
        struct bar fb[10];
} *fp;

struct bar
        struct bar *b2;
        struct bar *b3;
        int b4;
} *bp;

bp=(struct bar*)(&fp->f2);
```

ポインタ割り当て bp=(struct bar*)(&fp->f2) の実行後、対になった次のメモリーアクセスは同じメモリー位置に接触します。

- fp->f2 および bp->b2
- fp->f3 および bp->b3
- fp->f4 および bp->b4

このコード例に示された変更内容から、式 fp->f2 は式 fp->fb.b2 の別の形式であることがわかります。fp->fb が型 bar であるため、fp->f2 は bar の b2 フィールドにアクセスします。さらに、bp->b2 も bar の b2 フィールドにアクセスします。そのため、コンパイラは、fp->f2 が bp->b2 を別名設定することを仮定します。同様に、コンパイラは、fp->f3 が bp->b3 を別名設定し、fp->f4 が bp->b4 を別名設定することを仮定します。その結果、コンパイラの仮定する別名設定は、ポインタ割り当てで設定された実際の別名と一致します。

6.4.4 例: 構造体のフィールド

次の例のソースコードを考えてみましょう。

```
struct foo {
        int f1;
```

```
        int f2;
} *fp;

struct bar {
        int b1;
        int b2;
} *bp;

struct cat {
        int c1;
        struct foo cf;
        int c2;
        int c3;
} *cp;

struct dog {
        int d1;
        int d2;
        struct bar db;
        int d3;
} *dp;
```

この例が -xalias_level=weak オプションでコンパイルされる場合、コンパイラは、次の別名情報を仮定します。

- fp->f1 は、bp->b1、cp->c1、dp->d1、cp->cf.f1、および df->db.b1 を別名設定できます。
- fp->f2 は、bp->b2、cp->cf.f1、dp->d2、cp->cf.f2、df->db.b2、cp->c2 を別名設定できます。
- bp->b1 は、fp->f1、cp->c1、dp->d1、cp->cf.f1、および df->db.b1 を別名設定できます。
- bp->b2 は、fp->f2、cp->cf.f1、dp->d2、cp->cf.f1、および df->db.b2 を別名設定できます。

*dp が *cp を別名設定でき、*fp が dp->db を別名設定できるため、fp->f2 は、cp->c2 を別名設定できます。

- cp->c1 は、fp->f1、bp->b1、dp->d1、および dp->db.b1 を別名設定できます。
- cp->cf.f1 は、fp->f1、fp->f2、bp->b1、bp->b2、dp->d2、および dp->d1 を別名設定できます。

cp->cf.f1 は dp->db.b1 を別名設定しません。

- cp->cf.f2 は、fp->f2、bp->b2、dp->db.b1、および dp->d2 を別名設定できます。
- cp->c2 は、dp->db.b2 を別名設定できます。

cp->c2 は dp->db.b1 を別名設定せず、cp->c2 は dp->d3 を別名設定しません。

オフセットに関連して、*dp が cp->cf を別名設定する場合にかぎり、cp->c2 は db->db.b1 を別名設定できます。ただし、*dp が cp->cf を別名設定する場合、dp->db.b1 は foo cf の末尾を超えて別名設定する必要がありますが、これはオブジェクトの制限事項で禁じられています。そのため、コンパイラは、cp->c2 が db->db.b1 を別名設定できないと仮定します。

cp->c3 は、dp->d3 を別名設定できます。

cp->c3 は dp->db.b2 を別名設定しません。参照解除に関連する型のフィールドのオフセットが異なり、重複することがないため、これらのメモリー参照は別名設定を行いません。この事実に基づき、コンパイラは、それらのメモリー参照が別名設定できないと仮定します。

- dp->d1 は、fp->f1、bp->b1、および cp->c1 を別名設定できます。
- dp->d2 は、fp->f2、bp->b2、および cp->cf.f1 を別名設定できます。
- dp->db.b1 は、fp->f1、bp->b1、および cp->c1 を別名設定できます。
- dp->db.b2 は、fp->f2、bp->b2、cp->c2、および cp->cf.f1 を別名設定できます。
- dp->d3 は、cp->c3 を別名設定できます。

dp->d3 は cp->cf.f2 を別名設定しません。参照解除に関連する型のフィールドのオフセットが異なり、重複することがないため、これらのメモリー参照は別名設定を行いません。この解析に基づき、コンパイラは、それらが別名設定できないと仮定します。

この例が -xalias_level=layout オプションでコンパイルされる場合、コンパイラでは、次の別名情報だけを想定します。

- fp->f1、bp->b1、cp->c1、および dp->d1 はすべて相互に別名設定できます。
- fp->f2、bp->b2、および dp->d2 はすべて相互に別名設定できます。
- fp->f1 は、cp->cf.f1 および dp->db.b1 を別名設定できます。
- bp->b1 は、cp->cf.f1 および dp->db.b1 を別名設定できます。
- fp->f2 は、cp->cf.f2 および dp->db.b2 を別名設定できます。
- bp->b2 は、cp->cf.f2 および dp->db.b2 を別名設定できます。

この例が -xalias_level=strict オプションでコンパイルされる場合、コンパイラでは、次の別名情報だけを想定します。

- fp->f1 および bp->b1 は相互に別名設定できます。
- fp->f2 および bp->b2 は相互に別名設定できます。
- fp->f1 は、cp->cf.f1 および dp->db.b1 を別名設定できます。
- bp->b1 は、cp->cf.f1 および dp->db.b1 を別名設定できます。
- fp->f2 は、cp->cf.f2 および dp->db.b2 を別名設定できます。
- bp->b2 は、cp->cf.f2 および dp->db.b2 を別名設定できます。

この例が -xalias_level=std オプションでコンパイルされる場合、コンパイラでは、次の別名情報だけを想定します。

- fp->f1 は、cp->cf.f1 を別名設定できます。
- bp->b1 は、dp->db.b1 を別名設定できます。
- fp->f2 は、cp->cf.f2 を別名設定できます。
- bp->b2 は、dp->db.b2 を別名設定できます。

6.4.5 例: 共用体

次の例のソースコードを考えてみましょう。

```
struct foo {
        short f1;
        short f2;
        int   f3;
} *fp;

struct bar {
        int b1;
        int b2;
} *bp;

union moo {
        struct foo u_f;
        struct bar u_b;
} u;
```

さまざまな別名レベルに基づくコンパイラの仮定を、次に示します。

- この例が `-xalias_level=weak` オプションでコンパイルされる場合、`fp->f3` および `bp->b2` は相互に別名設定できます。
- この例が `-xalias_level=layout` オプションでコンパイルされる場合、フィールドは相互に別名設定できません。
- この例が `-xalias_level=strict` オプションでコンパイルされる場合、`fp->f3` および `bp->b2` は相互に別名設定できます。
- この例が `-xalias_level=std` オプションでコンパイルされる場合、フィールドは相互に別名設定できません。

6.4.6 例: 構造体の構造体

次の例のソースコードを考えてみましょう。

```
struct bar;

struct foo {
        struct foo *ffp;
        struct bar *fbp;
} *fp;

struct bar {
        struct bar *bbp;
        long        b2;
} *bp;
```

さまざまな別名レベルに基づくコンパイラの仮定を、次に示します。

- この例が -xalias_level=weak オプションでコンパイルされる場合、fp->ffp および bp->bbp だけが相互に別名設定できます。
- この例が -xalias_level=layout オプションでコンパイルされる場合、fp->ffp および bp->bbp だけが相互に別名設定できます。
- この例が -xalias_level=strict オプションでコンパイルされる場合、フィールドは別名設定できません。タグが削除されたあとも、2 つの struct の型が異なるからです。
- この例が -xalias_level=std オプションでコンパイルされる場合、フィールドは別名設定できません。2 つの型とタグが同じではないからです。

6.4.7 例: プラグマの使用

次の例のソースコードを考えてみましょう。

```
struct foo;
struct bar;
#pragma alias (struct foo, struct bar)

struct foo {
        int f1;
        int f2;
} *fp;

struct bar {
        short b1;
        short b2;
        int   b3;
} *bp;
```

この例のプラグマにより、foo および bar が相互に別名設定できることがコンパイラに伝えられます。コンパイラは、別名情報について次のように仮定します。

- fp->f1 は、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 を別名設定できます
- fp->f2 は、bp->b1、bp->b2、および bp->b3 を別名設定できます

♦ ♦ ♦ 第 7 章

7 ISO C への移行

この章では、K&R (Kerigan and Ritchie) C のアプリケーションを移植し、ISO/IEC C 規格に適合させるために役立てるために使用できる情報について説明します。この章は、9899:1990 ISO/IEC C 規格への移植を支援することを主たる目的として記載されていますが、実際上は、9899:1999 または 9899:2011 バージョンの ISO/IEC C 規格への移植を支援するためにも使用できます。

このバージョンの C コンパイラは、9899:2011 に準拠するコードを受け入れるようデフォルトで設定され、つまり `-std=c11` と設定されます。9899:1999 用にコンパイルするには `-std=c99` を使用し、9899:1990 用にコンパイルするには `-std=c89` を使用します。

`-std` フラグによって指定される ISO C ダイアレクトに最大限準拠するプログラムをコンパイルするには、`-pedantic` フラグも指定する必要があります。

7.1 新しい形式の関数プロトタイプ

1990 ISO C 規格での最大の変更点は、C++ 言語の機能である関数プロトタイプを使用できることです。各関数のパラメータの数と型を指定することにより、すべての通常のコンパイルは、関数呼び出しごとに (`lint` のように) 引数とパラメータの検査の利点を得る一方、引数が (代入だけで) 自動的に関数が期待する型に変換されます。プロトタイプを使用するように変更できる (また、変更すべき) 既存の C コードが非常に多く存在するため、1990 ISO C 規格には、古い形式と新しい形式の関数宣言を併用する規則が含まれています。

1999 ISO C 規格によって、古い形式の関数宣言は廃止されました。

7.1.1 新しいコードを書く

まったく新しいプログラムを書くとき、ヘッダーでは、新しい形式の関数宣言 (関数プロトタイプ) を使用し、それ以外の C ソースファイルでは、新しい形式の関数宣言と関数定義を使用します。しかし、ISO C 以前のコンパイラを持つシステムにコードを移植する可能性がある場合は、ヘッダーとソースファイルの両方で、マクロ `__STDC__` (ISO C コンパイルシステム専用に定義されている) を使用してください。例については、154 ページの「併用に関する考慮点」を参照してください。

同じオブジェクトまたは関数に対して 2 つの互換性のない宣言が同じスコープの中にある場合、ISO C 準拠のコンパイラは診断メッセージを発行しなければいけません。すべての関数がプロトタイプで宣言および定義され、適切なヘッダーが正しいソースファイルによってインクルードされている場合、すべての呼び出しは関数の定義に従うはずです。この取り決めによって、起こりがちな C プログラミングの誤りを防ぐことができます。

7.1.2 既存のコードを更新する

既存のアプリケーションがあり、関数プロトタイプの利点が必要な場合、どれくらいのコードを変更するかによって、更新にいくつかの可能性が存在します。

1. 変更せずに再コンパイルする

   コードを変更しなくても、`-v` オプションでコンパイラを実行すると、パラメータの型と数の不一致について警告が発行されます。
2. ヘッダーだけに関数プロトタイプを追加する

   大域的な関数へのすべての呼び出しが診断の対象になります。
3. ヘッダーには関数プロトタイプを追加し、各ソースファイルの先頭には局所 (静的な) 関数に対する関数プロトタイプを追加する

   関数へのすべての呼び出しが対象になります。ただしこの方法では、ソースファイル内で局所関数ごとに 2 回インタフェースを入力する必要があります。
4. すべての関数宣言と関数定義を、関数プロトタイプを使用するように変更する

結果として受ける恩恵とそのための負荷を考えると、ほとんどの場合、前述の 2 か 3 が適切な選択だと言えるでしょう。ただしこれらを選択する場合、古い形式と新しい形式を併用するための規則を詳細に知っておく必要があります。

7.1.3 併用に関する考慮点

関数プロトタイプ宣言と古い形式の関数定義がともに機能するためには、両方が機能的に同じインタフェースを指定しなければいけません。つまり、ISO C の用語を使用する*互換形式*を持っていなければいけません。

可変引数を持つ関数の場合は、ISO C の省略記号と古い形式の `varargs()` 関数定義は併用できません。固定数のパラメータを持つ関数の場合、以前の実装で渡したとおりのパラメータの型を指定できます。

K&R C では、各引数は、呼び出された関数に渡される直前に、デフォルトの引数拡張に従って変換されました。このような拡張は、`int` より狭いすべての整数型が `int` サイズに拡張され、また、任意の `float` 引数が `double` に拡張されるように指定していたため、コンパイラとライブラリの両方を単純化していました。関数プロトタイプはより表現力が高いです。指定したパラメータの型が関数に渡されるものになるためです。

したがって、関数プロトタイプが既存の (古い形式の) 関数定義のために記述されている場合、その関数プロトタイプには、次のいずれかの型のパラメータを一切含めないようにしてください: `char`、`signed char`、`unsigned char`、`float`、`short`、`signed short`、`unsigned short`。

プロトタイプを書く際には、依然として 2 つの問題があります。`typedef` 名と、狭い unsigned 型の拡張規則です。

古い形式の関数内のパラメータが `typedef` 名を使って宣言されている場合 (`off_t` や `ino_t` など)、`typedef` 名がデフォルトの引数拡張によって影響を受ける型を指しているかどうかを確認する必要があります。これら 2 つの場合、`off_t` は `long` で、関数プロトタイプで使用できます。`ino_t` は `unsigned short` であったため、プロトタイプで使用すると、古い形式の定義とプロトタイプが異なる互換性のないインタフェースを指定するため、コンパイラは診断メッセージを発行します。

`unsigned short` の代わりに何を使用すべきかを決定するのは複雑な問題です。K&R C と 1990 ANSI/ISO C コンパイラ間の最大の非互換性は、`unsigned char` と `unsigned short` を `int` 値に広げるための拡張規則です。(158 ページの「拡張: 符号なし保存と値の保持」を参照してください。)この古い形式のパラメータに対応するパラメータ型は、コンパイル時に使用するコンパイルモードによって異なります。

- `-Xs` と `-Xt` では `unsigned int` を使用する
- `–Xa`、`– Xc`、および `-std=`*anyvalue* は `int` を使用する必要があります

最良の方法は、`int` または `unsigned int` のどちらかを指定するように古い形式の定義を変更して、一致する型を関数プロトタイプで使用することです。必要であれば、関数を入力したあとでも、より狭い型の値を局所変数に代入できます。

前処理によって影響を受ける可能性のあるプロトタイプでは、ID の使用に注意を払ってください。次の例を考えてみましょう。

```
#define status 23
void my_exit(int status);   /* Normally, scope begins */
                            /* and ends with prototype */
```

関数プロトタイプは、狭い型を持つ古い形式の関数定義と併用できません。

```
void foo(unsigned char, unsigned short);
void foo(i, j) unsigned char i; unsigned short j; {...}
```

`__STDC__` を適切に使用すれば、古いコンパイラと新しいコンパイラの両方で使用できるヘッダーファイルを作成できます。

```
header.h:
    struct s { /* .  .  .  */ };
    #ifdef __STDC__
       void errmsg(int, ...);
       struct s *f(const char *);
       int g(void);
```

```
    #else
      void errmsg();
      struct s *f();
      int g();
    #endif
```

次の関数はプロトタイプを使用していますが、古いシステムでもコンパイルできます。

```
struct s *
#ifdef __STDC__
    f(const char *p)
#else
    f(p) char *p;
#endif
{
    /* .  .  .  */
}
```

次の例は、更新されたソースファイルを示しています (前述の選択肢 3 と同様)。局所関数は古い形式の定義を使用していますが、新しいコンパイラ用にプロトタイプも含まれています。

```
source.c:
   #include “header.h”
      typedef /* .  .  .  */ MyType;
   #ifdef __STDC__
      static void del(MyType *);
      /* .  .  .  */
      static void
      del(p)
      MyType *p;
      {
      /* .  .  .  */
      }
      /* .  .  .  */
```

7.2 可変引数を持つ関数

以前の実装では、関数が期待するパラメータの型を指定できませんでしたが、ISO C でプロトタイプを使用すれば、これを指定できます。`printf()` などの関数をサポートするために、プロトタイプの構文では特別な省略記号 (…) が終了を示す記号として使用されます。実装によっては可変引数を処理するために特別なことを行う必要があるため、ISO C では、すべての宣言とこのような関数などの定義が末尾に省略記号を含むべきであると規定しています。

パラメータの“…”の部分には名前が付いていないため、`stdarg.h` に含まれている一連の特殊なマクロが、それらの引数へのアクセスを関数に提供します。初期のバージョンではこのような関数は `varargs.h` に含まれている同様なマクロを使用しなければいけませんでした。

これから書こうとする関数が `errmsg()` というエラーハンドラで、`void` を返し、その唯一の固定パラメータがエラーメッセージの詳細を指定する `int` であると仮定します。このパラメータには、

ファイル名または行番号、あるいはその両方を続けることができます。これらの項目には、エラーメッセージのテキストを指定する、printf() のものに似た書式や引数が続きます。

初期のコンパイラでこの例をコンパイルするには、ISO C コンパイラ専用に定義されたマクロ __STDC__ を多く使用する必要があります。適切なヘッダーファイルにおける関数の宣言は次のようになります。

```
#ifdef __STDC__
    void errmsg(int code, ...);
#else
    void errmsg();
#endif
```

errmsg() の定義を持つファイルは、古い形式と新しい形式を併用できます。まず、インクルードするヘッダーはコンパイルシステムによって異なります。

```
#ifdef __STDC__
#include <stdarg.h>
#else
#include <varargs.h>
#endif
#include <stdio.h>
```

そのあとで fprintf() と vfprintf() を呼び出すため、stdio.h をインクルードしています。

次は関数の定義です。識別子 va_alist と va_dcl は古い形式の varargs.h インタフェースの一部です。

```
void
#ifdef __STDC__
errmsg(int code, ...)
#else
errmsg(va_alist) va_dcl /* Note: no semicolon! */
#endif
{
   /* more detail below */
}
```

古い形式の可変引数メカニズムでは固定パラメータを指定することが一切許可されなかったため、可変部分の前でそれらにアクセスする必要があります。また、パラメータの「…」部分に名前がないため、新しい va_start() マクロは 2 番目の引数 (「…」ターミネータの直前にあるパラメータの名前) を持ちます。

拡張機能として、Oracle Developer Studio ISO C では次のように、固定パラメータなしで関数を宣言および定義することが許可されます。

```
int f(...);
```

このような関数の場合、次のように、va_start() は 2 番目の引数を空にして呼び出すようにしてください。

```
va_start(ap,)
```

次の例は関数の本体です。

```
{
    va_list ap;
    char *fmt;
#ifdef __STDC__
    va_start(ap, code);
#else
    int code;
    va_start(ap);
    /* extract the fixed argument */
    code = va_arg(ap, int);
#endif
    if (code & FILENAME)
        (void)fprintf(stderr, "\"%s\": ", va_arg(ap, char *));
    if (code & LINENUMBER)
        (void)fprintf(stderr, "%d: ", va_arg(ap, int));
    if (code & WARNING)
        (void)fputs("warning: ", stderr);
    fmt = va_arg(ap, char *);
    (void)vfprintf(stderr, fmt, ap);
    va_end(ap);
}
```

`va_arg()` と `va_end()` マクロは両方とも古い形式と ISO C バージョンで同様に動作します。`va_arg()` は `ap` の値を変更するため、`vfprintf()` への呼び出しを次のようにすることはできません。

```
(void)vfprintf(stderr, va_arg(ap, char *), ap);
```

マクロ `FILENAME`、`LINENUMBER`、および `WARNING` の定義は、おそらく、`errmsg()` の宣言と同じヘッダーに含まれています。

`errmsg()` の呼び出し例を次に示します。

```
errmsg(FILENAME, "<command line>", "cannot open: %s\n",
argv[optind]);
```

7.3 拡張: 符号なし保存と値の保持

1990 ISO C 規格の「Rationale」(論理的根拠) セクションに、次のような情報があります。「QUIET CHANGE」(メッセージなしの変更)。符号なし保存演算変換に依存するプログラムは、おそらくはメッセージを発行せずに、異なる動作を行います。この変更は、現在広く行われている慣習に対して委員会が行なったもっとも重大な変更であると考えられます。

このセクションでは、この変更がコーディングにどのように影響するかを説明します。

7.3.1 若干の背景となる歴史

『*プログラミング言語 C*』の最初のエディションでは、unsigned は正確に 1 つの型を指定しており、unsigned char、unsigned short、unsigned long はありませんでした。ほとんどの C コンパイラにはそれからまもなく、これらが追加されました。一部のコンパイラは unsigned long を実装せず、残りの 2 つを含んでいました。当然、式の中でこれらの新しい型がほかの型と併用されている場合、実装によって異なる型拡張規則が適用されました。

ほとんどの C コンパイラでは、より単純な規則である「*符号なし保持*」が使用されています。符号なし型を拡張する必要があるときは符号なし型に拡張され、符号なし型が符号付き型と混在するときは結果は符号なし型です。

ISO C で定義されるもう一方の規則は、「*値の保持*」と呼ばれ、結果の型はオペランドの型の相対的なサイズによって異なります。unsigned char または unsigned short が拡張されるとき、int がより小さい型の値をすべて表現できる大きさである場合は、結果の型は int です。それ以外の場合、結果の型は unsigned int です。この「値の保持」規則は、ほとんどの式に予期されない演算結果になることは少なくなります。

7.3.2 コンパイルの動作

移行モードまたは ISO モード (-Xt または -Xs) でのみ、ISO C コンパイラは符号なし保持拡張を使用します。-std=*anyvalue* が指定されるか、準拠モード (–Xc) および ISO モード (–Xa) のほかの 2 つのモードでは、値の保持拡張規則が使用されます。

7.3.3 例: キャストの使用

次のコードでは、unsigned char が int より小さいと仮定します。

```
int f(void)
{
    int i = -2;
    unsigned char uc = 1;

   return (i + uc) < 17;
}
```

このコードは、-xtransition オプションを使用したときに、コンパイラが次の警告を発行する原因になります。

```
line 6: warning: semantics of "<" change in ISO C; use explicit cast
```

加算の結果の型は int (値保持) または unsigned int (符号なし保存) です。しかし、どちらの場合でもビットパターンは同じです。2 の補数を使用するマシンでは、次のようになります。

```
    i:       111...110 (-2)
```

```
+   uc:      000...001 ( 1)
==================
        111...111 (-1 or UINT_MAX)
```

このビット表現は、int では -1 に、unsigned int では UINT_MAX に対応します。したがって、結果の型が int の場合、符号付きの比較が使用され、「小さい」のテストは真になります。結果の型が unsigned int の場合、符号なしの比較が使用され、「小さい」のテストは偽になります。

キャストの加算を使用すると、2 つの動作のうち、どちらを希望するかを指定できます。

```
value preserving:
    (i + (int)uc) < 17
unsigned preserving:
    (i + (unsigned int)uc) < 17
```

異なるコンパイラが同じコードに対して異なる意味を選択したため、この式は曖昧になる可能性があります。キャストの加算を使用することにより、コードが読みやすくなると同時に、警告メッセージも発行されなくなります。

同じ動作が、ビットフィールド値の拡張にも適用されます。ISO C では、int または unsigned int ビットフィールド内のビットの数が int 中のビットの数よりも少ない場合、拡張される型は int です。それ以外の場合、拡張される型は unsigned int です。ほとんどの古い C コンパイラでは、明示的な符号なしビットフィールドの場合、拡張される型は unsigned int です。それ以外の場合は int です。

この場合も、キャストを使用することにより、曖昧になることを防ぐことができます。

7.3.4 例: 同じ結果、警告なし

次のコードでは、unsigned short と unsigned char の両方が int よりも狭いと仮定します。

```
int f(void)
{
    unsigned short us;
    unsigned char uc;
    return uc < us;
}
```

この例では、2 つの自動変数は int または unsigned int のどちらかに拡張されます。したがって、比較対象は符号なしになることも、符号付きになることもあります。しかし、どちらを選んでも結果は同じなので、警告は発行されません。

7.3.5 整数定数

式と同様に、ある整数定数の型の規則も変更されました。K&R C では、接尾辞なしの 10 進定数の型が int になるのは、その値が int に収まる場合だけでした。接尾辞なしの 8 進数定

数または 16 進数定数の型が int になるのは、その値が unsigned int に収まる場合だけでした。それ以外の場合、整数定数の型は long でした。したがって、値が結果の型に収まらないことがありました。1990 ISO/IEC C 規格では、定数の型は、次のリストのうち、値を格納できる最初の型となります。

- 接尾辞なし 10 進数: int、long、unsigned long
- 接尾辞なし 8 進数または 16 進数: int、unsigned int、long、unsigned long
- 接尾辞 U 付き: unsigned int、unsigned long
- 接尾辞 L 付き: long、 unsigned long
- 接尾辞 UL 付き : unsigned long

-xtransition オプションを使用すると、ISO C コンパイラは、関係する定数の型決定規則によって動作が異なる可能性のあるすべての式について警告します。古い整数定数型規則が使用されるのは、移行モードだけです。ISO モードと準拠モードでは新しい規則が使用されます。

注記 - 接尾辞なしの 10 進定数の型規則は、1999 ISO C 規格に従って変更されています。29 ページの「整数定数」を参照してください。

7.3.6 例: 整数定数

次のコードでは、int が 16 ビットであると仮定します。

```
int f(void)
{
    int i = 0;

    return i > 0xffff;
}
```

16 進数定数の型が int (2 の補数を使用するマシンで値 – 1) または unsigned int (値 65535) であるため、比較は -Xs および -Xt モードで真になり、-Xa および -Xc モードあるいは -std フラグが指定された場合に偽となります。

この場合も、キャストを適切に使用することにより、コードが読みやすくなり、警告も発行されなくなります。

```
-Xt, -Xs modes:
    i > (int)0xffff

-Xa, -Xc modes, or when -std flag is specified:
    i > (unsigned int)0xffff
       or
    i > 0xffffU
```

接尾辞 U 文字は ISO C の新しい機能であるため、古いコンパイラではおそらくエラーメッセージが生成されます。

7.4 トークン化と前処理

以前のバージョンの C でもっとも不明確な仕様は、各ソースファイルを文字の集合から一連のトークンに変換して構文解析できるようにするまでの操作でしょう。具体的には、空白 (コメントも含む) の認識、連続した文字のトークン化、前処理指令行の処理、およびマクロの置換などがあります。しかし、これら操作の優先順位は保証されていませんでした。

7.4.1 ISO C の翻訳段階

ISO C では、このような翻訳段階の順番が指定されています。

ソースファイル内のすべての 3 文字表記シーケンスが置換されます。ISO C にはちょうど 9 つの 3 文字表記シーケンスがありますが、これらは、不完全な文字セットの容認としてのためだけに考案されました。これらは 3 文字から成るシーケンスであり、ISO 646-1983 文字セットにない 1 つの文字を指定します。

表 17 3 文字シーケンス

3 文字シーケンス	変換後
??=	#
??-	~
??(	[
??)	]
??!	|
??<	{
??>	}
??/	\
??’	^

これらのシーケンスは ISO C コンパイラによって理解される必要がありますが、推奨されていません。`-xtransition` オプションを使用すると、ISO C コンパイラは、移行 (`–Xt`) モードにあるときに (コメント内であっても) 3 文字表記を置き換えるたびに警告します。たとえば、次の例を考えてください。

```
/* comment *??/
/* still comment? */
```

`??/` はバックスラッシュになります。この文字とそれに続く改行は削除されます。結果として、次のようになります。

```
/* comment */* still comment? */
```

2 行目の最初の `/` は、コメントの終わりです。次のトークンは `*` です。

1. バックスラッシュと改行文字の組み合わせがすべて削除されます。
2. ソースファイルが前処理トークンと空白文字のシーケンスに変換されます。各コメントは効果的に空白文字で置換されます。
3. すべての前処理指令が処理され、すべてのマクロ呼び出しが置換されます。`#include` でインクルードされた各ソースファイルは、内容が指令行に置換される前の初期段階で実行されます。
4. すべてのエスケープシーケンス (文字定数と文字列リテラル) が解釈されます。
5. 隣接する文字列リテラルが連結されます。
6. すべての前処理トークンが通常のトークンに変換されます。コンパイラはこれらを正しく解析し、コードを生成します。
7. すべての外部オブジェクトと関数参照が解釈処理され、最終的なプログラムになります。

7.4.2 古い C の翻訳段階

以前の C コンパイラは、そのような単純な一連の段階に従っておらず、それらの手順が適用される順番も予測不可能でした。コンパイラとは別のプリプロセッサが、マクロを置換して指令行を処理するときに、トークンと空白を認識していました。そして、コンパイラがプリプロセッサの出力を適切に再トークン化し、言語を構文解析し、コードを生成していました。

プリプロセッサ内のトークン化プロセスは刻一刻の処理であり、マクロ置換は、トークンベースではなく文字ベースの処理として行われていました。したがって、トークンや空白は前処理中に大きく変動する可能性がありました。

これら 2 つのアプローチからいくつかの違いが生じます。このセクションの残りでは、マクロ置換中に発生する行の連結、マクロ置換、文字列化、およびトークンの連結によって、コードの動作がどのように変化する可能性があるかを説明します。

7.4.3 論理的なソース行

K&R C では、バックスラッシュと改行を組み合わせた次の行には、指令、文字列リテラル、文字定数しか指定できませんでした。ANSI/ISO C ではこの概念が拡張され、バックスラッシュと改行の組みの次の行に、あらゆるものを指定できるようになりました。K&R では 1 行は 1 行でしたが ANSIC では複数行組み合わせて 1 行とでき、これが論理行です。したがって、バックスラッシュと改行の組み合わせのいずれかの側でのトークンの別個の認識に依存するコードは、期待どおりに動作しません。

7.4.4 マクロ置換

ISO C 以前は、マクロ置換のプロセスについて詳しく記述されていませんでした。この曖昧さにより、極めて多種多様な実装が生み出されました。明白な定数置換や簡単な関数のようなマ

クロよりも複雑なものに依存するコードは、おそらく正しく移植できませんでした。このマニュアルでは、古い C と ISO C 間のマクロ置換実装の違いをすべて説明することはできません。ほとんどすべてのマクロ置換の結果は、前とまったく同じトークンの連続になります。ただし、ISO C マクロ置換アルゴリズムは、古い C ではできなかったことができます。次の例は、すべての name の使用を name 経由の間接参照で置換することになります。

```
#define name (*name)
```

古い C プリプロセッサは数多くの括弧とアスタリスクを生成し、ときには、マクロの再帰についてエラーを生成する場合もあります。

ANSI/ISO C によるマクロ置換方法の主な変更は、マクロ置換演算子 # と ## のオペランド以外のマクロ引数が要求であること、置換トークンリストでの置換前に再帰的に展開することです。ただし、この変更によって、実際に生成されるトークンに差が生じることは滅多にありません。

7.4.5 文字列の使用

注記 - ISO C では、-xtransition オプションを使用すると、下の ? でマークされている例では古い機能の使用に関する警告が生成されます。結果が以前のバージョンの C と同じになるのは、移行モード (–Xt および -Xs) にあるときだけです。

K&R C では、次のコードは文字列リテラル "x y!" を生成していました。

```
#define str(a) "a!"   ?
str(x y)
```

プリプロセッサは、文字列リテラルと文字定数の内部で、マクロパラメータのように見える文字を検索していました。ISO C はこの機能の重要性を認識していましたが、トークンの部分にこの操作を行うことはできませんでした。ISO C では、前述のマクロのすべての呼び出しが、文字列リテラル "a!" を生成します。ISO C で古い効果を実現するには、# マクロ置換演算子と文字列リテラルの連結を使用してください。

```
#define str(a) #a "!"
str(x y)
```

このコードでは、2 つの文字列リテラル "x y" と "!" が生成され、連結後に同一の "x y!" が生成されます。

文字定数用の操作を完全に代用するものはありません。この機能の主な使用方法は、次の例のようなものでした。

```
#define CNTL(ch) (037 & 'ch')    ?
CNTL(L)
```

この例では次の結果が生成され、ASCII の Control-L 文字に評価されます。

```
(037 & 'L')
```

最良の解決策は、このマクロのすべての使用を次のように変更することです。

```
#define CNTL(ch) (037 & (ch))
CNTL('L')
```

このコードの方が読みやすく式にも適用できるため、より使いやすくなっています。

7.4.6 トークンの連結

K&R C では、2 つのトークンを連結するために、少なくとも 2 つの方法がありました。次のコード内の両方の呼び出しは、2 つのトークン x と 1 から 1 つの識別子 x1 を生成します。

```
#define self(a) a
#define glue(a,b) a/**/b ?
self(x)1
glue(x,1)
```

ISO C では、どちらの方法も使用できません。ISO C では、どちらの呼び出しも、2 つの別々のトークン x と 1 を生成します。2 つのうちの 2 番目の方法は、## マクロ置換演算子を使用することで、ISO C 用に書き換えることができます。

```
#define glue(a,b) a ## b
glue(x, 1)
```

と ## は、__STDC__ が定義されているときだけ、マクロ置換演算子として使用しなければいけません。## は実際の演算子のため、定義と呼び出しの両方で空白について呼び出しをより自由に行うことができます。

コンパイラは、未定義の ## 演算に対して警告の診断を発行するようになりました (C 規格、3.4.3 セクション)。未定義とは、## を前処理したときの結果に、単一のトークンではなく、複数のトークンが含まれていることを意味します (C 規格、6.10.3.3(3) セクション)。未定義の ## 演算の結果は現在、## オペランドを連結することによって作成された文字列を前処理することによって生成される最初の個別のトークンとして定義されています。

2 つの古い連結方法のスキームのうち、最初の方法を再現するための直接的なアプローチは存在しません。しかし、呼び出し時に連結の負荷が発生するため、もう 1 つの方法に比べてあまり使用されませんでした。

7.5 const と volatile

キーワード const は、ISO C に含められた C++ 機能の 1 つでした。ISO C 委員会によって類似のキーワード volatile が考案された際に、「*型修飾子*」というカテゴリが作成されました。

7.5.1 *lvalue* 専用の型

const と volatile は識別子の型の一部であり、記憶クラスの一部ではありません。ただし、それらは多くの場合、式の評価中にオブジェクトの値が取り出されるとき (正確には、*lvalue* が *rvalue* になるとき) に、型のいちばん上の部分から削除されます。これらの用語は、プロトタイプ代入式 *left-hand-side*=*right-hand-side*; から来ています。ここで、左側は依然としてオブジェクトを直接参照している必要があり (*lvalue*)、右側は値であるだけでよい (*rvalue*) ということです。したがって、*lvalues* である式だけが const または volatile (あるいは、その両方) で修飾できます。

7.5.2 派生型の型修飾子

型修飾子は型名と派生型を変更します。派生型は C の宣言の一部であり、何度も適用することによって、より複雑な型 (ポインタ、配列、関数、構造体、共用体) を構築できます。関数を除き、1 つまたは両方の型修飾子を使用すると、派生型の動作を変更できます。

この例は、型が const int であり、値が正しいプログラムによって変更されないオブジェクトを宣言し、初期化します。

```
const int five = 5;
```

キーワードの順番は C にとって重要ではありません。たとえば、次の宣言は、最初の例と効果の点で同じです。

```
int const five = 5;
```

```
const five = 5;
```

次の宣言は、以前に宣言したオブジェクトを初期状態で指す、const int 型のポインタのオブジェクトを宣言します。

```
const int *pci = &five;
```

このポインタ自身は修飾型を持ちませんが、そのポイント先が修飾型になっています。そのポイント先はプログラムの実行中、基本的に任意の int に変更可能です。pci を使用してそのポイント先のオブジェクトを変更することはできません。ただし、次の例のようにキャストを使用すれば可能です。

```
*(int *)pci = 17;
```

pci が実際に const オブジェクトを指す場合、このコードの動作は未定義です。

次の宣言は、int への const ポインタという型を持つ大域オブジェクトの定義が、プログラム内のどこかに存在することを示しています。

```
extern int *const cpi;
```

この場合、正しいプログラムでは cpi の値は変更されません。しかし、cpi を使用して、cpi が指すオブジェクトを変更することはできます。この宣言において、const が * のあとにあることに注意してください。次の 2 つの宣言の効果は同じです。

```
typedef int *INT_PTR;
extern const INT_PTR cpi;
```

前述の宣言は、次の宣言のように連結できます。この場合、オブジェクトの型は const int への const ポインタであると宣言されます。

```
const int *const cpci;
```

7.5.3 const は readonly を意味する

なお、キーワードとしては通常 const よりも readonly を選択するほうが便利です。この方法で const を読み取ると、次の例のような宣言は、2 番目のパラメータが文字値を読み取るためにのみ使用されるのに対して、最初のパラメータはそれが指している文字を上書きすることを示していることがすぐわかります。

```
char *strcpy(char *, const char *);
```

さらに、この例で cpi の型が const int へのポインタであるという事実にかかわらず、実際に型が const int で宣言されたオブジェクトを指していないかぎり、ポイント先のオブジェクトの値は別の方法で変更できます。

7.5.4 const の使用例

const の 2 つの主な使用法は、コンパイル時に初期化された大きな情報テーブルが未変更であると宣言することと、ポインタパラメータが指しているオブジェクトを変更しないことを指定することです。

最初の使用法では、同じプログラムのほかの並行呼び出しが、プログラムのデータ部分を共有可能にします。データはメモリーの読み取り専用部分にあるため、この不変データを変更しようとする試みを、ある種類のメモリー保護障害で即座に検出できます。

const の 2 番目の使用法は、メモリーで障害が発生する前に潜在的なエラーを特定するのに役立ちます。たとえば、ヌル文字を挿入できない文字列に対して、ある関数が一時的にヌル文字を挿入しようとした場合、その関数は、コンパイル時、ヌル文字を挿入できない文字列へのポインタが渡されたときに検出されます。

7.5.5 volatile の使用例

これまでの例では、const は概念的に単純なものとして示されてきました。しかし、volatile はどのような意味でしょうか。それはコンパイラにとって、そのようなオブジェクトへのアクセス時にコード生成上のショートカットを行ってはいけない、ということを意味します。一方、ISO C では、対応する特殊な特性を持つすべてのオブジェクトを volatile として宣言することはプログラマの責任としています。

volatile は、通常、次の 4 つのオブジェクトに使用します。

- メモリーにマップされた入出力ポートであるオブジェクト
- 複数の並行プロセス間で共有されるオブジェクト
- 非同期シグナルハンドラによって変更されるオブジェクト
- setjmp を呼び出す関数中で宣言され、その値が setjmp への呼び出しとそれに対応する longjmp への呼び出し間で変更される自動記憶オブジェクト

最初の 3 つの例はすべて、特定の動作を行うオブジェクトのインスタンスです。つまり、その値は、プログラムの実行中の任意の時点で変更できます。したがって、一見無限ループに見える次のループは、flag が volatile で修飾された型を持つかぎりにおいて有効となります。

```
flag = 1;
while (flag);
```

おそらく、ある非同期イベントが将来 flag をゼロに設定することもあります。volatile 修飾型を持たない場合、flag の値はループ本体内では変更されないため、コンパイルシステムによって前述のループは、完全に flag の値を無視する本当の無限ループに変更されることもあり得ます。

4 番目の例は、setjmp を呼び出す関数に対して局所的な変数を含んでいるため、より複雑です。setjmp と longjmp の動作に関する詳細は、4 番目の例に一致するオブジェクトの値は予測不可能であることを示します。もっとも望ましい動作を行うためには、longjmp が、setjmp を呼び出す関数と longjmp を呼び出す関数の間で、保存されたレジスタ値に対してすべてのスタックフレームを検査する必要があります。スタックフレームは非同期的に作成される可能性があるため、この作業はより難しくなります。

自動オブジェクトが volatile 修飾型で宣言される場合、コンパイラは、プログラマが書いたものと完全に一致するコードを生成する必要があります。したがって、このような自動オブジェクトに対する最新の値は、レジスタ内だけでなく常にメモリー内にあり、longjmp が呼び出されたときに最新であることが保証されます。

7.6 複数バイト文字とワイド文字

ISO C の国際化は、当初はライブラリ関数だけに影響がありました。しかし、国際化の最終段階 (複数バイト文字とワイド文字) は言語属性にも影響します。

1990 ISO/IEC C 規格では、複数バイト文字とワイド文字を管理するために、5 つのライブラリ関数を規定しています。1999 ISO/IEC C 規格では、さらに多くのこうした関数を規定しています。

7.6.1 アジア言語は複数バイト文字を必要とする

アジア言語のコンピュータ環境における基本的な難しさは、入出力する必要のある膨大な数の表意文字にあります。通常のコンピュータアーキテクチャーの制約内で機能するよう、これらの表意文字はバイトシーケンスに符号化されます。関連するオペレーティングシステム、アプリケーションプログラム、および端末は、このようなバイトシーケンスを個々の表意文字として認識します。さらに、すべてのこのような符号化によって、通常の 1 バイト文字を表意文字のバイトシーケンスと混合できます。個々の表意文字を認識する際の難易度は、使用される符号化方式に依存します。

「複数バイト文字」は、ISO C の定義では、使用する符号化方式の種類に関係なく、表意文字を符号化するバイトシーケンスを示します。すべての複数バイト文字は「拡張文字セット」に属します。通常の 1 バイト文字は、単に複数バイト文字の特別なケースです。符号化に必要な唯一の条件は、どの複数バイト文字もヌル文字を符号化の一部として使用できないということです。

ISO C では、プログラムのコメント、文字列リテラル、文字定数、およびヘッダー名がすべて複数バイト文字のシーケンスであると規定されています。

7.6.2 符号化の種類

符号化方式は 2 つの種類に分けることができます。1 つは、各複数バイト文字が自己識別性を持つ方式です。つまり、どの複数バイト文字も簡単に 2 つの複数バイト文字の間に挿入できます。

もう 1 つは、特別なシフトバイトの存在が後続のバイトの解釈を変更する方式です。例は、あるキャラクタ端末で行描画モードに入ったり出たりするために使用する方式です。このシフト状態依存符号化による複数バイト文字で書かれたプログラムの場合、ISO C では、コメント、文字列リテラル、文字定数、およびヘッダー名の始まりと終わりがすべてシフトなし状態でなければならないと規定しています。

7.6.3 ワイド文字

複数バイト文字の処理で不都合が発生した場合は、すべての文字を一定のバイト数またはビット数にすることで解決できることがあります。そのような文字セットには数千または数万の表意文字が含まれている可能性があるため、すべてのメンバーを保持できるように 16 ビットまたは 32 ビットサイズの整数値を使用すべきです。(完全な中国語には 65,000 以上もの表意文字がある)。ISO C には、拡張文字セットのすべてのメンバーを保持するために十分な大きさを持つ実装定義の整数型として、`typedef` 名 `wchar_t` が含まれています。

各ワイド文字にはそれぞれ対応する複数バイト文字があり、またその逆も成り立ちます。通常の単一バイト文字に対応するワイド文字は、ヌル文字も含め、その単一バイトの値と同じ値を持つ必要があります。ただし、マクロ EOF が char として表現できない場合があるのとまったく同様に、EOF は必ずしも wchar_t に格納されない可能性があります。

7.6.4 C 言語の機能

アジア言語環境においてプログラマがより柔軟にプログラムを組むために、ISO C では、ワイド文字定数とワイド文字列リテラルを提供しています。この 2 つの形式は、直前に文字「L」の接頭辞が付くことを除き、通常の (ワイドでない) バージョンと同じです。

- 'x' 通常の文字定数
- '¥' 通常の文字定数
- L'x' ワイド文字定数
- L'¥' ワイド文字定数
- "abc¥xyz" 通常の文字列リテラル
- L"abcxyz" ワイド文字列リテラル

複数バイト文字は、通常とワイドの両方のバージョンで有効です。表意文字 ¥ を生成するために必要なバイトシーケンスは、符号化に固有です。それが複数のバイトから構成されている場合、'ab' の値が実装定義されるのとまったく同様に、文字定数 '¥' の値も実装定義されます。エスケープシーケンスを除き、通常の文字列リテラルには、引用符の間に指定されたものと同じバイト数 (指定したすべての複数バイト文字のバイト数も含む) が含まれます。

コンパイルシステムがワイド文字定数またはワイド文字列リテラルを検出したとき、各複数バイト文字は (mbtowc() 関数を呼び出したように) ワイド文字に変換されます。したがって、L'¥' の型は wchar_t です。abc¥xyz の型は長さが 8 の wchar_t の配列です。通常の文字列リテラルと同様に、各ワイド文字列リテラルは、値がゼロの余分な要素が追加されます。しかし、この要素は、ゼロの値を持つ wchar_t です。

通常の文字列リテラルが文字配列初期化の簡単な方法として使用できるのと同様に、ワイド文字列リテラルも wchar_t 配列を初期化するために使用できます。

```
wchar_t *wp = L"a¥z";
wchar_t x[] = L"a¥z";
wchar_t y[] = {L'a', L'¥', L'z', 0};
wchar_t z[] = {'a', L'¥', 'z', '\0'};
```

この例では、3 つの配列 x、y、および z と、wp が指す配列の長さは同じです。すべての配列は同じ値で初期化されます。

最後に、通常の文字列リテラルと同様に、隣接するワイド文字列リテラルは連結されます。しかし、1990 ISO/IEC C 規格では、通常の文字列リテラルとワイド文字列リテラルが隣接する場合、その動作は定義されていません。また、1990 ISO/IEC C 規格では、コンパイラがそのような連結を受け付けない場合にコンパイラがエラーを生成する必要がないと指定しています。

7.7 標準ヘッダーと予約名

ISO 規格委員会は標準化作業の初期の段階において、ライブラリ関数、マクロ、およびヘッダーファイルを ISO C の一部として含むことを選択しました。

このセクションでは、さまざまな予約名のカテゴリとその予約名が必要な基本的な理由を示します。最後には、プログラムで予約名を使用しないようにするための規則を示します。

7.7.1 標準ヘッダー

標準ヘッダーは、`assert.h`、`ctype.h`、`errno.h`、`float.h`、`limits.h`、`locale.h`、`math.h`、`setjmp.h`、`signal.h`、`stdarg.h`、`stddef.h`、`stdio.h`、`stdlib.h`、`string.h`、`time.h` です。

ほとんどの実装は、さらに多くのヘッダーを提供しています。しかし、1990 ISO/IEC C に厳密に準拠するプログラムが使用できるヘッダーは、記載されたものだけです。

これらヘッダーの一部の内容については、ほかの規格ではわずかに異なります。たとえば、POSIX (IEEE 1003.1) は、`fdopen` を `stdio.h` で宣言するように指定しています。これら 2 つの規格が共存するために、POSIX では、このような追加の名前が存在することを保証するためには任意のヘッダーをインクルードする前にマクロ `_POSIX_SOURCE` を `#defined` で定義しなければならないと規定しています。また、『*X/Open Portability Guide*』でも、その拡張のためにこのマクロ方式を使用しています。X/Open のマクロは `_XOPEN_SOURCE` です。

ISO C は、標準ヘッダーがそれ自身だけで完結し、べき等 (何度指定しても同じ) であることを要求しています。どの標準ヘッダーも、その前後でほかのヘッダーを `#included` でインクルードする必要はありません。標準ヘッダーは何度 `#included` でインクルードしても、問題は発生しません。ISO C 規格では、安全なコンテキストにおいてのみ、標準ヘッダーを `#included` でインクルードすることを要求します。したがって、ヘッダーで使用される名前は変更されないことが保証されます。

7.7.2 実装で使用される予約名

ISO C 規格は、そのライブラリに関する実装に対して、より多くの制限を課しています。過去において、ほとんどのプログラマは UNIX システムでは独自の関数に `read` や `write` などの名前を使用しないようにしていました。ISO C は、規格で予約されている名前だけが実装内の参照で導入されることを要求しています。

したがって規格では、実装で使用する可能性があるすべての名前のサブセットが予約されています。この名前のクラスは下線で始まり、もう 1 つの下線または大文字の英字が続く識別子から構成されます。この名前のクラスは、次の正規表現に一致するすべての名前を含みます。

```
_[_A-Z][0-9_a-zA-Z]*
```

厳密には、プログラムがこのような識別子を使用する場合、その動作は未定義です。したがって、_POSIX_SOURCE (または、_XOPEN_SOURCE) を使用するプログラムの動作は未定義です。

ただし、未定義の動作は程度の問題です。POSIX 準拠の実装で _POSIX_SOURCE を使用する場合、プログラムの未定義の動作は特定のヘッダー内に追加された特定の名前から構成されていても、受け入れられる標準にプログラムは準拠しています。ISO C 規格におけるこの故意の抜け道により、実装は外見上互換性のない仕様に準拠できます。一方、POSIX 規格に準拠しない実装は、_POSIX_SOURCE などの名前に遭遇したとき、任意の方法で動作できます。

規格では、下線で始まるほかのすべての名前が (局所的なスコープではなく) ヘッダーファイルにおける通常のファイルのスコープの識別子として、および構造体と共用体のタグとして使用するために予約されています。従来通り、_filbuf と _doprnt という名前の関数によりライブラリの隠れた部分を実装することはできます。

7.7.3 拡張用の予約名

明示的に予約されたすべての名前に加えて、1990 ISO/IEC C 規格は、次の特定のパターンに一致する名前も実装用および将来の規格用として予約しています。

表 18 拡張用の予約名

ファイル	予約名のパターン
errno.h	E[0-9A-Z].*
ctype.h	(to|is)[a-z].*
locale.h	LC_[A-Z].*
math.h	*現在の関数名*[fl]
signal.h	(SIG|SIG_)[A-Z].*
stdlib.h	str[a-z].*
string.h	(str|mem|wcs)[a-z].*

このリストにおいて、大文字の英字で始まる名前はマクロで、関連するヘッダーがインクルードされるときだけ予約されます。残りの名前は関数を示し、大域的なオブジェクトや関数を指定する場合には使用できません。

7.7.4 安全に使用できる名前

ISO C の予約名と衝突しないようにするために従うことのできる 4 つの簡単な規則です。

- すべてのシステムヘッダーは、ユーザーのソースファイルの最初に #include でインクルードする (_POSIX_SOURCE または _XOPEN_SOURCE あるいはその両方の #define 行がある場合は、そのあとでインクルードする)。

- 下線で始まる名前は定義または宣言しない。
- すべてのファイルスコープのタグと通常名の最初の数文字では、下線または大文字の英字を使用する。stdarg.h または varargs.h 内の va_ 接頭辞に注意する。
- すべてのマクロ名の最初の数文字では、数字または小文字の英字を使用する。errno.h を #included でインクルードする場合、E で始まるほとんどすべての名前は予約されています。

ほとんどの実装はデフォルトで標準ヘッダーに名前を追加しているため、これらの規則は一般的なガイドラインに過ぎません。

7.8 国際化

168 ページの「複数バイト文字とワイド文字」では、標準ライブラリの国際化を紹介しました。このセクションでは、影響を受けるライブラリ関数について説明し、これらの機能を利用するためにどのようにプログラムを書くべきかのガイドラインをいくつか提供します。このセクションでは、1990 ISO/IEC C 規格に関する国際化についてのみ説明します。1999 ISO/IEC C 規格には、ここで説明するものを除けば、国際化のサポートへの大幅な拡張機能はありません。

7.8.1 ロケール

C プログラムは常に、現在のロケール (国、文化、および言語に適した規約を記述した情報の集まり) を持っています。ロケールは文字列の名前を持っています。標準化されたロケール名は、"C" と "" の 2 つだけです。どのプログラムも "C" ロケールから始まります。これによって、すべてのライブラリ関数は従来どおりに動作します。"" ロケールは、各処理系がプログラムの呼び出しに最適であると推測する規約セットです。"C" と "" の動作は同じになることもあります。ほかのロケールは各処理系によって提供されます。

実用性と便宜上の目的により、ロケールはカテゴリに分類されます。プログラムは、ロケール全体を変更することも、1 つまたは複数のカテゴリを変更することもできます。一般的に各カテゴリは、ほかのカテゴリが影響を与える関数とは関係なく、複数の関数に影響を与えます。したがって、1 つのカテゴリを限られた期間一時的に変更することにも意味がある可能性があります。

7.8.2 setlocale() 関数

setlocale() 関数は、プログラムのロケールとのインタフェースです。呼び出す国の規約を使用するすべてのプログラムは、その実行パスの前のほうに、次の例のような呼び出しを配置するようにしてください。

```
#include <locale.h>
/*...*/
```

```
setlocale(LC_ALL, "");
```

LC_ALL は 1 つのカテゴリではなく、ロケール全体を指定するマクロであるため、この呼び出しによって、プログラムの現在のロケールが適切なローカルバージョンに変更されます。標準のカテゴリは次のとおりです。

LC_COLLATE	ソート情報
LC_CTYPE	文字分類情報
LC_MONETARY	通貨の出力情報
LC_NUMERIC	数値の出力情報
LC_TIME	日付と時間の出力情報

前述の任意のマクロを setlocale() への最初の引数として渡すことによって、そのカテゴリを指定できます。

setlocale() 関数は、特定のカテゴリ (または、LC_ALL) に対する現在のロケールの名前を返します。2 番目の引数がヌルポインタの場合は、照会専用として機能します。したがって次の例のようなコードを使用すると、制限された期間だけロケール (または、その一部) を変更できます。

```
#include <locale.h>
/*...*/
char *oloc;
/*...*/
oloc = setlocale(LC_category, NULL);
if (setlocale(LC_category, "new") != 0)
{
        /* use temporarily changed locale */
    (void)setlocale(LC_category, oloc);
}
```

ほとんどのプログラムではこの機能は必要ありません。

7.8.3 変更された関数

変更が適切で可能である場合、既存のライブラリ関数はロケールに依存する動作を含むように拡張されました。これらの関数は、次の 2 つのグループに分類できます。

- ctype.h ヘッダーで宣言される関数 (文字の分類と変換)
- 数値を出力可能な形式から内部的な形式に (または、その逆に) 変換する関数 (printf() や strtod() など)

すべての ctype.h 述語関数 (isdigit() と isxdigit() を除く) は、現在のロケールの LC_CTYPE カテゴリが "C" 以外の場合に、追加の文字に対してゼロでない (真の) 値を返すことができます。スペイン語ロケールでは isalpha('ñ') は真になります。同様に、文字変換関数

tolower() と toupper() は、isalpha() 関数で識別される特別な英字を適切に処理できます。ctype.h 関数は、ほとんどの場合、文字引数による索引付きテーブル検索を使用して実装されるマクロです。それらの動作は、テーブルを新しいロケールの値に再設定することで変更されます。したがって、パフォーマンスに影響はありません。

出力可能な浮動小数点値を書き込んだり解釈したりする前述の関数は、現在のロケールの LC_NUMERIC カテゴリが "C" 以外の場合に、ピリオド (.) 以外の小数点文字を使用するように変更できます。千単位区切り型文字で数値を出力可能な形式に変換するための規定はありません。出力刷可能な形式から内部的な形式に変換するときにも、実装では、"C" 以外のロケールの場合に、このような追加の形式を受け入れることが許可されています。小数点文字を使用する関数は、printf() と scanf() のグループ、atof()、および strtod() です。実装での定義を拡張できる関数は、atof()、atoi()、atol()、strtod()、strtol()、strtoul()、および scanf() のグループです。

7.8.4 新しい関数

新しい標準関数として、特定のロケールに依存する機能が追加されました。ロケール自身を制御できる setlocale() 以外にも、規格には次の新しい関数が取り込まれています。

localeconv()	数値/通貨の規約
strcoll()	2 つの文字列の照合順序
strxfrm()	照合のために文字列を変換する
strftime()	日付と時間の書式を設定する

さらに、複数バイト関数 mblen()、mbtowc()、mbstowcs()、wctomb()、および wcstombs() があります。

localeconv() 関数は、現在のロケールの LC_NUMERIC と LC_MONETARY カテゴリに適切な、書式化された数値および通貨の情報に便利な情報を含む構造体へのポインタを返します。この関数は、動作が複数のカテゴリに依存する唯一の関数です。数値の場合、構造体は、小数点文字、千単位区切り文字、および区切り文字を置くべき場所を記述します。ほかの 15 個の構造体メンバーは、通貨値の書式設定方法を記述します。

strcoll() 関数は、strcmp() 関数と似ていますが、現在のロケールの LC_COLLATE カテゴリに従って 2 つの文字列を比較するところが異なります。strxfrm() 関数は、文字列を別の文字列に変換するためにも使用できます。たとえば、変換後の 2 つの文字列を strcmp() に渡すと、変換前の 2 つの文字列を strcoll() に渡した場合に返されるものと似た順番にすることができます。

strftime() 関数は、struct tm に値を持つ sprintf() で使用される書式化と似た書式化と、さらに、現在のロケールの LC_TIME カテゴリに依存する日付と時間の書式を提供します。この

関数は、UNIX System V Release 3.2 の一部としてリリースされた `ascftime()` 関数に基づいています。

7.9 式のグループ化と評価

K&R C は、数学的に交換可能で結合可能な隣り合う演算子を含む式を再配置する権利を、括弧がある場合でもコンパイラに与えます。しかし、ISO C は、この権利をコンパイラに与えませんでした。

このセクションでは、前述の 2 つの C の定義間の違いを説明します。また、次のコードにおける式文を考えることによって、式の副作用、グループ化、および評価の間の区別を明らかにします。

```
int i, *p, f(void), g(void);
/*...*/
i = *++p + f() + g();
```

7.9.1 式の定義

式の副作用とは、メモリーへの変更と、`volatile` 修飾オブジェクトへのアクセスのことです。サンプル式の副作用は、`i` と `p` の更新と、関数 `f()` と `g()` 内に含まれる任意の副作用です。

式のグループ化とは、値をほかの値や演算子と結合させる方法です。サンプル式のグループ化は、主に加算を実行する順番です。

式の評価には、その結果の値を生成するために必要なすべてが含まれます。式を評価するためには、指定したすべての副作用が以前のシーケンスポイントから次のシーケンスポイントまでの間で発生しなければならず、指定した演算が特定のグループ化で実行されなければいけません。サンプル式の場合、`i` と `p` の更新は、直前の文からこの式文の `;` までの間で発生する必要があります。関数への呼び出しは、直前の文から戻り値が使用されるまでの間であれば、どちらが先に発生してもかまいません。特に、メモリーを更新する演算子には、演算の値が使用される前に新しい値を代入しなければならないという制約はありません。

7.9.2 K&R C の再配置の権利

サンプル式では加算が数学的に交換可能で結合可能であるため、K&R C の再配置の権利がサンプル式に適用されます。通常の括弧と実際の式のグループ化を区別するために、左右の中括弧でグループ化を示します。この式の場合、次の 3 つのグループ化が考えられます。

```
i = { {*++p + f()} + g() };
i = { *++p + {f() + g()} };
```

```
i = { {*++p + g()} + f() };
```

前述のすべてのグループ化は、K&R C の規則であれば有効です。さらに、たとえば、次のように式を書き換えた場合でも、前述のすべてのグループ化は有効です。

```
i = *++p + (f() + g());
i = (g() + *++p) + f();
```

オーバーフローによって例外が発生するか、あるいは、オーバーフローで加算と減算が逆にならないアーキテクチャー上でこの式が評価される場合、加算の 1 つがオーバーフローしたとき、前述の 3 つのグループ化の動作は異なります。

このようなアーキテクチャー上では、K&R C では、式を分割することによって強制的にグループ化するしか方法がありません。次の書き換え案はそれぞれ、前述の 3 つのグループ化を強制的に行います。

```
i = *++p; i += f(); i += g()
i = f(); i += g(); i += *++p;
i = *++p; i += g(); i += f();
```

7.9.3 ISO C の規則

ISO C では、数学的に交換可能で結合可能であるが、対象となるアーキテクチャー上では実際にそうではない演算を再配置することは許可されていません。したがって、ISO C 文法の優先度と結合規則によって、すべての式のグループ化が完全に記述されます。すべての式は、解析されるとおりにグループ化されなければいけません。前述の式は、次の方法でグループ化されます。

```
i = { {*++p + f()} + g() };
```

このコードでもなお「`f()` が `g()` よりも前に呼び出されなければならない」、あるいは、「`g()` が呼び出されるよりも前に `p` が増分されなければならない」ということはありません。

ISO C では、予想外のオーバーフローが発生しないように式を分割する必要があります。

7.9.4 括弧の使用

ISO C では、不十分な理解と不正確な表現のために、括弧の信頼性と括弧に従った評価について、間違って記述されることがしばしばあります。

ISO C 式は解析によって指定されるグループ化を持つため、括弧は、式の解析方法を制御する手段としての役割しか果たしません。式の自然な優先度と結合規則が、括弧とまったく同じ重要性を持ちます。

前述の式は、グループ化や評価に対する効果を一切変えずに、次のように記述することもできました。

```
i = (((*(++p)) + f()) + g());
```

7.9.5 *as if* 規則

K&R C の再配置規則の理由を、次にいくつか示します。

- 再配置によって、より多くの最適化の機会が生まれること (たとえば、コンパイル時の定数折り畳み)
- ほとんどのマシンにおいて、再配置によって整数型の式の結果が変わらないこと
- すべてのマシンにおいて、いくつかの演算が数学的にも演算的にも交換可能で結合可能であること

ISO C 委員会は、記述される対象アーキテクチャーに適用されるときに、再配置規則は「*as if*」規則のインスタンスになるものであると、最終的に決定しました。ISO C の「as if」規則は、有効な C プログラムの動作を変更しないかぎり、実装が必要に応じて抽象マシン記述から離れることを一般的に許可しています。

したがって、すべてのビット単位の 2 項演算子 (シフトを除く) は任意のマシンで再配置できます。これは、そのような再グループ化は確認不可能であるためです。2 の補数を使用するマシンでオーバーフローが発生しない場合は、いくつかの理由のため、乗算または加算を含む整数式は再配置できます。

したがって、C におけるこの変更は、ほとんどの C プログラマには重要な影響を与えません。

7.10 不完全な型

C の当初から内在し、C の基本的な部分であるがまだ真価を認められていない部分を正式なものとするために、ISO C 規格は「不完全な型」を導入しました。このセクションでは、不完全な型がどこで許可されるかと、なぜ便利であるかを説明します。

7.10.1 型

ISO は C の型を、関数、オブジェクト、および不完全の 3 つに区分しました。関数型の定義は明白です。オブジェクト型は、サイズが不明なオブジェクトを除く、そのほかすべてのものを示します。規格は、明示されるオブジェクトのサイズが既知でなければいけないことを指定するために、「オブジェクト型」を使用します。しかし、`void` 以外の不完全な型もオブジェクトを参照します。

不完全な型には、`void`、不特定長の配列、および不特定内容の構造体と共用体の 3 つの種類しかありません。型 `void` は、完成させることができない不完全な型であるという点でほかの 2 つとは異なります。そして、特別な関数の戻り型とパラメータ型として機能します。

7.10.2 不完全な型を完全にする

不完全な配列型を完全なものにするには、同じオブジェクトを示す同じスコープ内にある後続の宣言で、配列のサイズを指定します。同じ宣言でサイズが不明な配列 (不特定長の配列) が宣言および初期化されるとき、その配列は、宣言の終わりから初期化の終わりまでの間だけ、不完全な型になります。

不完全な構造体型または共用体型を完成させるには、同じタグの同じスコープ内にある後続の宣言で、構造体型または共用体型の内容を指定します。

7.10.3 宣言

不完全な型を使用できる宣言もありますが、完全なオブジェクト型が必要な宣言もあります。オブジェクト型を必要とする宣言は、配列要素、構造体または共用体のメンバー、および関数に局所的なオブジェクトです。ほかのすべての宣言は、不完全な型を許可します。特に、次の構造が許可されています。

- 不完全な型へのポインタ
- 不完全な型を返す関数
- 不完全な関数パラメータ型
- 不完全な型の `typedef` 名

関数の戻り型とパラメータ型は特別です。このような方法で使用される不完全な型 (`void` を除く) は、関数が宣言または呼び出されるときまでに完全にならなければいけません。`void` の戻り型は、値を返さない関数を指定します。また、`void` の単一のパラメータ型は、引数を受け入れない関数を指定します。

配列と関数のパラメータ型はポインタ型に書き換えられるため、配列のパラメータ型は外見上不完全ですが、実際には不完全ではありません。典型的な `main` の `argv` (つまり、`char *argv[]`) の宣言は、不特定長の文字ポインタの配列として、文字ポインタへのポインタとして書き換えられます。

7.10.4 式

ほとんどの式演算子では完全なオブジェクト型が必要ですが、例外が 3 つあります。単項 `&` 演算子、コンマ演算子の最初のオペランド、および `?:` 演算子の 2 番目と 3 番目のオペランドです。ポインタのオペランドを受け入れるほとんどの演算子は、ポインタ演算が要求されないかぎり、不完全な型へのポインタも許可します。この中には、単項 `*` 演算子も含まれます。

たとえば、次の式の場合、`&*p` はこの状況を利用する有効なサブ式です。

```
void *p
```

7.10.5 正当性

void を除けば、C には、不完全な型を処理する方法は、構造体や共用体への前方参照のほかには用意されていません。たとえば、2 つの構造体がお互いを指すポインタを必要とする場合、これを行う唯一の方法は、不完全な型を使用することです。

```
struct a { struct b *bp; };
struct b { struct a *ap; };
```

異なる形式のポインタや異なる種類のデータ型を持つ、強力な型依存プログラミング言語には、すべて前述のようなケースを処理するための方法が用意されています。

7.10.6 例: 不完全な型

不完全な構造体型や共用体型には typedef 名の定義が役立ちます。データ構造が複雑な (お互いへのポインタを多数持つような) 場合は、構造体への typedef のリストを前方に (中心となるヘッダーに) 指定することによって、宣言が簡単になります。

```
typedef struct item_tag Item;
typedef union note_tag Note;
typedef struct list_tag List;
.  .  .
struct item_tag { .  .  .  };
.  .  .
struct list_tag {
    struct list_tag {
};
```

さらに、内容がプログラムの残りで使用できてはいけない構造体や共用体に対しては、内容なしのタグをヘッダーに宣言できます。プログラムのほかの部分は、何の問題もなく不完全な構造体や共用体へのポインタを、そのメンバーを使用しようとしない限り使用できます。

不特定長の外部配列は不完全な型として頻繁に使用されます。一般的に、配列の内容を使用するために、配列の大きさを知る必要はありません。

7.11 互換型と複合型

K&R C では (ISO C の場合はさらに顕著ですが)、同じ要素を参照する 2 つの宣言を同じでないものにできます。ISO C は、このような「ある程度似ている」型を示すために、「互換型」という用語を使用します。このセクションでは、この互換型と、2 つの互換型を結合した結果である「複合型」を説明します。

7.11.1 複数の宣言

C プログラムが、各オブジェクトまたは関数の宣言を一度だけ許可されているとしたら、互換型は必要ありませんでした。しかし、同じ要素を参照する複数の宣言を許可するリンク、関数のプロトタイプ、および分割コンパイルには、このような機能が必要です。複数の翻訳単位 (ソースファイル) 間では、型の互換性の規則は 1 つの翻訳単位内のものとは異なります。

7.11.2 分割コンパイル間の互換性

各コンパイルはおそらく別々のソースファイルを参照するため、分割コンパイル間の互換型に対して、ほとんどの規則は事実上次のように構造化されています。

- 一致するスカラー (整数、浮動小数点、およびポインタ) 型は、同じソースファイル内にある場合のように、互換性を持たなければならない。
- 一致する構造体、共用体、および `enum` のメンバー数は同じでなければならない。一致する各メンバーは (分割コンパイルという意味で) 互換型を持たなければならない (ビットフィールド幅も含む)。
- 一致する構造体のメンバーの順番は、同じでなければならない。共用体と `enum` 型のメンバーの順番は問題にならない。
- 一致する `enum` 型のメンバーの値は、同じでなければならない。

  さらに、構造体、共用体、および `enum` 型のメンバーの名前 (名前なしメンバーに名前がないということ) も一致しなければいけませんが、それぞれのタグは必ずしも一致する必要はありません。

7.11.3 単一のコンパイルでの互換性

同じスコープ内の 2 つの宣言が同じオブジェクトまたは関数を記述するとき、この 2 つの宣言は互換型を指定しなければいけません。これら 2 つの型は次に、最初の 2 つと互換性を持つ、1 つの複合型に結合されます。

互換型は再帰的に定義されます。一番下は型指定子のキーワードです。これらの規則は、`unsigned short` は `unsigned short int` と同じであり、型指定子なしの型は `int` を持つものと同じであることを示します。ほかのすべての型は、派生元の型が互換性を持つときだけ、互換性を持ちます。たとえば、修飾子 `const` と `volatile` が同じであり、修飾されていない基底型が互換性を持つ場合、2 つの修飾型は互換性を持ちます。

7.11.4 互換ポインタ型

2 つのポインタ型が互換性を持つためには、この 2 つのポインタが指す型が互換性を持ち、2 つのポインタが同じように修飾されていなければいけません。ポインタの修飾子は * のあとに

指定されることを思い出してください。次の 2 つの宣言は、同じ型 int への異なる修飾子を持つ 2 つのポインタを宣言しています。

```
int *const cpi;
int *volatile vpi;
```

7.11.5 互換配列型

2 つの配列型が互換性を持つためには、この 2 つの配列の要素の型が互換性を持たなければいけません。両方の配列の型のサイズが指定されている場合は、両方のサイズも一致しなければいけません。つまり、不完全な配列型 (178 ページの「不完全な型」を参照) は、ほかの不完全な配列型とも、サイズが指定されている配列型とも互換性を持ちます。

7.11.6 互換関数型

関数が互換性を持つためには、次の規則に従います:

- 2 つの関数型が互換性を持つためには、その戻り型が互換性を持たなければいけません。関数型のいずれかまたはその両方がプロトタイプを持つ場合:規則はより複雑になります。
- プロトタイプを持つ 2 つの関数型が互換性を持つためには、(省略記号 (...) も含む) パラメータの数が同じで、対応するパラメータもパラメータ互換でなければいけません。
- 古い形式の関数定義がプロトタイプを持つ関数型と互換性を持つためには、プロトタイプの最後のパラメータが省略記号 (...) であってはいけません。プロトタイプの各パラメータは、デフォルトの引数拡張の適用後、対応する古い形式のパラメータとパラメータ互換でなければいけません。
- 古い形式の関数宣言 (定義ではない) が、プロトタイプを持つ関数型と互換性を持つためには、プロトタイプの最後のパラメータが省略記号 (...) であってはいけません。プロトタイプのすべてのパラメータは、デフォルトの引数拡張で影響を受けない型でなければいけません。
- 2 つの型がパラメータ互換になるためには、これら 2 つの型は、1 番上に修飾子があればそれが削除されたあと、そして、関数型または配列型が適切なポインタ型に変換されたあとに、互換性を持たなければいけません。

7.11.7 特別な場合

signed int は int と同じように動作しますが、ビットフィールドは例外の可能性があり、通常の int が unsigned 動作の量を示すことがあります。

列挙型は同じ整数型と互換性を持つ必要があります。移植可能なプログラムの場合、これは、列挙型が別の型であることを意味します。一般的に、ISO C 規格はこのように列挙型を扱います。

7.11.8 複合型

2 つの互換型から 1 つの複合型への作成も再帰的に定義されます。不完全な配列型や古い形式の関数型を使用することにより、互換型をお互いに異なるようにできます。同様に、複合型をもっとも簡単に記述するには、元の両方の型 (元の型のすべての使用可能な配列サイズとパラメータリストも含む) と型の互換性を持たせればよいでしょう。

♦ ♦ ♦ 第 8 章

8 64 ビット環境に対応するアプリケーションへの変換

この章では、32 ビットまたは 64 ビットのコンパイル環境用のコードを作成するために必要な情報について説明します。

32 ビット、64 ビット両方のコンパイル環境で動作するコードを作成または変更する場合、次の 2 つの基本的な問題に直面します。

- 異なるデータ型モデル間でのデータ型の統一
- 異なるデータ型モデルを使用するアプリケーション間の相互動作

通常、複数のソースツリーを保守するより、`#ifdef` をできるだけ少なくした 1 つのソースコードを保守するほうが便利です。このため、この章では、32 ビットと 64 ビット両方のコンパイラ環境で正しく機能するコードを作成する際のガイドラインを示します。場合によっては、現在のコードを再コンパイルして、64 ビットライブラリに再リンクすればよいだけのこともあります。しかし、コードの修正が必要になる場合もあり得るため、この章では、こうした変換をより簡単に行うためのツールと参考情報について説明します。

8.1 データ型モデルの相違点

32 ビットと 64 ビットコンパイル環境の最大の違いは、データ型モデルにあります。

32 ビットアプリケーション用の C のデータ型モデルは ILP32 モデルです。この名前は、integer、long、pointer が 32 ビットデータ型であることから名付けられています。long と pointer が 64 ビットの大きさになったことから名付けられた LP64 データ型モデルは、業界の関連企業から構成されるコンソーシアムが作成したものです。残りの C データ型 `int`、`long long`、`short`、および `char` はどちらのデータ型モデルでも同じです。

C の整数型間の標準の関係は、次に示すようにデータ型モデルに関係なく有効です。

```
sizeof (char) <= sizeof (short) <= sizeof (int) <= sizeof (long)
```

ILP32 と LP64 データ型モデルの基本的な C のデータ型と対応するサイズ (単位: ビット) は、次の表に示すとおりです。

表 19 ILP32 と LP64 のデータ型のサイズ

C データ型	ILP32	LP64
char	8	8
short	16	16
int	32	32
long	32	64
long long	64	64
pointer	32	64
enum	32	32
float	32	32
double	64	64
long double	128	128

現在の 32 ビットアプリケーションでは通常、integer、pointer、および long は同じサイズとみなされます。ただし、LP64 データ型モデルでは long と pointer のサイズが変更されており、ILP32 から LP64 への変換で多くの問題の原因となる可能性があります。

また、宣言とキャストは非常に重要です。型が変化すると、式がどのように評価されるかが影響を受ける可能性があります。データ型のサイズが変わると、標準 C 変換規則の処理が影響を受けます。意図したことを正しく示すには、定数の型を明示的に宣言してください。式で型変換を使用して、意図したとおりに式が評価されるようにすることもできます。この方法は、意図したことを示す上で明示的な型変換が欠かせない符号拡張部で特に重要です。

8.2 単一ソースコードの実現

このセクションでは、32 ビットと 64 ビットの両方でコンパイル可能な単一ソースコードの作成に使用できるリソースをいくつか紹介します。

8.2.1 派生型

32 ビットと 64 ビットの両方のコンパイル環境でコードを安全にするためにシステム派生型を使用することは、良いプログラミング方法です。派生データ型を使用するときに、データ型モデルの変更または移植のためにはシステム派生型だけを変更する必要があります。

システムインクルードファイルの <sys/types.h> および <inttypes.h> には、32 ビットと 64 ビットのどちらにも安全なアプリケーションの作成に役立つ定数、マクロ、派生型が含まれています。

8.2.1.1 <sys/types.h>

アプリケーションのソースファイルに <sys/types.h> をインクルードして、_LP64 および _ILP32 の定義を使用できるようにしてください。このヘッダーには、必要に応じて使用される基本派生型もいくつか含まれています。特に次は大切です。

- clock_t クロックの刻み数でシステム時間を表します。
- dev_t デバイス番号に使用されます。
- off_t ファイルのサイズとオフセットに使用されます。
- ptrdiff_t 2 つのポインタの減算結果用の符号付き整数型です。
- size_t メモリー上のオブジェクトのサイズをバイト数で表します。
- ssize_t バイト数あるいはエラー発生通知を返す関数によって使用されます。
- time_t 秒数で時間をカウントします。

これらの派生型はすべて、ILP32 コンパイル環境では 32 ビット量のままですが、LP64 コンパイル環境では、64 ビット量になります。

8.2.1.2 <inttypes.h>

<inttypes.h> インクルードファイルには、コンパイル環境に関係なく、明示的にサイズ指定されたデータ項目との互換性を持たせるのに役立つ定数、マクロ、派生型が含まれています。このファイルには、8、16、32、64 ビットオブジェクトを操作するための仕組みも含まれています。<inttypes.h> に含まれることが議論されている基本機能としては、次のものがあります。

- 固定幅の整数型。
- uintptr_t などの便利な型
- 定数マクロ
- 制限
- 書式文字列マクロ

以降のセクションで、<inttypes.h> のこれらの基本機能について詳しく説明します。

固定幅の整数型

<inttypes.h> が提供する固定幅の整数型には、int8_t、int16_t、int32_t、int64_t などの符号付整数型と、uint8_t、uint16_t、uint32_t、uint64_t などの符号なし整数型が含まれます。

指定数のビットを保持できる最小サイズの整数型として定義されている派生型には、int_least8_t、…、int_least64_t、uint_least8_t、…、uint_least64_t が含まれます。

ループカウンタやファイル記述子などの演算に int または unsigned int を使用することは安全です。配列インデックスに long を使用することも安全です。しかし、これらの固定幅型はむ

やみに使用しないでください。固定幅の型は、次の項目の明示的なバイナリ表現に使用してください。

- ディスク上のデータ
- データ回線上のデータ
- ハードウェアレジスタ
- バイナリのインタフェース仕様
- バイナリのデータ構造体

unintptr_t などの便利な型

<inttypes.h> ファイルには、ポインタを保持するのに十分な大きさの符号付き整数型と符号なし整数型が含まれています。これらは intptr_t および uintptr_t として指定されます。また、<inttypes.h> は符号付きと符号なし整数型の中で最長 (ビット) の整数型である intmax_t と uintmax_t も提供します。

uintptr_t 型は、unsigned long などの基本型ではなく、ポインタ用の整数型として使用してください。ILP32 と LP64 の両方のデータ型モデルで unsigned long がポインタと同じサイズであるとしても、uintptr_t を使用することは、データ型モデルが変わった場合に、uintptr_t の定義だけが影響を受けることを意味します。この方法は、コードをほかの多くのシステムに移植可能にし、意図を C で表現するためのより明確な方法でもあります。

intptr_t および uintptr_t 型は、アドレス演算でポインタの型変換を行うときに大変役立ちます。この目的には、long や符号なし long ではなく、intptr_t と uintptr_t 型を使用してください。

定数マクロ

定数のサイズと符号の指定には、INT8_C(c) … INT64_C(c)、UINT8_C(c) … UINT64_C(c) マクロを使用してください。基本的に、これらのマクロは、必要に応じて定数の末尾に l、ul、ll、ull という文字列を追加します。たとえば INT64_C(1) は、ILP32 では定数 1 に ll、LP 64 では l を付加します。

定数を最大型にするときは、INTMAX_C(c) と UINTMAX_C(c) を使用してください。これらのマクロは、190 ページの「LP64 データ型モデルへの変換」で説明している定数型を指定する際に大変役立ちます。

制限

<inttypes.h> で定義されている上下制限は、いろいろな整数型の最小値と最大値を指示する定数です。これらの制限には、INT8_MIN … INT64_MIN、INT8_MAX … INT64_MAX などの各固定幅型とそれらに対応する符合なし型に対する、最小値と最大値が含まれます。

<inttypes.h> ファイルは、最小サイズのそれぞれの型に対する最小値と最大値も提供します。これらの型には、INT_LEAST8_MIN … INT_LEAST64_MIN、INT_LEAST8_MAX … INT_LEAST64_MAX 型やそれらに対応する符号なし型が含まれます。

最後に、<inttypes.h> は、サポートされる最大整数型の最小値と最大値を定義します。これらの型には、INTMAX_MIN と INTMAX_MAX、およびそれらに対応する符号なし型が含まれます。

書式文字列マクロ

<inttypes.h> ファイルには、printf(3C) および scanf(3C) 書式指定子を指定するマクロが含まれています。基本的にこれらのマクロは、引数のビット数がマクロ名に組み込まれていることを条件に、書式指定子の前に l または ll を付加して、引数が long または long long のどちらであるかを示します。

printf(3C) 用の一部のマクロは、次の例に示すように、最小整数型と最大整数型の両方を 10 進数、8 進数、符号なし、および 16 進数の書式で出力します。

```
int64_t i;
printf("i =%" PRIx64 "\n", i);
```

同様に、scanf(3C) 用のマクロは、最小整数型と最大整数型の両方を 10 進数、8 進数、符号なし、および 16 進数の書式で読み取ります。

```
uint64_t u;
scanf("%" SCNu64 "\n", &u);
```

これらのマクロはむやみに使用しないでください。187 ページの「固定幅の整数型」で説明しているように、固定幅型に対して使用するのがもっとも適しています。

8.2.2 lint によるチェック

lint プログラムの -errchk オプションは、64 ビットへの移植でエラーになる可能性のある問題を検出します。また、より厳密な意味検査を追加で実行するようコンパイラに指示する cc -v を指定することもできます。-v オプションではまた、指定されたファイルに対する lint に似た特定の検査も可能になります。

コードを拡張して 64 ビット対応にするときは、Oracle Solaris オペレーティングシステムに存在するヘッダーファイルを使用してください。これらのファイルが、64 ビットコンパイル環境用の派生型とデータ構造体の正しい定義を持っているためです。

32 ビットおよび 64 ビットの両方のコンパイル環境用に作成したコードの検査には、lint を使用してください。LP64 の警告を生成するには、-errchk=longptr64 オプションを指定します。また、ロング整数およびポインタのサイズが 64 ビットであり、標準整数のサイズが 32 ビットである環境への移植性を検査する -errchk=longptr64 フラグも使用します。-

errchk=longptr64 フラグは、明示的なキャストが使用されている場合でも、ポインタ式とロング整数式の標準整数への代入を検査します。

通常の ISO C 値保持規則によって符号付き整数値の符号の符号なし整数型の式への拡張が許可されるコードを検索するには、-errchk=longptr64,signext オプションを使用します。

Oracle Solaris の 64 ビットコンパイル環境でのみ実行しようとしているコードを検査する場合は、lint の -m64 オプションを使用します。

lint の警告は、問題のコードの行番号、問題について説明するメッセージ、ポインタが関係しているかどうかの兆候を示します。また、関係するデータ型のサイズも示します。ポインタが関係していること、データ型のサイズがわかれば、64 ビットの問題を特定し、32 ビットとそれより小さい型の間に以前から存在している問題を避けることできます。

ただし、64 ビット環境でエラーになる可能性のある問題について警告を出すといっても、lint によってすべての問題が検出できるわけではありません。多くの場合、意図したとおりであり、正しいコードであっても、警告は出されます。

行の前に "NOTE(LINTED("<optional message">))" の形式のコメントを挿入すると、特定の行に対する警告を抑止できます。このコメント指令は、キャストや代入などの特定のコード行を lint に無視させるときに役立ちます。ただし、現実には存在する問題が隠される可能性があるため、"NOTE(LINTED("<optional message">))" コメントを使用するときは、細心の注意を払ってください。NOTE を使用する場合は、note.h をインクルードします。詳細は、lint のマニュアルページを参照してください。

8.3 LP64 データ型モデルへの変換

この節では実際の例を使用して、コードを変換したときに発生する可能性のある一般的な問題をいくつか紹介します。対応する lint の警告がある場合は、その警告も示します。

8.3.1 整数とポインタのサイズの変更

ILP32 コンパイル環境では整数とポインタは同じサイズであるため、一部のコードはこの前提に依存しています。アドレス演算では、ポインタはしばしば int または unsigned int に型変換されます。ILP32 と LP64 データ型モデルで、long とポインタが同じサイズであるため、代わりにポインタを long に型変換してください。明示的に unsigned long を使用するのではなく、代わりに uintptr_t を使用してください。意図がより正確に表現され、コードの移植性が向上し、将来の変更に容易に対応できます。次の例を考えてみましょう。

```
char *p;
p = (char *) ((int)p & PAGEOFFSET);
%
warning: conversion of pointer loses bits
```

変更後のバージョン:

```
char *p;
p = (char *) ((uintptr_t)p & PAGEOFFSET);
```

8.3.2 整数とロング整数のサイズの変更

ILP32 データ型モデルでは実際には整数とロング整数が区別されないため、ほとんどの場合、既存のコードでは区別なしに整数とロング整数が使用されています。整数とロング整数が区別なしに使用されているコードは、修正して ILP32 と LP64 両方のデータ型モデルの条件に準拠するようにしてください。ILP32 データ型モデルでは integer と long はともに 32 ビットですが、LP64 データ型モデルでは `long` は 64 ビットです。

次の例を考えてみましょう。

```
int waiting;
long w_io;
long w_swap;
...
waiting = w_io + w_swap;

%
warning: assignment of 64-bit integer to 32-bit integer
```

さらに、`long` または `unsigned long` の大きな配列は、`int` または `unsigned int` の配列と比較して、LP64 データ型モデルでパフォーマンスを顕著に低下させる可能性があります。`long` または `unsigned long` の大きな配列は、キャッシュミスの大幅な増加や消費メモリーの増加の原因になることもあります。

このため、アプリケーション目的のために `int` が long と同程度に機能する場合は、`long` ではなく `int` を使用してください。

この引数は、ポインタの配列の代わりに `int` の配列を使用する場合にも適用されます。一部の C アプリケーションは、LP64 データ型モデルへの変換後に、深刻なパフォーマンスの低下を招きます。これは、それらが多数の大きなポインタ型配列に依存しているためです。

8.3.3 符号拡張

型の変換と拡張規則はいくぶん曖昧ですから、64 ビットコンパイル環境への移行で、符号拡張はよく問題になります。符号拡張の問題を避けるには、明示的な型変換を使用して、意図した結果を得られるようにしてください。

符号拡張が発生する理由を理解するために、ISO C の変換規則を考えます。32 ビットと 64 ビットのコンパイル環境間での符号拡張に関するほとんどの問題の原因と考えられる変換規則は、次の操作中に効力を生じます。

- 整数の拡張

  整数を必要とする式では、符号の有無に関係なく、char、short、enumerated type、ビットフィールドを使用することができます。

  整数が元の型が取り得る値をすべて保持できる場合、値は整数に変換され、それ以外の場合は、符号なし整数に変換されます。
- 符号付きと符号なし整数間の変換

  負符号付きの整数を同じまたは大きい型の符号なし整数に拡張する場合は、最初に大きな型符号付き整数に拡張され、次に符号なし値に変換されます。

次のコードを 64 ビットプログラムとしてコンパイルすると、addr と a.base の両方が符号なしの型であっても、addr 変数は符号拡張されます。

```
%cat test.c
struct foo {
unsigned int base:19, rehash:13;
};

main(int argc, char *argv[])
{
  struct foo a;
  unsigned long addr;

  a.base = 0x40000;
  addr = a.base << 13;  /* Sign extension here! */
  printf("addr 0x%lx\n", addr);

 addr = (unsigned int)(a.base << 13); /* No sign extension here! */
 printf("addr 0x%lx\n", addr);
}
```

ここで符号拡張が起きるのは、次のように変換規則が適用されるためです。

- a.base は、整数拡張規則により符号なし int から int に変換されます。つまり、式の a.base << 13 は int 型ですが、符号拡張はまだ発生していません。
- 式の a.base << 13 は int 型ですが、符号付きと符号なし整数拡張規則により、addr に代入する前に long、次に符号なし long へと変換されます。符号拡張は、int から long に変換したときに発生します。

```
% cc -o test64 -m64 test.c
% ./test64
addr 0xffffffff80000000
addr 0x80000000
%
```

同じ例を 32 ビットプログラムとしてコンパイルすると、符号拡張はまったく表示されません。

```
cc -o test -m32 test.c
%test

addr 0x80000000
```

```
addr 0x80000000
```

変換規則の詳細については、ANSI/ISO C 規格の仕様書を参照してください。この規格には通常の演算変換や整数定数に関する有用な規則も規定されています。

8.3.4 整数の代わりのポインタ演算

ポインタ演算が常にデータ型モデルから独立しているのに対し、整数は独立していないことがあるため、通常は整数を使用するより、ポインタ演算を使用する方がよいでしょう。また、通常、ポインタ演算を使用することによって、コードを簡単にすることもできます。次の例を考えてみましょう。

```
int *end;
int *p;
p = malloc(4 * NUM_ELEMENTS);
end = (int *)((unsigned int)p + 4 * NUM_ELEMENTS);

%
warning: conversion of pointer loses bits
```

変更後のバージョン:

```
int *end;
int *p;
p = malloc(sizeof (*p) * NUM_ELEMENTS);
end = p + NUM_ELEMENTS;
```

8.3.5 構造体

アプリケーション内の内部データ構造に穴がないかどうかを検査します。境界整列条件を満たすには、構造体のフィールドとフィールドの間にパディングをします。この臨時パディングは、`long` またはポインタ型のフィールドが LP64 データ型モデル用に 64 ビットになったときに適用されます。SPARC プラットフォームの 64 ビットコンパイル環境では、あらゆる種類の構造体が、その中の最大量のサイズに合わせて整列されます。構造体を整列し直すときは、`long` およびおよびポインタ型フィールドを構造体の先頭に移動するという簡単な規則に従ってください。次の例を考えてみましょう。

```
struct bar {
   int i;
   long j;
   int k;
   char *p;
};   /* sizeof (struct bar) = 32 */
```

次の例は、同じ構造体を示しています。`long` およびポインタデータ型を構造体の先頭で定義しています。

```
struct bar {
```

```
  char *p;
  long j;
  int i;
  int k;
};   /* sizeof (struct bar) = 24 */
```

8.3.6 共用体

ILP32 と LP64 データ型モデルの間では、共用体のフィールドのサイズが変わる可能性があるため、共用体は必ず検査してください。次の例を考えてみましょう。

```
typedef union {
   double _d;
   long _l[2];
} llx_t;
```

変更後のバージョン:

```
typedef union {
   double _d;
   int _l[2];
} llx_t;
```

8.3.7 型定数

精度が足りないと、一部の定数式でデータが失われることがあります。定数式でデータ型を指定するときは明示的に行なってください。u、U、l、L のいくつかを組み合わせて、すべての整定数の型を指定してください。型変換を使用して、定数式の型を指定することもできます。次の例を考えてみましょう。

```
int i = 32;
long j = 1 << i; /* j will get 0 because RHS is integer */
                              /* expression */
```

変更後のバージョン:

```
int i = 32;
long j = 1L << i;
```

8.3.8 暗黙の宣言に対する注意

`-std=c90` または `-xc99=none` を使用する場合、C コンパイラは、モジュールで使用されていて、外部で定義または宣言されてない関数や変数をすべて整数とみなします。このようにして使用される `long` およびポインタ型のデータはすべて、コンパイラの暗黙の整数宣言によって切り捨てられます。C モジュールではなく、ヘッダーに関数または変数のための適切な `extern` 宣言を

置いてください。そして、その関数または変数を使用する C モジュールにヘッダーをインクルードしてください。関数または変数がシステムヘッダーによって定義されている場合でも、コードに正しいヘッダーをインクルードする必要があります。次の例を考えてみましょう。

```
int
main(int argc, char *argv[])
{
  char *name = getlogin();
  printf("login = %s\n", name);
  return (0);
}

%
warning: improper pointer/integer combination: op "="
warning: cast to pointer from 32-bit integer
implicitly declared to return int
getlogin        printf
```

次の修正版には正しいヘッダーが含まれています。

```
#include <unistd.h>
#include <stdio.h>

int
main(int argc, char *argv[])
{
  char *name = getlogin();
  (void) printf("login = %s\n", name);
  return (0);
}
```

8.3.9 sizeof( ) は符号なし long

LP64 データ型モデルでは、sizeof() は有効な型 unsigned long を持っています。ときには sizeof() は、int 型の引数を待つ関数に渡されたり、整数に代入あるいは型変換されたりします。そうした場合は、切り捨てによってデータが失われることがあります。

```
long a[50];
unsigned char size = sizeof (a);

%
warning: 64-bit constant truncated to 8 bits by assignment
warning: initializer does not fit or is out of range: 0x190
```

8.3.10 型変換で意図を明確にする

変換規則により、関係式は扱いにくいことがあります。必要に応じて型変換を追加することによって、式の評価方法を明示するようにしてください。

8.3.11 書式文字列の変換操作を検査する

printf(3C)、sprintf(3C)、scanf(3C)、および sscanf(3C) の書式文字列が long またはポインタ引数に対応できることを確認します。pointer 引数については、32 ビットおよび 64 ビット両方のコンパイル環境で機能するように、書式文字列で与えられる変換操作は %p であるべきです。次の例を考えてみましょう。

```
char *buf;
struct dev_info *devi;
...
(void) sprintf(buf, "di%x", (void *)devi);

%
warning: function argument (number) type inconsistent with format
sprintf (arg 3)     void *: (format) int
```

変更後のバージョン:

```
char *buf;
struct dev_info *devi;
...
(void) sprintf(buf, "di%p", (void *)devi);
```

long 引数の場合は、書式文字列内の変換操作文字の前に long のサイズ指定 (l) を付加するようにしてください。また、buf の指し示す記憶場所が 16 桁を保持できる大きさであるか確認してください。

```
size_t nbytes;
u_long align, addr, raddr, alloc;
printf("kalloca:%d%%%d from heap got%x.%x returns%x\n",
nbytes, align, (int)raddr, (int)(raddr + alloc), (int)addr);

%
warning: cast of 64-bit integer to 32-bit integer
warning: cast of 64-bit integer to 32-bit integer
warning: cast of 64-bit integer to 32-bit integer
```

変更後のバージョン:

```
size_t nbytes;
u_long align, addr, raddr, alloc;
printf("kalloca:%lu%%%lu from heap got%lx.%lx returns%lx\n",
nbytes, align, raddr, raddr + alloc, addr);
```

8.4 変換に関するその他の注意事項

この節では、アプリケーションを完全な 64 ビットプログラムに変換するときに発生する問題を取り上げます。

8.4.1 注: サイズが大きくなった派生型

いくつかの派生型は、64 ビットアプリケーションコンパイル環境で 64 ビット量を表すようになりました。この変更が 32 ビットアプリケーションに影響することはありませんが、これらの型で表されるデータを消費またはエクスポートする 64 ビットアプリケーションは、評価し直す必要があります。たとえば、utmp(4) または utmpx(4) ファイルを直接操作するアプリケーションでは、これらのファイルに直接アクセスを試みないでください。64 ビットアプリケーション環境での正しい操作のためには、getutxent (3C) および関連する関数ファミリを代わりに使用します。

8.4.2 変更の副作用の検査

ある場所で型を変更したために、別のコード部分で予想外の 64 ビット変換が発生することがあります。たとえば、それまで int を返していて、現在は ssize_t を返す ようになった関数のすべての呼び出し元を検査してください。

8.4.3 long のリテラル使用の効果持続の確認

long と定義された変数は、ILP32 データ型モデルでは 32 ビット、LP64 データ型モデルでは 64 ビットです。可能な場合は、変数を定義し直し、移植性に優れた派生型を使用することによって問題を回避してください。

この問題に関連して、LP64 データ型モデルでは、いくつかの派生型が変更されています。たとえば、pid_t は 32 ビット環境では long のままですが、64 ビット環境では pid_t は int です。

8.4.4 明示的な 32 ビットと 64 ビットプロトタイプに対する #ifdef の使用

場合によっては、32 ビットや 64 ビット専用のインタフェースを使用しなければならないことがあります。これらのバージョンは、ヘッダー中で _LP64 または _ILP32 機能テストマクロを指定することによって区別できます。同様に、32 ビットまた 64 ビット環境で動作するコードでは、コンパイルモードに従って適切な #ifdefs を使用する必要があります。

8.4.5 呼び出し規則の変更

構造体を値によって渡し、64 ビット環境用にコードをコンパイルした場合、その構造体は、コピーへのポインタとしてではなく、レジスタ中で渡されます (構造体がそのようにできるほどの

大きさの場合)。C コードと手書きのアセンブリコード間で構造体を渡そうとすると、この処理によって問題が起きる可能性があります。

浮動小数点パラメータも同様に機能します。値で渡される一部の浮動小数点値は浮動小数点レジスタ中で渡されます。

8.4.6 アルゴリズムの変更

64 ビット環境で安全なコードを作成したら、コードを見直して、アルゴリズムとデータ構造体が正しく機能することを確認してください。データ構造体のデータ型が大きいほど、使用する空間が増えることがあります。コードのパフォーマンスも影響を受けるかもしれません。こうしたことに注意し、必要に応じてコードを修正してください。

8.5 変換前の確認事項

コードを 64 ビットに変換するにあたっては次の事項を確認してください。

- すべてのデータ構造体とインタフェースを見直して、64 ビット環境でも問題がないことを確認します。
- コードに `<inttypes.h>` をインクルードして、多数の基本派生型とともに `_ILP32` または `_LP64` の定義を提供します。システムプログラムの場合は、`_ILP32` または `_LP64` の定義を取得するために `<sys/types.h>` (または少なくとも `<sys/isa_defs.h>`) をインクルードします。
- スコープが局所ではない関数プロトタイプと外部宣言はヘッダーに移動し、コード中にヘッダーをインクルードします。
- `-m64`、`-errchk=longptr64`、および `signext` オプションを使用して `lint` を実行します。1 つ 1 つすべての警告に目を通してください。必ずしもすべての警告について、コードの変更が必要になるわけではありません。変更によっては、32 ビットと 64 ビットモードの両方で `lint` を再度実行してください。
- アプリケーションが 64 ビットとしてのみ提供されている場合を除いて、32 ビットと 64 ビット の両方でコードをコンパイルしてください。
- 64 ビットオペレーティングシステム上で 32 ビットバージョンと 64 ビットバージョンを実行することによって、アプリケーションをテストします。

♦ ♦ ♦ 第 9 章

9 cscope: 対話的な C プログラムの検査

cscope は、C、lex、または yacc ソースファイル内のコードの特定の要素を探し出す対話型プログラムです。cscope を使用すると、一般的なエディタで行うよりも効率的にソースファイルを検索および編集できます。cscope には、関数呼び出し (関数がいつ呼び出され、いつその関数を実行するか) に加えて、C 言語の識別子とキーワードをサポートする利点があります。

この章では、このリリースで提供される cscope ブラウザについての情報を示します。

注記 - cscope プログラムは、まだ 1999 ISO/IEC C 規格用に作成されたコードを理解するように更新されていません。たとえば、1999 ISO/IEC C 規格で導入された新しいキーワードを認識しません。

9.1 cscope プロセス

cscope は、一連の C、lex、yacc のソースファイルに対して呼び出されると、これらのファイル内の関数、関数呼び出し、マクロ、変数、プリプロセッサシンボルのシンボル相互参照表を作成します。次に作成した表を検索して、ユーザーが指定したシンボルの位置を探し出します。最初に、実行する検索のタイプをメニューから選択します。たとえば、cscope で特定の関数を呼び出しているすべての関数を検索することがあります。

検索が終了すると、cscope は結果を表示します。リストの各エントリ行には、cscope によって指定したコードが見つかったファイル名、行番号、その行のテキストが含まれます。リストには、指定された関数を呼び出している関数の名前を含めることもできます。次に、別の検索を要求するか、またはリストに表示された行をエディタで調べるかのオプションがあります。後者の場合、cscope はその行があるファイルをエディタで読み込んで、その行にカーソルを移動します。ここで、コードをコンテキストで表示したり、ほかのファイルと同じようにファイルを編集したりできます。エディタを終了したら、メニューに戻って新しい検索を始めます。

従う手順は手許のタスクによって変わってくるので、1 通りの手順だけが cscope の使用に対応しているのではありません。高度な使用例については、次セクションで説明する、すべてのコードを学習しなくてもプログラム内のバグを特定できる方法を示す cscope セッションを参照してください。

9.2 基本的な使用方法

たとえば、プログラム prog の保守作業を担当しているとします。「out of storage」というエラーメッセージが表示されることがあると想定します。これを解決するには、まず cscope を使用してコード内のメッセージを発行している場所を探し出さなければいけません。この場合、次の手順で実行します。

9.2.1 ステップ 1: 環境設定

cscope は、端末情報ユーティリティー (terminfo) データベースにリストされている端末だけで使用可能な、スクリーン指向のツールです。cscope が、TERM 環境変数の値が terminfo データベースに存在することを確認できるように、TERM 環境変数を自分の端末タイプに設定してあることを確認してください。まだ設定していない場合は、次のようにして TERM に値を設定し、それをシェルに伝えます。

B シェルの場合は次のように入力します。

```
$ TERM=term_name; export TERM
```

C シェルの場合は次のように入力します。

```
% setenv TERM term_name
```

次に、EDITOR 環境変数に値を設定します。デフォルトでは、cscope は vi エディタを呼び出します。(本章の例も vi を使用して説明しています)。vi を使用しない場合は、EDITOR 環境変数を任意のエディタ名に変更して、EDITOR をエクスポートします。

B シェルの場合は次のように入力します。

```
$ EDITOR=emacs; export EDITOR
```

C シェルの場合は次のように入力します。

```
% setenv EDITOR emacs
```

cscope とエディタ間のインタフェースを設定しなければいけません。詳細については、213 ページの「エディタのコマンド行構文」を参照してください。

cscope を表示するためだけに使用する (編集は使用しない) 場合は、VIEWER 環境編集を pg に設定して VIEWER をエクスポートします。cscope は vi の代わりに pg を起動します。

環境変数 VPATH には、ソースファイルの検索対象ディレクトリを指定します。209 ページの「ビューパス」を参照してください。

9.2.2 ステップ 2: cscope プログラムの起動

デフォルトでは、cscope は現在のディレクトリ内にあるすべての C、lex、および yacc のソースファイルのシンボル相互参照表、および現在のディレクトリまたは標準位置内にあるすべてのインクルードヘッダーファイルのシンボル相互参照表を作成します。したがって、表示するプログラムのすべてのソースファイルが現ディレクトリにあり、かつそのヘッダーファイルが現ディレクトリまたは標準位置にある場合は、cscope を引数なしで起動します。

```
% cscope
```

特定のソースファイルを表示する場合は、そのファイルの名前を引数にして cscope を起動します。

```
% cscope file1.c file2.c file3.h
```

cscope のほかの起動方法については、207 ページの「コマンド行オプション」を参照してください。

プログラムを表示するため、最初に cscope が使用されるときにシンボル相互参照表が作成されます。デフォルトでは、作成されたシンボル相互参照表は現ディレクトリ内の cscope.out ファイルに格納されます。そのあと cscope を再び起動すると、前回と比較してソースファイルが修正されていたとき、またはソースファイルのリストが異なるときだけ相互参照表が作成し直されます。相互参照表をふたたび作成するときには、変更されていないファイルのデータは前回の相互参照表からコピーされます。これによって、最初の作成時より作成速度が速くなり、起動時のスタートアップ時間も短くなります。

9.2.3 ステップ 3: コード位置の確定

本セクションの最初で述べた本来のタスクに戻り、「out of storage」のエラーメッセージが出力される原因となっている問題を確定します。cscope が起動され、相互参照表が作成されました。画面には、cscope のタスクメニューが表示されます。

cscope のタスクメニュー

```
% cscope

cscope     Press the ? key for help


Find this C symbol:
Find this global definition:
Find functions called by this function:
Find functions calling this function:
Find this text string:
Change this text string:
Find this egrep pattern:
```

```
Find this file:
Find files #including this file:
```

Return キーを押すと、カーソルが下に移動し (画面の一番下まで移動すると、先頭に戻る)、^p (Ctrl+p キー) を押すと、上に移動します。また、上矢印 (ua) と下矢印 (da) キーも使用できます。次の単一キーコマンドを使用すれば、メニュー操作とそのほかのタスクが行えます。

表 20 cscope メニュー操作コマンド

Tab	次の入力フィールドへ移動する
Return	次の入力フィールドへ移動する
^n	次の入力フィールドへ移動する
^p	前の入力フィールドへ移動する
^y	最後に入力したテキストを検索する
^b	逆方向にパターンを検索する
^f	順方向にパターンを検索する
^c	検索時に大文字と小文字を区別するか否かのトグルスイッチ (大文字と小文字を区別しない場合、たとえば FILE 文字列は file と File の両方と一致)。
^r	相互参照表を再作成する
!	対話型シェルを起動する (**^d** で cscope に復帰)
^l	画面を描き直す
?	コマンドのリストを表示する
^d	cscope を終了する

検索文字列の最初の文字が前述のいずれかのコマンドと一致する場合は、検索文字列の前にバックスラッシュ (\) を加えてコマンドと区別します。

たとえば、カーソルを 5 番目のメニュー項目「Find this text string」に移動して文字列「out of storage」を入力し、Return キーを押します。

cscope 関数: 文字列検索の要求

```
$ cscope

cscope     Press the ? key for help


Find this C symbol
Find this global definition
Find functions called by this function
Find functions calling this function
Find this text string:  out of storage
Change this text string
Find this egrep pattern
Find this file
```

```
Find files #including this file
```

注記 - メニューに示されている 6 番目の「Change this text string」以外のタスクを行うには、同じ手順に従ってください。6 番目の項目はほかの項目よりも多少複雑なので手順が異なります。文字列の変更方法については、210 ページの「例」を参照してください。

cscope は指定された文字列を検索し、それを含む行を見つけ出して次のように検索結果を表示します。

cscope 関数: 文字列を含む cscope 行のリスト表示

```
Text string: out of storage

  File Line
1 alloc.c 63 (void) fprintf(stderr, "\n%s:  out of storage\n", argv0);


Find this C symbol:
Find this global definition:
Find functions called by this function:
Find functions calling this function:
Find this text string:
Change this text string:
Find this egrep pattern:
Find this file:
Find files #including this file:
```

cscope によって検索結果が正常に表示されたら、次の操作を選択します。行を変更したり、またはその行の前後をエディタで調べることができます。あるいは、cscope の検索結果のリストが一画面に収まらない場合は、リストの次の部分を見ることもできます。cscope が指定した文字列を検索したあとに使用可能なコマンドを次に示します。

表 21 最初の検索後に使用するコマンド

1 -9	この行を含むファイルを編集する (入力した番号は cscope が表示したリストの行番号に対応する)
スペース	次画面のリストを表示する
+	次画面のリストを表示する
^v	次画面のリストを表示する
–	前画面のリストを表示する
^e	表示されたファイル順に編集する
>	表示されているリストをファイルへ追加する
|	全行をパイプでシェルコマンドに渡す

ここでも、検索文字列の最初の文字が前述のいずれかのコマンドと一致する場合は、検索文字列の前にバックスラッシュ (¥) を加えてコマンドと区別します。

次に、新しく検索した行の前後を調べます。「**1**」(リスト内の行番号) を入力してください。エディタが起動され、`alloc.c` ファイルが読み取られ、カーソルは `alloc.c` の 63 行目の先頭に移動します。

cscope 関数: コード行の検査

```
{
   return(alloctest(realloc(p, (unsigned) size)));
}

/* check for memory allocation failure */

static char *
alloctest(p)
char *p;
{
    if (p == NULL) {
        (void) fprintf(stderr, "\n%s:  out of storage\n", argv0);
        exit(1);
    }
    return(p);
}
~
~
~
~
~
~
~
"alloc.c" 67 lines, 1283 characters
```

変数 `p` が `NULL` のときに、エラーメッセージが出力されることがわかります。`alloctest()` に渡される引数がなぜ `NULL` になったのかを調べるには、まず `alloctest()` を呼び出している関数を確定する必要があります。

通常の終了方法でエディタを終了し、タスクメニューに戻ります。ここで、4 番目の項目「`Find functions calling this function`」のあとに **`alloctest`** と入力します。

cscope 関数: `alloctest()` を呼び出す関数のリストの要求

```
Text string: out of storage

  File Line
1 alloc.c 63(void)fprintf(stderr,"\n%s:  out of storage\n",argv0);


Find this C symbol:
Find this global definition:
Find functions called by this function:
Find functions calling this function:  alloctest
Find this text string:
Change this text string:
Find this egrep pattern:
```

```
Find this file:
Find files #including this file:
```

cscope は検索を実行し、次の 3 つの関数のリストを表示します。

cscope 関数: alloctest() を呼び出す Listing 関数

```
Functions calling this function: alloctest
File Function Line
1 alloc.c mymalloc 33 return(alloctest(malloc((unsigned) size)));
2 alloc.c mycalloc 43 return(alloctest(calloc((unsigned) nelem, (unsigned) size)));
3 alloc.c myrealloc 53 return(alloctest(realloc(p, (unsigned) size)));


Find this C symbol:
Find this global definition:
Find functions called by this function:
Find functions calling this function:
Find this text string:
Change this text string:
Find this egrep pattern:
Find this file:
Find files #including this file:
```

今度は、mymalloc() を呼び出す関数を調べます。cscope は、次のような 10 個の関数を見つけ出します。そのうち 9 個を画面に表示し、残りの 1 個を見るにはスペースバーを押すように指示しています。

cscope 関数: mymalloc() を呼び出す Listing 関数

```
Functions calling this function: mymalloc

File         Function       Line
1 alloc.c    stralloc       24 return(strcpy(mymalloc
                            (strlen(s) + 1), s));
2 crossref.c crossref       47 symbol = (struct symbol *)mymalloc
                            (msymbols * sizeof(struct symbol));
3 dir.c      makevpsrcdirs  63 srcdirs = (char **) mymalloc
                            (nsrcdirs * sizeof(char*));
4 dir.c      addincdir      167 incdirs = (char **)mymalloc
                            (sizeof(char *));
5 dir.c      addincdir      168 incnames = (char **)
                            mymalloc(sizeof(char *));
6 dir.c      addsrcfile     439 p = (struct listitem *) mymalloc
                            (sizeof(struct listitem));
7 display.c  dispinit       87 displine = (int *) mymalloc
                            (mdisprefs * sizeof(int));
8 history.c  addcmd         19  h = (struct cmd *) mymalloc
                            (sizeof(struct cmd));
9 main.c     main           212 s = mymalloc((unsigned )
                            (strlen(reffile) +strlen(home) + 2));

* 9 more lines - press the space bar to display more *
Find this C symbol:
```

```
Find this global definition:
Find functions called by this function:
Find functions calling this function:
Find this text string:
Change this text string:
Find this egrep pattern:
Find this file:
Find files #including this file:
```

「out of storage」のエラーメッセージはプログラムの開始直後に出力されるので、関数 `dispinit()` (表示の初期化) 内で問題が発生していることが推測できます。

`dispinit()` はリストの 7 番目の関数なので、これを参照するには「**7**」と入力します。

`cscope` 関数: `dispinit()` をエディタで参照

```
void
dispinit()
{
        /* calculate the maximum displayed reference lines */
    lastdispline = FLDLINE -  4;
    mdisprefs = lastdispline -  REFLINE + 1;
    if (mdisprefs > 9) {
       mdisprefs = 9;
    }
       /* allocate the displayed line array */
   displine = (int *) mymalloc(mdisprefs * sizeof(int));
}
^L/* display a page of the references */

void
display()
{
    char file[PATHLEN + 1]; /* file name */
    char function[PATHLEN + 1];/* function name */
    char linenum[NUMLEN + 1]; /* line number */
    int screenline; /* screen line number */
    int width; /* source line display width */
    register int i, j;
"display.c" 622 lines, 14326 characters
```

`mymalloc()` が失敗したのは、非常に大きな数または負数を引数にして呼び出されたためです。`FLDLINE` と `REFLINE` が取り得る値を調べてみると、`mdisprefs` の値が負になる場合があることがわかり、この場合、`mymalloc()` は負数を引数にして呼び出されます。

9.2.4 ステップ 4: コードの編集

ウィンドウ形式の端末では、任意のサイズのウィンドウを複数使用できます。「out of storage」のエラーメッセージが出力されたのは、`prog` を実行するウィンドウ内の行数が少なすぎたためと考えられます。つまり、`mymalloc()` が負数を引数にして呼び出された場合にこのような状況が

発生する可能性があるということです。今後このような状況が発生した場合に、もっとわかりやすいエラーメッセージ、たとえば「Screen too small」を出力してプログラムを中止するように設定しておくとよいでしょう。それには `dispinit()` 関数を次のように編集します。

cscope 関数: 問題箇所の修正

```
void
dispinit()
{
/* calculate the maximum displayed reference lines */
    lastdispline = FLDLINE - 4;
    mdisprefs = lastdispline - REFLINE + 1;
    if (mdisprefs > 9) {
       mdisprefs = 9;
    }
/* allocate the displayed line array */
    displine = (int *) mymalloc(mdisprefs * sizeof(int));
}
^L/* display a page of the references */

void
display()
{
    char file[PATHLEN + 1]; /* file name */
    char function[PATHLEN + 1];/* function name */
    char linenum[NUMLEN + 1]; /* line number */
    int screenline; /* screen line number */
    int width; /* source line display width */
    register int i, j;
"display.c" 622 lines, 14326 characters
```

以上で、本セクションの最初で調査を開始した問題箇所は修正されました。これで、行数が少なすぎるウィンドウ内で `prog` を実行したときに、単に意味不明のエラーメッセージ「out of storage」を出力して中止するのではなく、代わりに、ウィンドウサイズを検査し、終了前によりわかりやすいエラーメッセージを生成します。

9.2.5 コマンド行オプション

すでに述べたとおり、`cscope` はデフォルトでは現在のディレクトリ内にある C、`lex`、および yacc ソースファイルのシンボル相互参照表を作成します。次に例を示します。

```
% cscope
```

これは次と同義です。

```
% cscope *.[chly]
```

指定したソースファイルを表示するには、ソースファイル名を引数に指定して `cscope` を起動します。

```
% cscope file1.c file2.c file3.h
```

cscope のコマンド行オプションを使用して、相互参照表に含まれるソースファイルをさらに自由に指定することもできます。それには、次のように -s オプションのあとにコンマで区切られた任意の数のディレクトリ名を指定して cscope を起動します。

```
% cscope– s dir1,dir2,dir3
```

cscope は現ディレクトリ内だけでなく、指定されたディレクトリ内にあるすべてのソースファイルを対象に相互参照表を作成します。*ファイル*中にリストされているソースファイル (ファイル名をスペースやタブまたは復帰改行で区切ったもの) のすべてを表示するには、– i オプションとリストを持つファイル名を指定して cscope を起動します。

```
% cscope– i file
```

ソースファイルがディレクトリツリーの中にある場合は、次のコマンドでディレクトリツリー内のすべてのソースファイルを簡単に表示できます。

```
% find .–  name '*.[chly]'– print | sort > file
% cscope– i file
```

このオプションを使用しても、コマンド行でファイルが指定されている場合、cscope によって指定されたファイル以外については無視されます。

-I オプションは、cc に対する -I オプションと同じような形式で cscope にも指定できます。57 ページの「インクルードファイルを指定する方法」を参照してください。

– f オプションを使用すると、デフォルトの cscope.out 以外のファイルを相互参照ファイルとして指定できます。このオプションは、同じディレクトリ内に異なるシンボル相互参照ファイルを保管するのに役立ちます。たとえば、2 つのプログラムが同じディレクトリ内にあるが、すべてのファイルを共有しているとは限らない場合に使用します。

```
% cscope– f admin.ref admin.c common.c aux.c libs.c
% cscope– f delta.ref delta.c common.c aux.c libs.c
```

この例では、2 つのプログラム admin と delta のソースファイルは同じディレクトリ内にありますが、プログラムを構成するファイルのグループは異なっています。cscope 起動時に、別のシンボル相互参照ファイルを指定しておくことによって、2 つのプログラムの相互参照情報を別々に保管できます。

– p*n* オプションを使用すると、cscope は検索結果でリストされたファイルのあるパス名やそのパス名の一部を表示することができます。– p のあとの *n* には、パス名の中で最後から何番目までの要素を表示させたいかを指定します。デフォルト値は 1 で、これはファイル名そのものを意味します。したがって現在のディレクトリが home/common の場合、次のコマンドでは:

```
% cscope– p2
```

cscope によって検索結果がリストされるときに、common/file1.c や common/file2.c のように表示されます。

表示するプログラムが大量のソースファイルを含む場合、– b オプションを使用して、相互参照表を作成したあとで cscope を終了することができます。このとき、cscope はタスクメニューを表

示しません。パイプラインで、cscope– b を batch(1) コマンドとともに使用する場合、cscope は相互参照表をバックグラウンドで作成します。

```
% echo 'cscope -b' | batch
```

相互参照表がいったん作成されると、その後、ソースファイルまたはソースファイルのリストを変更しないかぎり、次のように指定するだけで

```
% cscope
```

相互参照表がコピーされ、通常どおりタスクメニューが表示されます。このコマンドシーケンスを使用すると cscope の初期処理の終了を待たずに作業を続けることができます。

– d オプションは、cscope にシンボル相互参照表を更新させません。このオプションを指定すると、cscope はソースファイルの変更を検査しないため時間の節約になります。変更されていないと確信できる場合にのみ使用してください。

注記 - -d オプションの使用には注意が必要です。ソースファイルが変更されていることに気付かずに – d オプションを使用すると、cscope は古いシンボル相互参照表を使用して照会に応じてしまいます。

ほかのコマンド行オプションについては、cscope(1) のマニュアルページを参照してください。

9.2.6 ビューパス

前述のように cscope は、デフォルトでは現在のディレクトリ内のソースファイルを検索します。環境変数 VPATH が設定されているときは、cscope は VPATH に指定されたディレクトリ内のソースファイルを検索します。ビューパスとは、順序付けされたディレクトリのリストで、リスト内の各ディレクトリの下は同じディレクトリ構造になっています。

たとえば、ユーザーがあるソフトウェアプロジェクトのメンバーであるとします。/fs1/ofc 下のディレクトリには、*正式*バージョンのソースファイルがあります。メンバーはホームディレクトリ (/usr/you) を持っており、ソフトウェアシステムを変更する場合は、変更するファイルだけを /usr/you/src/cmd/prog1 にコピーします。全プログラムの正式バージョンは、/fs1/ofc/src/cmd/prog1 にあります。

cscope を使用して、prog1 を構成する 3 つのファイル (f1.c、f2.c、f3.c) を表示するとします。まず VPATH を /usr/you と /fs1/ofc に設定してエクスポートします。

B シェルの場合は次のように入力します。

```
$ VPATH=/usr/you:/fs1/ofc; export VPATH
```

C シェルの場合は次のように入力します。

```
% setenv VPATH /usr/you:/fs1/ofc
```

次に、現ディレクトリを /usr/you/src/cmd/prog1 に移動して cscope を起動します。

```
% cscope
```

cscope はビューパスにあるすべてのファイルの位置を調べます。同じファイルが複数のディレクトリにある場合は、cscope はVPATH 内で先に現れたディレクトリの下にあるファイルを使用します。したがって、f2.c がユーザーのディレクトリにあり、3 つのファイルはすべて正式バージョン用ディレクトリの下にある場合、cscope は f2.c はユーザーディレクトリのものを、f1.c および f3.c は正式バージョン用のディレクトリのものを検査します。

VPATH 内の最初のディレクトリは、作業用ディレクトリの接頭辞 (通常は $HOME) でなければいけません。VPATH 内のコロンで区切られたそれぞれのディレクトリは、/ から始まる絶対パス名でなければいけません。

9.2.7 cscope とエディタ呼び出しのスタック

cscope とエディタの呼び出しはスタックできます。たとえば、cscope がエディタを起動してシンボルへの参照を調べているときに、ほかにも参照関係を調べたいシンボルがある場合、現在起動中の cscope やエディタを終了することなく、エディタ内部からふたたび cscope を起動して 2 番目の参照関係を調べることができます。一番最後に起動した cscope またはエディタコマンドを正常に終了すれば、1 つ前の状態に戻ることができます。

9.2.8 例

このセクションでは、cscope が、定数をプリプロセッサシンボルに変更する、関数に引数を追加する、変数の値を変更するという 3 つのタスクを行う際にどのように使用されるかを示す例を示します。最初の例では、文字列の変更手順を示します。このタスクは、cscope メニューのほかのタスク項目とは少し異なっています。変更したい文字列を入力すると、cscope はそれを置き換える新しい文字列を聞いてきます。画面には古い文字列を含む行が表示されます。ここで、どの行に含まれる文字列を変更するかを指定します。

9.2.8.1 例 1: 定数をプリプロセッサシンボルに変更する

たとえば、定数 100 をプリプロセッサシンボル MAXSIZE に変更するとします。6 番目のメニュー項目「Change this text string」を選択して **\100** と入力します。1 の前にはバックスラッシュを加えて、cscope のメニュー項目番号を意味する 1 と区別します。Return キーを押すと cscope は新しい文字列を聞いてくるので、**MAXSIZE** と入力します。

cscope 関数: 文字列の変更

```
cscope            Press the ? key for help


Find this C symbol:
```

```
Find this global definition:
Find functions called by this function:
Find functions calling this function:
Find this text string:
Change this text string: \100
Find this egrep pattern:
Find this file:
Find files #including this file:
To:  MAXSIZE
```

cscope は、指定された文字列を含む行を表示します。どの行の文字列を変更するかが選択されるまで入力待ちになります。

cscope 関数: 変更行に対するプロンプト

```
cscope            Press the ? key for help


Find this C symbol:
Find this global definition:
Find functions called by this function:
Find functions calling this function:
Find this text string:
Change this text string: \100
Find this egrep pattern:
Find this file:
Find files #including this file:
To:  MAXSIZE
```

リストの 1、2、3 行目 (ソースファイル内の行番号はそれぞれ 4、26、8 行目) に含まれる定数 **100** は、MAXSIZE に変更すべきだとわかります。さらに、read.c の **0100** (4 行目) と err.c の **100.0** (5 行目) は変更すべきではないこともわかります。次の単一キーコマンドを使用して、変更したい行を選択します。

表 22 変更する行を選択するコマンド

1-9	変更対象の行をマークしたり、マークを削除する
*	すべての表示行を変更対象としてマークしたり、マークを削除する
スペース	次画面のリストを表示する
+	次画面のリストを表示する
–	前画面のリストを表示する
a	すべての行を変更対象としてマークする
^d	マークされた行を変更して終了する
Esc	マークされた行を変更しないで終了する

この場合、**1**、**2**、および **3** を入力します。入力した番号は画面上には表示されません。代わりに cscope は各行の行番号のあとに > (右不等号) を出力することによって、変更箇所を示します。

cscope 関数: 変更行のマーキング

```
Change "100" to "MAXSIZE"

  File Line
1>init.c 4 char s[100];
2>init.c 26 for (i = 0; i < 100; i++)
3>find.c 8 if (c < 100) {
4 read.c 12 f = (bb & 0100);
5 err.c 19 p = total/100.0; /* get percentage */

Find this C symbol:
Find this global definition:
Find functions called by this function:
Find functions calling this function:
Find this text string:
Change this text string:
Find this egrep pattern:
Find this file:
Find files #including this file:
Select lines to change (press the ? key for help):
```

ここで、**^d** を入力して選択行を変更します。cscope は変更後の各行を表示し、作業の継続を促します。

cscope 関数: 変更後のテキスト行表示

```
Changed lines:

    char s[MAXSIZE];
    for (i = 0; i < MAXSIZE; i++)
    if (c < MAXSIZE) {

Press the RETURN key to continue:
```

このプロンプトに対して Return キーを押すと、cscope は画面を書き換えて変更行を指定する前の画面に戻ります。

次に新しいシンボル MAXSIZE の #define を追加します。#define 文を追加するヘッダーファイルは、現在表示されている行の参照元ファイルの中にはありません。したがって、**!** と入力してシェルに入る必要があります。シェルプロンプトが画面の一番下に現れます。あとは、エディタを起動して #define 文を追加します。

cscope 関数: シェルへの一時移行

```
Text string: 100

  File Line
1 init.c 4 char s[100];
2 init.c 26 for (i = 0; i < 100; i++)
3 find.c 8 if (c < 100) {
4 read.c 12 f = (bb & 0100);
5 err.c 19 p = total/100.0;                                    /* get percentage */
```

```
Find this C symbol:
Find this global definition:
Find functions called by this function:
Find functions calling this function:
Find this text string:
Change this text string:
Find this egrep pattern:
Find this file:
Find files #including this file:
$ vi defs.h
```

cscope セッションへ戻るには、エディタを終了し、**^d** を入力してシェルを終了させます。

9.2.8.2 例 2: 関数に引数を追加する

関数に引数を追加するには、関数そのものを編集することとその関数が呼び出されているすべての箇所に新しい引数を追加することの 2 つのステップがあります。cscope を使用して簡単にこのステップを実行できます。

まず、2 番目のメニュー項目「`Find this global definition`」を使用して、関数を編集します。次に、その関数がどこで呼び出されているかを探します。4 番目のメニュー項目「`Find functions calling this function`」を使用すると、ある関数を呼び出しているすべての関数のリストを表示することができます。このリストを使用して、リストの各行番号を個々に入力してエディタを起動するか、または **^e** を入力して、各行のすべての参照元ファイルを対象にエディタを自動的に起動することができます。このような修正処理に `cscope` を使用すると、修正を必要とする関数はすべて修正され、見落とすことがありません。

9.2.8.3 例 3: 変数の値を変更する

変更内容がコードにどのように影響するかを見たいときに、表示手段として cscope が力を発揮します。

変数の値またはプリプロセッサシンボルを変更する場合を考えてみます。実際に変更する前に、最初のメニュー項目「`Find this C symbol`」を使用して、変更によって影響を受ける参照箇所のリストを表示します。それから、エディタを起動して各参照箇所を調べます。これによって、変更によるすべての影響を予測できます。同様に `cscope` を使用して、間違いなく変更されたことも確認できます。

9.2.9 エディタのコマンド行構文

デフォルトでは、`cscope` は `vi` エディタを呼び出します。`EDITOR` 環境変数に任意のエディタ名を設定して `EDITOR` をエクスポートすると、デフォルトを変更することができます。この手順につ

いては、200 ページの「ステップ 1: 環境設定」で述べたとおりです。ただし、cscope は、使用するエディタのコマンド行構文が次の形式であるとみなします。

```
% editor +linenum filename
```

これは vi と同じです。使用したいエディタがこのようなコマンド行構文を持っていない場合は、cscope とエディタ間のインタフェースを定義する必要があります。

ed を使用する場合を考えてみます。ed では、コマンド行内に行番号を指定することができないので、そのままでは cscope のエディタとして使用できません。そこで、次のような行を含むシェルスクリプトを作成します。

```
/usr/bin/ed $2
```

ここでは、シェルスクリプトを myedit とします。環境変数 EDITOR の値をこのシェルスクリプトに設定して EDITOR をエクスポートします。

B シェルの場合は次のように入力します。

```
$ EDITOR=myedit; export EDITOR
```

C シェルの場合は次のように入力します。

```
% setenv EDITOR myedit
```

cscope は、指定されたリスト項目 (たとえば、main.c の 17 行目) を読み込んでエディタを起動するとき、次のようなコマンド行を使用してシェルスクリプトを起動します。

```
% myedit +17 main.c
```

myedit は第一引数の行番号 ($1) を無視して、第二引数のファイル名 ($2) だけを使用して ed を正しく呼び出します。ファイルの行 17 へ自動的に移動しないので、適切な ed コマンドを実行してその行を表示し、編集する必要があります。

9.3 不明な端末タイプのエラー

次のエラーメッセージが出力されることがあります。

```
Sorry, I don't know how to deal with your "term" terminal
```

このメッセージは、現在ロードされている端末情報ユーティリティー (terminfo) データベース内に使用端末が含まれていないことを意味します。TERM に正しい値が設定されていることを確認してください。それでもメッセージが出力される場合は、端末情報ユーティリティーを再ロードしてください。

次のようなメッセージも表示されることがあります。

```
Sorry, I need to know a more specific terminal type than "unknown"
```

ステップ 1: 環境設定で説明した手順に従って、200 ページの「ステップ 1: 環境設定」を設定してエクスポートしてください。

♦ ♦ ♦ 付 録 A

機能別コンパイラオプション

この付録では、機能別に C コンパイラのオプションをまとめています。各オプションおよびコンパイラコマンド行構文の詳細は、表36「廃止オプションの表」を参照してください。

A.1 機能別に見たオプションの要約

このセクションには、参照しやすいように、コンパイラオプションが機能別に分類されています。各オプションの詳細は、付録B C コンパイラオプションリファレンスを参照してください。フラグによっては、複数の使用目的があるため、複数の個所に記載されているものがあります。

特に明記しないかぎり、オプションはすべてのプラットフォームに適用されます。SPARC ベースシステムに固有の機能は (SPARC) として識別し、x86/x64 ベースシステムに固有の機能は *(x86)* として識別しています。Oracle Solaris プラットフォームにのみ適用されるオプションは、(Oracle Solaris) とマークされます。Oracle Linux のみのプラットフォーム用のオプションは、(Oracle Linux) とマークされます。

A.1.1 最適化とパフォーマンスのオプション

表 23 最適化とパフォーマンスのオプション

オプション	アクション
`-fast`	実行可能コードの速度を向上させるコンパイルオプションの組み合わせを選択します。
`-fma`	浮動小数点の積和演算命令の自動生成を有効にします。
`-library=sunperf`	Sun Performance Library とリンクします。
`-p`	プロファイリング用のデータを収集するためにオブジェクトコードを準備します。
`-xalias_level`	コンパイラで、型に基づく別名の解析および最適化を実行するように指定します。
`-xannotate`	最適化および可観測性ツール `binopt`(1)、`code-analyzer`(1)、`discover`(1)、`collect`(1)、および `uncover`(1) で使用できるバイナリを作成するようコンパイラに指示します。
`-xbinopt`	あとで最適化、変換、分析を行うために、バイナリを準備します。

オプション	アクション
-xbuiltin	標準ライブラリ関数を呼び出すコードをさらに最適化します。
-xdepend	ループの繰り返し内部でのデータ依存性の解析およびループ再構成を実行します。
-xF	リンカーによるデータおよび関数の順序変更を有効にします。
-xglobalize	ファイルの静的変数のグローバル化を制御します (関数は制御しません)。
-xhwcprof	コンパイラのハードウェアカウンタによるプロファイリングのサポートを有効にします。
-xinline	指定された関数のみのインライン化を試みます。
-xinline_param	コンパイラが関数呼び出しをインライン化するタイミングを判断するために使用するヒューリスティックを手動で変更します。
-xinline_report	コンパイラによる関数のインライン化に関する報告を生成し、標準出力に書き込みます。
-xinstrument	スレッドアナライザで分析するために、プログラムをコンパイルして計測します。
-xipo	内部手続き解析パスを呼び出すことにより、プログラム全体の最適化を実行します。
-xipo_archive	クロスファイル最適化でアーカイブ (.a) ライブラリを取り込むことを許可します。
-xipo_build	コンパイラへの最初の受け渡し時には最適化を行わず、リンク時にのみ最適化を行うことによって、コンパイルの時間を短縮します。
-xkeepframe	指定した関数のスタック関連の最適化を禁止します。
-xjobs	コンパイラが作成するプロセスの数を設定します。
-xlibmil	実行速度を上げるために一部のライブラリルーチンをインライン化します。
-xlic_lib=sunperf	廃止。Sun Performance Library にリンクするには、–library=sunperf を使用します。
-xlinkopt	再配置可能なオブジェクトファイルのリンク時の最適化を実行します。
-xlibmopt	最適化された数学ルーチンのライブラリを有効にします。
-xmaxopt	pragma opt のレベルを指定されたレベルに制限します。
-xnolibmil	数学ライブラリルーチンをインライン化しません。
-xnolibmopt	最適化された数学ルーチンのライブラリを有効にしません。
-xO	オブジェクトコードを最適化します。
-xnorunpath	実行可能ファイル内の共有ライブラリの実行時検索パスのインクルードを抑止します。
-xpagesize	スタックとヒープの優先ページサイズを設定します。
-xpagesize_stack	スタックの優先ページサイズを設定します。
-xpagesize_heap	ヒープの優先ページサイズを設定します。
-xpch	共通の一連のインクルードファイル群を共有するソースファイルを持つアプリケーションのコンパイル時間を短縮します。
-xpec	追加のチューニングやトラブルシューティングで使用できる移植可能な実行可能コード (Portable Executable Code、PEC) バイナリを生成します。
-xpchstop	活性文字列の最後のインクルードファイルを指定するために、-xpch と組み合わせて使用できます。

オプション	アクション
-xprefetch	先読み命令を有効にします。
-xprefetch_level	-xprefetch=auto を設定したときの先読み命令の自動挿入を制御します。
-xprefetch_auto_type	間接先読みの生成方法を制御します。
-xprofile	プロファイルのデータを収集、または最適化のためにプロファイルを使用します。
-xprofile_ircache	-xprofile=collect 段階から保存されたコンパイルデータを再利用することで、-xprofile=use 段階のコンパイル時間を改善します。
-xprofile_pathmap	1 つのプロファイルディレクトリ内で複数のプログラムや共有ライブラリをサポートします。
-xrestrict	ポインタ値の関数パラメータを制限付きのポインタとして扱います。
-xsafe	(SPARC) コンパイラがメモリーベースのトラップが起こらないと仮定するのを許可します。
-xspace	コードサイズを増やすループの最適化または並列化を行いません。
- xthroughput	システム上で多数のプロセスが同時に実行されている状況でアプリケーションが実行されることを指定します。
-xunroll	ループを *n* 回展開するようにオプティマイザに示唆します。

A.1.2 コンパイル時とリンク時のオプション

次の表は、リンク時とコンパイル時の両方に指定する必要があるオプションをまとめています。

表 24 コンパイル時とリンク時のオプション

オプション	アクション
-fast	実行可能コードの速度を向上させるコンパイルオプションの組み合わせを選択します。
-fopenmp	-xopenmp=parallel と同義です。
-m32 |-m64	コンパイルされたバイナリオブジェクトのデータ型モデルを指定します。
-mt	-D_REENTRANT -lthread に展開されるマクロオプションです。
-p	prof(1) を使用してプロファイル用のデータを収集するように、オブジェクトコードを準備します。
-xarch	命令セットアーキテクチャーを指定します。
-xautopar	複数プロセッサのための自動並列化を有効にします。
-xhwcprof	コンパイラのハードウェアカウンタによるプロファイリングのサポートを有効にします。
-xipo	内部手続き解析パスを呼び出すことにより、プログラム全体の最適化を実行します。
-xlinkopt	再配置可能なオブジェクトファイルのリンク時の最適化を実行します。
-xmemalign	(SPARC) メモリーの予想される最大境界整列と境界整列していないデータアクセスの動作を指定します。
-xopenmp	明示的な並列化のための OpenMP インタフェースをサポートします。このインタフェースには、ソースコード指令セット、実行時ライブラリルーチン、環境変数などが含まれます。

オプション	アクション
-xpagesize	スタックとヒープの優先ページサイズを設定します。
-xpagesize_stack	スタックの優先ページサイズを設定します。
-xpagesize_heap	ヒープの優先ページサイズを設定します。
- xpatchpadding	各関数を開始する前に、メモリー領域を予約します。
-xpg	gprof(1) でプロファイル処理するためのデータを収集するオブジェクトコードを用意します。
-xprofile	プロファイルのデータを収集、または最適化のためにプロファイルを使用します。
-xs	(Oracle Solaris) オブジェクトファイルからのデバッグ情報を実行可能ファイルにリンクします。
-xvector=lib	ベクトルライブラリ関数を自動呼び出しします。

A.1.3 データ境界整列のオプション

表 25 データ境界整列のオプション

オプション	アクション
-xchar_byte_order	複数文字からなる文字定数の文字を指定されたバイト順序で配置することにより、整数定数を生成します。
-xdepend	ループの繰り返し内部でのデータ依存性の解析およびループ再構成を実行します。
-xmemalign	(SPARC) メモリーの予想される最大境界整列と境界整列していないデータアクセスの動作を指定します。
-xsegment_align	ドライバがリンク行で特殊なマップファイルをインクルードします。

A.1.4 数値と浮動小数点のオプション

表 26 数値と浮動小数点のオプション

オプション	アクション
-flteval	*(x86)* 浮動小数点の評価を制御します。
-fma	浮動小数点の積和演算命令の自動生成を有効にします。
-fnonstd	浮動小数点演算ハードウェアの標準以外の初期化を行います。
-fns	標準以外の浮動小数点モードをオンにします。
-fprecision	*(x86)* 浮動小数点制御ワードの丸め精度モードのビットを初期化します
-fround	プログラム初期化中に実行時に確立される IEEE 754 丸めモードを設定します。
-fsimple	オプティマイザが浮動小数点演算に関する単純化した仮定を行うことを許可します。
-fsingle	コンパイラが float 式を倍精度ではなく単精度で評価します。
-fstore	*(x86)* コンパイラが浮動小数点の式または関数の値を代入の左辺の型に変換します。

オプション	アクション
-ftrap	起動時に IEEE 754 トラップモードを有効に設定します。
-nofstore	*(x86)* 浮動小数点の式または関数の値を代入の左辺の型に変換しません。
-xdepend	ループの繰り返し内部でのデータ依存性の解析およびループ再構成を実行します。
-xlibmieee	例外時の数学ルーチンの戻り値を強制的に IEEE 754 形式にします。
-xsfpconst	接尾辞のない浮動小数点定数を単精度で表します
-xvector	ベクトルライブラリ関数を自動呼び出しします。

A.1.5 並列化のオプション

表 27 並列化のオプション

オプション	アクション
-fopenmp	-xopenmp=parallel と同義です。
-mt	-D_REENTRANT -lthread に展開されるマクロオプションです。
-xautopar	複数プロセッサのための自動並列化を有効にします。
-xcheck	スタックオーバーフローの実行時検査を追加し、局所変数を初期化します。
-xdepend	ループの繰り返し内部でのデータ依存性の解析およびループ再構成を実行します。
-xloopinfo	並列化されているループとされていないループを示します。
-xopenmp	明示的な並列化のための OpenMP インタフェースをサポートします。このインタフェースには、ソースコード指令セット、実行時ライブラリルーチン、環境変数などが含まれます。
-xreduction	自動並列化での縮約の認識を有効にします。
-xrestrict	ポインタ値の関数パラメータを制限付きのポインタとして扱います。
-xthreadvar	スレッドローカルな変数の実装を制御します。
- xthroughput	システム上で多数のプロセスが同時に実行されている状況でアプリケーションが実行されることを指定します。
-xvpara	#pragma MP 指令が指定されているが、並列化用に正しく指定されていない可能性のあるループについて、警告します。

A.1.6 ソースコードのオプション

表 28 ソースコードのオプション

オプション	アクション
-A	*#assert* 前処理指令が実行されたかのように、*name* を述語として、指定された tokens に関連付けます。
-ansi	-std=c89 と同等です。
-C	前処理指令の行のものを除いて、プリプロセッサがコメントを削除することを抑止します。

オプション	アクション
-D	#define 前処理指令が実行されたかのように、*name* を指定された *tokens* に関連付けます。
-E	ソースファイルに対してプリプロセッサのみを実行し、その出力を stdout に送ります。
-fd	K&R 形式の関数の定義や宣言について報告します。
-H	現在のコンパイル中にインクルードされた各ファイルのパス名を、標準エラーに 1 行に 1 つずつ出力します。
-I	#include ファイルが相対ファイル名で検索されるリストに、ディレクトリを追加します。
-include	コンパイラが引数 *filename* を、まるでそれが主ソースファイルの先頭行に#include プリプロセッサ指令として存在しているかのように処理します。
-P	ソースファイルに対して C プリプロセッサのみを実行します。
-pedantic	ANSI 以外の構文に対するエラー/警告への厳密な準拠を適用します。
-preserve_argvalues	(x86) レジスタベースの関数の引数のコピーをスタックに保存します。
-std	C 言語規格を指定します。
-U	プリプロセッサシンボル *name* の初期定義をすべて削除します。
-X	-X オプションは、ISO C 標準への準拠のさまざまな度合いを指定します。
-xCC	C++ 形式のコメントを受け入れます。
-xc99	サポートされる C99 機能のコンパイラ認識を制御します。
-xchar	char が符号なしとして定義されているシステムからの移行を支援します。
-xcsi	C コンパイラが、ISO C ソース文字コード要件に準拠していないロケールで記述されたソースコードを受け入れることを許可します
-xM	指定された C プログラムに対してプリプロセッサのみを実行し、メイクファイル依存関係を生成して結果を標準出力に送信することを要求します。
-xM1	-xM と同様に依存関係を収集しますが、/usr/include ファイルは除外します。
-xMD	-xM と同様にメイクファイルの依存関係を生成しますが、コンパイルを含みます。
-xMF	メイクファイルの依存関係情報を保存するファイル名を指定します。
-xMMD	メイクファイル依存関係を生成しますが、システムヘッダーは除外します。
-xP	このモジュール内に定義されたすべての K&R C 関数のプロトタイプを出力します
-xpg	gprof(1) でプロファイル処理するためのデータを収集するオブジェクトコードを用意します。
-xtrigraphs	3 文字表記シーケンスの認識を決定します。
-xustr	16 ビット文字で構成された文字リテラルを認識します。

A.1.7 コンパイル済みコードのオプション

表 29 コンパイル済みコードのオプション

オプション	アクション
-c	ld(1) によるリンクを抑制し、ソースファイルごとに .o ファイルを現在の作業ディレクトリ内に生成するよう、コンパイラに指示します

オプション	アクション
-o	出力ファイルに名前を付けます
-S	アセンブリソースファイルは生成するがプログラムのアセンブルは行わないように、コンパイラに指示します。

A.1.8 コンパイルモードのオプション

表 30 コンパイルモードのオプション

オプション	アクション
-#	冗長モードを有効にします。この場合、コマンドオプションの展開方法が表示されるほか、呼び出された各コンポーネントも表示されます。
-###	呼び出される各コンポーネントを表示しますが、それらのコンポーネントは実際には実行しません。また、コマンドオプションの展開内容も表示されます。
-ansi	-std=c89 と同等です。
-features	C 言語の各種機能を有効または無効にします。
-keeptmp	コンパイル中に作成された一時ファイルを、自動的に削除する代わりに保持します。
-std	C 言語規格を指定します。
-temp	一時ファイルのディレクトリを定義します。
-V	コンパイラが実行する各コンポーネントの名前とバージョン ID を出力するよう、cc に指示します。
-W	C コンパイルシステムのコンポーネントに引数を渡します。
-X	-X オプションは、ISO C 標準への準拠のさまざまな度合いを指定します。
-xc99	サポートされる C99 機能のコンパイラ認識を制御します。
-xchar	char の符号を保持します
-xhelp	オンラインヘルプ情報を表示します。
-xjobs	コンパイラが作成するプロセスの数を設定します。
-xlang	-std フラグで指定されたデフォルトの libc の動作をオーバーライドします。
-xpch	共通の一連のインクルードファイル群を共有するソースファイルを持つアプリケーションのコンパイル時間を短縮します。
-xpchstop	活性文字列の最後のインクルードファイルを指定するために、-xpch と組み合わせて使用できます。
-xtime	各コンパイルコンポーネントによって使用される時間とリソースを報告します。
-Y	C コンパイルシステムのコンポーネントの場所用の新しいディレクトリを指定します。
-YA	コンポーネントが検索されるデフォルトディレクトリを変更します。
-YI	インクルードファイルが検索されるデフォルトディレクトリを変更します。
-YP	ライブラリファイルが検索されるデフォルトディレクトリを変更します。
-YS	起動オブジェクトファイル用のデフォルトディレクトリを変更します。

A.1.9 診断のオプション

表 31 診断のオプション

オプション	アクション
`-errfmt`	警告メッセージとの区別がすぐにつくように、エラーメッセージの先頭に「error:」という文字列を付加します。
`-errhdr`	ヘッダーファイルから指定したグループへの警告を制限します。
`-erroff`	コンパイラの警告メッセージを抑止します。
`-errshort`	型の不一致が見つかった際にコンパイラによって生成されるエラーメッセージに含める情報の詳細度を制御します。
`-errtags`	各警告メッセージのメッセージタグを表示します。
`-errwarn`	指定の警告メッセージが出力されると、`cc` はエラーステータスを返して終了します。
`-pedantic`	ANSI 以外の構文に対するエラー/警告への厳密な準拠を適用します。
`-v`	より厳格な意味検査を実行し、`lint` に似たほかの検査も有効にするよう、コンパイラに指示します。
`-w`	コンパイラの警告メッセージを抑止します。
`-xanalyze`	コードアナライザを使用して表示できるソースコードの静的分析を生成します。
`-xe`	ソースファイルの構文と意味のチェックだけを行い、オブジェクトや実行可能コードの出力はしません。
`-xprevise`	コードアナライザを使用して表示できるソースコードの静的分析を生成します。
`-xs`	(Oracle Solaris) オブジェクトファイルからのデバッグ情報を実行可能ファイルにリンクします。
`-xtransition`	K&R C と Oracle Developer Studio ISO C の違いに関する警告を発行します。
`-xvpara`	`#pragma MP` 指令が指定されているが、並列化用に正しく指定されていない可能性のあるループについて、警告します。

A.1.10 デバッグオプション

表 32 デバッグオプション

オプション	アクション
`-g`	デバッガ用の追加のシンボルテーブル情報を生成します。
`-g3`	追加のデバッグ情報を生成します。
`-s`	出力オブジェクトファイルからすべてのシンボリックデバッグ情報を削除します。
`-xcheck`	スタックオーバーフローの実行時検査を追加し、局所変数を初期化します。
`-xdebugformat`	stabs 形式ではなく dwarf 形式でデバッグ情報を生成します。
`-xdebuginfo`	デバッグおよび可観測性情報の出力量を制御します。
`-xglobalize`	ファイルの静的変数のグローバル化を制御します (関数は制御しません)。
`-xkeep_unref`	参照されない関数および変数の定義を維持します。

オプション	アクション
-xpagesize	スタックとヒープの優先ページサイズを設定します。
-xpagesize_stack	スタックの優先ページサイズを設定します。
-xpagesize_heap	ヒープの優先ページサイズを設定します。
-xs	dbx のためのオブジェクトファイルの自動読み取りを無効にします。
-xvis	(SPARC) VIS 命令セットに定義されているアセンブリ言語テンプレートをコンパイラが認識します。

A.1.11 リンクとライブラリのオプション

表 33 リンクとライブラリのオプション表

オプション	アクション
-B	リンク用ライブラリのバインディングを static、dynamic のどちらにするかを指定します。
-d	リンクエディタで動的リンクまたは静的リンクを指定します。
-G	動的にリンクされる実行可能ファイルの代わりに共有オブジェクトを生成するためのオプションを、リンクエディタに渡します。
-h	共有動的ライブラリに異なるバージョンのライブラリを持つような名前を割り当てます。
-i	すべての LD_LIBRARY_PATH 設定を無視するオプションを、リンカーに渡します。
-L	リンカーがライブラリを検索する際に使用するリストに、ディレクトリを追加します。
-l	オブジェクトライブラリ lib*name*.so または lib*name*.a とリンクします。
-mc	オブジェクトファイルの .comment セクションから、重複する文字列を削除します。
-mr	.comment セクションからすべての文字列を削除します。オブジェクトファイルの *string* を挿入します。
-Q	出力ファイルに識別情報を出力するかどうかを決定します。
-R	ライブラリの検索ディレクトリを指定するために使用されるディレクトリのコンマ区切りリストを、実行時リンカーに渡します。
-staticlib	Sun Performance ライブラリとのリンクが静的または動的のいずれであるかを指定します。
-xMerge	データセグメントをテキストセグメントにマージします。
-xcode	コードアドレス空間を指定します。
-xlang	-std フラグで指定されたデフォルトの libc の動作をオーバーライドします。
-xldscope	共有ライブラリをより速くより安全に作成するため、変数と関数の定義のデフォルトスコープを制御します。
-xnolib	デフォルトでライブラリを一切リンクしません
-xnolibmil	数学ライブラリルーチンをインライン化しません。
- xpatchpadding	各関数を開始する前に、メモリー領域を予約します。
-xsegment_align	ドライバがリンク行で特殊なマップファイルをインクルードします。
-xstrconst	このオプションは、将来のリリースでは推奨されません。代わりに、-features=[no%]conststrings を使用します。

オプション	アクション
	デフォルトデータセグメントではなくテキストセグメントの読み取り専用データセクションに、文字列リテラルを挿入します。
-xunboundsym	動的に結合されているシンボルへの参照がプログラムに含まれているかどうかを指定します。

A.1.12 対象プラットフォームのオプション

表 34 対象プラットフォームのオプション

オプション	アクション
-m32 |-m64	コンパイルされたバイナリオブジェクトのデータ型モデルを指定します。
-xarch	命令セットアーキテクチャーを指定します。
-xcache	オプティマイザによって使用されるキャッシュプロパティーを定義します。
-xchip	オプティマイザによって使用されるターゲットプロセッサを指定します。
-xregs	生成されたコードのレジスタの使用法を指定します。
-xtarget	命令セットと最適化の対象とするシステムを指定します。

A.1.13 x86 固有のオプション

表 35 x86 固有のオプション

オプション	アクション
-flteval	浮動小数点の評価を制御します。
-fprecision	浮動小数点制御ワードの丸め精度モードのビットを初期化します
-fstore	コンパイラが浮動小数点式または関数の値を代入の左辺の型に変換します。
-nofstore	浮動小数点式または関数の値を代入の左辺の型に変換しません。
-preserve_argvalues	(x86) レジスタベースの関数の引数のコピーをスタックに保存します。
-xmodel	64 ビットオブジェクトの形式を Oracle Solaris x86 プラットフォーム用に変更します。

A.1.14 廃止オプション

次の表に、非推奨になったオプションを示します。引き続きコンパイラはこれらのオプションを受け付けますが、将来のリリースでそうならない可能性があります。できるだけ速やかに推奨代替オプションを使うようにしてください。

表 36 廃止オプションの表

オプション	アクション
-dalign	代わりに -xmemalign=8s を使用してください。
-KPIC (SPARC)	代わりに -xcode=pic32 を使用してください。
-Kpic (SPARC)	代わりに -xcode=pic13 を使用してください。
-misalign	代わりに -xmemalign=1i を使用してください。
-misalign2	代わりに -xmemalign=2i を使用してください。
-x386	代わりに、-xchip=generic を使用してください。
-x486	代わりに、-xchip=generic を使用してください。
-xa	代わりに、-xprofile=tcov を使用してください。
-xanalyze	コードアナライザを使用して表示できるソースコードの静的分析を生成します。
-xarch=v7,v8,v8a	廃止。
-xcg	-xarch、-xchip、および -xcache のデフォルト値を利用するには、代わりに -O を使用します。
--xcrossfile	廃止。代わりに、-xipo を使用してください。
-xlicinfo	廃止。これに代わるオプションはありません。
-xnativeconnect	廃止。これに代わるオプションはありません。
-xprefetch=yes	代わりに - xprefetch=auto,explicit を使用します。
-xprefetch=no	代わりに -xprefetch=no%auto,no%explicit を使用します。
-xsb	廃止。これに代わるオプションはありません。
-xsbfast	廃止。これに代わるオプションはありません。
-xtarget=386	代わりに -xtarget=generic を使用してください。
-xtarget=486	代わりに -xtarget=generic を使用してください。
-xvector=yes	代わりに、--xvector=lib を使用します。
-xvector=no	代わりに、-xvector=none を使用します。

♦ ♦ ♦ 付 録 B

C コンパイラオプションリファレンス

この章では、C コンパイラオプションについてアルファベット順に説明します。機能でグループ化されたオプションについては、付録A 機能別コンパイラオプションを参照してください。たとえば、表23「最適化とパフォーマンスのオプション」には、最適化とパフォーマンスのすべてのオプションが示されています。

C コンパイラは、デフォルトでは 2011 ISO/IEC C 規格の構文の一部を認識します。サポートされる機能は、付録C C11 の機能で詳細に説明されています。コンパイラを以前のバージョンの ISO/IEC C 規格に制限する場合は、`-std` コマンドを使用します。

B.1 オプションの構文

`cc` コマンドの構文を次に示します。

```
% cc [options] filenames [libraries]...
```

ここでは:

- *options* は、表36「廃止オプションの表」で説明されている 1 つまたは複数のオプションを表します。
- *filename;* は、実行可能プログラムの作成に使用するファイル名で、複数指定可能です。

  C コンパイラは *filename;*で指定されたファイルリストに含まれている C ソースファイルとオブジェクトファイルのリストを受け取ります。結果として得られた実行可能コードは、`a.out` 内に配置されます。ただし、`-o` オプションが使用されている場合を除きます。この場合、コードは `-o` オプションで指定されているファイル内に配置されます。

  C コンパイラを使用すると、次のファイルのどのような組み合わせに対しても、コンパイルとリンクを行うことができます。

  - 接尾辞 `.c` の C ソースファイル
  - 接尾辞 `.il` のインラインテンプレートファイル (.c ファイルで指定される場合のみ)
  - 接尾辞 `.i` の前処理済みソースファイル
  - 接尾辞 `.o` のオブジェクトコードファイル
  - 接尾辞 `.s` のアセンブラソースファイル

リンクのあと、C コンパイラは、リンクされた (実行可能コードの形式になった) ファイルを a.out という名前のファイルまたは -o オプションで指定されたファイルに配置します。コンパイラが .i または .c の各入力ファイルに対応するオブジェクトコードを生成する場合は、現在の作業ディレクトリにオブジェクト (.o) ファイルを作成します。

*ライブラリ*は複数の標準ライブラリやユーザー提供のライブラリです。ライブラ リには関数、マクロ、そして定数の定義が含まれます。

ライブラリの検索に使用されるデフォルトのディレクトリを変更するには、オプション *-YP, dir* を使用します。*dir* は、コロンで区切られたパスリストです。デフォルトのライブラリ検索順序は、**-###** または **-xdryrun** オプションを使用し、**ld** 呼び出しの **-Y** オプションを検査することで、確認できます。

cc は getopt を使用してコマンド行オプションの構文を解析します。オプションは単一文字、または後ろに引数を 1 つとる単一文字によって指定します。getopt(3c) のマニュアルページを参照してください。

B.2 cc のオプション

このセクションでは、cc オプションについてアルファベット順に説明します。これらの説明は cc(1) のマニュアルページでも見ることができます。これらの説明の 1 行のサマリーを出力するには、cc -flags オプションを使用します。

特定のプラットフォームに固有と表記されたオプションを別のプラットフォームで使用してもエラーは起きません。単に無視されます。

B.2.1 -#

冗長モードを有効にし、コマンドオプションがどのように展開されるかを示します。要素が呼び出されるごとにその要素を表示します。

B.2.2 -###

呼び出された各コンポーネントが表示されますが、実行はされません。また、コマンドオプションの展開内容を表示します。

B.2.3 -A*name*[(*tokens*)]

#assert 前処理指令に似せて、指定の *tokens* を使用し *name* を述語として関連付けます。事前表明 (preassertion) は次のとおりです。

- system(unix)
- machine(sparc) (SPARC)
- machine(i386) *(x86)*
- cpu(sparc) (SPARC)
- cpu(i386) *(x86)*

これらの事前表明は -pedantic モードでは無効です。

-A のあとにハイフン (-) だけが続く場合は、事前定義のマクロ (__ から始まるもの以外) および事前定義の表明はすべて無視されます。

B.2.4 -ansi

-std=c89 と同等です。

B.2.5 -B[static| dynamic]

リンク時に結合するライブラリをstatic (静的) (指定するとライブラリが非共有ライブラリであることを示す) と dynamic (動的) (指定すると共有ライブラリであることを示す) のどちらにするかを指定します。

-B オプションは、コマンド行で複数回使用できます。このオプションは、リンカー ld(1) に渡されます。

-Bdynamic は、リンカーに lib*lib*.so (共有) ファイルを検索し、それらが見つからなかった場合は lib*lib*.a (静的、非共有) ファイルを検索するよう指示します。ライブラリのリンク方式を共有にしたい場合は、このオプションを指定します。

-Bstatic は、リンカーに lib*lib*.a (静的、非共有) ファイルのみを検索するよう指示します。ライブラリのリンク形式を非共有にしたい場合は、このオプションを指定します。

-B と static または dynamic 値の間に空白は許可されません。

B.2.5.1 デフォルト

-B が指定されていない場合は、-Bdynamic が使用されます。

B.2.5.2 相互の関連性

-Bstatic および -Bdynamic オプションは、デフォルトで提供されているライブラリのリンクに影響を与えます。デフォルトのライブラリが確実に動的にリンクされるようにするために、-B の最後の使用を -Bdynamic にするようにしてください。

B.2.5.3 例

次の例では、lib*foo*.so があっても lib*foo*.a がリンクされます。ほかのすべてのライブラリは動的にリンクされます。

```
example% cc prog.c -Bstatic -lfoo -Bdynamic
```

B.2.5.4 警告

-Bsymbolic を使用すると、異なるモジュール内の参照が、本来 1 つの大域オブジェクトの複数の異なる複製に結合されてしまう可能性があります。

例外メカニズムは、アドレスの比較によって機能します。何かのコピーが 2 つある場合は、それらのアドレスが等しくならず、例外メカニズムが失敗することがあります。これは、例外メカニズムが、一意のアドレスであると想定されるものの比較に依存しているためです。

コンパイルとリンクを別の手順で行い、-B*binding* オプションを使用している場合は、このオプションをリンク手順に含める必要があります。

B.2.5.5 関連項目

255 ページの「-staticlib=[no%]sunperf」、ld(1)、『Oracle Solaris 11.3 リンカーとライブラリガイド』

B.2.6 -c

C プリプロセッサが、前処理指令の行にあるコメント以外のコメントを削除しないようにします。

B.2.7 -c

C コンパイラ ld(1) によるリンクを行わず、ソースファイルごとに .o ファイルを作成します。-o オプションを使用すると、1 つのオブジェクトファイルを明示的に指定することができます。コン

パイラが .i または .c の各入力ファイルに対応するオブジェクトコードを生成する場合は、現在の作業ディレクトリにオブジェクト (.o) ファイルを作成します。リンクを行わないと、オブジェクトファイルの削除も行われません。

B.2.8 -D*name*[(*arg*[,*arg*])][=*expansion*]

#define 前処理マクロが指令によって定義されるのと同様に、オプションの引数を使用してマクロを定義します。=*expansion* が指定されていない場合は、コンパイラは 1 であると仮定します。

コンパイラの定義済みマクロのリストについては、**cc**(1) のマニュアルページを参照してください。

B.2.9 -d[y| n]

-dy はリンクエディタに動的なリンクを指定します (デフォルト)。

-dn はリンクエディタに静的なリンクを指定します。

このオプションとその引数は ld(1) に渡されます。

注記 - このオプションを動的ライブラリと組み合わせて使用すると、重大なエラーが発生します。ほとんどのシステムライブラリは、動的ライブラリでのみ使用できます。

B.2.10 -dalign

(SPARC) 廃止。このオプションは使わないでください。代わりに -xmemalign=8s を使用してください。詳細は、306 ページの「-xmemalign=*ab*」を参照してください。226 ページの「廃止オプション」に、廃止のオプションの全一覧をまとめています。x86 プラットフォームでは、このオプションはメッセージを表示せずに無視されます。

B.2.11 -E

プリプロセッサのみでソースファイルを処理し、出力を stdout に送ります。プリプロセッサはコンパイラ内部に直接組み込まれます。/usr/ccs/lib/cpp が呼び出される -Xs モードの場合は除きます。プリプロセッサの行番号付け情報も含みます。-P オプションの説明も参照してください。

B.2.12 -errfmt[=[no%]error]

このオプションは、エラーメッセージの最初に “error:” という接頭辞を追加して、警告メッセージと区別しやすくする場合に使用します。接頭辞は、-errwarn によってエラーに変換された警告にも追加されます。

表 37 -errfmt のフラグ

フラグ	意味
error	すべてのエラーメッセージに接頭辞「error: 」を追加します。
no%error	エラーメッセージに接頭辞「error: 」を追加しません。

このオプションを指定しない場合は、-errfmt=no%errorに設定されます。-errfmt を指定したけれども値を指定しない場合、コンパイラはそれを -errfmt=error に指定します。

B.2.13 -errhdr[=h]

ヘッダーファイルからの警告を、次の表のフラグによって示されるヘッダーファイルのグループに限定します。

表 38 –errhdr オプション

値	意味
%all	使用しているすべてのヘッダーファイルを検査します。
%none	ヘッダーファイルを検査しません。
%user	使用されているすべてのユーザー定義のヘッダーファイル、すなわち /usr/include およびそのサブディレクトリに入っているヘッダーファイルとコンパイラが提供しているヘッダーファイルを除く、すべてのヘッダーファイルを検査します。これはデフォルト値です。

B.2.14 -erroff[=*t*]

このコマンドは、C コンパイラの警告メッセージを無効にし、エラーメッセージには影響しません。このオプションは、-errwarn によってゼロ以外の終了ステータスを発生させるように指定されているかどうかにかかわらず、すべての警告メッセージに適用されます。

t には、次の 1 つまたは複数の項目をコンマで区切って指定します。*tag*、no%*tag*、%all、%none。指定順序によって実行内容が異なります。たとえば、「%all,no%*tag*」と指定すると、*tag* 以外のすべての警告メッセージを抑制します。次の表は、-erroff 値の一覧を示しています。

表 39　　-erroff のフラグ

フラグ	意味
tag	*tag* によって指定された警告メッセージを抑制します。-errtags=yes オプションで、メッセージのタグを表示できます。
no%*tag*	*tag* によって指定された警告メッセージを有効にします。
%all	すべての警告メッセージを抑制します。
%none	すべてのメッセージの抑制を解除します (デフォルト)。

デフォルトは -erroff=%none です。-erroff と指定すると、-erroff=%all を指定した場合と同等の結果が得られます

-erroff オプションで無効にできるのは、C コンパイラで -errtags オプションを指定したときにタグを表示する警告メッセージだけです。無効にするエラーメッセージをさらに詳細に設定することができます。43 ページの「error_messages」を参照してください。

B.2.15　-errshort[=*i*]

このオプションは、コンパイラで型の不一致が検出されたときに生成されるエラーメッセージの詳細さを設定する場合に使用します。大きな集合体が関係する型の不一致がコンパイラで検出される場合にこのオプションを使用すると特に便利です。

i は、次の表に示す値のいずれかです。

表 40　　-errshort のフラグ

フラグ	意味
short	エラーメッセージは、型の展開なしの簡易形式で出力されます。集合体のメンバー、関数の引数、戻り値の型は展開されません。
full	エラーメッセージは、完全な冗長形式で出力されます。不一致の型が完全に展開されます。
tags	エラーメッセージは、タグ名がある型の場合はそのタグ名付きで出力されます。タグ名がない場合は、型は展開された形式で出力されます。

-errshort を指定しない場合は、コンパイラでは -errshort=full が指定されます。-errshort を指定したけれども値を指定しない場合、コンパイラはこのオプションを -errshort=tags に設定します。

このオプションは累積されません。コマンド行で指定された最後の値を受け入れます。

B.2.16　-errtags[=*a*]

-erroff オプションで抑制するか、-errwarn オプションで致命的なエラーにできる、C コンパイラの各警告メッセージのメッセージタグを表示します。C コンパイラのドライバおよび C のコンパ

イルシステムのほかのコンポーネントから出力されるメッセージにはエラータグが含まれないため、-erroff で無効にしたり、-errwarn で致命的なエラーに変換したりすることはできません。

a には yes または no のいずれかを指定します。デフォルトは -errtags=no です。-errtags を指定することは、-errtags=yes を指定することと同等です。

B.2.17 -errwarn[=*t*]

指定した警告メッセージが生成された場合に、失敗ステータスで C コンパイラを終了する場合は、-errwarn オプションを使用します。

t には、次の 1 つまたは複数の項目をコンマで区切って指定します。*tag*、no%*tag*、%all、%none。このとき、順序が重要になります。たとえば、%all,no%*tag* と指定すると、*tag* 以外のすべての警告メッセージが生成された場合に、致命的ステータスで cc を終了します。

C コンパイラで生成される警告メッセージは、コンパイラのエラーチェックの改善や機能追加に応じて、リリースごとに変更されます。-errwarn=%all を指定してエラーなしでコンパイルされるコードが、コンパイラの次のリリースではエラーなしでコンパイルされない可能性があります。

-errwarn オプションを使用して、障害ステータスで C コンパイラを終了するように指定できるのは、C コンパイラで -errtags オプションを指定したときにタグを表示する警告メッセージだけです。

-errwarn の値を次の表に示します。

表 41 -errwarn のフラグ

フラグ	意味
tag	*tag* に指定されたメッセージが警告メッセージとして発行される場合は、cc は致命的ステータスで終了します。*tag* に指定されたメッセージが発行されない場合は無効です。
no%*tag*	*tag* に指定されたメッセージが警告メッセージとしてのみ発行された場合に、cc が致命的なエラーステータスを返して終了しないようにします。*tag* に指定されたメッセージが発行されない場合は無効です。このオプションは、*tag* または %all を使用して以前に指定したメッセージが警告メッセージとして発行されても cc が致命的エラーステータスで終了しないようにする場合に使用してください。
%all	警告メッセージが何か発行される場合にコンパイラが致命的なエラーステータスを返して終了します。%all に続いて no%*tag* を使用して、特定の警告メッセージを対象から除外することもできます。
%none	どの警告メッセージが発行されてもコンパイラが致命的なエラーステータスを返して終了することがないようにします。

デフォルトは -errwarn=%none です。-errwarn のみを指定することは、-errwarn=%all と同義です。

B.2.18 -fast

このオプションは、実行可能ファイルをチューニングして実行時パフォーマンスを最大化するための出発点として効果的に使用できるマクロです。-fast オプションマクロは、コンパイラのあるリリースから次の変更される可能性があり、ターゲットプラットフォーム固有のオプションに展開されます。-# オプションまたは -xdryrun を使用して -fast の展開を調べ、-fast の該当するオプションを使用して実行可能ファイルのチューニングを行なってください。

-fast の展開には、コンパイラが最適化された数学ルーチンのライブラリを使用できるようにする -xlibmopt オプションが含まれます。詳細は、301 ページの「-xlibmopt」を参照してください。

-fast オプションは、errno の値に影響します。詳細は、54 ページの「errno の値の保持」を参照してください。

-fast を指定してコンパイルしたモジュールは、-fast を指定してリンクする必要があります。219 ページの「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションの全一覧をまとめています。

-fast オプションは、特にコンパイルするマシンとは異なるターゲットで実行するプログラムでは使用できません。そのような場合は、-fast のあとに適切な -xtarget オプションを指定します。例:

```
cc -fast -xtarget=generic ...
```

SUID で指定された例外処理に依存する C モジュールの場合は、-fast のあとに -xnolibmil を指定します。

```
% cc -fast -xnolibmil
```

-xlibmil では、errno の設定や matherr(3m) の呼び出しによって例外を示すことはできません。

–fast オプションは、IEEE 754 標準への厳密な準拠が必要なプログラムには適していません。

次の表は、プラットフォームにまたがって -fast により選択される一連のオプションを示しています。

表 42 -fast 展開フラグ

オプション	SPARC	x86
-fma=fused	X	X
-fns	X	X
-fsimple=2	X	X
-fsingle	X	X
-nofstore	-	X

オプション	SPARC	x86
-xalias_level=basic	X	X
-xbuiltin=%all	X	X
-xlibmil	X	X
-xlibmopt	X	X
-xmemalign=8s	X	-
-xO5	X	X
-xregs=frameptr	-	X
-xtarget=native	X	X

注記 - 一部の最適化では、プログラムの動作が特定の動作になることを想定しています。プログラムがこれらの想定に適合していない場合は、アプリケーションがエラーが発生したり、誤った結果を生成したりすることがあります。プログラムが -fast 付きのコンパイルに適しているかどうかを判断するには、各オプションの説明を参照してください。

これらのオプションで実行される最適化は、ISO C および IEEE 規格で定義されたプログラムの動作を変えることがあります。詳細については、各オプションの説明を参照してください。

-fast フラグは、コマンド行でのマクロ展開のように動作します。そのため、-fast のあとに目的の最適化レベルまたはコード生成オプションを指定することによって、最適化レベルやコード生成オプションの側面をオーバーライドできます。-fast -xO4 のペアでのコンパイルは、-xO2 -xO4 のペアでのコンパイルと同じです。後ろの指定が優先されます。

x86 では、-fast オプションに -xregs=frameptr が含まれます。特に C、Fortran、および C++ の混合ソースコードをコンパイルする場合は、その詳細について、このオプションの説明を参照してください。

このオプションは、IEEE 規格例外処理に依存するプログラムには使用しないでください。数値結果が異なったり、プログラムが途中で終了したり、予想外の SIGFPE シグナルが発生する可能性があります。

実行中のプラットフォームで –fast の実際の展開を確認するには、次のコマンドを使用します。

```
% cc -fast -xdryrun |& grep ###
```

B.2.19 -fd

K&R 形式の関数の宣言や定義を報告します。

B.2.20 -features=[*v*]

次の表に、*v* で使用できる値の一覧を示します。

表 43 -features のフラグ

値	意味
[no%]conststrings	読み取り専用メモリー内で文字列リテラルの配置を有効にします。デフォルトは -features=conststrings であり、文字列リテラルを読み取り専用データセクションに配置します。文字列リテラルのメモリー位置に書き込もうとするプログラムをコンパイルするときに、このオプション付きでコンパイルすると、セグメント例外が発生するようになりました。no% 接頭辞はこのサブオプションを無効にします。
[no%]extensions	サイズがゼロの struct または union の宣言、および有効な値を返す return 文を持つ void 関数を許可または禁止します。
extinl	extern インライン関数を大域関数として生成します。これがデフォルトで、1999 C 規格に準拠しています。
no%extinl	extern インライン関数を静的関数として生成します。-features=no%extinl 付きで新しいコードをコンパイルすると、extern インライン関数は、C および C++ コンパイラの古いバージョンで提供されていたのと同じ扱いを受けます。
[no%]iddollar	最初以外の識別子文字としてドル記号 ($) を許可します。デフォルトは no%iddollar です。
[no%]mergestrings	(SPARC) 重複する文字列がリンカーによって削除されるバイナリの特殊セクションに、文字列リテラルおよびその他の適切な const または読み取り専用データを、コンパイラに配置させます。 デフォルトは -features=no%mergestrings であり、重複した文字列は削除されません。 -features=mergestrings は、-features=conststrings も有効になっている場合にのみ有効です。
[no%]typeof	typeof 演算子の認識を有効または無効にします。typeof 演算子はその引数 (式または型のどちらか) の型を返します。構文上は sizeof 演算子と同様に指定されますが、意味上は typedef で定義される型と同様に動作します。 したがって、typedef が使用できる箇所であればどこでも使用できます。たとえば、宣言、キャスト、または sizeof や typeof の内側で使用できます。デフォルトは -features=typeof です。 no% 接頭辞はこの機能を無効にします。
[no]zla	配列を 0 のサイズで宣言することを許可します。通常であれば、これは C では許可されません。次に例を示します。 `int b[0];  /* allowed only with -features=zla */`
%none	-features=%none オプションは非推奨であるため、-features=no% (この後にサブオプションを指定) に置き換えてください。

古い (このリリースより前の Studio コンパイラで作成された) C および C++ オブジェクトは、その古いオブジェクトの動作を変更することなく、新しい C および C++ オブジェクトとリンクできます。規格に適合した動作を実現するには、最新のコンパイラを使って古いコードをコンパイルする必要があります。

B.2.20.1 –features=typeof の例

```
typeof(int) i;/* declares variable "i" to be type int*/
typeof(i+10) j;/* declares variable "j" to be type int,
                  the type of the expression */

i = sizeof(typeof(j)); /* sizeof returns the size of
                the type associated with variable "j" */

int a[10];
typeof(a) b;/* declares variable "b" to be array of
               size 10 */
```

typeof 演算子は、任意の型の引数を使用できるマクロ定義で特に役立つ可能性があります。例:

```
    #define SWAP(a,b)
{ typeof(a) temp; temp = a; a = b; b = temp; }
```

B.2.21 -flags

使用できる各コンパイラオプションのサマリーを出力します。

B.2.22 -flteval[={any|2}]

(x86) このオプションは、浮動小数点式の評価方法の制御に使用します。

表 44 -flteval のフラグ

フラグ	意味
2	浮動小数点式が long double 型として評価されます。
any	式を構成している変数および定数の型の組み合わせに基づいて浮動小数点式が評価されます。

-flteval が指定されない場合は、-flteval=any に設定されます。-flteval を指定したけれども値を指定しない場合、コンパイラはそれを -flteval=2 に設定します。

-flteval=2 は -xarch=sse、 pentium_pro、ssea、または pentium_proa と一緒でのみ使用できます。-flteval=2 は、-fprecision または -nofstore オプションとの組み合わせでも互換性がありません。

352 ページの「浮動小数点評価における精度」も参照してください。

B.2.23 -fma[={none|fused}]

浮動小数点の積和演算 (FMA) 命令の自動生成を有効にします。-fma=none を指定すると、これらの命令の生成を無効にします。-fma=fused を指定すると、コンパイラは浮動小数点の積和演算 (FMA) 命令を使用して、コードのパフォーマンスを改善する機会を検出しようとします。

デフォルトは -fma=none です。

積和演算命令を生成するための最低限のアーキテクチャーの要件は、SPARC では -xarch=sparcfmaf、x86 では -xarch=avx2 です。積和演算 (FMA) 命令をサポートしていないプラットフォームでプログラムが実行されないようにするため、コンパイラは積和演算 (FMA) 命令を生成する場合、バイナリプログラムにマーク付けをします。最低限のアーキテクチャーが使用されていない場合、-fma=fused は無効になります。

積和演算 (FMA) 命令により、積と和の間で中間の丸め手順が排除されます。その結果、-fma=fused を指定してコンパイルしたプログラムは、精度は減少ではなく増加する傾向にありますが、異なる結果になることがあります。

B.2.24 -fnonstd

このオプションは、-fns および -ftrap=common 用のマクロです。

B.2.25 -fns[={no|yes}]

SPARC プラットフォームでは、このオプションは標準でない浮動小数点モードを有効にします。

x86 プラットフォームの場合、このオプションは SSE flush-to-zero モードを選択し、使用可能な場合には denormals-are-zero モードを選択します。これにより、非正規数の結果がゼロに切り捨てられ、使用可能な場合には、非正規化数のオペランドもゼロとして扱われます。このオプションは、SSE や SSE2 命令セットを利用しない従来の x86 浮動小数点演算には影響しません。

デフォルトは -fns=no (標準浮動小数点モード) です。-fns は -fns=yes と同じです。

オプションの =yes または =no を使用すると、-fast のように、-fns を含むほかのマクロフラグに続く -fns フラグを切り替えることができます。

一部の SPARC システムでは、非標準の浮動小数点モードは「段階的アンダーフロー」を無効にします。つまり、小さな結果は、非正規数にはならず、ゼロに切り捨てられます。また、非正規オペランドはメッセージなしにゼロに変更されます。このような SPARC システムでは、ハードウェアの段階的アンダーフローや非正規数がサポートされておらず、このオプションを使用するとプログラムのパフォーマンスを著しく改善することができます。

非標準モードを有効にすると、浮動小数点演算は IEEE 754 規格に準拠しない結果を生成する場合があります。詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: 数値計算ガイド』を参照してください。

SPARC システムでは、このオプションはメインプログラムのコンパイル時に使用される場合にのみ有効です。

B.2.26 -fopenmp

`-xopenmp=parallel` と同じです。

B.2.27 -fPIC

`-KPIC` と同等です。

B.2.28 -fpic

`-Kpic` と同等です。

B.2.29 -fprecision=*p*

`-fprecision={single, double, extended}`

(x86) 浮動小数点制御ワード内の丸め精度モードビットを、それぞれ単精度 (24 ビット)、倍精度 (53 ビット)、拡張精度 (64 ビット) に初期化します。デフォルトの浮動小数点丸め精度モードは拡張モードです。

x86 では、浮動小数点丸め精度モードの設定は精度に対してのみ影響します。指数の有効範囲に対しては影響しません。

このオプションは、x86 システムでメインプログラムのコンパイル時に使用する場合にのみ有効で、64 ビット (`-m64`) または SSE2 対応 (`-xarch=sse2`) プロセッサでコンパイルする場合は無視されます。SPARC システムでも無視されます。

B.2.30 -fround=*r*

プログラム初期化中に、実行時に確立される IEEE 754 丸めモードを設定します。

r は、`nearest`、 `tozero`、`negative`、`positive` のいずれかです。

デフォルトは、-fround=nearest です。

ieee_flags サブルーチンと同義です。

r を tozero、negative、positive のいずれかにすると、プログラムが実行を開始するときに、丸め方向モードがそれぞれ、ゼロの方向に丸める、負の無限の方向に丸める、正の無限の方向に丸めるに設定されます。*r* が nearest のとき、あるいは -fround フラグを使用しないとき、丸め方向モードは初期値から変更されません (デフォルトは nearest)。

このオプションは、メインプログラムをコンパイルするときにだけ有効です。

B.2.31 -fsimple[=*n*]

オプティマイザが浮動小数点演算に関する前提事項を単純化することを許可します。

デフォルトは -fsimple=0 です。-fsimple を指定することは、-fsimple=1 と同等です。

n を指定する場合、0、1、2 のいずれかにしなければいけません。

表 45 -fsimple のフラグ

値	意味
-fsimple=0	前提事項の単純化を行えないようにします。IEEE 754 に厳密に準拠します。
-fsimple=1	若干の単純化を許可します。生成されるコードは、厳密には IEEE 754 に準拠していません。 -fsimple=1 では、オプティマイザは、次の点を前提にすることができます。 ■ IEEE 754 のデフォルトの丸めとトラップモードが、プロセスの初期化以後も変わらない。 ■ 潜在的な浮動小数点例外を除き、表示できない結果を生成する計算が削除される場合があります。 ■ オペランドとして無限大または非数を持つ計算は、結果に非数を反映する必要はありません。たとえば、x*0 は 0 に置き換えられることがあります。 ■ 演算はゼロの符号を区別しない。 -fsimple=1 では、オプティマイザは、丸めや例外を考慮せずに完全に最適化することは許可*されません*。特に、浮動小数点演算を、実行時に一定に保たれる丸めモードにおいて異なる結果を生成する浮動小数点演算と置き換えることはできません。
-fsimple=2	-fsimple=1 のすべての機能が含まれ、-xvector=simd が有効な場合に、SIMD 命令を使用して縮約を計算できるようにします。 コンパイラは積極的な浮動小数点演算の最適化を試み、この結果、丸めの変化によって、多くのプログラムが異なる数値結果を生じる可能性があります。たとえば、-fsimple2 を指定し、あるループ内に x/y の演算があった場合、x/y がループ内で少なくとも 1 回は必ず評価され、z=1/yで、ループの実行中に y と z が一定の値をとることが明らかである場合、オプティマイザは x/y の演算をすべて x*z で置き換えます。

-fsimple=2 であっても、オプティマイザは、通常であれば何も生成しないプログラムで浮動小数点例外を発生させることは許可されません。

最適化が精度に与える影響の詳細は、『*Techniques for Optimizing Applications: High Performance Computing*』(Rajat Garg と Ilya Sharapov 著) をお読みください。

B.2.32 -fsingle

(-Xt および -Xs モードのみ) デフォルトでは、-Xs と -Xt は float 式を double に拡張して倍精度で評価することで、これらの式に関する K&R C の規則に従います。-fsingle は、-Xs または -Xt を指定して、コンパイラに浮動小数点式を単精度として評価させる場合に使用します。

B.2.33 -fstore

(x86) 浮動小数点式または関数が、ある変数に代入されるか、より小さい型の浮動小数点にキャストされる場合に、コンパイラがその値をレジスタに残さないで、代入値の左側に表記される型に変換するようにします。丸めや切り上げによって、結果はレジスタの値から生成されるものと異なる可能性があります。これは、デフォルトのモードです。

このオプションを無効にするには、-nofstore フラグを使用します。

B.2.34 -ftrap=*t*[,*t*...]

SIGFPE ハンドラを組み込まずに、起動時に有効にする IEEE トラップモードの設定のみ行います。トラップの設定と SIGFPE ハンドラの組み込みを同時に行うには、ieee_handler(3M) か fex_set_handling(3M) を使用します。複数の値を指定すると、それらの値は左から右に処理されます。

t には、次の表に示す値のいずれかにできます。

表 46 -ftrap のフラグ

フラグ	意味
[no%]division	ゼロによる除算をトラップします。
[no%]inexact	正確でない結果をトラップします。
[no%]invalid	無効な演算をトラップします。
[no%]overflow	オーバーフローをトラップします。
[no%]underflow	アンダーフローをトラップします。
%all	前述のすべてをトラップします。

フラグ	意味
%none	前述のどれもトラップしません。
common	無効、ゼロ除算、オーバーフローをトラップします。

例に示すように、no% 接頭辞は、%all および common 値の意味を変更するためにのみ使用され、これらの値のいずれかと一緒に使用される必要があります。no% 接頭辞は、特定のトラップを明示的に無効にするものではありません。

-ftrap を指定しない場合、コンパイラは -ftrap=%none とみなします。

例: –ftrap=%all,no%inexact は、inexact を除くすべてのトラップを設定します。

-ftrap=*t* 付きで 1 つのルーチンを コンパイルする場合は、予期しない結果を避けるために、プログラムのすべてのルーチンを同じオプションでコンパイルしてください。

-ftrap=inexact のトラップは慎重に使用してください。-ftrap=inexact では、浮動小数点の値が正確でないとトラップが発生します。たとえば、次の文ではこの条件が発生します。

```
x = 1.0 / 3.0;
```

このオプションは、メインプログラムをコンパイルするときにだけ有効です。このオプションを使用する際には注意してください。IEEE トラップを有効にするには、-ftrap=common を使用します。

B.2.35 -G

動的にリンクされた実行可能ファイルではなく、共有オブジェクトを生成します。このオプションは ld(1) に渡され、-dn オプションと一緒に使用できません。

-G オプションを使用すると、コンパイラはデフォルトの -l オプションを ld に渡しません。共有ライブラリを別の共有ライブラリに依存させる場合は、必要な -l オプションをコマンド行に渡す必要があります。

コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションと -G オプションを組み合わせて共有ライブラリを作成した場合は、生成された共有オブジェクトとのリンクでも、必ず同じオプションを指定してください。

共有オブジェクトを作成するときは、-m64 付きでコンパイルされるすべての 64 ビット SPARC オブジェクトファイルも、-xcode[=v]で説明するように、明示的な 278 ページの「-xcode[=*v*]」値付きでコンパイルする必要があります。

B.2.36 -g

-g[*n*] を参照してください。

B.2.37 -g[*n*]

dbx(1) とパフォーマンスアナライザ analyzer(1) によるデバッグのために、追加のシンボルテーブル情報を生成します。

-xO3 以下の最適化レベルで -g を指定すると、ほとんど完全な最適化と可能なかぎりのシンボル情報を取得することができます。末尾呼び出しの最適化とバックエンドのインライン化は無効です。

-xO4 以下の最適化レベルで -g を指定すると、完全な最適化と可能なかぎりのシンボル情報が得られます。

-g オプションでコンパイルすると、パフォーマンスアナライザの機能をフルに利用できます。一部のパフォーマンス分析機能は -g を必要としませんが、注釈付きのソースコード、一部の関数レベルの情報、およびコンパイラの注釈メッセージを確認するには、-g でコンパイルする必要があります。詳細は、analyzer(1) のマニュアルページおよび『Oracle Developer Studio 12.5: パフォーマンスアナライザ』を参照してください。

-g オプションで生成される注釈メッセージは、プログラムのコンパイル時にコンパイラが実行した最適化と変換について説明します。メッセージを表示するには、er_src(1) コマンドを使用します。これらのメッセージはソースコードでインタリーブされます。

注記 - プログラムを個別の手順でコンパイルしてリンクする場合、–g オプションを一方の手順に含め、もう一方の手順から除外してもプログラムの正確さには影響しませんが、プログラムのデバッグ機能に影響します。–g を付けてコンパイルしないけれども、–g を付けてリンクされるモジュールは、デバッグのために適切に準備されません。関数 main を含むモジュールを –g オプション付きでコンパイルすることは通常、デバッグのために必要です。

-g は、さまざまなよりプリミティブなオプションに展開されるマクロとして実装されます。展開の詳細については、-xdebuginfo を参照してください。

-g	標準のデバッグ情報を生成します。
-gnone	デバッグ情報は生成されません。これはデフォルト値です。
-g1	事後デバッグの際に重要と思われるファイル、行番号、および簡単なパラメータ情報を生成します。
-g2	-g と同じです。
-g3	追加のデバッグ情報 (現在はマクロの定義情報のみで構成されます) を生成します。この追加情報により、-g のみを使用したコンパイルと比較して、結果の .o および実行可能ファイルのデバッグ情報のサイズが増える可能性があります。

デバッグの詳細は、『*dbx コマンドによるデバッグ*』を参照してください。

B.2.38 -H

現在のコンパイルでインクルードされたファイルのパス名を 1 行に 1 つずつ標準エラーに出力します。表示は、どのファイルがほかのファイルにインクルードされるかを示すためにインデントされます。

次の例では、プログラム `sample.c` はファイル `stdio.h` と `math.h` をインクルードします。`math.h` はファイル `floatingpoint.h` をインクルードし、これ自体が `sys/ieeefp.h` を使用する関数をインクルードします。

```
% cc -H sample.c
    /usr/include/stdio.h
    /usr/include/math.h
        /usr/include/floatingpoint.h
            /usr/include/sys/ieeefp.h
```

B.2.39 -h *name*

共有動的ライブラリに、異なったバージョンのライブラリを持つように名前を割り当てます。*name* は、`-o` オプションで指定されるものと同じファイル名にしてください。`-h` と *name* の間の空白は任意です。

リンカーは指定された *name;* をライブラリに割り当て、この名前をライブラリの*イントリンシック*名としてライブラリファイルに記録します。`-h`*name;* オプションがない場合、イントリンシック名はライブラリファイルに記録されません。

実行時リンカーはライブラリを実行可能ファイルにロードするとき、組み込み名をライブラリファイルから実行可能ファイルが必要とする共有ライブラリファイルのリストにコピーします。実行可能ファイルはこのリストを持っています。共有ライブラリの組み込み名が提供されない場合、リンカーは代わりに共有ライブラリファイルのパスをコピーします。

B.2.40 -I[- | *dir*]

`-I` *dir* は、相対ファイル名、つまり、/ (スラッシュ) から始まらないディレクトリパスを持つ `#include` ファイルを検索するディレクトリのリスト内の `/usr/include` の前に `dir` を追加します。

複数の `-I` オプションが指定された場合は、指定された順序でディレクトリが調べられます。

コンパイラの検索パターンの詳細については、58 ページの「-I- オプションによる検索アルゴリズムの変更」を参照してください。

B.2.41 -i

オプションをリンカーへ渡して、LD_LIBRARY_PATH または LD_LIBRARY_PATH_64 の設定を無視します。

B.2.42 -include *filename*

このオプションを指定すると、コンパイラは *filename* を、主要なソースファイルの 1 行目に記述されているかのように #include プリプロセッサ指令として処理します。ソースファイル t.c の考慮:

```
main()
{
   ...
}
```

t.c を **cc -include t.h t.c** コマンドを使用してコンパイルする場合は、ソースファイルに次の内容が含まれているかのようにコンパイルが進行します。

```
#include "t.h"
main()
{
   ...
}
```

コンパイラが *filename* を最初に検索するのは、ファイルが明示的にインクルードされる場合のように、main ソースファイルが含まれるディレクトリではなく、現在の作業ディレクトリです。たとえば、次のディレクトリ構造では、同じ名前を持つ 2 つのヘッダーファイルが異なる場所に存在しています。

```
foo/
   t.c
   t.h
   bar/
     u.c
     t.h
```

作業ディレクトリが foo/bar であり、**cc ../t.c -include t.h** コマンドを使用してコンパイルする場合は、コンパイラによって foo/bar ディレクトリから取得された t.h がインクルードされますが、ソースファイル t.c 内で #include 指令を使用した場合の foo/ ディレクトリとは異なります。

-include で指定されたファイルをコンパイラが現在の作業ディレクトリ内で見つけることができない場合は、コンパイラは通常のディレクトリパスでこのファイルを検索します。複数の -include オプションを指定する場合は、コマンド行で表示される順にファイルがインクルードされます。

B.2.43 -KPIC

(SPARC) 廃止。このオプションは使わないでください。代わりに `-xcode=pic32` を使用してください。

詳細は、278 ページの「-xcode[=v]」を参照してください。226 ページの「廃止オプション」に、廃止のオプションの全一覧をまとめています。

(x86) `-KPIC` は `-Kpic` と同じです。

B.2.44 -Kpic

(SPARC) 廃止。このオプションは使わないでください。代わりに `-xcode=pic13` を使用してください。詳細は、278 ページの「-xcode[=v]」を参照してください。226 ページの「廃止オプション」に、廃止のオプションの全一覧をまとめています。

(x86) 位置独立コードを生成します。このオプションは、共有ライブラリを構築するためにソースファイルをコンパイルするときに使用します。大域データへの各参照は、大域オフセットテーブルにおけるポインタの間接参照として生成されます。各関数呼び出しは、手続きリンケージテーブルを通して PC 相対アドレス指定モードで生成されます。

B.2.45 -keeptmp

コンパイル中に作成される一時ファイルを自動的に削除しないで保持します。

B.2.46 -L*dir*

`ld`(1) がライブラリを検索するディレクトリのリストに *dir* を付け加えます。このオプションとその引数は `ld`(1) に渡されます。

注記 - コンパイラインストール領域 (`/usr/include`、`/lib`、または `/usr/lib`) を検索ディレクトリとして指定しないでください。

B.2.47 -l*name*

オブジェクトライブラリ`lib` *name*`.so` または `lib`*name* `.a` をリンクの対象とします。シンボルは左から右へ解決されるため、コマンドでのライブラリの順序は重要です。

このオプションは*ソースファイル*引数のあとに指定してください。

B.2.48 -library=sunperf

Oracle Developer Studio パフォーマンスライブラリとリンクします。

B.2.49 -m32|-m64

コンパイルされたバイナリオブジェクトのデータ型モデルを指定します。

-m32 を使用すると、32 ビット実行可能ファイルと共有ライブラリが作成されます。-m64 を使用すると、64 ビット実行可能ファイルと共有ライブラリが作成されます。

-m32 を使用してコンパイルされたオブジェクトファイルまたはライブラリを、-m64 を使用してコンパイルされたオブジェクトファイルまたはライブラリにリンクすることはできません。

-m64 を使用して、大量の静的データを含むアプリケーションをコンパイルするときは、-xmodel=medium も必要になることがあります。一部の Oracle Linux プラットフォームは medium モデルをサポートしていないので注意してください。

-m32|-m64 を指定してコンパイルしたモジュールは、-m32 |-m64 を指定してリンクする必要があります。219 ページの「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションの一覧をまとめています。

Oracle Solaris では、-m32 がデフォルトです。Oracle Linux システムでは、-m64 がデフォルトです。

-xarch の説明も参照してください。

B.2.50 -mc

オブジェクトファイルの .comment セクションから重複している文字列を削除します。-mc フラグを使用すると、mcs -c が起動されます。

B.2.51 -misalign

(SPARC) 廃止。このオプションは使わないでください。代わりに -xmemalign=1i オプションを使ってください。詳細は、306 ページの「-xmemalign=*ab*」を参照してください。226 ページの「廃止オプション」に、廃止のオプションの全一覧をまとめています。

B.2.52 -misalign2

(SPARC) 廃止。このオプションは使わないでください。代わりに -xmemalign=2i オプションを使ってください。詳細は、306 ページの「-xmemalign=*ab*」を参照してください。226 ページの「廃止オプション」に、廃止のオプションの全一覧をまとめています。

B.2.53 -mr[,*string*]

-mr は、.comment セクションからすべての文字を削除します。このフラグを使用すると、mcs -d -a が呼び出されます。

-mr, *string* はオブジェクトファイルの .comment セクションからすべての文字列を削除して、*string* を挿入します。*string* に空白が含まれている場合は二重引用符で囲みます。*string* がなければ .comment セクションは空になります。このオプションは -d -*string* として mcs に渡されます。

B.2.54 -mt[={yes|no}]

マルチスレッド化コードをコンパイルしてリンクするには、このオプションを使用します。

このオプションは -D_REENTRANT をプリプロセッサに渡します。

-mt=yes は、コンパイラのデフォルトの動作です。-mt は -mt=yes と同等です。この動作が望ましくない場合は、オプション -mt=no を使用してください。

-xopenmp オプションおよび -xautopar オプションには -mt=yes が自動的に含まれます。

一貫してこのオプションを使用します。-mt を使用して 1 つの変換ユニットをコンパイルおよびリンクする場合は、-mt を指定してプログラムのすべてのユニットをコンパイルおよびリンクする必要があります。

どのシステムサポートライブラリがデフォルトでリンクされるかを確認するには、-dryrun オプションでコンパイルします。

309 ページの「-xnolib」、Oracle Solaris『Multithreaded Programming Guide』、および『Oracle Solaris 11.3 リンカーとライブラリガイド』も参照してください。

B.2.55 -native

このオプションは、-xtarget=native と同義です。

B.2.56 -nofstore

(x86) 浮動小数点式または関数が変数に代入されるか、より短い浮動小数点型にキャストされるときに、その式または関数の値を代入の左辺の型に変換しません。代わりに、値をレジスタに残します。244 ページの「-fstore」も参照してください。

B.2.57 -O

デフォルトの最適化レベルの -xO3 を使ってください。-O マクロは -xO3 に展開されます。

-xO3 最適化レベルがより高い実行時パフォーマンスを生み出します。ただし、あらゆる変数が自動的に volatile と見なされることに依存するプログラムの場合、これは不適切なことがあります。この前提を持つ典型的なプログラムは、独自の同期処理プリミティブを実装するデバイスドライバや古いマルチスレッドアプリケーションです。回避策は、-O ではなく、-xO2 でコンパイルすることです。

B.2.58 -o *filename*

デフォルトの a.out ではなく、出力ファイル *filename* を指定します。コンパイラはソースファイルを上書きしないため、*filename* を入力ソースファイルと同じにできません。

filename は適切な接尾辞を持つ必要があります。–c とともに使用すると、*filename* はターゲット .o オブジェクトファイルを指定します。–G とともに使用すると、ターゲット .so ライブラリファイルを指定します。このオプションとその引数はリンカー ld に渡されます。

B.2.59 -P

ソースファイルのプリプロセッサ処理のみを行います。.i 接尾辞の付いたファイルに結果を出力します。-E オプションと異なり、出力ファイルに C のプリプロセッサ行番号付け情報は含まれません。-E オプションも参照してください。

B.2.60 -p

このオプションは廃止されました。代わりに 322 ページの「-xpg」を使用してください。

B.2.61 –pedantic{=[yes|no]}

非 ANSI 構文に対するエラー/警告に厳密に準拠します。有効な ANSI 標準を指定するために -std フラグを使用できます。-Xc、-Xa、-Xt、-Xs、および -xc99 フラグは、-pedantic フラグとともに指定できません。一緒に指定するとコンパイラによってエラーが発行されます。

-pedantic が指定されていない場合のデフォルトは -pedantic=no です。

-pedantic は -pedantic=yes と同義です。

B.2.62 –preserve_argvalues[=simple|none|complete]

(x86) レジスタベースの関数の引数のコピーをスタックに保存します。

コマンド行に none を指定した場合、または -preserve_argvalues オプションを指定しない場合、コンパイラは通常どおりに動作します。

simple を指定した場合、最大で 6 つの整数引数が保存されます。

complete を指定した場合、スタックトレース内のすべての関数引数の値は、適切な順序でユーザーに表示されます。

仮引数に割り当てられている関数の有効期間中、値は更新されません。

B.2.63 –Qoption *phase option*[,*option..*]

option をコンパイル*段階*に渡します。

複数のオプションを渡すには、コンマで区切って指定します。-Qoption でコンポーネントに渡されるオプションは、順序が変更されることがあります。ドライバが認識するオプションは、正しい順序に保持されます。ドライバがすでに認識しているオプションに、-Qoption は使わないでください。

phase は、次のリスト内のいずれかの値にできます。

acomp	コンパイラ
cg	コードジェネレータ (SPARC)
cpp	プリプロセッサ
driver	cc ドライバ

fbe	アセンブラ
ipo	内部手続きオプティマイザ
previse	静的なエラーチェック
iropt	オプティマイザ
ld	リンクエディタ (ld)
mcs	mcs — –mc または –mr が指定されたとき、オブジェクトファイルのコメントセクションを操作します。
postopt	ポストオプティマイザ
ube	コードジェネレータ (x86)

同等の機能を提供する –W*c*, *arg* も参照してください。–Qoption は、ほかのコンパイラとの互換性のために提供されています。

B.2.64 -Q[y|n]

出力ファイルに識別情報を出力するかどうかを決定します。-Qy がデフォルトです。

-Qy を指定すると、起動した各コンパイラツールの識別情報が出力ファイルの .comment 部分に追加され、mcs でのアクセスが可能になります。これはソフトウェア管理に役立ちます。

-Qn を指定すると、この情報が抑制されます。

B.2.65 -qp

-pと同じです。

B.2.66 -R*dir*[:*dir*]

コロンで区切られたディレクトリのリストを、ライブラリ検索ディレクトリとして、実行時リンカーに渡します。ディレクトリリストが存在していて null でない場合は、出力オブジェクトファイルに記録され、実行時リンカーに渡されます。

LD_RUN_PATH と -R オプションの両方が指定されたときは、この -R オプションが優先されます。

B.2.67 -S

cc に対して、アセンブリソースファイルを作成するけれども、プログラムをアセンブルまたはリンクしないように指示します。アセンブラ言語出力は、接尾辞が .s の対応するファイルに書き込まれます。

B.2.68 -s

出力されるオブジェクトファイルからシンボリックデバッグのための情報をすべて削除します。このオプションは、-g とともに指定することはできません。

ld(1) に渡します。

B.2.69 -staticlib=[no%]sunperf

-library=sunperf とともに使用すると、-staticlib=sunperf は Sun パフォーマンスライブラリと静的にリンクします。デフォルトの場合、および -library=no%sunperf を指定すると、-library=sunperf は Sun パフォーマンスライブラリと動的にリンクします。

CC との互換性のため、%all および %none も -staticlib で受け入れられる値です (%all は sunperf と同等であり、%none は no%sunperf と同義です)。

B.2.70 -std=*value*

C 言語規格の選択フラグ。

value は必須であり、次のいずれかとして定義します。

c89	受け入れられる C ソース言語は、ISO C90 標準で定義されたものです。
c99	受け入れられる C ソース言語は、ISO C99 標準で定義されたものです。
c11	受け入れられる C ソース言語は、ISO C11 標準で定義されたものです。

-std のデフォルトは c11 です。

フラグ -Xc、-Xa、-Xt、または -xtransition のいずれかを指定すると、-std のデフォルトは無効になり、コンパイラではデフォルトで -xc99=all,no_lib が指定されます。-Xs を指定す

ると、-std のデフォルトは無効になり、コンパイラではデフォルトで -xc99=none が指定されます。-xc99 を指定すると、-std のデフォルトは無効になり、コンパイラは -xc99 フラグの指定を受け入れます。

-std フラグを指定した場合、-Xc、-Xa、-Xt、-Xs、および -xc99 フラグは使用できません。一緒に指定するとコンパイラによってエラーが発行されます。

コンパイルとリンクを別々に行う場合は、両方の手順で同じ -std フラグの値を使用する必要があります。

B.2.71 -temp=*path*

一時ファイルのディレクトリを定義します。

このオプションは、コンパイル中に生成される一時ファイルを格納するディレクトリのパス名を指定します。コンパイラは -temp によって設定された値を、TMPDIR の値より優先します。

B.2.71.1 関連項目

-keeptmp

B.2.72 -traceback[={%none|common|*signals_list*}]

実行時に重大エラーが発生した場合にスタックトレースを発行します。

-traceback オプションを指定すると、プログラムによって特定のシグナルが生成された場合に、実行可能ファイルで stderr へのスタックトレースが発行されて、コアダンプが実行され、終了します。複数のスレッドが 1 つのシグナルを生成すると、スタックトレースは最初のスレッドに対してのみ生成されます。

追跡表示を使用するには、リンク時に -traceback オプションをコンパイラコマンド行に追加します。このオプションはコンパイル時にも使用できますが、実行可能バイナリが生成されない場合無視されます。-traceback を -G とともに使用して共有ライブラリを作成すると、エラーが発生します。

表 47 -traceback のオプション

オプション	意味
common	sigill、sigfpe、sigbus、sigsegv、または sigabrt の共通シグナルのいずれかのセットが発生した場合にスタックトレースを発行するべきであることを指定します。
signals_list	スタックトレースを生成するべきシグナルの名前のコンマ区切りのリスト (小文字) を指定します。コアファイルの生成の原因となる、sigquit、sigill、sigtrap、sigabrt、

オプション	意味
	sigemt、sigfpe、sigbus、sigsegv、sigsys、sigxcpu、sigxfsz の各シグナルをキャッチできます。 これらのシグナルの前に no% を指定すると、そのシグナルのキャッチが無効になります。 たとえば、**-traceback=sigsegv,sigfpe** と指定すると、sigsegv または sigfpe が発生した場合にスタックトレースとコアダンプが生成されます。
%none または none	トレースバックを無効にします。

このオプションを指定しない場合、デフォルトは -traceback=%none になります。

= 記号を指定せずに、-traceback だけを指定すると、-traceback=common と同義になります。

コアダンプが必要ない場合は、次のように coredumpsize 制限を 0 に設定します。

```
% limit coredumpsize 0
```

-traceback オプションは、実行時のパフォーマンスに影響しません。

B.2.73 -U*name*

プリプロセッサシンボル *name;* の定義を削除します。このオプションは、同じコマンド行で -D で作成されたプリプロセッサシンボル *name* の初期定義を削除します。コマンド行ドライバでそこに配置されたものも含みます。

-U は、ソースファイルのプリプロセッサ指令に影響しません。コマンド行に複数の -U オプションを配置できます。

コマンド行で -D と -U の両方に同じ *name* が指定された場合、オプションの配置順に関係なく、*name* は未定義になります。次の図で、-U は __sun の定義のを削除します。

```
cc -U__sun text.c
```

test.c の次の書式のプリプロセッサ文は、__sun の定義が削除されているために有効になりません。

```
#ifdef(__sun)
```

定義済みシンボルのリストについては、233 ページの「-D*name*[(*arg*[,*arg*])][=*expansion*]」を参照してください。

B.2.74 -v

コンパイラの実行時に cc によって各コンポーネントの名前とバージョン番号を出力します。

B.2.75 -v

より厳しい意味検査およびほかの lint に似た検査を行います。たとえば、次のコードは支障なくコンパイルおよび実行されます。

```
#include <stdio.h>
main(void)
{
     printf("Hello World.\n");
}
```

-v オプションを指定した場合も、コンパイルされます。ただし、コンパイラは次の警告を表示します。

```
"hello.c", line 5: warning: function has no return statement:
 main
```

-v は lint(1) が発する警告をすべて表示するわけではありません。lint を通して前の例を実行することにより、違いを確認できます。

B.2.76 -W*c*,*arg*

指定されたコンパイラコンポーネント *c* に、*arg* を渡します。コンポーネントのリストについては、表1「C コンパイルシステムのコンポーネント」を参照してください。

引数は前の引数からコンマでのみ区切る必要があります。すべての -W 引数は、残りのコマンド行引数のあとに渡されます。コンマを引数の一部として含めるには、コンマの直前にエスケープ文字 \ (バックスラッシュ) を使用します。すべての -W arg は、通常のコマンド行引数のあとに渡されます。

たとえば、-Wa,-o,objfile は、-o と objfile をこの順番でアセンブラに渡します。また、-Wl,-I,*name;* を指定すると、リンク段階で動的リンカー /usr/lib/ld.so.1 のデフォルト名がオーバーライドされます。

引数がツールに渡される順序は、ほかに指定されるコマンド行オプションとの関係で、今後のコンパイラリリースで変更される可能性があります。

c に使用できる値の一覧を次の表に示します

表 48 -W のフラグ

フラグ	意味
a	アセンブラ : (fbe); (gas)
c	C コードジェネレータ : (cg) *(SPARC)* ;
d	cc ドライバ

フラグ	意味
l	リンクエディタ (ld)
m	mcs
O (大文字の o)	内部手続きオプティマイザ
o (小文字の o)	ポストオプティマイザ
p	プリプロセッサ (cpp)
u	C コードジェネレータ (ube) (*x86*)
0 (ゼロ)	コンパイラ (acomp)
2	オプティマイザ: (iropt)
3	静的なエラーチェック: (previse)

-Wd を使用して cc のオプションを c コンパイラに渡すことはできません。

B.2.77 -w

コンパイラからの警告メッセージを出力しません。

このオプションは、オプション -erroff=%all と同等です。

B.2.78 -X[c|a|t|s]

-std または -xlang フラグを指定した場合、-Xc、-Xa、-Xt、および -Xs フラグは使用できません。

-std フラグを使用しない場合、 -X (大文字の X である点に注意) オプションは 1990 および 1999 ISO C 規格に準拠する度合いを指定します。-xc99 の値により、-X オプションが適用される ISO C 規格のバージョンが異なります。-xc99 オプションは、デフォルトでは -xc99=all になっています。この場合は、1999 ISO/IEC C 規格のサブセットをサポートします。-xc99=none を指定した場合は、1990 ISO/IEC C 規格をサポートします。サポートされている 1999 ISO/IEC の機能については、「D.1」を参照してください。ISO/IEC C と K&R C の相違点については、「付録 H」を参照してください。

コンパイラのデフォルトモードは、-pedantic フラグのない -std=c11 です。-xc99 フラグが指定されているかまたは有効な場合、-Xa がコンパイラのデフォルトモードになります。

-Xc　(c = conformance) ISO C にない言語構造を使用しているプログラムに対してエラーや警告を発行します。このオプションは、K&R C 互換性拡張機能なしで、ISO C に厳格に準拠しています。

-Xa
: ISO C に K&R C 互換性拡張機能を加え、ISO C により求められる意味の変更を含めたものです。K&R C と ISO C が同じ構造体に異なる意味を指定している場合、コンパイラは ISO C の解釈を使用します。-Xa オプションを -xtransition オプションと併せて使用すると、異なる意味論に関する警告が出力されます。

-Xt (廃止)
: (t = transition) -Xt オプションは、将来のリリースで削除される予定です。適切なビルドおよびコンパイルに -Xt が必要になる C コードは、少なくとも ISO C 標準の C99 ダイアレクトに準拠するように、つまり -std=c99 でコンパイルできるように移行することをお勧めします。

このオプションは、ISO C に必要な意味の変更*なしで*、ISO C に加えて K&R C 互換性拡張機能を使用します。K&R C と ISO C が同じ構文に対して異なるセマンティクスを指定している場合、コンパイラは K&R C の解釈を使用します。-Xt オプションを -xtransition オプションとともに使用すると、異なる意味論に関する警告が出力されます。

-Xs (廃止)
: (s = K&R C) -Xs オプションには、将来のリリースで -E が必要になります。適切なビルドおよびコンパイルに -Xs が必要になる C コードは、少なくとも ISO C 標準の C99 ダイアレクトに準拠するように、つまり -std=c99 でコンパイルできるように移行することをお勧めします。

ISO C と K&R C で動作が異なるすべての言語構造に関して警告しようとします。コンパイラ言語には、K&R C と互換性のあるすべての機能が含まれています。このオプションは、前処理のために cpp を呼び出します。

B.2.79 -x386

(x86) 廃止。このオプションは使わないでください。代わりに、-xchip=generic を使用してください。226 ページの「廃止オプション」に、廃止のオプションの全一覧をまとめています。

B.2.80 -x486

(x86) 廃止。このオプションは使わないでください。代わりに、-xchip=generic を使用してください。226 ページの「廃止オプション」に、廃止のオプションの全一覧をまとめています。

B.2.81 -Xlinker *arg*

arg をリンカー ld(1) に渡します。

B.2.82 -xaddr32[=yes|no]

(*Oracle Solaris x86/x64 のみ*) -xaddr32=yes コンパイルフラグは、結果として得られる実行可能ファイルまたは共有オブジェクトを 32 ビットアドレス空間に制限します。

この方法でコンパイルする実行可能ファイルは、32 ビットアドレス空間に制限されるプロセスを作成する結果になります。

-xaddr32=no を指定する場合は、通常の 64 ビットバイナリが作成されます。

-xaddr32 オプションを指定しないと、-xaddr32=no が想定されます。

-xaddr32 だけを指定すると、-xaddr32=yes が想定されます。

このオプションは、-m64 コンパイルのみ、および SF1_SUNW_ADDR32 ソフトウェア機能をサポートしている Oracle Solaris プラットフォームのみに適用できます。Oracle Linux カーネルはアドレス空間の制限をサポートしていないため、このオプションは Oracle Linux では使用できません。

単一のオブジェクトファイルが -xaddr32=yes を指定してコンパイルされた場合は、出力ファイル全体が -xaddr32=yes を指定してコンパイルされたものと、リンク時に想定されます。

32 ビットアドレス空間に制限される共有オブジェクトは、制限された 32 ビットモードのアドレス空間内で実行されるプロセスから読み込む必要があります。

詳細は、『Oracle Solaris 11.3 リンカーとライブラリガイド』で説明されている SF1_SUNW_ADDR32 ソフトウェア機能の定義を参照してください。

B.2.83 -xalias_level[=*l*]

コンパイラで -xalias_level オプションを使用して、型に基づく別名の解析による最適化でのレベルを指定します。このオプションは、コンパイル対象の変換ユニットで、指定した別名レベルを有効にします。

-xalias_level コマンドを発行しない場合、コンパイラは -xalias_level=any を仮定します。値を設定しないで -xalias_level を指定する場合、デフォルトは -xalias_level=layout になります。

-xalias_level オプションを使用するには、-xO3 以上の最適化レベルが必要です。最適化がこれよりも低く設定されている場合は、警告が表示され、-xalias_level オプションは無視されます。

-xalias_level オプションを発行しても、別名レベルごとに記述されている規則と制限を遵守しない場合、プログラムが未定義の動作をします。

l を次の表のいずれかの用語で置き換えます。

表 49 別名明確化のレベル

フラグ	意味
any	コンパイラは、すべてのメモリー参照がこのレベルで別名設定できると仮定します。-xalias_level=any レベルで型に基づく別名分析は行われません。
basic	-xalias_level=basic オプションを使用する場合、コンパイラは、さまざまな C 言語基本型を呼び出すメモリー参照が相互に別名設定しないと仮定します。また、コンパイラは、ほかのすべての型への参照が C 言語基本型と同様に相互に別名設定できると仮定します。コンパイラは、char * を使用する参照がそのほかの型を別名設定できると仮定します。 たとえば、-xalias_level=basic レベルにおいて、コンパイラは、int * 型のポインタ変数が float オブジェクトにアクセスしないことを仮定します。そのため、コンパイラは、float * 型のポインタが int * 型のポインタで参照される同一メモリーを別名設定しないと仮定する最適化を安全に実行できます。
weak	-xalias_level=weak オプションを使用する場合、コンパイラは、任意の構造体ポインタが構造体の型にポイントできると仮定します。 コンパイルされるソースの式で参照されるか、コンパイルされるソースの外側から参照される型への参照を含む構造体または共用体は、コンパイルされるソースの式より先に宣言する必要があります。 この制限事項を遵守するには、コンパイルされるソースの式で参照されるオブジェクトの型を参照する型を含むプログラムの全ヘッダーファイルを取り込みます。 -xalias_level=weak レベルで、コンパイラは、さまざまな C 言語基本型に関連するメモリー参照が相互に別名設定しないと仮定します。コンパイラは、char * を使用する参照がそのほかの型に関連するメモリー参照を別名設定すると仮定します。
layout	-xalias_level=layout オプションを使用すると、コンパイラは、メモリー内に同一の型のシーケンスを保持する型に関連するメモリー参照が相互に別名設定できると仮定できます。 コンパイラは、メモリーで同一に見えない型を保持する 2 つの参照が相互に別名設定しないと仮定します。コンパイラは、構造体の初期メンバーがメモリーで同じに見える場合、さまざまな struct の型の別名を介して 2 つのメモリーがアクセスを実行すると仮定します。ただし、このレベルで、struct へのポインタを使用して、2 つの struct の間にあるメモリーで同じに見えるメンバーの一般的な初期シーケンスの外側にある類似しない struct オブジェクトのフィールドにアクセスすべきではありません。コンパイラは、そのような参照が相互に別名設定しないと仮定します。 -xalias_level=layout オプションを使用すると、コンパイラは、メモリー内に同一の型のシーケンスを保持する型に関連するメモリー参照が相互に別名設定できると仮定できます。コンパイラは、char * を使用する参照がそのほかの型に関連するメモリー参照を別名設定できると仮定します。
strict	-xalias_level=strict オプションを使用すると、コンパイラは、タグを削除したときに同一となるメモリー参照 (struct や union などの型に関連するもの) が相互に別名設定できると仮定します。逆に言えば、コンパイラは、タグを削除したあとも同一にならない型に関連するメモリー参照は相互に別名設定しないと仮定します。 ただし、コンパイルされるソースの式で参照されるか、コンパイルされるソースの外側から参照されるオブジェクトの一部となる型への参照を含む構造体または共用体の型は、コンパイルされるソースの式より先に宣言しなければいけません。 この制限事項を遵守するには、コンパイルされるソースの式で参照されるオブジェクトの型を参照する型を含むプログラムの全ヘッダーファイルを取り込みます。-xalias_level=strict レベルで、コンパイラは、さまざまな C 言語基本型に関連するメモリー参照が相互に別名設定しないと仮定します。コンパイラは、char * を使用する参照がそのほかの型を別名設定できると仮定します。
std	-xalias_level=std オプションを使用する場合、コンパイラは、型とタグが別名に対し同一でなくてはならないが、char * を使用する参照がそのほかの型を別名設定できると仮定します。この規則は、1999 ISO C 規格に記載されているポインタの参照解除についての制限事項と同じです。この

フラグ	意味
	規則を正しく使用するプログラムは移植性が非常に高く、最適化によって良好なパフォーマンスが得られるはずです。
strong	-xalias_level=strong オプションを使用する場合、std レベルと同じ規則が適用されますが、それに加えて、コンパイラは、型 char * のポインタを使用する場合にかぎり、型 char のオブジェクトにアクセスできると仮定します。また、コンパイラは、内部ポインタが存在しないと仮定します。内部ポインタは、struct のメンバーをポイントするポインタとして定義されます。

B.2.84 -xanalyze={code|%none}

(廃止) このオプションは、将来のリリースで削除される予定です。代わりに -xprevise を使用してください。

『Oracle Developer Studio 12.5: コードアナライザユーザーズガイド』を使用して表示できるソースコードの静的分析を生成します。

–xanalyze=code を指定してコンパイルし、別の手順でリンクするときは、リンク手順でも –xanalyze=code を含めてください。

デフォルトは –xanalyze=%none です。

Oracle Linux では、-xanalyze=code を -xannotate とともに指定する必要があります。

詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: コードアナライザユーザーズガイド』を参照してください。

B.2.85 -xannotate[=yes|no]

最適化ツールおよび可観測性ツール binopt(1)、 code-analyzer(1)、discover(1)、collect(1)、および uncover(1) によってあとで使用できるバイナリを作成します。

Oracle Solaris でのデフォルトは -xannotate=yes です。Oracle Linux でのデフォルトは -xannotate=no です。値なしで -xannotate を指定することは、-xannotate=yes と同義です。

最適化および監視ツールを最適に使用するためには、コンパイル時とリンク時の両方で -xannotate=yes が有効である必要があります。最適化および監視ツールを使用しないときは、-xannotate=no を指定してコンパイルおよびリンクすると、バイナリとライブラリが若干小さくなります。

B.2.86 –xarch=*isa*

対象となる命令セットアーキテクチャー (*ISA*) を指定します。

このオプションは、コンパイラが生成するコードを、指定した命令セットアーキテクチャーの命令だけに制限します。このオプションは、すべてのターゲットを対象とするような命令としての使用は保証しません。ただし、このオプションを使用するとバイナリプログラムの移植性に影響を与える可能性があります。

注記 - 目的のデータ型モデル LP64 (64 ビット) または ILP32 (32 ビット) を指定するには、それぞれ `-m64` または `-m32` オプションを使用します。下で示すように、以前のリリースとの互換性を除き、`-xarch` オプションはデータ型モデルを示さなくなりました。

別々の手順でコンパイルしてリンクする場合は、両方の手順に同じ `-xarch` の値を指定してください。

`_asm` 文を指定するときや、アーキテクチャー固有の命令を使用する `.il` インラインテンプレートファイルを使ってコンパイルするときは、コンパイルエラーを避けるために適切な `-xarch` 値を指定することが必要な場合があります。

B.2.86.1 SPARC および x86 用の -xarch フラグ

次の表は、SPARC プラットフォームと x86 プラットフォームの両方に共通する `-xarch` キーワードの一覧です。

表 50 SPARC および x86 プラットフォームに共通のフラグ

フラグ	意味
`generic`	ほとんどのプロセッサに共通の命令セットを使用します。これはデフォルト値です。
`native`	このシステムで良好なパフォーマンスを得られるようにコンパイルします。現在コンパイルしているシステムプロセッサにもっとも適した設定を選択します。

B.2.86.2 SPARC での -xarch のフラグ

次の表は、SPARC プラットフォームでの `-xarch` キーワードの説明です。

表 51 SPARC プラットフォーム用の `-xarch` フラグ

フラグ	意味
`sparc`	SPARC-V9 ISA 用のコンパイルを実行しますが、VIS (Visual Instruction Set) は使用せず、その他の実装に固有の ISA 拡張機能も使用しません。このオプションを使用して、コンパイラは、V9 ISA で良好なパフォーマンスが得られるようにコードを生成できます。
`sparcvis`	SPARC-V9 + VIS (Visual Instruction Set) version 1.0 + UltraSPARC 拡張機能用のコンパイルを実行します。このオプションを使用すると、コンパイラは、UltraSPARC アーキテクチャー上で良好なパフォーマンスが得られるようにコードを生成することができます。
`sparcvis2`	UltraSPARC アーキテクチャー + VIS (Visual Instruction Set) version 2.0 + UltraSPARC-III 拡張機能用のオブジェクトコードを生成します。
`sparcvis3`	SPARC VIS version 3 の SPARC-V9 ISA 用にコンパイルします。SPARC-V9 命令セット、VIS (Visual Instruction Set) version 1.0 を含む UltraSPARC 拡張機能、VIS (Visual

フラグ	意味
	Instruction Set) version 2.0、積和演算 (FMA) 命令、および VIS (Visual Instruction Set) version 3.0 を含む UltraSPARC-III 拡張機能の命令をコンパイラが使用できるようになります。
`sparcfmaf`	SPARC-V9 命令セット、VIS (Visual Instruction Set) version 1.0 を含む UltraSPARC 拡張機能、VIS (Visual Instruction Set) version 2.0 を含む UltraSPARC-III 拡張機能、および浮動小数点積和演算用の SPARC64 VI 拡張機能の命令をコンパイラが使用できるようになります。 `-xarch=sparcfmaf` は `fma=fused` と組み合わせて使用し、ある程度の最適化レベルを指定することで、コンパイラが自動的に積和命令の使用を試みるようにする必要があります。
`sparcace`	`sparcace` バージョンの SPARC-V9 ISA 用にコンパイルします。コンパイラが、SPARC-V9 命令セットに加えて、VIS (Visual Instruction Set) Version 1.0 を含む UltraSPARC 拡張機能、VIS (Visual Instruction Set) Version 2.0 を含む UltraSPARC-III 拡張機能、浮動小数点の積和演算用の SPARC64 VI 拡張機能、整数の積和演算用の SPARC64 VII 拡張機能、および ACE 浮動小数点用の SPARC64 X 拡張機能からの命令を使用できるようにします。
`sparcaceplus`	`sparcaceplus` バージョンの SPARC-V9 ISA 用にコンパイルします。コンパイラが、SPARC-V9 命令セットに加えて、VIS (Visual Instruction Set) Version 1.0 を含む UltraSPARC 拡張機能、VIS (Visual Instruction Set) Version 2.0 を含む UltraSPARC-III 拡張機能、浮動小数点の積和演算用の SPARC64 VI 拡張機能、整数の積和演算用の SPARC64 VII 拡張機能、SPARCACE 浮動小数点用の SPARC64 X 拡張機能、および SPARCACE 浮動小数点用の SPARC64 X+ 拡張機能からの命令を使用できるようにします。
`sparcima`	`sparcima` 版の SPARC-V9 ISA 用にコンパイルします。コンパイラが、SPARC-V9 命令セットに加えて、VIS (Visual Instruction Set) Version 1.0 を含む UltraSPARC 拡張機能、VIS (Visual Instruction Set) Version 2.0 を含む UltraSPARC-III 拡張機能、浮動小数点の積和演算用の SPARC64 VI 拡張機能、整数の積和演算用の SPARC64 VII 拡張機能からの命令を使用できるようにします。
`sparc4`	SPARC4 バージョンの SPARC-V9 ISA 用にコンパイルします。コンパイラが SPARC-V9 命令セットからの命令、さらに拡張機能 (VIS 1.0 を含む)、UltraSPARC-III 拡張機能 (VIS 2.0 を含む)、浮動小数点積和演算 (FMA) 命令、VIS 3.0、および SPARC4 命令を使用できるようになります。
`sparc4b`	SPARC4B バージョンの SPARC-V9 ISA 用にコンパイルします。コンパイラが、SPARC-V9 命令セットからの命令に加えて、VIS 1.0 を含む UltraSPARC 拡張機能、VIS 2.0 を含む UltraSPARC-III 拡張機能、浮動小数点の積和演算用の SPARC64 VI 拡張機能、整数の積和演算用の SPARC64 VII 拡張機能からの命令、および SPARC T4 拡張機能からの PAUSE および CBCOND 命令を使用できるようにします。
`sparc4c`	SPARC4C バージョンの SPARC-V9 ISA 用にコンパイルします。コンパイラが、SPARC-V9 命令セットからの命令に加えて、VIS 1.0 を含む UltraSPARC 拡張機能、VIS 2.0 を含む UltraSPARC-III 拡張機能、浮動小数点の積和演算用の SPARC64 VI 拡張機能、整数の積和演算用の SPARC64 VII 拡張機能、VIS 3.0 の VIS3B サブセットと呼ばれる SPARC T3 拡張機能のサブセットからの命令、および SPARC T4 拡張機能からの PAUSE および CBCOND 命令を使用できるようにします。
`sparc5`	SPARC5 バージョンの SPARC-V9 ISA 用にコンパイルします。コンパイラが SPARC-V9 命令セットからの命令、さらに拡張機能 (VIS 1.0 を含む)、Ultra SPARC-III 拡張機能 (VIS 2.0 を含む)、浮動小数点積和演算 (FMA) 命令、VIS 3.0、SPARC4、および SPARC5 命令を使用できるようになります。
`v9`	`-m64 -xarch=sparc` に相当します。`-xarch=v9` を使用して 64 ビットのデータ型モデルを取得する従来のメイクファイルやスクリプトは、`-m64` を使用するだけで十分です。
`v9a`	`-m64 -xarch=sparcvis` に相当し、以前のリリースとの互換性のために用意されています。
`v9b`	`-m64 -xarch=sparcvis2` に相当し、以前のリリースとの互換性のために用意されています。

また、次のことにも注意してください。

- generic、sparc、sparcvis2、sparcvis3、sparcfmaf、sparcima でコンパイルされたオブジェクトライブラリファイル (.o) をリンクして、一度に実行できます。ただし、リンクされているすべての命令セットをサポートしているプロセッサでのみ実行できます。
- 特定の設定で、生成された実行可能ファイルが実行されなかったり、従来のアーキテクチャーよりも実行速度が遅くなったりする場合があります。また、4 倍精度 (REAL*16 および long double) 浮動小数点命令は、これらの命令セットアーキテクチャーのいずれにも実装されないため、コンパイラは、そのコンパイラが生成したコードではそれらの命令を使用しません。

B.2.86.3 x86 での -xarch のフラグ

次の表に、x86 プラットフォームでの -xarch フラグを示します。

表 52 x86 での -xarch のフラグ

フラグ	意味
pentium_pro	命令セットを 32 ビット Pentium Pro アーキテクチャーに限定します。
pentium_proa	AMD 拡張機能 (3DNow!、3DNow! 拡張機能、および MMX 拡張機能) を 32 ビット pentium_pro アーキテクチャーに追加します。
sse	SSE 命令セットを pentium_pro アーキテクチャーに追加します。
ssea	AMD 拡張機能 (3DNow!、3DNow! 拡張機能、および MMX 拡張機能) を 32 ビット SSE アーキテクチャーに追加します。
sse2	SSE2 命令セットを pentium_pro アーキテクチャーに追加します。
sse2a	AMD 拡張機能 (3DNow!、3DNow! 拡張機能、および MMX 拡張機能) を 32 ビット SSE2 アーキテクチャーに追加します。
sse3	SSE3 命令セットを SSE2 命令セットに追加します。
sse3a	AMD 拡張命令 (3DNow! など) を SSE3 命令セットに追加します。
ssse3	SSSE3 命令セットで、pentium_pro、SSE、SSE2、および SSE3 の各命令セットを補足します。
sse4_1	SSE4.1 命令セットで、pentium_pro、SSE、SSE2、SSE3、および SSSE3 の各命令セットを補足します。
sse4_2	SSE4.2 命令セットで、pentium_pro、SSE、SSE2、SSE3、SSSE3、および SSE4.1 の各命令セットを補足します。
amdsse4a	AMD SSE4a 命令セットを使用します。
aes	Intel Advanced Encryption Standard 命令セットを使用します。
avx	Intel Advanced Vector Extensions 命令セットを使用します。
avx_i	RDRND、FSGSBASE、および F16C 命令セットとともに Intel Advanced Vector Extensions 命令セットを使用します。
avx2	Intel Advanced Vector Extensions 2 命令セットを使用します。
avx2_i	pentium_pro、SSE、SSE2、SSE3、SSSE3、SSE4.1、SSE4.2、AVX、AVX2 の命令セットを Broadwell 命令 (ADOX、ADCX、MULX、RDSEED、PREFETCHWT1) で補います。

プログラムのいずれかの部分が x86 プラットフォーム上で –m64 でコンパイルまたはリンクされる場合、プログラムのすべての部分もこれらのいずれかのオプションでコンパイルされる必要があります。各種 Intel 命令セットアーキテクチャー (SSE、SSE2、SSE3、SSSE3 など) の詳細は、http://www.intel.com にある Intel-64 および IA-32 の『*Intel Architecture Software Developer's Manual*』を参照してください。

23 ページの「x86 の特記事項」および 24 ページの「バイナリの互換性の妥当性検査」も参照してください。

B.2.86.4 相互の関連性

このオプションは単独で使用できますが、これは -xtarget オプションの拡張の一部であり、特定の -xtarget オプションによって設定された –xarch 値をオーバーライドするために使用できます。-xtarget=T3 は -xarch=sparcvis3 -xchip=T3 -xcache=8/16/4:6144/64/24 に展開されます。次のコマンドでは、-xarch=sparc4 は、-xtarget=T3 の展開で設定された -xarch=sparcvis3 をオーバーライドします。

```
example% cc -xtarget=T3 -xarch=sparc4 foo.c
```

B.2.86.5 警告

このオプションを最適化と併せて使用する場合、適切なアーキテクチャーを選択すると、そのアーキテクチャー上での実行パフォーマンスを向上させることができます。ただし、適切な選択をしなかった場合、パフォーマンスが著しく低下するか、あるいは、作成されたバイナリプログラムが目的のターゲットプラットフォーム上で実行できない可能性があります。

別々の手順でコンパイルしてリンクする場合は、両方の手順に同じ -xarch の値を指定してください。

B.2.87 -xatomic=*a*

どの不可分サポート実行時ライブラリがリンクされるかを指定します。

a には次のいずれかを指定します。

studio	Oracle Developer Studio とバンドルされている libstatomic ライブラリとリンクします。
gcc	/usr/lib 内の libatomic ライブラリとリンクします。
none	どの不可分サポートライブラリともリンクしません。

-latomic も -xatomic も指定されていない場合、-xatomic=none オプションがデフォルトです。

-latomic は自動的に -xatomic=studio に変換されます。

コマンド行での順序に関係なく、明示的な -xatomic オプションで -latomic の存在をオーバーライドする必要があります。-xatomic の設定が -latomic と競合する場合、警告メッセージが発せられます。

C コンパイラはデフォルトで不可分機能をサポートしますが、デフォルトで不可分実行時サポートライブラリとリンクしません。不可分機能を使用するには、-xatomic オプションを使用してプログラムを不可分実行時サポートライブラリとリンクする必要がある場合があります。

アプリケーションに適した不可分実行時ライブラリの選択の詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: C++ ユーザーズガイド』の「バンドルされている不可分ライブラリ」を参照してください。

B.2.88 -xautopar

注記 - このオプションは OpenMP の並列化命令を有効にしません。

ループの自動並列化を有効にします。依存性の解析 (ループの繰り返し内部でのデータ依存性の解析) およびループ再構成を実行します。最適化が -xO3 以上でない場合、最適化は -xO3 に引き上げられ、警告が出されます。

独自のスレッド管理を行なっている場合には、-xautopar を使用しないでください。

より高速な実行を実現するため、このオプションには、複数のハードウェアスレッドがあるシステムが必要です。使用するスレッドの数を指定するには、OMP_NUM_THREADS または PARALLEL 環境変数を使用します。これらの環境変数とそのデフォルト値については、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。

最高のパフォーマンスを得るため、並列領域の実行に使用するスレッドの数が、マシン上で使用できるハードウェアスレッド (仮想プロセッサ) の数を超えないようにしてください。Oracle Solaris システムでは、psrinfo (1M) コマンドを使用すると、この数を特定できます。Oracle Linux システムでは、この数は、ファイル /proc/cpuinfo を検査することによって特定できます。

-xautopar を使用し、コンパイルとリンクを 1 つの手順で行う場合は、リンクに OpenMP 実行時サポートライブラリ (libmtsk.so) とスレッドに対して安全な C 実行時ライブラリが自動的に含まれます。-xautopar を使用して別々にコンパイルし、リンクする場合、-xautopar でリンクする必要があります。表24「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションの全一覧をまとめています。

B.2.89 -xbinopt={prepare|off}

(SPARC) *このオプションは廃止されており、コンパイラの将来のリリースで削除される予定です。*263 ページの「-xannotate[=yes|no]」を参照してください。

コンパイラにあとで最適化、変換、および分析するためにバイナリを準備するように指示します。このオプションは、実行可能ファイルまたは共有オブジェクトの構築に使用できます。このオプションを有効にするには、最適化レベル -xO1 以上で使用する必要があります。このオプションを使用すると、構築したバイナリのサイズが少し増えます。

コンパイルとリンクを別々に行う場合は、両方の手順に -xbinopt を指定する必要があります。

```
example% cc -c -xO1 -xbinopt=prepare a.c b.c
example% cc -o myprog -xbinopt=prepare a.o
```

一部のソースコードがコンパイルに使用できない場合も、このオプションを使用してそのほかのコードがコンパイルされます。このとき、最終的なバイナリを作成するリンク手順で、このオプションを使用する必要があります。この場合、このオプションでコンパイルされたコードだけが最適化、変換、分析できます。

-xbinopt=prepare と -g を指定してコンパイルすると、デバッグ情報が取り込まれるので、実行可能ファイルのサイズが増えます。デフォルトは -xbinopt=off です。

詳細は、binopt(1) のマニュアルページを参照してください。

B.2.90 -xbuiltin[=(%all|%default|%none)]

標準ライブラリ関数を呼び出すコードの最適化を改善するには、-xbuiltin オプションを使用します。多くの標準ライブラリ関数 (math.h や stdio.h で定義されたものなど) は、さまざまなプログラムで一般的に使用されます。-xbuiltin オプションは、パフォーマンスに役立つ場合、コンパイラが組み込み関数やインラインシステム関数を置き換えることを許可します。コンパイラが実際に置換を行う関数を判断するために、オブジェクトファイル内のコンパイラコメントを読み取る方法については、er_src(1) のマニュアルページを参照してください。

これらの置換によって、errno の設定の信頼性が失われる場合があります。プログラムが errno の値に依存している場合、このオプションの使用は避けてください。54 ページの「errno の値の保持」も参照してください。

-xbuiltin=%default は、errno を設定しない関数のみをインライン化します。errno の値はどの最適化レベルでも常に正確であり、高い信頼度でチェックできます。-xbuiltin=%default が -xO3 以下の場合、コンパイラはどの呼び出しをインライン化すると役立つかを判断し、ほかのものはインライン化しません。-xbuiltin=%none オプションは、ライブラリ関数のすべての置換を無効にします。

-xbuiltin を指定しない場合、デフォルトは、最適化レベル -xO1 以上でコンパイルするときは -xbuiltin=%default、 -xO0 のときは -xbuiltin=%none です。引数なしで -xbuiltin を指定

する場合、デフォルトは -xbuiltin=%all で、コンパイラはより積極的に組み込み関数を置き換えたり、標準ライブラリ関数をインライン化したりします。

-fast を指定してコンパイルする場合は、-xbuiltin は %all になります。

注記 - -xbuiltin は、システムヘッダーファイルで定義された大域関数のみをインライン化し、ユーザーが定義した静的関数はインライン化しません。

B.2.91 -xCC

-std=c89 および -xCC を指定した場合は、コンパイラで C++ 形式のコメントが認識されます。このオプションを使用すると、// を使用してコメントの始まりを示すことができます。

B.2.92 -xc99[=*o*]

-xc99 オプションは、C99 規格 (『Programming Language - C (ISO/IEC 9899: 1999)』) からの実装機能に対するコンパイラの認識状況を制御します。

次の表に、*o* の許容値の一覧を示します。複数の値はコンマで区切ることができます。

表 53 -xc99 のフラグ

フラグ	意味
lib	(Oracle Solaris) 1990 と 1999 の両方の C 標準に現れるルーチンの 1999 C 標準ライブラリの意味を有効にします。no_lib は、1990 C 標準の意味を制限します。このフラグは、Linux には影響を与えません。
all	サポートされている C99 言語機能に認識可能にして、1990 C 規格と 1999 C 規格の両方にあるルーチンの 1999 C 標準ライブラリ意味処理を有効にします。
none	サポートされている C99 言語機能に認識不可にして、1990 C 規格と 1999 C 規格の両方にあるルーチンの 1999 C 標準ライブラリ意味処理を無効にします。

-xc99 を指定しない場合は、コンパイラではデフォルトで -xc99=all,no_lib が設定されます。値を指定しないで -xc99 を指定すると、オプションは -xc99=all に設定されます。

-std または -xlang フラグが指定されている場合、-xc99 フラグは使用できません。

B.2.93 -xcache[=*c*]

オプティマイザ用のキャッシュ特性を定義します。この定義によって、特定のキャッシュが使用されるわけではありません。

注記 - このオプションは単独で指定できますが、-xtarget オプションのマクロ展開の一部です。-xtarget オプションによって指定された値を変更するのが主な目的です。

オプションのプロパティー [/t*i*] は、キャッシュを共有できるスレッド数を設定します。t の値を指定しない場合のデフォルトは 1 です。

c には次のいずれかを指定します。

- generic
- native
- *s*1/*l*1/*a*1[/*t*1]
- *s*1/*l*1/*a*1[/*t*1]:*s*2/*l*2/*a*2[/*t*2]
- *s*1/*l*1/*a*1[/*t*1]:*s*2/*l*2/*a*2[/*t*2]:*s*3/*l*3/*a*3[/*t*3]

s、*l*、*a*、*t* の各特性の定義は次のとおりです。

si レベル *i* のデータキャッシュのサイズ (キロバイト単位)

li レベル *i* のデータキャッシュのラインサイズ (バイト単位)

ai レベル *i* のデータキャッシュの結合特性

ti レベル *i* でキャッシュを共有するハードウェアスレッドの数

次に、-xcache の値を示します。

表 54 -xcache のフラグ

フラグ	意味
generic	これはデフォルト値です。コンパイラに対して、ほとんどの x86 および SPARC プロセッサで良好なパフォーマンスが得られ、それらのすべてでパフォーマンスが大きく低下しないような、キャッシュプロパティーを使用するように指示します。 これらの最高のタイミング特性は、新しいリリースごとに、必要に応じて調整されます。
native	ホスト環境に対して最適化されたパラメータを設定します。
s1/*l1*/*a1*[/*t*1]	レベル 1 のキャッシュ特性を定義します。
s1/*l1*/*a1*[/*t*1]:*s2*/*l2*/*a2*[/*t*2]	レベル 1 と 2 のキャッシュ特性を定義します。
s1/*l1*/*a1*[/*t*1]:*s2*/*l2*/*a2*[/*t*2]: *s3*/*l3*/*a3*[/*t*3]	レベル 1、2、3 のキャッシュ特性を定義します。

例: -xcache=16/32/4:1024/32/1 では、次の内容を指定します。

- レベル 1 のキャッシュ:

- 16K バイト
- ラインサイズ 32 バイト
- 4 ウェイアソシアティブ

- レベル 2 のキャッシュ:
  - 1024 バイト
  - ラインサイズ 32 バイト
  - ダイレクトマッピングの結合規則

B.2.94 –xcg[89|92]

(SPARC) 廃止。このオプションは使わないでください。このオプションでコンパイルすると、現在の SPARC プラットフォームでの実行速度が遅いコードが生成されます。代わりに `-O` を使用して、`-xarch`、`-xchip`、および `-xcache` のコンパイラデフォルトを利用します。

B.2.95 -xchar[=*o*]

オプションこのオプションは、`char` 型が符号なしで定義されているシステムからのコードの移行を簡単にするためだけに提供されています。そのようなシステムからの移植以外では、このオプションは使用しないでください。`char` の符号に依存するコードだけは、`signed` または `unsigned` を明示的に指定するように書き直す必要があります。

次の表に、*o* の許容値の一覧を示します。

表 55 `-xchar` のフラグ

フラグ	意味
`signed`	char 型で定義された文字定数および変数を符号付きとして処理します。このオプションはコンパイル済みコードの動作に影響しますが、ライブラリルーチンの動作には影響しません。
`s`	`signed` と同義です。
`unsigned`	char 型で定義された文字定数および変数を符号なしとして処理します。このオプションはコンパイル済みコードの動作に影響しますが、ライブラリルーチンの動作には影響しません。
`u`	`unsigned` と同義です。

`-xchar` を指定しない場合は、コンパイラでは `-xchar=s` が指定されます。

`-xchar` を指定するけれども値を指定しない場合は、コンパイラは `-xchar=s` と見なします。

`-xchar` オプションは、`-xchar` でコンパイルしたコードでだけ、`char` 型の値の範囲を変更します。このオプションは、システムルーチンまたはヘッダーファイル内の `char` 型の値の範囲は変

更されません。特に、CHAR_MAX および CHAR_MIN の値 (limits.h で定義される) は、このオプションを指定しても変更されません。したがって、CHAR_MAX および CHAR_MIN は、通常の char で符号化可能な値の範囲は表示されなくなります。

-xchar を使用するときは、マクロ内の値が符号付きの場合があるため、char を定義済みシステムマクロと比較する際には特に注意してください。この状況は、マクロを使用してアクセスするエラーコードを戻すルーチンでもっとも一般的です。エラーコードは、一般的には負の値になっています。したがって、char をそのようなマクロによる値と比較するときは、結果は常に false になります。負の数値が符号なしの型の値と等しくなることはありません。

ライブラリ経由でエクスポートされるインタフェースのルーチンをコンパイルするために、-xchar を使用しないでください。Oracle Developer Studio のすべてのターゲットプラットフォームの ABI は、型 char を signed として指定し、システムライブラリはそれに応じて動作します。char を符号なしにする影響は、システムライブラリで十分にテストされていませんでした。このオプションを使用する代わりに、char 型の符号の有無に依存しないようにコードを変更してください。型 char の符号は、コンパイラやオペレーティングシステムによって異なります。

B.2.96 -xchar_byte_order[=*o*]

複数文字定数の文字を指定されたバイト順序で配置することにより、整定数を生成します。*o* には、次のいずれかの値を使用します。

- low: 複数文字定数の文字を低いバイトから順に配置します。
- high: 複数文字定数の文字を高いバイトから順に配置します。
- default: 複数文字定数の文字を、コンパイルモード (-X *v*) で決定された順に配置します。詳細は、30 ページの「文字定数」および 259 ページの「-x[c|a|t|s]」を参照してください。

B.2.97 -xcheck[=*o*[,*o*]]

スタックオーバーフローに関する実行時検査を追加し、局所変数を初期化します。

次の表に、*o* の値の一覧を示します。

表 56 -xcheck のフラグ

フラグ	意味
%none	-xcheck のチェックを実行しません。
%all	-xcheck のチェックをすべて実行します。
stkovf[*action*]	実行時にスタックオーバーフローエラーを検出するためのコードを生成します。オプションで、スタックオーバーフローエラーが検出されたときに行うアクションを指定します。 スタックオーバーフローエラーは、スレッドのスタックポインタがスレッドに割り当てられているスタック境界を越えた位置に設定されると発生します。新しいスタックアドレスの先頭が書き込み可能である場合は、エラーが検出されないことがあります。

フラグ	意味
	エラーの直接の結果としてメモリーアクセス違反が発生した場合、スタックオーバーフローエラーが検出され、関連付けられているシグナル (通常は SIGSEGV) が発行されます。このように発生したシグナルは、そのエラーに関連付けられていると言います。 `-xcheck=stkovf`[*action*] を指定すると、コンパイラはシステムのページサイズより大きいスタックフレームが使用される場合にスタックオーバーフローエラーを検出するためのコードを生成します。このコードには、無効であるがマップされている可能性があるアドレスにスタックポインタを設定する代わりに、メモリーアクセス違反を強制的に発生させるためのライブラリ呼び出しが含まれています (`_stack_grow`(3C) を参照)。 オプションの *action* を指定する場合、これは `:detect` または `:diagnose` のいずれかでなければなりません。 *action* が `:detect` の場合は、そのエラーに通常関連付けられているシグナルハンドラを実行することによって、検出されたスタックオーバーフローエラーが処理されます。 SPARC Oracle Solaris では、`-xcheck=stkovf:detect` はデフォルトで有効になっています。これは、スタックオーバーフローによるスタックのサイレント破損を防ぎます。`-xcheck=no%stkovf` を指定することによって無効にできます。 *action* が `:diagnose` の場合は、関連付けられているシグナルを捕捉し、`stack_violation`(3C) を呼び出してエラーを診断することによって、検出されたスタックオーバーフローエラーが処理されます。これはactionを指定しない場合のデフォルト動作です。 メモリーアクセス違反がスタックオーバーフローエラーと診断されると、次のメッセージが**標準エラー出力**に出力されます。 `ERROR: stack overflow detected: pc=<inst_addr>, sp=<sp_addr>` ここで、*<inst_addr>* はエラーが検出された命令のアドレスであり、*<sp_addr>* はエラーが検出されたときのスタックポインタの値です。スタックオーバーフローを検査して前述のメッセージを出力した (該当する場合) あとに、そのエラーに通常関連付けられているシグナルハンドラに制御が渡されます。 `-xcheck=stkovf:detect` は、システムのページサイズより大きいスタックフレームを持つルーチンに入るときのスタック境界の検査を追加します (`_stack_grow`(3C) を参照)。追加の境界の検査に関連するコストは、ほとんどのアプリケーションで無視できる程度です。 `-xcheck=stkovf:diagnose`はスレッドを作成するためのシステムコールを追加します (`sigaltstack`(2) を参照)。追加のシステムコールに関連するコストは、アプリケーションが新しいスレッドを作成および破棄する頻度によって異なります。 `-xcheck=stkovf` は Oracle Solaris でのみサポートされています。Oracle Linux 上の C 実行時ライブラリは、スタックオーバーフローの検出をサポートしていません。
`no%stkovf`	スタックオーバーフロー検査を無効にします。
`init_local`	局所変数を初期化します。 10,000 要素を超える配列のような大量のローカルデータに対して `-xcheck` を使用するときは注意してください。これにより、そのローカルな日付が初期化されたときにコンパイラによるプログラムの内部表現が非常に大きくなる可能性があります。特に -02 より大きい最適化レベルを組み合わせたときには、コンパイル時間が大幅に長くなる可能性があります。
`no%init_local`	ローカル変数を初期化しません。

フラグ	意味
noreturn	「戻らない」として記述されているルーチンが戻った場合に実行時エラーを発生させるコードを追加するように、コンパイラに通知します。 ルーチンを「戻らない」として記述するには、次のいずれかの方法を使用します。 ■ __attribute__ ((noreturn)) ■ #pragma does_not_return ■ C11 修飾子 _Noreturn を使用する 戻らないとして記述されたあとでルーチンが戻ると、未定義の動作が発生します。-xcheck=noreturn フラグは、戻らないとしてマークされた関数のすべての呼び出し後に不正な命令を追加して、その関数が戻った場合はターゲットアプリケーションを強制的に異常終了するようにコンパイラに指示します。

-xcheck を指定しない場合、コンパイラはデフォルトで -xcheck=noreturn を使用します。-xcheck を引数なしで指定すると、コンパイラはデフォルトで -xcheck=%all になります。ただし、SPARC 用の Oracle Solaris システムを使用している場合を除きます。その場合は、どちらのケースでもコンパイラはデフォルトで -xcheck=stkovf:detect を使用します。

-xcheck オプションは、コマンド行で累積されません。コンパイラは、コマンドで最後に指定したものに従ってフラグを設定します。したがってスタックオーバーフロー診断と局所変数の初期化の両方を有効にするには、次のオプションを使用します。

```
cc -xcheck=stkovf:diagnose,init_local ...
```

B.2.97.1 -xcheck=init_local の初期化値

-xcheck=init_local では、次の表に示すように、コンパイラは初期化子なしで宣言されたローカル変数を事前定義された値に初期化します。(これらの値は変更される可能性があるため、信頼しないでください)。

基本型

表 57 基本型の init_local の初期化

型	初期化値
char, _Bool	0x85
short	0x8001
int, long, enum (-m32)	0xff80002b
long (-m64)	0xfff00031ff800033
long long	0xfff00031ff800033
pointer	0x00000001 (-m32)
	0x0000000000000001 (-m64)
float, float _Imaginary	0xff800001

型	初期化値
float _Complex	0xff80000fff800011
double	SPARC: 0xfff00003ff800005 x86: 0xfff00005ff800003
double _Imaginary	0xfff00013ff800015
long double, long double _Imaginary	SPARC: 0xffff0007ff800009 / 0xfff0000bff80000d x86: 12 バイト (-m32): 0x80000009ff800005 / 0x0000ffff x86: 16 バイト (-m64): 0x80000009ff800005 / 0x0000ffff00000000
double _Complex	0xfff00013ff800015 / 0xfff00017ff800019
long double _Complex	SPARC: 0xffff001bff80001d / 0xfff0001fff800021 / 0xffff0023ff800025 / 0xfff00027ff800029 x86: 12 バイト (-m32): 0x7fffb01bff80001d / 0x00007fff / 0x7fffb023ff800025 / 0x00007fff x86: 16 バイト (-m64): 0x00007fff00080000 / 0x1b1d1f2100000000 / 0x00007fff00080000 / 0x2927252300000000

計算された goto で使用するために宣言されたローカル変数 (単純な void * ポインタ) は、表中のポインタの説明に従って初期化されます。

次の局所変数型は初期化されません: 修飾された const、register、計算された goto のラベル番号、ローカルラベル。

構造体、共用体、配列の初期化

初期化されていない参照が可視エラーを生成する可能性を最大化するために、struct 内の基本型であるフィールドは、表で説明されているとおりに初期化されます。union 内で最初に宣言された pointer または float フィールドも同様です。

配列要素も表で説明されているとおりに初期化されます。

入れ子の struct、union、および配列フィールドは、ビットフィールドを含む struct、pointer または float フィールドのない union、または完全に初期化できない型の配列を除いて、表で説明されているとおりに初期化されます。これらの例外は、型 double のローカル変数に使用される値で初期化されます。

B.2.98 -xchip[= *c*]

オプティマイザ用のプロセッサを指定します。

このオプションは単独でも使用できますが、-xtarget オプションの展開の一部です。その*主な*使用方法は、-xtarget オプションで提供される値をオーバーライドすることです。

このオプションは、処理対象となるプロセッサを指定することによって、タイミング特性を指定します。いくつかの影響があります。

- 命令の順序 (スケジューリング)
- コンパイラが分岐を使用する方法
- 意味が同じもので代用できる場合に使用する命令

次の表は、SPARC プラットフォーム向けの *c* の -xchip 値の一覧です。

表 58 SPARC -xchip のフラグ

フラグ	意味
generic	ほとんどの SPARC で良好なパフォーマンスとなるタイミング特性を使用します。 これはデフォルト値です。コンパイラに対して、ほとんどのプロセッサで良好なパフォーマンスが得られ、それらのすべてでパフォーマンスが大きく低下しないような、最適なタイミングプロパティーを使用するように指示します。
native	ホスト環境で最適なパフォーマンスになるようにパラメータを設定します。
sparc64vi	SPARC64 VI プロセッサ用に最適化します。
sparc64vii	SPARC64 VII プロセッサ用に最適化します。
sparc64viiplus	SPARC64 VII+ プロセッサ用に最適化します。
sparc64x	SPARC64 X プロセッサ用に最適化します。
sparc64xplus	SPARC64 X+ プロセッサ用に最適化します。
ultraT1	UltraSPARC T1 プロセッサのタイミング特性を使用します。
ultraT2	UltraSPARC T2 プロセッサのタイミング特性を使用します。
ultraT2plus	UltraSPARC T2+ プロセッサのタイミング特性を使用します。
T3	SPARC T3 プロセッサのタイミングプロパティーを使用します。
T4	SPARC T4 プロセッサのタイミングプロパティーを使用します。
T5	SPARC T5 プロセッサのタイミングプロパティーを使用します。
T7	SPARC T7 プロセッサのタイミングプロパティーを使用します。
M5	SPARC M5 プロセッサのタイミングプロパティーを使用します。
M6	SPARC M6 プロセッサのタイミングプロパティーを使用します。
M7	SPARC M7 プロセッサのタイミングプロパティーを使用します。

次の表は、x86 プラットフォーム向けの -xchip の値をまとめています。

表 59 x86 -xchip のフラグ

フラグ	意味
generic	ほとんどの x86 アーキテクチャーで良好なパフォーマンスとなるタイミング特性を使用します。

フラグ	意味
	これはデフォルト値です。コンパイラに対して、ほとんどのプロセッサで良好なパフォーマンスが得られ、それらのすべてでパフォーマンスが大きく低下しないような、最適なタイミングプロパティーを使用するように指示します。
native	ホスト環境に対して最適化されたパラメータを設定します。
core2	Intel Core2 プロセッサ用に最適化します。
nehalem	Intel Nehalem プロセッサ用に最適化します。
opteron	AMD Opteron プロセッサ用に最適化します。
penryn	Intel Penryn プロセッサ用に最適化します。
pentium	x86 Pentium アーキテクチャーのタイミングプロパティーを使用します
pentium_pro	x86 Pentium Pro アーキテクチャーのタイミングプロパティーを使用します
pentium3	x86 Pentium 3 アーキテクチャーのタイミング特性を使用します。
pentium4	x86 Pentium 4 アーキテクチャーのタイミング特性を使用します。
amdfam10	AMD AMDFAM10 プロセッサ用に最適化します。
sandybridge	Intel Sandy Bridge プロセッサ
ivybridge	Intel Ivy Bridge プロセッサ
haswell	Intel Haswell プロセッサ
westmere	Intel Westmere プロセッサ
broadwell	Intel Broadwell プロセッサ

B.2.99 -xcode[=*V*]

*(SPARC)*コードアドレス空間を指定します。

注記 - -xcode=pic13 または -xcode=pic32 を指定することで、共有オブジェクトを構築します。-m64 -xcode=abs64 でも作業可能な共有オブジェクトを構築できますが、それらは効率的ではありません。-m64, -xcode=abs32 または -m64, -xcode=abs44 を指定して構築された共有オブジェクトは動作しません。

次の表に、*v* の値の一覧を示します。

表 60 -xcode のフラグ

値	意味
abs32	これは 32 ビットアーキテクチャーでのデフォルトです。32 ビットの絶対アドレスを生成します。コード + データ + BSS のサイズは 2**32 バイトに制限されます。
abs44	これは 64 ビットアーキテクチャーでのデフォルトです。44 ビットの絶対アドレスを生成します。コード + データ + BSS のサイズは 2**44 バイトに制限されます。64 ビットアーキテクチャーだけで利用できます。
abs64	64 ビットの絶対アドレスを生成します。64 ビットのアーキテクチャーでのみ利用できます。

pic13	共有ライブラリで使用する位置独立コードを生成します。-Kpic と同義です。32 ビットアーキテクチャーでは最大 2**11 まで、64 ビットアーキテクチャーでは最大 2**10 までの固有の外部シンボルを参照できます。
pic32	共有ライブラリで使用する位置独立コード (大規模モデル) を生成します。-KPIC と同義です。32 ビットアーキテクチャーでは最大 2**30 まで、64 ビットアーキテクチャーでは最大 2**29 までの固有の外部シンボルを参照できます。

32 ビットアーキテクチャーの場合は -xcode=abs32 です。64 ビットアーキテクチャーの場合は -xcode=abs44 です。

共有動的ライブラリを作成する場合、64 ビットアーキテクチャーでは -xcode のデフォルト値である abs44 と abs32 を使用できません。-xcode=pic13 または -xcode=pic32 を指定してください。SPARC では、-xcode=pic13 および -xcode=pic32 で、2 つのわずかなパフォーマンスコストがあります。

- -xcode=pic13 または -xcode=pic32 のいずれかでコンパイルしたルーチンは、共有ライブラリの大域または静的変数へのアクセスに使用されるテーブル (_GLOBAL_OFFSET_TABLE_) を指し示すようレジスタを設定するために、入口で命令を数個余計に実行します。
- 大域または静的変数へのアクセスのたびに、_GLOBAL_OFFSET_TABLE_ を使用した間接メモリー参照が 1 回余計に行われます。-xcode=pic32 でコンパイルした場合は、大域および静的メモリーへの参照ごとに命令が 2 個増えます。

これらのコストを考慮しても、-xcode=pic13 および -xcode=pic32 を使用すると、ライブラリコード共有の効果により、必要なシステムメモリーを大幅に減らすことができます。-xcode=pic13 または -xcode=pic32 でコンパイルした共有ライブラリ中のコードの各ページは、そのライブラリを使用する各プロセスで共有できます。共有ライブラリ内のコードに非 pic (すなわち、絶対) メモリー参照が 1 つでも含まれている場合、そのコードは共有不可になるため、そのライブラリを使用するプログラムを実行する場合は、その都度、コードのコピーを作成する必要があります。

.o ファイルが -xcode=pic13 または -xcode=pic32 でコンパイルされたかどうかを調べるためのもっとも簡単な方法は、nm コマンドを使用する方法です。

```
% nm file.o | grep _GLOBAL_OFFSET_TABLE_ U _GLOBAL_OFFSET_TABLE_
```

位置独立コードを含む .o ファイルには、_GLOBAL_OFFSET_TABLE_ への未解決の外部参照が含まれます。文字 U で示されます。

-xcode=pic13 または -xcode=pic32 のどちらを使用するかを決定するには、elfdump -c を使用してセクションヘッダー sh_name: .got を探すことによって、大域オフセットテーブル (GOT) のサイズを確認します。sh_size 値が GOT のサイズです。GOT が 8,192 バイトに満たない場合は、-xcode=pic13 を指定します。そうでない場合は、-xcode=pic32 を指定します。詳細は、elfdump(1) のマニュアルページを参照してください。

-xcode どのように使用するべきかを決定するには、次のガイドラインに従います。

- 実行可能ファイルを構築する場合は、-xcode=pic13 と -xcode=pic32 のどちらも使用しない。

- 実行可能ファイルにリンクするためだけのアーカイブライブラリを構築する場合は、-xcode=pic13 と -xcode=pic32 のどちらも使用しない。
- 共有ライブラリを構築する場合は、-xcode=pic13 から始めてし、GOT のサイズが 8,192 バイトを超えたら、-xcode=pic32 を使用する。
- 共有ライブラリにリンクするためのアーカイブライブラリを構築する場合は、-xcode=pic32 を使用する。

B.2.100 -xcrossfile

廃止。使用しないでください。代わりに -xipo を使用します。–xcrossfile は –xipo=1 の別名です。

B.2.101 -xcsi

C コンパイラが ISO C ソース文字コードの要件に準拠しないロケールで記述されたソースコードを受け付けられるようにします。これらのロケールには、ja_JP.PCK が含まれます。

コンパイラの翻訳段階でこのようなロケールの処理が必要になると、コンパイルの時間が非常に長くなることがあります。そのため、このオプションを使用するのは、前述のロケールのソース文字を含むソースファイルをコンパイルする場合に限定すべきです。

コンパイラは、-xcsi が発行されないかぎり、ISO C ソース文字コードの要件に準拠しないロケールで記述されたソースコードを認識しません。

B.2.102 -xdebugformat=[stabs|dwarf]

DWARF 形式のデバッグ情報を読み取るソフトウェアを保守している場合は、-xdebugformat=dwarf を指定します。このオプションにより、コンパイラは DWARF 標準形式を使用してデバッグ情報を生成します。これがデフォルトです。

表 61 -xdebugformat のフラグ

値	意味
stabs	-xdebugformat=stabs は、STABS 標準形式を使用してデバッグ情報を生成します。
dwarf	-xdebugformat=dwarf は、DWARF 標準形式を使用してデバッグ情報を生成します (デフォルト)。

-xdebugformat を指定しない場合は、コンパイラでは -xdebugformat=dwarf が指定されます。このオプションには引数が必要です。

このオプションは、-g オプションによって記録されるデータの形式に影響します。-g を指定しなくても、一部のデバッグ情報が記録されますが、その情報の形式もこのオプションによって制御されます。したがって、-g を使用しなくても、-xdebugformat は効果があります。

dbx とパフォーマンスアナライザソフトウェアは、STABS 形式と DWARF 形式を両方とも理解するので、このオプションを使用しても、いずれかのツールの機能に対する影響はありません。

詳細は、dumpstabs(1) および dwarfdump(1) のマニュアルページを参照してください。

B.2.103 -xdebuginfo=*a*[,*a*...]

デバッグおよび可観測性情報の出力量を制御します。

*タグタイプ*という用語は、タグ付きの型 (struct、union、enum、および class) を意味します。

次のリストには、サブオプション *a* に指定できる値が含まれています。サブオプションに接頭辞 no%を適用すると、そのサブオプションが無効になります。デフォルトは -xdebuginfo=%none です。サブオプションなしで -xdebuginfo を指定することは禁止されています。

%none　デバッグ情報は生成されません。これはデフォルト値です。

[no%]line　行番号およびファイル情報を出力します。

[no%]param　パラメータの場所の一覧情報を出力します。スカラー値 (たとえば、int、char *) の完全指定の型情報および型名を出力しますが、タグタイプの完全な定義は出力されません。

[no%]variable　構文的にグローバル変数およびローカル変数である変数の場所の一覧情報を出力します。これには、ファイルおよび関数の static は含まれますが、クラスの static および extern は含まれません。スカラー値 (int、char * など) の完全指定の型情報および型名を出力しますが、タグタイプの完全な定義は出力されません。

[no%]decl　関数と変数の宣言、メンバー関数、およびクラス宣言の静的なデータメンバーを出力します。

[no%]tagtype　param および variable データセットから参照されるタグタイプの完全指定の型情報、およびテンプレートの定義を出力します。

[no%]macro　マクロ情報を出力します。

[no%]codetag　DWARF コードタグ (Stabs N_PATCH とも呼ばれます) を出力します。これは、RTC および discover によって使用されるビットフィールド、構造体のコピー、およびスピルに関する情報です。

`[no%]hwcpro` ハードウェアカウンタプロファイルに関する重要な情報を生成します。この情報には、`ldst_map`、`ld/st` 命令と参照されているシンボルテーブルのエントリのマッピング、およびバックトラックが分岐先を超えていないことを確認するため使用される分岐先アドレスの `branch_target` テーブルが含まれています。詳細は、`-xhwcprof` を参照してください。

注記 - `ldst_map` では、タグタイプ情報が存在している必要があります。この要件が満たされていない場合は、ドライバがエラーを発行します。

次のマクロは、`-xdebuginfo` およびほかのオプションの組み合わせに次のように展開されます。

```
-g = -g2

-gnone =
        -xdebuginfo=%none
        -xglobalize=no
        -xpatchpadding=fix
        -xkeep_unref=no%funcs,no%vars

-g1 =
        -xdebuginfo=line,param,codetag
        -xglobalize=no
        -xpatchpadding=fix
        -xkeep_unref=no%funcs,no%vars

-g2 =
        -xdebuginfo=line,param,decl,variable,tagtype,codetag
        -xglobalize=yes
        -xpatchpadding=fix
        -xkeep_unref=funcs,vars

-g3 =

        -xdebuginfo=line,param,decl,variable,tagtype,codetag,macro
        -xglobalize=yes
        -xpatchpadding=fix
        -xkeep_unref=funcs,vars
```

B.2.104 -xdepend=[yes|no]

ループの繰り返し内部でのデータ依存関係を解析し、ループの交換、ループの融合、スカラー置換など、ループの再構成を行います。

最適化レベルが `-xO3` かそれ以上に設定されている場合はすべて、`-xdepend` のデフォルトは `-xdepend=on` です。`-xdepend` の明示的な設定を指定すると、デフォルト設定はオーバーライドされます。

引数なしで `-xdepend` を指定すると、`-xdepend=yes` と同等であることを意味します。

依存性の解析はシングルプロセッサシステムで役立つことがあります。ただし、シングルプロセッサシステムで -xdepend を使用する場合は、-xautopar も指定するべきではありません。-xdepend 最適化は、マルチプロセッサシステムのために行われるためです。

B.2.105 -xdryrun

このオプションは -### のマクロです。

B.2.106 -xdumpmacros[=*value*[,*value*...]]

プログラム内でマクロがどのように動作しているかを確認するときは、このオプションを使用します。このオプションは、定義済みマクロ、解除済みマクロ、実際の使用状況といった情報を提供します。マクロの処理順序に基づいて、標準エラー (stderr) に出力します。-xdumpmacros オプションは、ファイルの終わりまで、または dumpmacros プラグマまたは end_dumpmacros プラグマによって上書きされるまで有効です。42 ページの「dumpmacros」を参照してください。

次の表に、*value* の有効な引数の一覧を示します。接頭辞 no% は関連付けられた値を無効にします。

表 62 -xdumpmacros の値

値	意味
[no%]defs	すべての定義済みマクロを出力します。
[no%]undefs	すべての解除済みマクロを出力します。
[no%]use	使用されているマクロの情報を出力します
[no%]loc	defs、undefs、use の位置 (パス名と行番号) も出力します。
[no%]conds	条件付き指令で使用されたマクロの使用情報を出力します。
[no%]sys	システムヘッダーファイル内のマクロについて、すべての定義済みマクロ、解除済みマクロ、使用状況を出力します。
%all	オプションを-xdumpmacros=defs,undefs,use,loc,conds,sys に設定します。この引数は、[no%] 形式の引数と併用すると効果的です。たとえば -xdumpmacros=%all,no%sys は、出力からシステムヘッダーマクロを除外しますが、そのほかのマクロに関する情報は依然として出力します。
%none	あらゆるマクロ情報を出力しません。

オプションの値は累積されるので、-xdumpmacros=sys -xdumpmacros=undefs を指定することは、-xdumpmacros=undefs,sys と同じ効果があります。

注記 - サブオプション loc、conds、sys は、オプション defs、undefs、use の修飾子です。loc、conds、および sys は、単独では効果はありません。たとえば -xdumpmacros=loc,conds,sys は、まったく効果を持ちません。

引数なしで -xdumpmacros を指定するときのデフォルトは、-xdumpmacros=defs,undefs,sys です。-xdumpmacros を指定しないときのデフォルトは、-xdumpmacros=%none です。

-xdumpmacros=use,no%loc オプションを使用すると、使用した各マクロの名前が一度だけ出力されます。より詳しい情報が必要であれば、-xdumpmacros=use,loc オプションを使用します。マクロを使用するたびに、そのマクロの名前と位置が印刷されます。

次のファイル t.c を考慮します。

```
example% cat t.c
#ifdef FOO
#undef FOO
#define COMPUTE(a, b) a+b
#else
#define COMPUTE(a,b) a-b
#endif
int n = COMPUTE(5,2);
int j = COMPUTE(7,1);
#if COMPUTE(8,3) + NN + MM
int k = 0;
#endif
```

次の例は、defs、undefs、sys、および loc の引数に基づいた、ファイル t.c の出力を示しています。

```
example% cc -c -xdumpmacros -DFOO t.c
#define __SunOS_5_9 1
#define __SUNPRO_C 0x5140
#define unix 1
#define sun 1
#define sparc 1
#define __sparc 1
#define __unix 1
#define __sun 1
#define __BUILTIN_VA_ARG_INCR 1
#define __SVR4 1
#define __SUNPRO_CC_COMPAT 5
#define __SUN_PREFETCH 1
#define FOO 1
#undef FOO
#define COMPUTE(a, b) a + b

example% cc -c -xdumpmacros=defs,undefs,loc -DFOO -UBAR t.c
command line: #define __SunOS_5_9 1
command line: #define __SUNPRO_C 0x5140
command line: #define unix 1
command line: #define sun 1
command line: #define sparc 1
command line: #define __sparc 1
command line: #define __unix 1
command line: #define __sun 1
command line: #define __BUILTIN_VA_ARG_INCR 1
command line: #define __SVR4 1
```

```
command line: #define __SUN_PREFETCH 1
command line: #define FOO 1
command line: #undef BAR
t.c, line 2: #undef FOO
t.c, line 3: #define COMPUTE(a, b) a + b
```

次の例では、use、loc、および conds の引数によって、マクロ動作がファイル t.c に出力されます。

```
example% cc -c -xdumpmacros=use t.c
used macro COMPUTE

example% cc -c -xdumpmacros=use,loc t.c
t.c, line 7: used macro COMPUTE
t.c, line 8: used macro COMPUTE

example% cc -c -xdumpmacros=use,conds t.c
used macro FOO
used macro COMPUTE
used macro NN
used macro MM

example% cc -c -xdumpmacros=use,conds,loc t.c
t.c, line 1: used macro FOO
t.c, line 7: used macro COMPUTE
t.c, line 8: used macro COMPUTE
t.c, line 9: used macro COMPUTE
t.c, line 9: used macro NN
t.c, line 9: used macro MM
```

次は、ファイル y.c の例です。

```
example% cat y.c
#define X 1
#define Y X
#define Z Y
int a = Z;
```

次の例は、y.c 内のマクロに基づく、-xdumpmacros=use,loc からの出力を示しています。

```
example% cc -c -xdumpmacros=use,loc y.c
y.c, line 4: used macro Z
y.c, line 4: used macro Y
y.c, line 4: used macro X
```

プラグマ dumpmacros/end_dumpmacros は、-xdumpmacros コマンド行オプションのスコープより優先されます。

B.2.107 -xe

ソースファイルに対して構文および意味検査を実行しますが、オブジェクトコードや実行可能コードは生成しません。

B.2.108 -xF[=*v*[,*v*...]]

リンカーによる関数と変数の最適な順序の並べ替えを有効にします。

このオプションは、コンパイラに対して、関数またはデータ変数を別々のセクションフラグメントに配置するように指示します。それによってリンカーは、リンカーの -M オプションで指定されたマップファイル内の指示を使用して、これらのセクションの順序を並べ替えてプログラムのパフォーマンスを最適化できます。この最適化は、ページフォルト時間がプログラム実行時間の多くの割合を占めているときにもっとも効果的です。

変数の並べ替えは、実行時のパフォーマンスに悪影響を及ぼす次のような問題の解決に役立ちます。

- メモリー内で関係ない変数どうしが近接しているために生じる、キャッシュやページの競合
- 関係のある変数がメモリー内で互いに近くにないことの結果として、不必要に大きな作業セットサイズ。
- 使用していない weak 変数のコピーが有効なデータ密度を低下させた結果生じる、不必要に大きな作業セットサイズ

最適なパフォーマンスを得るために変数と関数の順序を並べ替えるには、次の処理が必要です。

1. -xF によるコンパイルとリンク
2. 『Oracle Developer Studio 12.5: パフォーマンスアナライザ』および『Oracle Solaris 11.3 リンカーとライブラリガイド』にある、関数またはデータのためのマップファイルの生成に関する手順に従います。
3. リンカーの -M オプションを使用して新しいマップファイルを再リンクします。
4. アナライザで再実行して、パフォーマンスが向上したかどうかを検証します。

B.2.108.1 値

次の表に、*v* の値の一覧を示します。

表 63 -xF の値

値	意味
func	関数を個別のセクションにフラグメント化します。
gbldata	大域データ (外部リンケージを持つ変数) を個別のセクションにフラグメント化します。
lcldata	ローカルデータ (内部リンケージを持つ変数) を個別のセクションにフラグメント化します。
%all	関数、大域データ、局所データを細分化します。
%none	何も細分化しません。

サブオプションを無効にするには、(%all および %none を除いた) 値の前に no% を置きます。たとえば no%func などです。

-xF を指定しない場合のデフォルトは、-xF=%none です。引数を指定しないで -xF を指定した場合のデフォルトは、-xF=%none,func です。

-xF=lcldata を使用するとアドレス計算最適化が一部禁止されるので、このフラグは試験によって正しいと認められた場合にのみ使用してください。

analyzer(1)、および ld(1) のマニュアルページを参照してください。

B.2.109 -xglobalize[={yes|no}]

関数レベルまたはファイルレベルの静的変数の大域化を制御します。

グローバル化は、デバッガの修正継続機能によって必要な手法です。グローバル化によって、関数レベルまたはファイルレベルの静的シンボルはグローバルに拡張されますが、同じ名前のシンボルを区別するためにその名前に接頭辞が追加されます。

デフォルトは -xglobalize=no です。-xglobalize と指定することは -xglobalize=yes と指定することと同等です。

B.2.109.1 相互の関連性

-xpatchpadding を参照してください。

B.2.110 -xhelp=flags

オンラインヘルプ情報を表示します。

-xhelp=flags は、コンパイラオプションのサマリーを表示します。

B.2.111 -xhwcprof

ハードウェアカウンタベースのプロファイリングに対するコンパイラサポートを有効にします。

-xhwcprof を有効にすると、コンパイラは、プロファイル対象のロード命令およびストア命令と、それらが参照するデータ型および構造体メンバーをツールが関連付けるのに役立つ情報を、-g で生成されたシンボル情報と組み合わせて生成します。プロファイルデータを、命令領域では

なくターゲットのデータ領域に関連付けます。これにより、命令プロファイリングだけからは簡単には得られない、動作に対する洞察が提供されます。

指定した一連のオブジェクトファイルは、-xhwcprof を指定してコンパイルできます。ただし、-xhwcprof は、アプリケーション内のすべてのオブジェクトファイルに適用されたときに、もっとも役立ちます。アプリケーションのオブジェクトファイルに分散しているすべてのメモリー参照が洗い出され、相互に関連付けられます。

コンパイルとリンクを別々に行う場合は、-xhwcprof をリンク時にも使用してくだ さい。-xhwcprof への今後の拡張により、リンク時にこれを使用することが必要になる可能性があります。表24「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションの全一覧をまとめています。

-xhwcprof=enable または -xhwcprof=disable のインスタンスは、同じコマンド行にある以前の -xhwcprof のインスタンスをすべてオーバーライドします。

-xhwcprof はデフォルトでは無効です。引数を指定せずに -xhwcprof と指定することは、-xhwcprof=enable と指定することと同等です。

-xhwcprof では、最適化が有効になっており、かつデバッグデータの形式が、現在の Oracle Developer Studio コンパイラでのデフォルトである DWARF (-xdebugformat=dwarf) に設定されている必要があります。同じコマンド行に -xhwcprof と -xdebugformat=stabs を指定することはできません。

-xhwcprof は -xdebuginfo を使用して必要最低限のデバッグ情報を自動的に有効にするため、-g は必要ありません。

-xhwcprof と -g を組み合わせて使用すると、コンパイラに必要な一時ファイル記憶領域は、-xhwcprof と -g を単独で指定することによって増える量の合計を超えて大きくなります。

-xhwcprof は、次のようにさまざまなよりプリミティブなオプションに展開されるマクロとして実装されます。

```
-xhwcprof
        -xdebuginfo=hwcprof,tagtype,line
-xhwcprof=enable
        -xdebuginfo=hwcprof,tagtype,line
-xhwcprof=disable
        -xdebuginfo=no%hwcprof,no%tagtype,no%line
```

次のコマンドは example.c をコンパイルし、ハードウェアカウンタによるプロファイリングのサポートを指定し、DWARF シンボルを使用してデータ型と構造体メンバーのシンボリック解析を指定します。

```
example% cc -c -O -xhwcprof -g -xdebugformat=dwarf example.c
```

ハードウェアカウンタベースのプロファイリングの詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: パフォーマンスアナライザ』を参照してください。

B.2.112 -xinline=*list*

-xinline での *list* の形式は次のとおりです。

[{%auto,*func_name*,no%*func_name*}[,{%auto,*func_name*,no%*func_name*}]...]

-xinline は、オプションのリストで指定した関数だけのインライン化を試行します。このリストは、空か、*func_name*、no%*func_name*、または %auto のコンマ区切りのリストを含みます (*func_name* は関数名です)。-xinline は、-xO3 以上でのみ効果を持ちます。

表 64 -xinline のフラグ

フラグ	意味
%auto	コンパイラがソースファイル内のすべての関数を自動的にインライン化するように指定します。%auto は、-xO4 以上の最適化レベルでのみ効果を持ちます。%auto は、-xO3 以下の最適化レベルでサイレントに無視されます。
func_name	指定した関数をコンパイラでインライン化するように指定します。
no%*func_name*	指定した関数をコンパイラでインライン化しないように指定します。

値のリストは、左から右に累積されます。-xinline=%auto,no%foo と指定した場合、コンパイラは foo 以外のすべての関数をインライン化しようとします。-xinline=%bar,%myfunc,no%bar と指定した場合は、myfunc だけのインライン化が試行されます。

最適化レベルを -xO4 以上に設定してコンパイルすると、通常はソースファイルで定義されたすべての関数参照のインライン化が試行されます。-xinline オプションを使用することで、特定の関数をインライン化しないように制限できます。関数または %auto を指定せずに -xinline= のみを指定することは、ソースファイル内のどのルーチンもインライン化されないことを示します。%auto を指定せずに *func_name* および no%*func_name* を指定した場合、コンパイラはリストで指定されたそれらの関数のみをインライン化しようとします。最適化レベルが -xO4 以上に設定された状態で、-xinline オプションの値リストで %auto が指定されている場合、コンパイラは no%*func_name* で明示的に除外されていないすべての関数をインライン化しようとします。

次のいずれかの条件に該当する場合、ルーチンはインライン化されません。警告は出力されませんので注意してください。

- 最適化のレベルが -xO3 未満である。
- ルーチンが見つからない。
- iropt がルーチンのインライン化を実行できない。
- ルーチンのソースが、コンパイル対象のファイル内にない (ただし、-xipo を参照)。

コマンド行で -xinline を複数指定した場合は、それらは累積されません。コマンド行の最後の -xinline が、コンパイラがインライン化しようとする関数を指定します。

-xldscope も参照してください。

B.2.113 -xinline_param=*a*[,*a*[,*a*]...]

このオプションは、コンパイラが関数呼び出しをインライン化するタイミングを判断するために使用するヒューリスティックを手動で変更するために使用します。

このオプションは -O3 以上でのみ有効となります。次のサブオプションは、自動インライン化がオンである場合に、-O4 以上でのみ有効となります。

次のサブオプションでは、*n* は正の整数である必要があります。*a* には次のいずれかを指定できます。

表 65 -xinline_param のサブオプション

サブオプション	意味
default	すべてのサブオプションの値にそのデフォルト値を設定します。
max_inst_hard[:*n*]	自動インライン化は、n疑似命令 (コンパイラの内部表現でカウントされます) より小さい関数のみをインライン化候補と見なします。 これより大きい関数は、インライン化の候補から常に除外されます。
max_inst_soft[:*n*]	インライン関数のサイズ制限に *n* 擬似命令 (コンパイラの内部表現でカウントされます) を設定します。 これより大きいサイズの関数はインライン化されることがあります。 max_inst_hard を指定する場合、max_inst_soft の値は max_inst_hard の値以下になるようにします (つまり、max_inst_soft <= max_inst_hard)。 通常、コンパイラの自動インライン化では、呼び出される関数のサイズが max_inst_soft の値より小さい呼び出しのみがインライン化されます。関数のサイズが max_inst_soft の値より大きいが max_inst_hard の値より小さい場合は、関数がインライン化されることがあります。この場合の例は、関数に渡されたパラメータが定数である場合です。 関数の特定の 1 つの呼び出しサイトをインライン化するために max_inst_hard または max_inst_soft の値を変更するかどうかを判断する場合は、-xinline_report=2 を使用して詳細なインライン化メッセージを出力し、そのインライン化メッセージの推奨に従います。
max_function_inst[:*n*]	自動インライン化によって、関数が最大 *n* 疑似命令 (コンパイラの内部表現でカウントされます) まで増えることを許可します。
max_growth[:*n*]	自動インライン化は、プログラムのサイズを最大 *n*% (サイズは疑似命令で計測されます) 増やすことを許可されます。
min_counter[:*n*]	関数を自動インライン化するかどうかを判断するために、プロファイリングフィードバック (-xprofile) によって計測される、呼び出しサイトの最小頻度カウンタ。 このオプションは、アプリケーションがプロファイリングフィードバック (-xprofile=use) を指定してコンパイルされている場合にのみ有効です。
level[:*n*]	このサブオプションは、自動インライン化を適用する度合いを制御するために使用します。-xinline_param=level の設定を高くすると、より多くの関数がインライン化されます。

サブオプション	意味
	n は 1、2、または 3 のいずれかである必要があります。 このオプションを指定しない場合、または :*n* を使用せずに指定した場合、*n* のデフォルト値は 2 です。 自動インライン化の level を指定します level:1 基本的なインライン化 level:2 中程度のインライン化 (デフォルト) level:3 積極的なインライン化 この level によって、次のインライン化パラメータの組み合わせに指定される値が決定されます。 max_growth + max_function_inst + max_inst + max_inst_call level = 1 の場合、すべてのパラメータはデフォルト値の半分になります。 level = 2 の場合、すべてのパラメータはデフォルト値になります。 level = 3 の場合、すべてのパラメータはデフォルト値の 2 倍になります。
max_recursive_depth[:*n*]	関数がそれ自体を直接または間接に呼び出している場合は、再帰呼び出しが発生していると言います。 このサブオプションは、再帰呼び出しを最大 *n* レベルまで自動的にインライン化することを許可します。
max_recursive_inst[:*n*]	自動再帰インライン化を実行することによって、再帰呼び出しの呼び出し元で増やすことができる疑似命令 (コンパイラの内部表現でカウントされます) の最大数を指定します。 max_recursive_inst および max_recursive_depth の間で相互作用が発生した場合、再帰関数呼び出しは、再帰呼び出しの max_recursive_depth の数まで、またはインライン化される関数のサイズが max_recursive_inst を超えるまでインライン化されます。これらの 2 つのパラメータの設定は、小さい再帰関数のインライン化の度合いを制御します。

-xinline_param=default を指定すると、コンパイラはサブオプションのすべての値にデフォルト値を設定します。

このオプションを指定しない場合、デフォルトは -xinline_param=default です。

値およびオプションのリストは、左から右に適用されます。このため、-xinline_param=max_inst_hard:30,..,max_inst_hard:50 と指定した場合は、値 max_inst_hard:50 がコンパイラに渡されます。

コマンド行に複数の -xinline_param オプションを指定した場合、サブオプションのリストは同様に左から右に適用されます。たとえば、次のように指定した場合は

```
-xinline_param=max_inst_hard:50,min_counter:70 ...
  -xinline_param=max_growth:100,max_inst_hard:100
```

次の指定と同じになります。

```
-xinline_param=max_inst_hard:100,min_counter:70,max_growth:100
```

B.2.114 -xinline_report[=*n*]

このオプションは、コンパイラによる関数のインライン化に関する報告を生成し、標準出力に書き込みます。報告のタイプは *n* の値 (0、1、または 2) によって異なります。

0	レポートは生成されません。
1	インライン化パラメータのデフォルト値のサマリー報告が生成されます。
2	インライン化メッセージの詳細な報告が生成され、インライン化された呼び出しサイトとインライン化されなかった呼び出しサイト、およびインライン化されなかったことの簡潔な理由が示されます。この報告には、インライン化されなかった呼び出しサイトをインライン化するために使用できる -xinline_param の推奨値が含まれている場合があります。

-xinline_report を指定しない場合、*n* のデフォルト値は 0 です。-xinline_report を指定して =*n* を指定しない場合、デフォルト値は 1 です。

-xlinkopt が指定されている場合は、インライン化されなかった呼び出しサイトに関するインライン化メッセージが正確でないことがあります。

B.2.115 -xinstrument=[no%]datarace

スレッドアナライザで分析するためにプログラムをコンパイルして計測するには、このオプションを指定します。スレッドアナライザの詳細は、tha(1) のマニュアルページを参照してください。

そうすることで、パフォーマンスアナライザを使用して計測されたプログラムを collect -r races で実行し、データ競合の検出実験を行うことができます。計測機構の組み込まれたコードをスタンドアロンで実行した場合は、より遅く実行されます。

-xinstrument=no%datarace を指定して、スレッドアナライザ用のソースコードの準備をオフにすることができます。これはデフォルト値です。

-xinstrument= は引数付きで指定する必要があります。

コンパイルとリンクを別々に行う場合は、コンパイル時とリンク時の両方で -xinstrument=datarace を指定する必要があります。

このオプションは、プリプロセッサトークン __THA_NOTIFY を定義します。#ifdef __THA_NOTIFY を指定して、libtha(3) ルーチンへの呼び出しを保護できます。

このオプションにも、-g を設定します。

-xinstrument は -xlinkopt と一緒に使用することはできません。

B.2.116 -xipo[=*a*]

a を 0、 1、または 2 と置き換えます。引数なしの -xipo は、-xipo=1 と同義です。-xipo=0 はデフォルト設定で、-xipo を無効にします。-xipo=1 を指定した場合は、すべてのソースファイルでインライン化が実行されます。

-xipo=2 を指定した場合は、コンパイラは内部手続きの別名解析と、メモリーの割り当ておよび配置の最適化を実行し、キャッシュ性能を向上させます。

このコンパイラは、内部手続き解析コンポーネントを呼び出すことにより、プログラムの一部の最適化を実行します。このオプションを指定すると、リンク段階ですべてのオブジェクトファイルを介して最適化を実行し、最適化の対象をコンパイルコマンドのソースファイルだけに限定しません。ただし、-xipo によるプログラム全体の最適化には、アセンブリ (.s) ソースファイルは含まれません。

-xipo は、コンパイル時とリンク時の両方で指定する必要があります。表24「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションの全一覧をまとめています。

-xipo オプションは、ファイルを介して最適化を実行する際に必要な情報を追加するため、非常に大きなオブジェクトファイルを生成します。ただし、この補足情報は最終的な実行可能バイナリファイルの一部にはなりません。実行可能プログラムのサイズが拡大するのは、最適化が追加実行されるためです。このコンパイル段階で作成されたオブジェクトファイルには、内部でコンパイルされた追加の分析情報が含まれているため、リンク段階でファイル相互の最適化を実行できます。

異なるコンパイラバージョンから -xipo オプションでコンパイルされた .o ファイルがある場合は、これらのファイルを混在させると「IR バージョンの不一致」に関するエラーメッセージが出て失敗する可能性があります。-xipo オプションを使用するときは、すべてのファイルを同じバージョンのコンパイラでコンパイルする必要があります。

-xipo は、大きなマルチファイルアプリケーションをコンパイルおよびリンクする際に特に便利です。このフラグを指定してコンパイルされたオブジェクトファイルには、ソースプログラムファイルとコンパイル済みプログラムファイル間で内部手続き解析を有効にする解析情報が含まれています。

解析と最適化は、-xipo を指定してコンパイルされたオブジェクトファイルに限定され、オブジェクトファイルやライブラリまでは及びません。

-xipoは複数の段階にわかれているため、コンパイルとリンクを個別に実行する場合、各ステップで -xipo を指定する必要があります。

-xipo に関するそのほかの重要な情報を次に示します。

- 少なくとも最適化レベル -xO4 を必要とします。
- -xipo なしでコンパイルされたオブジェクトは、-xipo でコンパイルされたオブジェクトと自由にリンクできます。

B.2.116.1 -xipo の例

次の例では、コンパイルとリンクが単一ステップで実行されます。

```
cc -xipo -xO4 -o prog part1.c part2.c part3.c
```

オプティマイザは 3 つのすべてのソースファイル間でファイル間のインライン化を実行します。この処理は最後のリンクステップで行われるので、ソースファイルのコンパイルを単一コンパイルですべて実行する必要はありません。-xipo オプションをそれぞれ指定して、個別のコンパイルを何回か実行してもかまいません。

次の例では、個別のステップでコンパイルとリンクが実行されます。

```
cc -xipo -xO4 -c part1.c part2.c
cc -xipo -xO4 -c part3.c
cc -xipo -xO4 -o prog part1.o part2.o part3.o
```

制限は、-xipo でコンパイルする場合でも、ライブラリはファイル相互の内部手続き解析に含まれない点です。次の例を参照してください。

```
cc -xipo -xO4 one.c two.c three.c
ar -r mylib.a one.o two.o three.o
...
cc -xipo -xO4 -o myprog main.c four.c mylib.a
```

この例では、内部手続きの最適化は one.c、two.c および three.c 間と、main.c および four.c 間で実行されますが、main.c または four.c と mylib.a のルーチン間では実行されません。最初のコンパイルは未定義のシンボルに関する警告を生成する場合がありますが、内部手続きの最適化は、コンパイルおよびリンクステップであるために実行されます。

B.2.116.2 -xipo=2 による内部手続き解析を行うべきでないケース

内部手続き解析では、コンパイラは、リンクステップでオブジェクトファイル群を操作しながら、プログラム全体の解析と最適化を試みます。このとき、コンパイラは、このオブジェクトファイル群に定義されているすべての foo() 関数 (またはサブルーチン) に関して次の 2 つのことを仮定します。

- 実行時、このオブジェクトファイル群の外部で定義されている別のルーチンによって foo() が明示的に呼び出されない。
- オブジェクトファイル群内のルーチンからの foo() 呼び出しが、そのオブジェクトファイル群の外部に定義されている別のバージョンの foo() からの割り込みを受けない。

仮定 2 が真でない場合は、-xipo=1 または -xipo=2 でコンパイルしないでください。

1 例として、独自のバージョンの malloc で関数 malloc() を置き換え、-xipo=2 を指定してコンパイルするケースを考えてみましょう。したがって、コードとリンクされる malloc() を参照する、あらゆるライブラリのあらゆる関数のコンパイルで -xipo=2 を使用する必要があるとともに、リンクステップでそれらのオブジェクトファイルが必要になります。システムライブラリにはこの処理を実行できない場合があるため、独自のバージョンの malloc() を -xipo=2 でコンパイルしないでください。

もう 1 つの例として、別々のソースファイルにある foo() および bar() という 2 つの外部呼び出しを含む共有ライブラリを構築するケースを考えてみましょう。また、bar() は foo() を呼び出すと仮定します。foo() が実行時に割り込み処理される可能性がある場合、foo() または bar() のソースファイルを -xipo=1 または -xipo=2 でコンパイルしないでください。それ以外の場合、foo() が bar() にインライン化され、それによって正しくない結果になる可能性があります。

B.2.117 -xipo_archive=[a]

新しい -xipo_archive オプションは、コンパイラが、リンカーに渡されるオブジェクトファイルと、-xipo でコンパイルされて実行可能ファイルを生成する前にアーカイブライブラリ (.a) に常駐するオブジェクトファイルを最適化することを許可します。コンパイル中に最適化されたライブラリに含まれるオブジェクトファイルはすべて、その最適化されたバージョンに置き換えられます。

次の表に、a の値の一覧を示します。

表 66 -xipo_archive のフラグ

値	意味
writeback	実行可能ファイルを生成する前に、アーカイブライブラリ (.a) に存在する -xipo でコンパイルしたオブジェクトファイルを使ってリンカーに渡すオブジェクトファイルを最適化します。コンパイル中に最適化されたライブラリに含まれるオブジェクトファイルは、すべてその最適化されたバージョンに置き換えられます。 アーカイブライブラリの共通セットを使用する並列リンクでは、最適化されるアーカイブライブラリの独自のコピーを、各リンクでリンク前に作成する必要があります。
readonly	実行可能ファイルを生成する前に、アーカイブライブラリ (.a) に存在する -xipo でコンパイルしたオブジェクトファイルを使ってリンカーに渡すオブジェクトファイルを最適化します。 -xipo_archive=readonly オプションを指定すると、リンク時に指定されたアーカイブライブラリのオブジェクトファイルで、モジュール間のインライン化と内部手続きデータフロー解析が有効になります。ただし、モジュール間インライン化によってほかのモジュールに挿入されたコードを除く、アーカイブライブラリのコードのモジュール間最適化は有効になりません。 アーカイブライブラリ内のコードにモジュール相互の最適化を適用するには、-xipo_archive=writeback を指定する必要があります。このオプションは、コードが抽出されたアーカイブライブラリの内容を変更します。

値	意味
none	これはデフォルト値です。アーカイブファイルの処理は行いません。コンパイラは、モジュール間のインライン化やその他のモジュール間の最適化を、-xipo を使用してコンパイルされ、リンク時にアーカイブライブラリから抽出されたオブジェクトファイルに適用しません。これを行うには、-xipo と、-xipo_archive=readonly または -xipo_archive=writeback のいずれかをリンク時に指定する必要があります。

-xipo_archive の値が指定されない場合、-xipo_archive=none に設定されます。

-xipo_archive= を値付きで指定する必要があります。

B.2.118 -xipo_build=[yes|no]

-xipo_build を指定せずに -xipo を構築すると、コンパイラを通じて 2 回受け渡しが行われることになります (オブジェクトファイルを生成するとき、およびリンク時にファイル間の最適化を実行するとき)。-xipo_build を設定すると、最初の受け渡し時には最適化されず、リンク時にのみ最適化されることによって、コンパイルの時間が短縮されます。-xipo を指定するとリンク時に最適化が実行されるため、オブジェクトファイルを最適化する必要はありません。-xipo_build を指定して作成された最適化されていないオブジェクトファイルを -xipo を指定せずにリンクして最適化すると、アプリケーションのリンクが未解決のシンボルエラーで失敗します。

B.2.118.1 -xipo_build の例

次の例では、.o ファイルの高速ビルドを実行し、リンク時にファイル間の最適化を行なっています。

```
% cc -O -xipo -xipo_build -o code1.o -c code1.c
% cc -O -xipo -xipo_build -o code2.o -c code2.c
% cc -O -xipo -o a.out code1.o code2.o
```

-xipo_build は、.o ファイルを作成するときに -O をオフにして、ファイルを迅速に作成します。完全な -O の最適化は、-xipo のファイル間の最適化の一部としてリンク時に実行されます。

次の例は、-xipo を使用せずにリンクしています。

```
% cc -O -o a.out code1.o code2.o
```

-xipo_build を指定して code1.o または code2.o を生成した場合、リンク時にエラーになり、シンボル __unoptimized_object_file が未解決であることが示されます。

.o ファイルを別々に作成する場合、デフォルトの動作は -xipo_build=no です。ただし、実行可能ファイルまたはライブラリがソースファイルから 1 回の受け渡しで作成された場合は、-xipo_build が暗黙的に有効になります。例:

```
% cc -fast -xipo a.c b.c c.c
```

この場合、a.o、b.o、および c.o が生成される最初の受け渡しで、-xipo_build=yes が暗黙的に有効になります。この動作を無効にするには、オプション -xipo_build=no を含めます。

B.2.119 -xivdep[=*p*]

#pragma ivdep プラグマの解釈を無効にするか、または設定します (*ベクトルの依存関係を無視します*)。

ivdep プラグマは、最適化の目的でループ内で検出された、配列参照へのループがもたらす依存関係の一部またはすべてを無視するようにコンパイラに指示します。これによってコンパイラは、マイクロベクトル化、分散、ソフトウェアパイプラインなど、それ以外の場合は不可能なさまざまなループ最適化を実行できます。これは、依存関係が重要ではない、または依存関係が実際に発生しないことをユーザーが把握している場合に使用されます。

#pragma ivdep 指令の解釈は、–xivdep オプションの値に応じて異なります。

次のリストは、*p* の値とそれらの意味です。

loop	ループキャリーのベクトル依存と想定されるものを無視
loop_any	ループキャリーのベクトル依存をすべて無視
back	逆方向のループキャリーのベクトル依存と想定されるものを無視
back_any	逆方向のループキャリーのベクトル依存をすべて無視
none	依存を無視しない (ivdep プラグマの無効化)

これらの解釈は、ほかのベンダーの ivdep プラグマの解釈との互換性のために提供されます。

B.2.120 -xjobs{=*n*|auto}

複数のプロセスでコンパイルします。このフラグを指定しない場合、デフォルトの動作は -xjobs=auto です。

コンパイラが処理を行うために生成するプロセスの数を設定するには、-xjobs オプションを指定します。このオプションを使用すると、マルチ CPU マシン上での構築時間を短縮できます。現時点では、-xjobs とともに使用できるのは -xipo オプションだけです。-xjobs=*n* を指定すると、内部手続きオプティマイザ は、さまざまなファイルをコンパイルするために呼び出せるコードジェネレータインスタンスの最大数として *n* を使用します。

一般に、*n* に指定する確実な値は、使用できるプロセッサ数に 1.5 を掛けた数です。生成されたジョブ間のコンテキスト切り替えにより生じるオーバーヘッドのため、使用できるプロセッサ数の何倍もの値を指定すると、パフォーマンスが低下することがあります。また、あまり大きな数を使用すると、スワップ領域などシステムリソースの限界を超える場合があります。

-xjobs=auto を指定すると、コンパイラは適切な並列ジョブの数を自動的に選択します。

-xjobs には必ず値を指定する必要があります。それ以外の場合は、エラー診断が発行され、コンパイルは中止されます。

-xjobs を指定しない場合、デフォルトの動作は -xjobs=auto です。これは、コマンド行に -xjobs=*n* を追加することによってオーバーライドできます。コマンド行に複数の -xjobs のインスタンスがある場合、一番右にあるインスタンスが実行されるまで相互にオーバーライドします。

B.2.120.1 -xjobs の例

次の例は、-xipo に最大 3 つの並列プロセスを使用しています。

```
% cc -xipo -xO4 -xjobs=3 t1.o t2.o t3.o
```

次の例は、-xipo に単一のプロセスを順次リンクしています。

```
% cc -xipo -xO4 -xjobs=1 t1.o t2.o t3.o
```

次の例は、コンパイラが -xipo のジョブ数を選択して、並列でリンクしています。

```
% cc -xipo -xO4  t1.o t2.o t3.o
```

これは、-xjobs=auto を明示的に指定したときの動作とまったく同じです。

```
% cc -xipo -xO4 -xjobs=auto t1.o t2.o t3.o
```

B.2.121 -xkeep_unref[={[no%]funcs,[no%]vars}]

参照されない関数および変数の定義を維持します。接頭辞 no%は、その定義を場合によっては削除することをコンパイラに許可します。

デフォルトは no%funcs,no%vars です。-xkeep_unref を指定することは -xkeep_unref=funcs,vars を指定することと同等であり、-keep_unref によってすべてが維持されることを意味します。

B.2.122 -xkeepframe[=[%all,%none,*name*,no%*name*]]

指定した機能 (*name*) のスタック関連の最適化を禁止します。

%all	すべてのコードのスタック関連最適化を禁止します。
%none	すべてのコードのスタック関連最適化を許可します。

このオプションは累積的で、コマンド行で複数回指定できます。たとえば、`–xkeepframe=%all –xkeepframe=no%func1` は、`func1` を除くすべての関数についてスタックフレームを維持するべきであることを示しています。また、`–xkeepframe` は `–xregs=frameptr` をオーバーライドします。たとえば、`–xkeepframe=%all –xregs=frameptr` は、すべての関数のスタックが保持されるはずですが、`–xregs=frameptr` の最適化は無視されることを示します。

このオプションがコマンド行で指定されていないと、コンパイラはデフォルトの `-xkeepframe=%none` を使用します。このオプションが値なしで指定されると、コンパイラは `-xkeepframe=%all` を使用します。

B.2.123 `-xlang=`*language*

(Oracle Solaris) `-xlang` フラグを使用すると、`-std` フラグで指定されているデフォルトの libc 動作をオーバーライドできます。*language* は、次のいずれかである必要があります。

`c89`	libc のランタイムライブラリの動作が C90 標準に準拠するように指定します。
`c99`	libc のランタイムライブラリの動作が C99 標準に準拠するように指定します。
`c11`	`c99` と同義です。`c99` および `c11` の libc のランタイムライブラリの動作は同じです。

`-xlang` が指定されていない場合は、デフォルトで `-std` フラグと同じ値になります。

`-xlang` を指定した場合、`-Xc`、`-Xa`、`-Xt`、`-Xs`、および `-xc99` フラグは使用できません。一緒に指定するとコンパイラによってエラーが発行されます。

別々の手順でコンパイルしてリンクする場合は、両方の手順に同じ `-xlang` の値を使用する必要があります。

言語混合リンクに使用するドライバを決定するには、次の言語階層を使用します。

C++	`CC` コマンドを使用します。詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: C++ ユーザーズガイド』を参照してください。
Fortran 95 (または Fortran 90)	`f95` コマンドを使用します。詳細については、『Oracle Developer Studio 12.5: Fortran ユーザーズガイド』を参照してください。
Fortran 77	`f95 -xlang=f77` を使用します。詳細については、『Oracle Developer Studio 12.5: Fortran ユーザーズガイド』を参照してください。
C	`cc` コマンドを使用します。

このフラグは Oracle Solaris でのみ使用でき、Oracle Linux では暗黙的に無視されます。

B.2.124 -xldscope={*v*}

extern シンボルの定義に対するデフォルトのリンカースコープを変更するには、-xldscope オプションを指定します。デフォルトを変更すると、実装がよりうまく隠されるので、より早く、より安全に共有ライブラリを使用できます。

v には、次のいずれかを指定します。

表 67 -xldscope のフラグ

フラグ	意味
global	大域リンカースコープは、もっとも制限の少ないリンカースコープです。シンボルに対する参照はすべて、シンボルを定義する最初の動的モジュール内の定義に結合します。このリンカースコープは、extern シンボルの現在のリンカースコープです。
symbolic	シンボリックリンカースコープは、大域リンカースコープよりも制限的です。リンクしている動的モジュール内のシンボルに対する参照はすべて、モジュール内に定義されたシンボルに結合します。モジュールの外側では、シンボルは大域と同じです。このリンカースコープはリンカーオプション -Bsymbolic に対応します。リンカーの詳細は、ld(1) のマニュアルページを参照してください。
hidden	隠蔽リンカースコープは、シンボリックリンカースコープや大域リンカースコープよりも制限されたリンカースコープです。動的モジュール内の参照はすべて、そのモジュール内の定義に結合します。シンボルはモジュールの外側では認識されません。

-xldscope を指定しない場合は、コンパイラでは -xldscope=global が指定されます。引数を指定しないで -xldscope を指定すると、エラーが表示されます。コマンド行にこのオプションの複数のインスタンスがある場合、一番右にあるインスタンスが実行されるまで相互にオーバーライドします。

クライアントがライブラリ内の関数をオーバーライドできるようにする場合は必ず、ライブラリの構築時に関数がインラインで生成されないようにしてください。コンパイラは次の状況で関数をインライン化します。

- 関数名を -xinline 付きで指定する。
- -xO4 以上でコンパイルする。この場合、インライン化は自動的に行われることがあります。
- インライン指定子を使用する。
- インラインプラグマを使用する。
- ファイル間最適化を使用する。

たとえば、ABC というライブラリにデフォルトの allocator 関数があり、ライブラリクライアントがその関数を使用でき、ライブラリの内部でも使用されるものとします。

```
void* ABC_allocator(size_t size) { return malloc(size); }
```

-xO4 以上でライブラリを構築すると、コンパイラはライブラリコンポーネント内での ABC_allocator の呼び出しをインライン化します。ライブラリユーザーが、カスタマイズされた

バージョンで ABC_allocator を置き換えようとする場合、ABC_allocator を呼び出したライブラリコンポーネント内では置き換えは発生しません。最終的なプログラムには、この関数の相異なるバージョンが含まれることになります。

__hidden 指定子または __symbolic 指定子で宣言されたライブラリ関数は、ライブラリの構築時にインラインで生成できます。これらの関数では、ユーザーによるオーバーライドはサポートされていません。詳細については、31 ページの「リンカースコープ指定子」を参照してください。

__global 指示子で宣言されたライブラリ関数はインラインで宣言しないでください。また、-xinline コンパイラオプションを使用してインライン化することから保護されるようにしてください。

-xinline、-xO、-xipo 、#pragma inline も参照してください。

B.2.125 -xlibmieee

例外が起きた場合の数学ルーチンの戻り値を強制的に IEEE 754 形式にします。この場合、例外メッセージは出力されないので、errno には依存しないでください。

B.2.126 -xlibmil

実行速度を上げるため、一部のライブラリルーチンをインライン化します。オプションによって浮動小数点演算用オプションとプラットフォームに適したアセンブリ言語のインラインテンプレートが選択されます。

-xlibmil は、-xinline フラグで関数を指定しているかどうかに関係なく、関数をインライン化します。

ただし、こうした置換によって errno の値の信頼性が失われることがあります。プログラムが errno の値に依存している場合、このオプションの使用は避けてください。54 ページの「errno の値の保持」も参照してください。

B.2.127 -xlibmopt

このオプションによって、コンパイラは最適化された数学ルーチンのライブラリを利用できます。このオプションを使用するときは -fround=nearest を指定することによって、デフォルトの丸めモードを使用する必要があります。

数学ルーチンライブラリは最高のパフォーマンスが得られるように最適化されており、通常、高速なコードを生成します。この結果は、通常の数学ライブラリが生成する結果と少し異なることがあります。その場合、通常、異なるのは最後のビットです。

これらの置換によって、errno の設定の信頼性が失われる可能性があります。プログラムが errno の値に依存している場合、このオプションの使用は避けてください。詳細は、54 ページの「errno の値の保持」を参照してください。

このライブラリオプションをコマンド行に指定する順序は重要ではありません。

このオプションは -fast オプションを指定した場合にも設定されます。

-fast および -xnolibmopt も参照してください。

B.2.128 -xlic_lib=sunperf

(廃止) Sun Performance Library とリンクするときは、-library=sunperf を使用してください。

B.2.129 -xlicinfo

このオプションは、コンパイル時には暗黙的に無視されます。

B.2.130 -xlinkopt[=*level*]

(Oracle Solaris) 再配置可能なオブジェクトファイルに対してリンク時の最適化を実行するようコンパイラに指示します。このような最適化は、リンク時にオブジェクトのバイナリコードを解析することによって実行されます。オブジェクトファイルは書き換えられませんが、結果の実行可能コードは元のオブジェクトコードとは異なる場合があります。

-xlinkopt をリンク時に有効にするには、少なくともコンパイルコマンドで -xlinkopt を使用する必要があります。-xlinkopt を指定しないでコンパイルされたオブジェクトバイナリについても、オプティマイザは限定的な最適化を実行できます。

-xlinkopt は、コンパイラのコマンド行にある静的ライブラリのコードは最適化しますが、コマンド行にある共有 (動的) ライブラリのコードは最適化しません。共有ライブラリを構築 (-G でコンパイル) するときに、-xlinkopt も使用できます。

level には、実行する最適化のレベルを 0、1、2 のいずれかで設定します。次の表に、最適化レベルの一覧を示します。

表 68 -xlinkopt のフラグ

フラグ	意味
0	ポストオプティマイザは無効です。これがデフォルトです。
1	リンク時の命令キャッシュカラーリングと分岐の最適化を含む、制御フロー解析に基づき最適化を実行します。

フラグ	意味
2	リンク時のデッドコードの除去とアドレス演算の簡素化を含む、追加のデータフロー解析を実行します。

別の手順でコンパイルする場合は、コンパイルとリンクの両方の手順で -xlinkopt を指定する必要があります。

```
example% cc -c -xlinkopt a.c b.c
example% cc -o myprog -xlinkopt=2 a.o
```

表24「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションの全一覧をまとめています。

レベルパラメータは、コンパイラのリンク時にだけ使用されます。例では、オブジェクトバイナリが暗黙のレベル 1 でコンパイルされた場合でも、使用される最適化後レベルは 2 です。

-xlinkopt をレベルパラメータなしで指定した場合は、-xlinkopt=1 を示します。

-xlinkopt オプションでは、プログラムを最適化するためにプロファイルフィードバック (-xprofile) が必要です。プロファイリングは、コードの使用頻度がもっとも高い部分ともっとも低い部分を明らかにし、オプティマイザにそれに基づいて処理を集中するよう指示します。リンク時の最適化は、コードの最適な配置によって命令キャッシュミスを大幅に削減できる大規模アプリケーションで特に重要です。また、-xlinkopt はプログラム全体のコンパイル時に使用するともっとも効果的です。このオプションは次のように使用します。

```
example% cc -o progt -xO5 -xprofile=collect:prog file.c
example% progt
example% cc -o prog -xO5 -xprofile=use:prog -xlinkopt file.c
```

プロファイルフィードバックの使用方法についての詳細は、325 ページの「-xprofile=*p*」を参照してください。

-xlinkopt でコンパイルする場合は、-zcombreloc リンカーオプションは使用しないでください。

このオプションを指定してコンパイルすると、リンク時間がわずかに増えます。オブジェクトファイルも大きくなりますが、実行可能ファイルのサイズは変わりません。-xlinkopt と -g を指定してコンパイルすると、デバッグ情報が取り込まれるので、実行可能ファイルのサイズが増えます。

-xlinkopt は -xinstrument と一緒に使用することはできません。

B.2.131 -xloopinfo

どのループが並列化されるかを表示します。ループを並列化しない理由を簡潔に提供します。-xloopinfo オプションは、-xautopar が指定されている場合にのみ有効です。指定されていない場合は、コンパイラによって警告が表示されます。

コードの実行速度を上げるには、このオプションにマルチプロセッサシステムが必要です。シングルプロセッサシステムでは、通常、生成されたコードの実行速度は低下します。

B.2.132 -xM

指定された C プログラムで C プリプロセッサのみを実行します。プリプロセッサがメイクファイル依存関係を生成して結果を標準出力に送信することを要求します。make ファイルと依存関係についての詳細は、make(1) のマニュアルページを参照してください。

例:

```
#include <unistd.h>
void main(void)
{}
```

この出力を生成します。

```
e.o: e.c
e.o: /usr/include/unistd.h
e.o: /usr/include/sys/types.h
e.o: /usr/include/sys/machtypes.h
e.o: /usr/include/sys/select.h
e.o: /usr/include/sys/time.h
e.o: /usr/include/sys/types.h
e.o: /usr/include/sys/time.h
e.o: /usr/include/sys/unistd.h
```

-xM と -xMF を指定する場合、-xMF で指定したファイルに、コンパイラはすべてのメイクファイルの依存関係情報を追加します。

B.2.133 -xM1

-xM と同様にメイクファイルの依存関係を生成しますが、/usr/include ファイルは除きます。
例:

```
more hello.c
#include<stdio.h>
main()
{
    (void)printf(“hello\n”);
}
cc– xM hello.c
hello.o: hello.c
hello.o: /usr/include/stdio.h
```

-xM1 オプションを使用してコンパイルすると、ヘッダーファイルの依存関係の出力が抑制されます。

```
cc– xM1 hello.c
hello.o: hello.c
```

-Xs モードでは -xM1 は使用できません。

-xM1 と -xMF を指定する場合、-xMF で指定したファイルに、コンパイラはすべてのメイクファイルの依存関係情報を追加します。

B.2.134 -xMD

-xM と同様にメイクファイル依存関係を生成しますが、コンパイルは続行します。-xMD は、-o 出力 *filename* (指定されている場合、つまり入力ソース *filename*) から派生した、メイクファイル依存関係情報のための出力ファイルを生成します。*filename* の接尾辞は .d で置換 (または追加) されます。-xMD と -xMF を指定する場合、-xMF で指定したファイルに、プリプロセッサはすべてのメイクファイルの依存関係情報を書き込みます。複数のソースファイルを使って -xMD -xMF または **-xMD -o** *filename* でコンパイルすることは許可されず、エラーが生成されます。依存関係ファイルがすでに存在する場合は上書きされます。

B.2.135 -xMF *filename*

makefile の依存関係の出力先ファイルを指定するには、このオプションを使用します。1 つのコマンド行の -xMF で、複数の入力ファイルに個々の *filename* を指定することはできません。複数のソースファイルで -xMD -xMF または -xMMD -xMF を使用してコンパイルすることはできず、エラーが生成されます。依存関係ファイルがすでに存在する場合は上書きされます。

このオプションは -xM または -xM1 とともに使用できません。

B.2.136 -xMMD

システムヘッダーファイルを除き、メイクファイルの依存関係を生成するには、このオプションを使用します。このオプションは -xM1 と同じ機能を提供しますが、コンパイルは続行します。-xMMD は、-o 出力 *filename* (指定されている場合、つまり入力ソース *filename*) から派生した、メイクファイル依存関係情報のための出力ファイルを生成します。*filename* の接尾辞は .d で置換 (または追加) されます。-xMF を指定する場合、コンパイラは代わりに、ユーザーが指定したファイル名を使用します。複数のソースファイルで -xMMD -xMF または -xMMD -o *filename* を使用してコンパイルすることはできず、エラーが生成されます。依存関係ファイルがすでに存在する場合は上書きされます。

B.2.137 -xMerge

データセグメントをテキストセグメントにマージします。このコンパイルで生成するオブジェクトファイルで初期化されるデータは読み取り専用なので、ld -N でリンクしていないかぎり、プロセスどうしで共有することができます。

3 つのオプション -xMerge -ztext -xprofile=collect を一緒に使用するべきではありません。-xMerge を指定すると、静的に初期化されたデータを読み取り専用記憶領域に強制的に配置します。 -ztext を指定すると、位置に依存するシンボルを読み取り専用記憶領域内で再配置することを禁止します。-xprofile=collect を指定すると、書き込み可能記憶領域内で、静的に初期化された、位置に依存するシンボルの再配置を生成します。

B.2.138 -xmaxopt[=*v*]

このオプションは、pragma opt のレベルを指定されたレベルに制限します。*v* は、off、1、2、3、4、5 のいずれかです。デフォルト値は -xmaxopt=off であり、pragma opt は無視されます。引数を指定せずに -xmaxopt を指定することは、-xmaxopt=5 を指定することと同義です。

-xO と -xmaxopt の両方を指定する場合、-xO で設定する最適化レベルが -xmaxopt 値を超えてはいけません。

B.2.139 -xmemalign=*ab*

(SPARC) データの境界整列についてコンパイラが行う想定を制御するには、-xmemalign オプションを使用します。潜在的に不正な境界整列メモリーアクセスのために生成されたコードを制御し、不正境界整列アクセスの場合のプログラム動作を制御することで、より簡単に SPARC プラットフォームにコードを移植できます。

最大想定メモリー境界整列と不正境界整列データアクセスの動作を指定します。*a* (境界整列) と *b* (動作) の両方の値を指定する必要があります。*a* は、最大想定メモリー境界整列を指定します。*b* は、不正境界整列メモリーアクセスの動作を指定します。次に、-memalign の境界整列と動作の値を示します。

表 69 -xmemalign の境界整列と動作のフラグ

a		*b*	
1	最大 1 バイトの境界整列	i	アクセスを解釈し、実行を継続する
2	最大 2 バイトの境界整列	s	シグナル SIGBUS を発生させます。
4	最大 4 バイトの境界整列	f	64 ビット SPARC (-m64) のみ: 4 以下の境界整列の場合にシグナル SIGBUS を発生させます。それ以外の場合、アクセスを解釈し

a		*b*	
			て実行を継続します。32 ビットプログラムの場合、f フラグは i と同義です。
8	最大 8 バイトの境界整列		
16	最大 16 バイトの境界整列		

b を i か f のいずれかに設定してコンパイルしたオブジェクトファイルにリンクする場合は、必ず、-xmemalign を指定する必要があります。表24「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションの全一覧をまとめています。

コンパイル時に境界整列が判別できるメモリーへのアクセスの場合、コンパイラはそのデータの境界整列に適したロードおよびストア命令を生成します。

境界整列がコンパイル時に決定できないメモリーアクセスの場合、コンパイラは、境界整列を想定して、必要なロード/ストア命令のシーケンスを生成します。-xmemalign オプションは、これらの状況のときにコンパイラが想定するデータの最大メモリー境界整列を指定できます。-xmemalign オプションは、境界整列に失敗したメモリーへのアクセスが実行時に発生した場合に行われるエラー動作 (処理) についても指定できます。

実行時の実際のデータ境界整列が指定された整列に達しない場合、境界整列に失敗したアクセス (メモリー読み取りまたは書き込み) が行われると、トラップが発生します。このトラップに対して可能な応答は 2 つあります。:

- OS がトラップを SIGBUS シグナルに変換します。プログラムがこのシグナルを捕捉しない場合、プログラムは停止します。プログラムがシグナルを捕捉しても、境界整列に失敗したアクセスが成功するわけではありません。
- 境界整列に失敗したアクセスが正常に成功したかのように OS がアクセスを解釈し、プログラムに制御を戻すことによってトラップを処理します。

次のデフォルトの値は、-xmemalign オプションがまったく指定されていない場合にのみ適用されます。

- すべての 32 ビットプラットフォーム (-m32) で -xmemalgin=8i。
- すべての 64 ビットプラットフォーム (-m64) で -xmemalign=8s。

-xmemalign オプションが指定されているけれども値が与えられていないときのデフォルトは、すべてのプラットフォームで -xmemalign=1i です。

次の表は、さまざまな境界整列状況を扱うために -xmemalign をどのように使用できるかについての説明です。

表 70 -xmemalign の例

コマンド	状況
-xmemalign=1s	境界整列されていないデータへのアクセスが多いため、トラップ処理が遅すぎる

コマンド	状況
-xmemalign=8i	コード内に境界整列されていないデータへのアクセスが意図的にいくつか含まれているが、それ以外は正しい
-xmemalign=8s	プログラム内に境界整列されていないデータへのアクセスは存在しないと思われる
-xmemalign=2s	奇数バイトへのアクセスが存在しないか検査したい
-xmemalign=2i	奇数バイトへのアクセスが存在しないか検査し、プログラムを実行したい

B.2.140 -xmodel=[*a*]

(x86) -xmodel オプションは、コンパイラが Oracle Solaris x86 プラットフォームのために 64 ビットオブジェクトの形式を変更することを許可します。そのようなオブジェクトのコンパイルにのみ指定するようにしてください。

-m32 が指定された場合、このオプションは無効です。

次の表に、*a* の値の一覧を示します。

表 71 -xmodel のフラグ

値	意味
small	このオプションは、実行されるコードの仮想アドレスがリンク時にわかっていて、すべてのシンボルが 0 ～ 2^31 - 2^24 - 1 の範囲の仮想アドレスに配置されることがわかっているスモールモデルのコードを生成します。
kernel	すべてのシンボルが 2^64 - 2^31 ～ 2^64 - 2^24 の範囲で定義されるカーネルモデルのコードを生成します。
medium	データセクションへのシンボリック参照の範囲に関する前提がないミディアムモデルのコードを生成します。テキストセクションのサイズとアドレスは、スモールコードモデルの場合と同じように制限されます。静的データが大量にあるアプリケーションでは、-m64 を指定してコンパイルするときに、-xmodel=medium が必要になることがあります。

このオプションは累積的ではないため、コンパイラはコマンド行でもっとも右側の -xmodel に従ってモデル値を設定します。

-xmodel を指定しない場合、コンパイラは -xmodel=small と見なします。引数を指定せずに-xmodel を指定すると、エラーになります。

すべての変換単位をこのオプションでコンパイルする必要はありません。アクセスするオブジェクトが範囲内にあれば、選択したファイルをコンパイルできます。

すべての Oracle Linux システムが medium モデルをサポートしているわけではないので注意してください。

B.2.141 -xnolib

デフォルトのライブラリリンクを行いません。つまり ld(1) に -l オプションを渡しません。通常は、cc ドライバが -lc を ld に渡します。

-xnolib を使用する場合、すべての -l オプションをユーザーが渡さなければいけません。

B.2.142 -xnolibmil

数学ライブラリのルーチンをインライン化しません。このオプションは、–fast オプションのあとで使用します。例:

```
% cc– fast– xnolibmil....
```

B.2.143 -xnolibmopt

以前に指定された -xlibmopt オプションを無効にすることによって、最適化された数学ライブラリがコンパイラによって使用されることを防ぎます。たとえば、このオプションは -xlibmopt を有効にする -fast のあとで使用します。

```
% cc -fast -xnolibmopt ...
```

B.2.144 -xnorunpath

実行可能ファイルに共有ライブラリへの実行時検索パスを組み込みません。

このオプションは、プログラムで使用される共有ライブラリに異なるパスを持つ可能性がある顧客に出荷される実行可能ファイルを構築する場合に推奨されます。

B.2.145 -xO[1|2|3|4|5]

コンパイラ最適化レベルを設定します。大文字 O のあとに数字 1、2、3、 4、または 5 が続きます。一般に、最適化のレベルが高いほど、実行時パフォーマンスは向上します。しかし、最適化レベルが高ければ、それだけコンパイル時間が増え、実行可能ファイルが大きくなる可能性があります。

いくつかの場合には、-xO2 がほかのものよりパフォーマンスが良いことがあり、-xO3 が -xO4 よりパフォーマンスが良いことがあります。

オプティマイザによりメモリーが不足した場合は、最適化のレベルを下げて現在の関数を再試行することによって処理を続行しようとします。これ以後の関数に対してはコマンド行オプションで指定されている本来のレベルで再開します。

デフォルトは最適化なしです。最適化レベルを指定しない場合にのみ可能です。最適化レベルを指定する場合は、最適化を無効にできません。

最適化レベルを設定しないようにする場合は、最適化レベルを示すようなオプションを指定しないようにしてください。たとえば、`-fast` は最適化を `-xO5` に設定するマクロオプションです。最適化レベルを暗黙に示すほかのすべてのオプションは、最適化レベルが設定されているという警告メッセージを発行します。最適化なしでコンパイルする唯一の方法は、コマンド行またはメイクファイルから最適化レベルを指定するすべてのオプションを削除することです。

`-xO3` 以下の最適化レベルで `-g` を指定すると、ほぼ完全な最適化と可能なかぎりのシンボル情報を取得できます。末尾呼び出しの最適化とバックエンドのインライン化は無効です。

`-xO4` 以上の最適化レベルで `-g` を指定すると、完全な最適化と可能なかぎりのシンボル情報を取得できます。

`-g` を指定したデバッグでは、`-xO`*n* が抑制されませんが、`-xO`*n* はいくつかの方法で `-g` を制限します。たとえば、最適化オプションは、デバッグのユーティリティを減らすので `dbx` からの変数を表示できませんが、それでも `dbx where` コマンドを使用して、シンボリックトレースバックを取得することはできます。詳細は、『*dbx コマンドによるデバッグ*』の第 1 章の「最適化コードのデバッグ」を参照してください。

`-xO` と `-xmaxopt` の両方を指定する場合、`-xO` で設定する最適化レベルが `-xmaxopt` 値を超えてはいけません。

`-xO3` または `-xO4` で (1 つの関数内のコードが数千行になるような) 大きな関数を最適化する場合、膨大な量の仮想メモリーが必要になり、そのような場合、マシンパフォーマンスが低下することがあります。

B.2.145.1 SPARC 最適化

次の表は、SPARC プラットフォームでの最適化レベルの一覧です。

表 72 SPARC プラットフォームでの `-xO` のフラグ

値	意味
`-xO1`	最小限の局所的な最適化 (ピープホール) を行います。
`-xO2`	基本的な局所的および大域的最適化を行います。ここでは帰納変数の削除、局所的および大域的な共通部分式の除去、算術の簡素化、コピー通達、定数通達、不変ループの最適化、レジスタの割り当て、基本ブロックのマージ、再帰的末尾の除去、無意味なコードの除去、末尾呼び出しの削除、複雑な式の展開を行います。 `-xO2`レベルでは、大域、外部、間接の参照または定義はレジスタに割り当てられません。これらの参照や定義は、あたかも `volatile` 型として宣言されたかのように取り扱われます。一般的 `-xO2` レベルではコードサイズはもっとも小さくなります。

値	意味
-x03	-x02 に加えて、外部変数の参照または定義も最適化します。ループの展開やソフトウェアのパイプラインなども実行されます。このレベルでは、ポインタ代入の影響は追跡されません。シグナルハンドラの内部から外部変数を変更するデバイスドライバまたはプログラムをコンパイルするときは、volatile 型修飾子を使用してオブジェクトを最適化から保護する必要がある場合があります。-x03 レベルは通常、コードサイズが増大します。
-x04	-x03 に加えて、同一のファイルに含まれている関数の自動的なインライン化も行います。通常はこれによって実行速度が上がります。どの関数がインライン化されるかを制御するには、289 ページの「-xinline=*list*」を参照してください。 このレベルでは、ポインタ代入の結果が追跡され、通常はコードサイズが増大します。
-x05	最高レベルの最適化を行おうとします。この最適化アルゴリズムは、コンパイルの所要時間が長く、また実行時間が確実に短縮される保証がありません。このレベルの最適化によってパフォーマンスが改善される確率を高くするには、プロファイルのフィードバックを使用します。詳細は、325 ページの「-xprofile=*p*」を参照してください。

B.2.145.2 x86 最適化レベル

次の表は、x86 プラットフォームでの最適化レベルの一覧です。

表 73 x86 プラットフォームでの -x0 のフラグ

値	意味
-x01	単一段階のデフォルト最適化のほかに、メモリーからの引数の事前ロードと、クロスジャンプ (末尾融合) を行います。
-x02	高レベルと低レベルの両方の命令をスケジュールし、改良されたスピル解析、ループメモリー参照の除去、レジスタ寿命解析、高度なレジスタ割り当て、大域共通部分式の除去を行います。
-x03	レベル 2 で行われる最適化のほかに、ループ強度削減と誘導変数除去を行います。
-x04	-x03 の最適化の実行に加えて、同じファイルに含まれている関数の自動インライン化を実行します。この自動インライン化は通常、実行速度を改善しますが、ときには悪化することもあります。このレベルは通常、コードサイズが増大します。
-x05	最高レベルの最適化を行います。この最適化アルゴリズムは、コンパイルの所要時間が長く、また実行時間が確実に短縮される保証がありません。これらの一部は、エクスポートされた関数がローカル呼び出し規則エントリポイントを生成したり、スピルコードをさらに最適化したり、命令スケジュールを向上するための解析を追加したりすることを含みます。

デバッグの詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: dbx コマンドによるデバッグ』を参照してください。最適化の詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: パフォーマンスアナライザ』を参照してください。

-xldscope および -xmaxopt も参照してください。

B.2.146 -xopenmp[={parallel|noopt|none}]

OpenMP 指令で明示的な並列化を有効にします。

-xopenmp の値を次の表に示します。

表 74 -xopenmp のフラグ

値	意味
parallel	OpenMP プラグマの認識を有効にします。-xopenmp=parallel での最適化レベルは -xO3 です。コンパイラは必要に応じて最適化レベルを -xO3 に引き上げ、警告を発行します。 このフラグは、プリプロセッサマクロ _OPENMP も定義します。_OPENMP マクロは、10 進値 *yyyymm* が含まれるように定義します。ここで、*yyyy* と *mm* は、この実装がサポートする OpenMP API のバージョンの年と月を示します。特定のリリースの _OPENMP マクロの値については、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。
noopt	OpenMP プラグマの認識を有効にします。最適化レベルが -O3 より低い場合は、最適化レベルは上げられません。 cc -O2 -xopenmp=noopt のように -O3 より低い最適化レベルを明示的に設定すると、エラーが表示されます。-xopenmp=noopt で最適化レベルを指定しなかった場合、OpenMP プラグマが認識され、その結果プログラムが並列化されますが、最適化は行われません。 このフラグは、プリプロセッサトークン _OPENMP も定義します。
none	OpenMP プラグマの認識を有効にせず、プログラムの最適化レベルへの変更は行わず、プリプロセッサマクロを定義しません。-xopenmp が指定されない場合は、これがデフォルトになります。

-xopenmp を指定するけれども値を指定しない場合、コンパイラは -xopenmp=parallel であると見なします。-xopenmp を一切指定しない場合、コンパイラは -xopenmp=none であると見なします。

dbx を指定して OpenMP プログラムをデバッグする場合、-g -xopenmp=noopt を指定してコンパイルすれば、並列化部分にブレークポイントを設定して変数の内容を表示できます。

-xopenmp のデフォルトは、将来のリリースで変更される可能性があります。警告メッセージを出力しないようにするには、適切な最適化レベルを明示的に指定します。

OpenMP プログラムを実行するときに使用するスレッドの数を指定するには、OMP_NUM_THREADS 環境変数を使用します。OMP_NUM_THREADS が設定されていない場合、使用されるスレッドのデフォルト数はソケットあたりのコアの数の倍数 (つまり、プロセッサチップあたりのコア数) です。これは、コアの総数と 32 のどちらか小さい方に等しいかまたはそれより少なくなります。別のスレッド数を指定するには、OMP_NUM_THREADS 環境変数を設定するか、omp_set_num_threads() OpenMP 実行時ルーチンを呼び出すか、並列領域ディレクティブの num_threads 節を使用します。最高のパフォーマンスを得るため、並列領域の実行に使

用するスレッドの数が、マシン上で使用できるハードウェアスレッド (仮想プロセッサ) の数を超えないようにしてください。Oracle Solaris システムでは、`psrinfo` (1M) コマンドを使用すると、この数を特定できます。Oracle Linux システムでは、この数は、ファイル `/proc/cpuinfo` を検査することによって特定できます。詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。

入れ子並列は、デフォルトでは無効です。入れ子並列を有効にするには、`OMP_NESTED` 環境変数を TRUE に設定する必要があります。詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。

コンパイルとリンクを別々に実行する場合は、コンパイル手順とリンク手順の両方に `-xopenmp` を指定してください。リンク手順とともに使用した場合、`-xopenmp` オプションは、OpenMP 実行時サポートライブラリ `libmtsk.so` とリンクします。

最新の機能と最適なパフォーマンスを得るために、OpenMP 実行時ライブラリの最新のパッチ、`libmtsk.so` がシステムにインストールされていることを確認してください。

マルチスレッド対応アプリケーションを構築するための OpenMP Fortran 95、C および C++ アプリケーションプログラムインタフェース (API) の詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』を参照してください。

B.2.147 `-xP`

すべての K&R C 関数のプロトタイプを出力する際、コンパイラはソースファイルに対して構文および意味検査のみ行います。このオプションは、オブジェクトコードや実行可能コードを生成しません。たとえば次のソースファイルに `-xP` を指定したと仮定します。

```
f()
{
}

main(argc,argv)
int argc;
char *argv[];
{
}
```

この出力を生成します。

```
int f(void);
int main(int, char **);
```

B.2.148 `-xpagesize=`*n*

スタックとヒープ用の優先ページサイズを設定します。

SPARC: 次の値が有効です: 4k、8K、64K、512K、2M、4M、32M、256M、2G、16G、または default。

x86: 次の値が有効です: 4K、2M、4M、1G、または default。

有効なページサイズを指定しない場合は、要求は実行時にサイレントに無視されます。ターゲットプラットフォームに対して有効なページサイズを指定する必要があります。

ページ内のバイト数を判断するには、pagesize(1) Oracle Solaris コマンドを使用します。オペレーティングシステムでは、ページサイズ要求に従うという保証はありません。ただし、適切なセグメントの整合を使用して、要求されたページサイズを取得できる可能性を高められます。セグメントの整合の設定方法は、-xsegment_align オプションを参照してください。ターゲットプラットフォームのページサイズを判断するには、 pmap(2) または meminfo(2) を使用します。

-xpagesize オプションは、コンパイル時とリンク時に使用しないかぎり無効です。表24「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションの全一覧をまとめています。

-xpagesize=default を指定する場合は、Oracle Solaris オペレーティングシステムがページサイズを設定します。

このオプションを指定してコンパイルすることは、LD_PRELOAD 環境変数を同等のオプションで mpss.so.1 に設定するか、またはプログラムを実行する前に同等のオプションを指定して Oracle Solaris コマンド ppgsz(1) を実行することと同じ効果を持ちます。詳細は、関連する Oracle Solaris マニュアルページを参照してください。

このオプションは -xpagesize_heap と -xpagesize_stack のマクロです。これらの 2 つのオプションは -xpagesize と同じ次の引数を使用します。-xpagesize を指定することで両方のオプションに同じ値を設定したり、それらをそれぞれ別々の値で指定したりできます。

-xpagesize が Oracle Linux 上で動作するには、libhugetlbfs ライブラリが必要です。詳細については、Oracle Linux の libhugetlbfs(7) のマニュアルページを参照してください。

B.2.149 -xpagesize_heap=*n*

ヒープ用のメモリーページサイズを設定します。

このオプションは、–xpagesize と同じ値を受け入れます。有効なページサイズを指定しないと、要求は実行時に暗黙的に無視されます。

Oracle Solaris オペレーティングシステムでページのバイト数を判断するには、getpagesize(3C) コマンドを使用します。Oracle Solaris オペレーティングシステムは、ページサイズ要求に従うという保証を提供しません。ターゲットプラットフォームのページサイズを判断するには、 pmap(1) または meminfo(2) を使用します。

-xpagesize_heap=default を指定する場合は、Oracle Solaris オペレーティングシステムがページサイズを設定します。

このオプションを指定してコンパイルすることは、LD_PRELOAD 環境変数を同等のオプションで mpss.so.1 に設定するか、またはプログラムを実行する前に同等のオプションを指定して Oracle Solaris コマンド ppgsz(1) を実行することと同じ効果を持ちます。詳細は、関連する Oracle Solaris マニュアルページを参照してください。

-xpagesize_heap オプションは、コンパイル時とリンク時に使用しないかぎり無効です。表 24「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションの全一覧をまとめています。

B.2.150 -xpagesize_stack=*n*

スタック用のメモリーページサイズを設定します。

このオプションは、–xpagesize と同じ値を受け入れます。有効なページサイズを指定しないと、要求は実行時に暗黙的に無視されます。

Oracle Solaris オペレーティングシステムでページのバイト数を判断するには、getpagesize(3C) コマンドを使用します。Oracle Solaris オペレーティングシステムは、ページサイズ要求に従うという保証を提供しません。ターゲットプラットフォームのページサイズを判断するには、 pmap(1) または meminfo(2) を使用します。

-xpagesize_stack=default を指定する場合は、Oracle Solaris オペレーティングシステムがページサイズを設定します。

このオプションを指定してコンパイルすることは、LD_PRELOAD 環境変数を同等のオプションで mpss.so.1 に設定するか、またはプログラムを実行する前に同等のオプションを指定して Oracle Solaris コマンド ppgsz(1) を実行することと同じ効果を持ちます。詳細は、関連する Oracle Solaris マニュアルページを参照してください。

-xpagesize_stack オプションは、コンパイル時とリンク時に使用しないかぎり無効 です。表 24「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるコンパイラオプションの全一覧をまとめています。

B.2.151 -xpatchpadding[={fix|patch|*size*}]

各関数の開始前にメモリー領域を予約します。fix を指定した場合、コンパイラは fix で必要となる領域を予約して続行します。これは最初のデフォルトです。patch を指定した場合、または値を指定しない場合、コンパイラはプラットフォーム固有のデフォルト値で予約します。値 -xpatchpadding=0 は 0 バイトの領域を予約します。*size* の最大値は、x86 では 127 バイト、および SPARC では 2048 バイトです。

B.2.152 -xpch=*v*

このコンパイラオプションは、プリコンパイル済みヘッダー機能を起動します。*v* には、auto、autofirst、collect:*pch_filename*、use:*pch_filename* のいずれかを指定できます。この機能は、-xpch と -xpchstop オプションを、#pragma hdrstop ディレクティブと組み合わせることで利用できます。

-xpch オプションは、プリコンパイル済みヘッダーファイルを作成して、コンパイル時間を短縮するときに使用します。プリコンパイル済みヘッダーファイルは、大量のソースコードを含む一連の共通インクルードファイルセットをソースファイルが共有しているアプリケーションの、コンパイル時間を短縮します。プリコンパイル済みヘッダーを使用することによって、1 つのソースファイルから一連のヘッダーファイルに関する情報を収集し、そのソースファイルを再コンパイルする場合や、同じ一連のヘッダーを持つほかのソースファイルをコンパイルする場合に、その情報を使用することができます。コンパイラが収集する情報は、プリコンパイル済みヘッダーファイルに格納されます。

詳細は、-xpchstop、44 ページの「hdrstop」を参照してください。

B.2.152.1 プリコンパイル済みヘッダーファイルの自動作成

コンパイラは、2 つの方法のいずれかでプリコンパイル済みヘッダーファイルを自動的に生成できます。1 つは、ソースファイルで検出された最初のインクルードファイルからプリコンパイル済みヘッダーファイルを作成する方法、もう 1 つの方法は、コンパイラが、ソースファイルで検出されたインクルードファイルのセット (最初のインクルードファイルから始めて、どのインクルードファイルが最後のものであるかを判断するためのよく定義されたポイントまで) から選択する方法です。プリコンパイル済みヘッダーを自動的に生成するためにコンパイラがどの方法を使用するかを判断するには、次の表で説明するフラグのいずれかを使用します。

表 75 -xpch のフラグ

フラグ	意味
-xpch=auto	プリコンパイル済みヘッダーファイルの内容は、コンパイラがソースファイル内で検出する使用可能な最長の接頭辞に基づきます。このフラグは、最大限の数のヘッダーファイルで構成されるプリコンパイル済みヘッダーファイルを生成します。詳細は、318 ページの「活性文字列 (Viable Prefix)」を参照してください。
-xpch=autofirst	このフラグは、ソースファイル内で最初に検出されたヘッダーのみからなるプリコンパイル済みヘッダーファイルを生成します。

B.2.152.2 プリコンパイル済みヘッダーファイルの手動作成

プリコンパイル済みヘッダーファイルを手動で作成するには、最初に -xpch を使用し、collect モードを指定します。-xpch=collect を指定するコンパイルコマンドは、ソースファイルを 1 つし

か指定できません。次の例では、-xpch オプションがソースファイル a.c に基づいて myheader.cpch というプリコンパイル済みヘッダーファイルを作成します。

```
cc -xpch=collect:myheader a.c
```

有効なプリコンパイル済みヘッダーファイル名には常に、接尾辞 .cpch が付きます。*pch_filename* を指定するときに、自分が接尾辞を追加することも、コンパイラに追加してもらうこともできます。たとえば、cc -xpch=collect:foo a.c と指定する場合は、プリコンパイル済みヘッダーファイルは foo.cpch と呼ばれます。

B.2.152.3 既存のプリコンパイル済みヘッダーファイルの処理方法

コンパイラが -xpch=auto および -xpch=autofirst と一緒にプリコンパイル済みヘッダーファイルを使用できない場合、新しいプリコンパイル済みヘッダーファイルを生成します。コンパイラが -xpch=use と一緒にプリコンパイル済みヘッダーファイルを使用できない場合は、警告が発行され、実際のヘッダーを使ってコンパイルが行われます。

B.2.152.4 特定のプリコンパイル済みヘッダーファイルの使用の指定

-xpch=use:*pch_filename* を指定することによって、特定のプリコンパイル済みヘッダーを使用するようコンパイラに指示することもできます。プリコンパイル済みヘッダーファイルを作成するために使用されたソースファイルと同じインクルードファイルの並びを持つソースファイルであれば、いくつでも指定できます。たとえば、use モードのコマンドは次のようになる可能性があります: cc -xpch=use:foo.cpch foo.c bar.c foobar.c。

次の項目が真の場合にのみ、既存のプリコンパイル済みヘッダーファイルを使用してください。次のいずれかが真でない場合は、プリコンパイル済みヘッダーファイルを再作成するべきです。

- プリコンパイル済みヘッダーファイルにアクセスするために使用するコンパイラは、プリコンパイル済みヘッダーファイルを作成したコンパイラと同じであること。あるバージョンのコンパイラによって作成されたプリコンパイル済みヘッダーファイルは、別のバージョンのコンパイラでは使用できない場合があります。
- -xpch オプション以外で -xpch=use とともに指定するコンパイラオプションは、プリコンパイル済みヘッダーファイルが作成されたときに指定されたオプションと一致すること。
- -xpch=use で指定する一連のインクルードヘッダー群は、プリコンパイル済み ヘッダーファイルが作成されたときに指定されたヘッダー群と同じであること。
- -xpch=use で指定するインクルードヘッダーの内容が、プリコンパイル済みヘッダーファイルが作成されたときに指定されたインクルードヘッダーの内容と同じであること。
- 現在のディレクトリ (すなわち、コンパイルが実行中で指定されたプリコンパイル済みヘッダーファイルを使用しようとしているディレクトリ) が、プリコンパイル済みヘッダーファイルが作成されたディレクトリと同じであること。
- -xpch=collect で指定したファイル内の前処理ディレクティブ (#include ディレクティブを含む) の最初のシーケンスが、-xpch=use で指定したファイル内の前処理ディレクティブのシーケンスと同じであること。

B.2.152.5 活性文字列 (Viable Prefix)

プリコンパイル済みヘッダーファイルを複数のソースファイル間で共有するために、これらのソースファイルには、最初のトークンの並びとして一連の同じインクルードファイルを使用していなければいけません。トークンはキーワードか名前、句読点のいずれかです。コンパイラは、コードおよび、`#if` 指令によって除外されたコードをトークンとして認識しません。この最初のトークンの並びは、*活性文字列 (viable prefix)* として知られています。言い替えれば、活性文字列は、すべてのソースファイルに共通のソースファイルの先頭部分です。コンパイラはこの活性文字列を、プリコンパイル済みヘッダーファイルを作成し、それによってソースからどのヘッダーファイルがプリコンパイルされるかを判断するためのベースとして使用します。

現在のコンパイル中にコンパイラが検出する活性文字列は、プリコンパイル済みヘッダーファイルの作成に使用した活性文字列と一致する必要があります。言い替えれば、活性文字列は、同じプリコンパイル済みヘッダーファイルを使用するすべてのソースファイル間で一貫して解釈される必要があります。

ソースファイルの活性文字列は、コメントと次の任意のプリプロセッサ指令のみで構成できます。

```
#include
#if/ifdef/ifndef/else/elif/endif
#define/undef
#ident (if identical, passed through as is)
#pragma (if identical)
```

これらの指令はいずれかがマクロを参照していてもかまいません。`#else`、`#elif`、および `#endif` 指令は、活性文字列内で一致している必要があります。コメントは無視されます。

`-xpch=auto` または `-xpch=autofirst` を指定すると、コンパイラは活性文字列の終点を自動的に判断します。次のように定義されます。

- 最初の宣言/定義
- 最初の `#line` 指令
- `#pragma hdrstop` 指令
- 指定されたインクルードファイルのあと (`-xpch=auto` および `-xpchstop` が指定された場合)
- 最初のインクルードファイル (`-xpch=autofirst` が指定された場合)

注記 - プリプロセッサ条件コンパイル文内に終点がある場合は、警告が生成され、プリコンパイル済みヘッダーファイルの自動作成は無効になります。また、`#pragma hdrstop` と `-xpchstop` オプションの両方が指定された場合、コンパイラは 2 つの停止点のうちの早い方を使用して、活性文字列を終了します。

`-xpch=collect` または `-xpch=use` の場合、活性文字列は `#pragma hdrstop` で終了します。

プリコンパイル済みヘッダーファイルを共有する各ファイルの活性文字列内では、対応する各 `#define` 指令と `#undef` 指令は同じシンボルを参照する必要があります。`#define` の場合は、

それぞれが同じ値を参照する必要があります。各活性文字列内での順序も同じである必要があります。対応する各プラグマも同じで、その順序もプリコンパイル済みヘッダーを共有するすべてのファイルで同じでなければいけません。

B.2.152.6 ヘッダーファイルの妥当性の判定

ヘッダーファイルは、異なるソースファイル間で整合性のある方法で解釈されるとき (具体的には、完全な宣言のみを含むとき) に、プリコンパイル可能です。すなわち、どのファイルの宣言も有効な宣言として独立している必要があります。`struct S;` などの不完全な型宣言は有効な型宣言です。完全な型宣言がほかのファイルに存在している可能性があります。次のヘッダーファイルの例を考えてみてください。

```
file a.h
struct S {
#include "x.h" /* not allowed */
};

file b.h
struct T; // ok, complete declaration
struct S {
   int i;
[end of file, continued in another file] /* not allowed*/
```

プリコンパイル済みヘッダーファイルに組み込まれるヘッダーファイルは、次の制約に違反してはいけません。これらの制限に違反するプログラムをコンパイルした場合、結果は予測できません。

- ヘッダーファイルに、`__DATE__` や `__TIME__` が含まれていてはいけません。
- ヘッダーファイルに、`#pragma hdrstop`が含まれていてはいけません。

ヘッダーに変数と関数の宣言が含まれている場合は、ヘッダーも同様にプリコンパイル可能です。

B.2.152.7 プリコンパイル済みヘッダーファイルキャッシュ

プリコンパイル済みヘッダーファイルの自動作成では、コンパイラは、そのファイルを `SunWS_cache` ディレクトリに書き込みます。このディレクトリは常に、オブジェクトファイルが作成される場所に置かれます。`dmake` の下で適切に機能するように、ファイルの更新はロックして行われます。

自動生成されるプリコンパイル済みヘッダーファイルをコンパイラに強制的に再構築させる必要がある場合は、`CCadmin` ツールを使って、プリコンパイル済みヘッダーファイルキャッシュディレクトリをクリアできます。詳細は、`CCadmin`(1) のマニュアルページを参照してください。

B.2.152.8 警告

- 矛盾する -xpch フラグをコマンド行に指定しないでください。たとえば、-xpch=collect と -xpch=auto の両方を指定したり、-xpchstop=<include> を付けて -xpch=autofirst を指定したりすると、エラーになります。
- -xpch=autofirst を指定するか、-xpchstop なしで -xpch=auto を指定した場合、最初のインクルードファイル、あるいは -xpch=auto に -xpchstop を付けて指定したインクルードファイルの前に宣言や定義、#line 指令があると、エラーになり、プリコンパイル済みヘッダーファイルの自動生成が無効になります。
- -xpch=autofirst または -xpch=auto で、最初のインクルードファイルの前に #pragma hdrstop があると、プリコンパイル済みヘッダーファイルの自動生成が無効になります。

B.2.152.9 プリコンパイル済みヘッダーファイルの依存関係と make ファイル

-xpch=collect が指定されている場合、コンパイラはプリコンパイル済みヘッダーファイル用の依存関係情報を生成します。この依存関係情報を利用するには、メイクファイル内に適切な規則を作成する必要があります。次のメイクファイルの例を考えてみてください。

```
%.o : %.c shared.cpch
        $(CC) -xpch=use:shared -xpchstop=foo.h -c $<
default : a.out

foo.o + shared.cpch : foo.c
        $(CC) -xpch=collect:shared -xpchstop=foo.h foo.c -c

a.out : foo.o bar.o foobar.o
        $(CC) foo.o bar.o foobar.o

clean :
        rm -f *.o shared.cpch .make.state a.out
```

これらの make 規則は、コンパイラによって生成される依存関係とともに、-xpch=collect で使用したソースファイルのいずれか、またはプリコンパイル済みヘッダーファイルの一部であるヘッダーのいずれかに変更があった場合、手動で作成されたプリコンパイル済みヘッダーファイルを強制的に再作成します。この制約は、古いプリコンパイル済みヘッダーファイルの使用を防ぎます。

-xpch=auto または -xpch=autofirst の場合、メイクファイルに追加の make 規則を作成する必要はありません。

B.2.153 -xpchstop=[*file*|<include>]

-xpchstop=*file* オプションは、プリコンパイル済みヘッダーファイル用の活性文字列の最後のインクルードファイルを指定するときに使用します。コマンド行で -xpchstop を使用するの

は、cc コマンドで指定する各ソースファイルの *file* を参照する最初のインクルード指令のあとに hdrstopプラグマを配置するのと同じことです。

<include> までのヘッダーファイルに基づくプリコンパイル済みヘッダーファイルを作成するには、-xpchstop=<include> と -xpch-auto を組み合わせて使用します。このフラグは、活性文字列全体に含まれているすべてのヘッダーファイルを使用するデフォルトの -xpch=auto の動作をオーバーライドします。

次の例では、-xpchstop オプションは、プリコンパイル済みヘッダーファイルの活性文字列が projectheader.h をインクルードして終わるよう指定します。したがって、privateheader.h は活性文字列の一部ではありません。

```
example% cat a.c
     #include <stdio.h>
     #include <strings.h>
     #include "projectheader.h"
     #include "privateheader.h"
     .
     .
     .
example% cc -xpch=collect:foo.cpch a.c -xpchstop=projectheader.h -c
```

-xpch も参照してください。

B.2.154 -xpec[={yes|no}]

(Oracle Solaris) 移植可能な実行可能コード (Portable Executable Code、PEC) バイナリを生成します。このオプションは、プログラム中間表現をオブジェクトファイルとバイナリに入れます。このバイナリは、あとでチューニングやトラブルシューティングのために、使用される場合があります。

-xpec を指定して構築したバイナリは通常、-xpec なしで構築したバイナリより 5 〜 10 倍の大きさになります。

-xpec を指定しない場合、コンパイラは -xpec=no と見なします。-xpec を指定するけれどもフラグを指定しない場合は、コンパイラは -xpec=yes と見なします。

B.2.155 -xpentium

(x86) Pentium プロセッサ用のコードを生成します。

B.2.156 -xpg

gprof(1) によるプロファイリングの準備として、データを収集するためのオブジェクトコードを生成します。この記録メカニズムは実行が正常終了すると、gmon.outファイルを作成します。

注記 - -xprofile とともに使用される場合、-xpg は追加の利点を提供しません。これら 2 つのオプションは、他方で提供されるデータを準備または使用しません。

プロファイルは、64 ビット Oracle Solaris プラットフォームでは prof(1) または gprof (1) を使用して、32 ビット Oracle Solaris プラットフォームでは gprof のみを使用して生成され、メイン実行可能ファイル内のルーチンと、実行可能ファイルのリンク時にリンカー引数として指定された共有ライブラリ内のルーチンの PC 標本データ (pcsample(2) を参照) から求められる、ユーザー CPU 時間の概算値を取り込みます。そのほかの共有ライブラリ (dlopen(3C を使用してプロセスの起動後に開かれたライブラリ)) のプロファイルは作成されません。

32 ビット Oracle Solaris システムの場合、prof(1) を使用して生成されるプロファイルは、実行可能ファイル内のルーチンに制限されます。32 ビット共有ライブラリは、-xpg で実行可能ファイルをリンクし、gprof(1) を使用することでプロファイリングできます。

x86 システムでは、-xpg は -xregs=frameptr と互換性がありません。これら 2 つのオプションを一緒に使用しないでください。-xregs=frameptr は -fast に含まれている点にも注意してください。-fast を -xpg とともに使用するときは、-fast -xregs=no%frameptr -xpg を指定してコンパイルします。

現行の Oracle Solaris リリースには、-p でコンパイルされるシステムライブラリが含まれません。その結果、現在の Oracle Solaris プラットフォームで収集されたプロファイルにはシステムライブラリルーチンの呼び出し回数が含まれません。

コンパイル時に -xpg を指定した場合は、リンク時にも指定する必要があります。219 ページの「コンパイル時とリンク時のオプション」に、コンパイル時とリンク時の両方に指定する必要があるオプションの全一覧をまとめています。

注記 - gprof プロファイリングのために -xpg でコンパイルされたバイナリは、binopt(1) では使用しないでください。互換性がないため、内部エラーになる可能性があります。

B.2.157 -xprefetch[=*val*[,*val*]]

先読みをサポートするそれらのアーキテクチャーで先読み命令を有効にします。

明示的な先読みは、測定方法によってサポートされる特殊な環境でのみ使用してください。

次の表に、*val* の値の一覧を示します。

表 76　　-xprefetch のフラグ

フラグ	意味
latx:factor	(SPARC) 指定の係数により、コンパイラの先読みからロード、および先読みからストアまでの応答時間を調整します。このフラグは、-xprefetch=auto とのみ組み合わせることができます。323 ページの「先読み応答率 (SPARC)」を参照してください。
[no%]auto	先読み命令の自動生成を有効 [無効] にします。
[no%]explicit	明示的な先読みマクロを有効 [無効] にします。
yes	廃止。使わないでください。代わりに - xprefetch=auto,explicit を使用します。
no	廃止。使わないでください。代わりに -xprefetch=no%auto,no%explicit を使用します。

デフォルトは -xprefetch=auto,explicit です。基本的に非線形のメモリーアクセスパターンを持つアプリケーションには、このデフォルトが良くない影響をもたらします。デフォルトを無効にするには、-xprefetch=no%auto,no%explicit を指定します。

sun_prefetch.h ヘッダーファイルには、明示的な先読み命令を指定するためのマクロが含まれています。先読み命令は、実行コード中のマクロの位置にほぼ相当するところに挿入されます。

B.2.157.1　先読み応答率 (SPARC)

先読みの応答時間とは、先読み命令を実行してから先読みされたデータがキャッシュで利用可能となるまでのハードウェアの遅延のことです。

係数には、*n.n.* という形式の正の数値を使用します。

コンパイラは、先読み命令と先読みされたデータを使用するロードまたはストア命令の距離を決定する際に先読み応答時間の値を想定します。先読みからロードまでの想定応答時間は、先読みからストアまでの想定応答時間と同じでない場合があります。

コンパイラは、幅広いマシンとアプリケーションで最適なパフォーマンスを得られるように先読みメカニズムを調整します。しかし、コンパイラの調整作業が必ずしも最適であるとはかぎりません。メモリーに負担のかかるアプリケーション、特に大型のマルチプロセッサでの実行を意図したアプリケーションの場合、先読みの応答時間の値を引き上げることにより、パフォーマンスを向上できる場合があります。この値を増やすには、1 よりも大きい係数を使用します。.5 と 2.0 の間の値は、おそらく最高のパフォーマンスを提供します。

外部キャッシュの中に完全に常駐するデータセットを持つアプリケーションの場合は、先読み応答時間の値を減らすことでパフォーマンスを向上できる場合があります。値を小さくするには、1 よりも小さな係数を使用します。

latx:factor サブオプションを使用するには、1.0 程度の係数から順にアプリケーションの性能テストを実行します。それに応じて係数を増減し、パフォーマンステストを再実行します。係数の調整を継続し、最適なパフォーマンスに到達するまでパフォーマンステストを実行します。係

数を小刻みに増減すると、しばらくはパフォーマンスに変化がなく、突然変化し、再び平常に戻ります。

B.2.158 -xprefetch_auto_type=*a*

a の値は [no%]indirect_array_access です。

直接メモリーアクセス用の先読みが生成されるのと同じ方法で、-xprefetch_level オプションで指定するループ用の間接先読みをコンパイラが生成することを許可するときは、-xprefetch_auto_type=indirect_array_access を使用します。

-xprefetch_auto_type の値が指定されていない場合、-xprefetch_auto_type=no%indirect_array_access に設定されます。

-xalias_level などのオプションは、メモリー別名を明確化する情報の生成に役立つため、間接プリフェッチ候補の計算の積極性に影響し、このため、自動的な間接プリフェッチの挿入が促進されることがあります。

B.2.159 -xprefetch_level=*l*

-xprefetch=auto で判断される先読み命令の自動挿入の積極性を制御するには、-xprefetch_level オプションを使用します。*l* は 1、2、または 3 である必要があります。-xprefetch_level が高いレベルであるほど、コンパイラはより積極的になります。つまり、より多くの先読みを取り込みます。

-xprefetch_level に適した値は、アプリケーションが持つキャッシュミス数によって異なります。-xprefetch_level の値を高くするほど、アプリケーションのパフォーマンスが向上する可能性が高くなります。

このオプションは、3 以上の最適化レベルで -xprefetch=auto を使用してコンパイルされた場合にのみ有効です。

-xprefetch_level=1 は、先読み命令の自動生成を有効にします。-xprefetch_level=2 は、レベル 1 を上回る追加生成を有効にします。-xprefetch_level=3 は、レベル 2 を上回る追加生成を有効にします。

デフォルトは、-xprefetch=auto を指定した場合は -xprefetch_level=1 になります。

B.2.160 -xprevise={yes|no}

コードアナライザを使用して表示できるソースコードの静的分析を生成する場合は、このオプションを指定してコンパイルします。

-xprevise=yes でコンパイルし、別の手順でリンクする場合、リンク手順でも -xprevise=yes をインクルードします。

デフォルトは -xprevise=no です。

Oracle Linux では、-xprevise=yes を -xannotate とともに指定する必要があります。

詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: コードアナライザユーザーズガイド』を参照してください。

B.2.161 -xprofile=*p*

プロファイルのデータを収集したり、プロファイルを使用して最適化したりします。

p には、collect[:*profdir*]、use[:*profdir*]、または tcov[:*profdir*] を指定する必要があります。

このオプションは、実行中の実行頻度データを収集および保存します。その後の実行で、パフォーマンスを向上させるためにこのデータを使用できます。プロファイルの収集は、マルチスレッド対応のアプリケーションにとって安全です。すなわち、独自のマルチタスク (-mt) を実行するプログラムをプロファイリングすることで、正確な結果が得られます。このオプションは、-xO2 以上の最適化レベルを指定するときにのみ有効です。コンパイルとリンクを別々の手順で実行する場合は、リンク手順とコンパイル手順の両方で同じ -xprofile オプションを指定する必要があります。

collect[:*profdir*]

実行頻度のデータを集めて保存します。のちに -xprofile=use を指定した場合にオプティマイザがこれを使用します。コンパイラによって文の実行頻度を測定するためのコードが生成されます。

-xMerge、-ztext、および -xprofile=collect を一緒に使用しないでください。-xMerge を指定すると、静的に初期化されたデータを読み取り専用記憶領域に強制的に配置します。 -ztext を指定すると、位置に依存するシンボルを読み取り専用記憶領域内で再配置することを禁止します。-xprofile=collect を指定すると、書き込み可能記憶領域内で、静的に初期化された、位置に依存するシンボルの再配置を生成します。

プロファイルディレクトリ名として *profdir* を指定すると、この名前が、プロファイル化されたオブジェクトコードを含むプログラムまたは共有ライブラリの実行時にプロファイルデータが保存されるディレクトリのパス名になります。*profdir* パス名が絶対パスではない場合、プログラムがオプション -xprofile=use:*profdir* でコンパイルされるときの現在の作業用ディレクトリの相対パスとみなされます。

–xprofile=collect: *prof_dir* または –xprofile=tcov: *prof_dir* でプロファイルディレクトリ名を指定しない場合、プロファイルデータは実行時に、*program*.profile という名前のディレクトリに保存されます (*program* はプロファイリングされたプロセスのメインプログラムのベース

名)。この場合は、環境変数 SUN_PROFDATA および SUN_PROFDATA_DIR を使用して、実行時にプロファイルデータが保存される場所を制御できます。設定する場合、プロファイルデータは $SUN_PROFDATA_DIR/$SUN_PROFDATA で指定されたディレクトリに書き込まれます。プロファイルディレクトリ名がコンパイル時に指定されても、実行時に SUN_PROFDATA_DIR および SUN_PROFDATA の効果はありません。これらの環境変数は、tcov で書き込まれるプロファイルデータファイルのパスと名前を同様に制御します (tcov(1) マニュアルページを参照)。

これらの環境変数が設定されていない場合、プロファイルデータは現在のディレクトリの *profdir* .profile ディレクトリに書き込まれます (*profdir* は実行可能ファイルの名前または -xprofile=collect:*profdir* フラグで指定された名前)。profdir が .profile ですでに終了している場合、*-xprofile* では、*.profile* が profdir に追加されません。プログラムを複数回実行すると、実行頻度データは *profdir*.profile ディレクトリに蓄積されていくので、以前の実行頻度データは失われません。

別々の手順でコンパイルしてリンクする場合は、-xprofile=collect を指定してコンパイルしたオブジェクトファイルは、リンクでも必ず -xprofile=collect を指定してください。

次の例では、プログラムが構築されたディレクトリと同じディレクトリ内にある myprof.profile ディレクトリ内のプロファイルデータを収集して使用します。

```
demo: cc -xprofile=collect:myprof.profile -xO5 prog.c -o prog
demo: ./prog
demo: cc -xprofile=use:myprof.profile -xO5 prog.c -o prog
```

次の例では、/bench/myprof.profile ディレクトリ内のプロファイルデータを収集し、収集したプロファイルデータをあとでフィードバックコンパイルで最適化レベル -xO5 で使用します。

```
demo: cc -xprofile=collect:/bench/myprof.profile
\    -xO5 prog.c -o prog
...run prog from multiple locations..
demo: cc -xprofile=use:/bench/myprof.profile
\    -xO5 prog.c -o prog
```

use[:*profdir*]

プロファイリングされたコードが実行されたときに実行された作業のために最適化するときは、–xprofile=collect[: *profdir*] または –xprofile=tcov[: *profdir*] でコンパイルされたコードから収集された実行頻度データを使用します。*profdir* は、–xprofile=collect[: *profdir*] または –xprofile=tcov[: *profdir*] でコンパイルされたプログラムを実行して収集されたプロファイルデータを含むディレクトリのパス名です。

tcov と –xprofile=use[:*profdir*] の両方で使用できるデータを生成するには、 –xprofile=tcov[:*profdir*] オプションを使用して、コンパイル時にプロファイルディレクトリを指定する必要があります。–xprofile=tcov:

profdir と –xprofile=use: *profdir* の両方で同じプロファイルディレクトリを指定する必要があります。混乱を最小限に抑えるには、*profdir* を絶対パス名として指定します。

profdir パス名はオプションです。*profdir* が指定されていない場合、実行可能バイナリの名前が使用されます。-o が指定されていない場合、a.out が使用されます。*profdir* が指定されていない場合、コンパイラは、profdir .profile/feedback、または *a.out.profile/feedback* を探します。例:

```
demo: cc -xprofile=collect -o myexe prog.c
demo: cc -xprofile=use:myexe -xO5 -o myexe prog.c
```

-xprofile=collect オプションを付けてコンパイルしたときに生成され、プログラムの前の実行で作成されたフィードバックファイルに保存された実行頻度データを使用して、プログラムが最適化されます。

-xprofile オプションを除き、ソースファイルおよびコンパイラのほかのオプションは、フィードバックファイルを生成したコンパイル済みプログラムのコンパイルに使用したものと完全に同一のものを指定する必要があります。同じバージョンのコンパイラは、collect 構築と use 構築の両方に使用する必要があります。

-xprofile=collect:*profdir* を付けてコンパイルした場合は、-*xprofile=use:* profdir のコンパイルの最適化に同じプロファイルディレクトリ名 *profdir* を使用する必要があります。

収集 (collect) 段階と使用 (use) 段階の間のコンパイル速度を高める方法については、-xprofile_ircache も参照してください。

tcov[:*profdir*]

tcov(1) を使用する基本のブロックカバレッジ分析用の命令オブジェクトファイル。

オプションの *profdir* 引数を指定した場合、コンパイラは指定された場所にプロファイルディレクトリを作成します。プロファイルディレクトリに格納したデータは、tcov(1)、または -xprofile=use:*profdir* を指定したコンパイラで使用できます。オプションの *profdir* パス名を省略すると、プロファイルリングされたプログラムの実行時にプロファイルディレクトリが作成されます。プロファイルディレクトリに保存されたデータは、tcov(1) でのみ使用できます。プロファイルディレクトリの場所は、環境変数 SUN_PROFDATA および SUN_PROFDATA_DIR を使用して指定できます。

profdir で指定される場所が絶対パス名でない場合、コンパイル時に、現在の作業ディレクトリからの相対パスと解釈されます。

場所が *profdir* で指定されているディレクトリには、プロファイル化されたプログラムを実行するときにすべてのマシンからアクセスできる必要があります。プロファイルディレクトリはその内容が必要なくなるまで削除できません。コンパイラでプロファイルディレクトリに保存されたデータは、再コンパイルする以外復元できません。

例 1: 1 つ以上のプログラムのオブジェクトファイルが `-xprofile=tcov:/test/profdata` でコンパイルされる場合、`/test/profdata.profile` という名前のディレクトリがコンパイラによって作成されて、プロファイリングされたオブジェクトファイルを記述するデータの保存に使用されます。実行時に同じディレクトリを使用して、プロファイル化されたオブジェクトファイルに関連付けられた実行データを保存できます。

例 2: `myprog` という名前のプログラムが `-xprofile=tcov` でコンパイルされ、ディレクトリ `/home/joe` で実行されると、実行時にディレクトリ `/home/joe/myprog.profile` が作成されて、実行時プロファイルデータの保存に使用されます。

B.2.162 -xprofile_ircache[=*path*]

(SPARC) `collect` 段階で保存されたコンパイルデータを再利用して `use` 段階のコンパイル時間を向上するには、`-xprofile=collect|use` で `-xprofile_ircache`[=*path*] を使用します。

大きなプログラムでは、中間データが保存されるため、`use` 段階のコンパイル時間の効率を大幅に向上させることができます。保存されたデータが必要なディスク容量を相当増やすことがある点に注意してください。

`-xprofile_ircache`[=*path*] を使用すると、*path* はキャッシュファイルが保存されているディレクトリをオーバーライドします。デフォルトでは、これらのファイルはオブジェクトファイルと同じディレクトリに保存されます。`collect` と `use` 段階が 2 つの別のディレクトリで実行される場合は、パスを指定しておくと便利です。次の例は一般的なコマンドシーケンスを示します。

```
example% cc -xO5 -xprofile=collect -xprofile_ircache t1.c t2.c
example% a.out    // run collects feedback data
example% cc -xO5 -xprofile=use -xprofile_ircache t1.c t2.c
```

B.2.163 -xprofile_pathmap

(SPARC) `-xprofile=use` コマンドも指定する場合は、`-xprofile_pathmap=`*collect_prefix*`:`*use_prefix* オプションを使用します。次の項目がともに真で、コンパイラが `-xprofile=use` でコンパイルされたオブジェクトファイルのプロファイルデータを見つけられない場合は、`-xprofile_pathmap` を使用します。

- 前回オブジェクトファイルが `-xprofile=collect` でコンパイルされたディレクトリとは異なるディレクトリで、オブジェクトファイルを `-xprofile=use` を指定してコンパイルしている。
- オブジェクトファイルはプロファイル内で共通ベース名を共有しているが、異なるディレクトリのそれらの場所で相互に識別されている。

collect-prefix は、オブジェクトファイルが `-xprofile=collect` を使用してコンパイルされたときのディレクトリツリーの UNIX パス名の接頭辞です。

use-prefix は、オブジェクトファイルが `-xprofile=use` を指定してコンパイルされたディレクトリツリーの UNIX パス名の接頭辞です。

`-xprofile_pathmap` の複数のインスタンスを指定すると、コンパイラは指定した順序でインスタンスを処理します。`-xprofile_pathmap` のインスタンスで指定される各 *use-prefix* は、対応する *use-prefix* が識別されるか、最後に指定された *use-prefix* がオブジェクトファイルパス名と一致しないことが確認されるまで、オブジェクトファイルパス名と比較されます。

B.2.164 `-xreduction`

自動並列化での縮約のためにループを分析します。このオプションは、`-xautopar` が指定する場合のみ有効です。それ以外の場合は、コンパイラは警告を発行します。

縮約の認識が有効になっている場合、コンパイラは内積、最大値発見、最小値発見などの縮約を並列化します。これらの縮約によって非並列化コードによる四捨五入の結果と異なります。

『Oracle Developer Studio 12.5: OpenMP API ユーザーズガイド』も参照してください。

B.2.165 `-xregs=`*r*`[,`*r*`···]`

生成コード用のレジスタの使用法を指定します。

r には、`appl`、`float`、`frameptr` サブオプションのいずれか 1 つ以上をコンマで区切って指定します。

サブオプションの前に `no%` を付けるとそのサブオプションは無効になります。

–`xregs` サブオプションは、特定のハードウェアプラットフォームでしか使用できません。

例:

```
-xregs=appl,no%float
```

表 77 `-xregs` のサブオプション

値	意味
`appl`	(SPARC) コンパイラがアプリケーションレジスタをスクラッチレジスタとして使用してコードを生成することを許可します。アプリケーションレジスタは次のとおりです。 `g2`、`g3`、`g4` (32 ビットプラットフォーム) `g2`、`g3` (64 ビットプラットフォーム)

値	意味
	すべてのシステムソフトウェアおよびライブラリは、-xregs=no%appl を使用してコンパイルしてください。システムソフトウェア (共有ライブラリを含む) は、アプリケーション用のレジスタの値を保持する必要があります。これらの値は、コンパイルシステムによって制御されるもので、アプリケーション全体で整合性が確保されている必要があります。 SPARC ABI では、これらのレジスタはアプリケーションレジスタと記述されています。これらのレジスタを使用すると必要なロードおよびストア命令が少なくてすむため、パフォーマンスが向上します。ただし、アセンブリコードで記述された古いライブラリプログラムとの間で衝突が起きることがあります。
float	(SPARC) コンパイラが浮動小数点レジスタを整数値用のスクラッチレジスタとして使用してコードを生成することを許可します。浮動小数点値は、このオプションに関係なくこれらのレジスタを使用する場合があります。浮動小数点レジスタへのすべての参照をコードから解放する必要がある場合は、-xregs=no%float を使用し、コードは浮動小数点型を一切使わないでください。 (x86) コンパイラが浮動小数点レジスタをスクラッチレジスタとして使用してコードを生成することを許可します。浮動小数点値は、このオプションに関係なくこれらのレジスタを使用する場合があります。浮動小数点レジスタに対するすべての参照を排除したバイナリコードを生成するには、-xregs=no%float を使用するとともに、決して浮動小数点型をソースコードで使わないようにします。コードの生成時に、コンパイラは浮動小数点、simd、または x87 の命令を使用した結果のコードを診断しようとします。
frameptr	(x86) フレームポインタレジスタ (IA32 の場合 %ebp、AMD64 の場合 %rbp) をコンパイラが汎用レジスタとして使用することを許可します。 デフォルトは -xregs=no%frameptr です。 –features=no%except によって例外も無効になっている場合を除いて、C++ コンパイラは –xregs=frameptr を無視します。-xregs=frameptr は -fast の一部です。 -xregs=framptr を使用すると、コンパイラは浮動小数点レジスタを自由に使用できるので、プログラムのパフォーマンスが向上します。ただし、この結果としてデバッガおよびパフォーマンス測定ツールの一部の機能が制限される場合があります。スタックトレース、デバッガ、およびパフォーマンスアナライザは、–xregs=frameptr を使用してコンパイルされた機能についてレポートできません。 C、Fortran、C++ が混在しているコードで、C または Fortran 関数から直接または間接的に呼び出された C++ 関数が例外をスローする可能性がある場合、このコードは –xregs=frameptr でコンパイルできません。このような言語が混在するソースコードを –fast でコンパイルする場合は、コマンド行の –fast オプションのあとに –xregs=no%frameptr を追加します。 64 ビットのプラットフォームでは利用できるレジスタが多いため、–xregs=frameptr でコンパイルすると、64 ビットコードよりも 32 ビットコードのパフォーマンスが向上する可能性が高くなります。 -xpg も指定されている場合、コンパイラは -xregs=frameptr を無視し、警告を表示します。また、–xkeepframe は –xregs=frameptr をオーバーライドします。たとえば、–xkeepframe=%all –xregs=frameptr は、すべての関数のスタックが保持されるはずですが、–xregs=frameptr の最適化は無視されることを示します。

SPARC のデフォルトは -xregs=appl,float です。

x86 のデフォルトは -xregs=no%frameptr,float です。

x86 システムでは、-xpg は -xregs=frameptr と互換性がありません。これら 2 つのオプションを一緒に使用しないでください。-xregs=frameptr は -fast に含まれている点にも注意してください。

アプリケーションにリンクする共有ライブラリ用に意図したコードは、-xregs=no%appl,float を指定してコンパイルしてください。少なくとも、共有ライブラリとリンクするアプリケーションがこれらのレジスタの割り当てを認識するように、共有ライブラリがアプリケーションレジスタを使用する方法を明示的に示す必要があります。

たとえば、大局的な方法でレジスタを使用する (重要なデータ構造体を指し示すためにレジスタを使用するなど) アプリケーションは、ライブラリと安全にリンクするため、-xregs=no%appl なしでコンパイルされたコードを含むライブラリがアプリケーションレジスタをどのように使用するかを認識する必要があります。

B.2.166 -xrestrict[=*f*]

ポインタ値の関数パラメータを制限付きポインタとして扱います。*f* は、%all、%none、あるいは 1 つまたは複数の関数名のコンマ区切りリストです: {%all| %none|*fn*[,*fn*...]}。

このオプションとともに関数リストを指定する場合は、指定した関数内のポインタパラメータが制限付きとして扱われます。-xrestrict=%all を指定する場合は、C ファイル全体のすべてのポインタパラメータが制限付きとして扱われます。詳細は、97 ページの「制限付きポインタ」を参照してください。

このコマンド行オプションは独立して使用できますが、最適化時に使用するのがもっとも適しています。たとえば、このコマンドは、ファイル prog.c 内のすべてのポインタパラメータを制限付きポインタとして扱います。

```
%cc -xO3 -xrestrict=%all prog.c
```

このコマンドは、ファイル prog.c 内の関数 agc 内のすべてのポインタパラメータを制限付きポインタとして扱います。

```
%cc -xO3 -xrestrict=agc prog.c
```

デフォルトは %none です。-xrestrict を指定することは、-xrestrict=%all を指定することと同義です。

B.2.167 –xs[={yes|no}]

dbx

(Oracle Solaris) オブジェクトファイルからのデバッグ情報を実行可能ファイルにリンクします。

-xs は -xs=yes と同じです。

-xdebugformat=dwarf のデフォルトは -xs=yes と同じです。

-xdebugformat=stabs のデフォルトは -xs=no と同じです。

このオプションは、実行可能ファイルのサイズ、およびデバッグのためにオブジェクトファイルを保持する必要性のトレードオフを制御します。dwarf の場合は、-xs=no を使用して実行可能ファイルを小さくしますが、オブジェクトファイルに依存しています。stabs の場合は、-xs または -xs=yes を使用してオブジェクトファイルに依存しないようにしますが、実行可能ファイルが大きくなります。このオプションは、dbx のパフォーマンスやプログラムの実行時パフォーマンスにはほとんど影響しません。

コンパイルコマンドがリンクを強制した (つまり、-c を指定しない) 場合、オブジェクトファイルはなく、デバッグ情報を実行可能ファイルに含める必要があります。この場合、-xs=no (暗黙的または明示的) は無視されます。

この機能は、コンパイラが生成されるオブジェクトファイル内のセクションフラグおよびセクション名を調整し、リンカーにそのオブジェクトファイルのデバッグ情報に関する処理を指示することによって実装されます。このため、これはコンパイラオプションであり、リンカーオプションではありません。一部のオブジェクトファイルが -xs=yes でコンパイルされ、ほかのオブジェクトファイルが -xs=no でコンパイルされた実行可能ファイルを作成することが可能です。

Oracle Linux コンパイラは、-xs を受け入れますが無視します。Oracle Linux コンパイラは、-xs={yes|no} を受け入れません。

B.2.168 –xsafe=mem

(SPARC) コンパイラが記憶域保護違反が発生した場合を前提とできるようにします。

このオプションを使用すると、コンパイラでは SPARC V9 アーキテクチャーで違反のないロード命令を使用できます。

注記 - アドレスの位置合わせが合わない、またはセグメンテーション侵害などの違反が発生した場合は違反のないロードはトラップを引き起こさないので、このオプションはこのような違反が起こる可能性のないプログラムでしか使用しないでください。ほとんどのプログラムではメモリーに関するトラップは起こらないので、大多数のプログラムでこのオプションを安全に使用できます。例外条件の処理にメモリーベースのトラップを明示的に使用するプログラムでは、このオプションは使用しないでください。

このオプションは、最適化レベルの -xO5 と、次のいずれかの値の -xarch を組み合わせた場合にだけ有効です: m32 と m64 の両方で sparc、sparcvis、-sparcvis2、または -sparcvis3。

B.2.169 –xsecure_code_analysis{=[yes|no]}

コンパイル時に、可能性のあるメモリーのセキュリティー違反を検出して表示する、コンパイラセキュアコード解析を有効または無効にします。セキュアコード解析は、コンパイル処理と並列に実行され、この結果、コンパイル時間が長くなることがあります。

-xsecure_code_analysis が指定されていない場合、または yes|no 引数なしに指定されている場合、デフォルトは -xsecure_code_analysis=yes です。

-xsecure_code_analysis=no を使用してセキュアコード解析を無効にします。

B.2.170 -xsegment_align=*n*

(Oracle Solaris) このオプションを指定すると、ドライバはリンク行で特殊なマップファイルをインクルードします。マップファイルはテキスト、データ、および bss セグメントを、*n* で指定された値に整列します。非常に大きなページを使用する場合は、ヒープセグメントおよびスタックセグメントが適切な境界に整列されることが重要です。これらのセグメントが整列されない場合、次の境界まで小さなページが使用され、この結果、パフォーマンスが低下することがあります。マップファイルにより、セグメントは確実に適切な境界上に整列されます。

n の値は次のいずれかである必要があります。

SPARC: 有効な値は、8K、64K、512K、2M、4M、32M、256M、1G、および none です。

x86: 有効な値は、4K、8K、64K、512K、2M、4M、32M、256M、1G、および none です。

SPARC と x86 のデフォルトはどちらも none です。

推奨の使用法は次のとおりです。

```
SPARC 32-bit compilation: -xsegment_align=64K
SPARC 64-bit compilation: -xsegment_align=4M

x86 32-bit compilation: -xsegment_align=8K
x86 64-bit compilation: -xsegment_align=4M
```

ドライバは適切なマップファイルをインクルードします。たとえば、ユーザーが -xsegment_align=4M と指定した場合、ドライバは -M*install-directory*/lib/compilers/mapfiles/map.4M.align をリンク行に追加します。*install-directory* はインストールディレクトリです。前述のセグメントは、4M 境界上に整列されます。

B.2.171 -xsfpconst

接尾辞のない浮動小数点定数を、デフォルトの倍精度モードではなく、単精度として表します。-pedantic とともに指定した場合は無効となります。

B.2.172 -xspace

コードサイズを増やすループの最適化や並列化を行いません。

例: コードサイズが増える場合は、ループの展開や並列化は行われません。

B.2.173 -xstrconst

このオプションは非推奨であり、将来のリリースで削除される可能性があります。–xstrconst は –features=conststrings の別名です。

B.2.174 -xtarget=*t*

命令セットと最適化の対象となるシステムを指定します。

t の値は、native、generic、*system-name* のいずれかである必要があります。

たとえば、-xtarget=T3 は -xchip=T3 -xcache=8/16/4:6144/64/24 -xarch=sparcvis3 と同等です。

```
cc -dryrun -xtarget=T3 |& grep ###
###     command line files and options (expanded):
### -dryrun -xchip=T3 -xcache=8/16/4:6144/64/24 -xarch=sparcvis3
```

データ型モデル (32 ビットまたは 64 ビット) は、-m32|-m64 オプションによって指定されます。64 ビットのデータ型モデルを指定するには、次のように -m64 オプションを指定します。

```
-xtarget=<value> ... -m64
```

32 ビットのデータ型モデルを指定するには、次のように -m32 オプションを指定します。

```
-xtarget=<value> ... -m32
```

デフォルトのデータ型モデルについては、-m32|-m64 オプションも参照してください。

注記 - 特定のホストシステムで -xtarget を展開した場合、そのシステムでコンパイルすると -xtarget=native と同じ -xarch、-xchip、または -xcache 設定にならない場合があります。

表 78 すべてのシステムでの -xtarget 値

値	意味
native	次と同義です。 –m32 –xarch=native –xchip=native –xcache=native ホスト 32 ビットシステムに最高のパフォーマンスを与えます。
generic	次と同義です。 –m32 –xarch=generic –xchip=generic –xcache=generic ほとんどの 32 ビットシステムに最高のパフォーマンスを与えます。
system-name	指定するシステムで最高のパフォーマンスが得られます。 対象となる実際のシステムを表すシステム名を、次のリストから選択してください。

対象となるハードウェア (コンピュータ) の正式な名前をコンパイラに指定した方がパフォーマンスが優れているプログラムもあります。プログラムパフォーマンスがクリティカルな場合、ターゲットハードウェアの適切な指定は、より新しい SPARC プロセッサ上での実行時は特に、非常に重要である可能性があります。しかし、ほとんどのプログラムおよび旧式の SPARC システムではパフォーマンスの向上はわずかであるため、汎用的な指定方法で十分です。

B.2.174.1 SPARC システム上の -xtarget 値

表 79 SPARC での -xtarget 展開

-xtarget=	-xarch	-xchip	-xcache
ultraT1	sparc	ultraT1	8/16/4/4: 3072/64/12/32
ultraT2	sparcvis2	ultraT2	8/16/4:4096/64/16
ultraT2plus	sparcvis2	ultraT2plus	8/16/4:4096/64/16
T3	sparcvis3	ultraT3	8/16/4:6144/64/24
T4	sparc4	T4	16/32/4:128/32/8: 4096/64/16
sparc64vi	sparcfmaf	sparc64vi	128/64/2:5120/64/10
sparc64vii	sparcima	sparc64vii	64/64/2:5120/256/10
sparc64viiplus	sparcima	sparc64viiplus	64/64/2: 11264/256/11
sparc64x	sparcace	sparc64x	64/128/4/2:24576/128/24/32
sparc64xplus	sparcaceplus	sparc64xplus	64/128/4/2:24576/128/24/32
T5	sparc4	T5	16/32/4/8:128/32/8/8: 8192/64/16/128
T7	sparc5	T7	16/32/4/8:256/64/8/16: 8192/64/8/32

-xtarget=	-xarch	-xchip	-xcache
M5	sparc4	M5	16/32/4/8:128/32/8/8:49152/64/12/48
M6	sparc4	M6	16/32/4/8:128/32/8/8:49152/64/12/96
M7	sparc5	M7	16/32/4/8:256/64/8/16:8192/64/8/32

B.2.174.2 x86 システム上の -xtarget 値

表 80 x86 での -xtarget の展開

-xtarget=	-xarch	-xchip	-xcache
pentium	386	pentium	generic
pentium_pro	pentium_pro	pentium_pro	generic
pentium3	sse	pentium3	16/32/4:256/32/4
pentium4	sse2	pentium4	8/64/4:256/128/8
opteron	sse2a	opteron	64/64/2:1024/64/16
woodcrest	ssse3	core2	32/64/8:4096/64/16
barcelona	amdsse4a	amdfam10	64/64/2:512/64/16
penryn	sse4_1	penryn	2/64/8:6144/64/24
nehalem	sse4_2	nehalem	32/64/8:256/64/8:8192/64/16
westmere	aes	westmere	32/64/8:256/64/8:30720/64/24
sandybridge	avx	sandybridge	32/64/8/2:256/64/8/2:20480/64/20/16
ivybridge	avx_i	ivybridge	32/64/8/2:256/64/8/2:20480/64/20/16
haswell	avx2	haswell	32/64/8/2:256/64/8/2:20480/64/20/16
broadwell	avx2_i	broadwell	32/64/8/2:256/64/8/2:20480/64/20/16

B.2.175 -xtemp=*path*

-temp=*path* と同義です。

B.2.176 -xthreadvar[=*o*]

スレッドローカルな変数の実装を制御するには -xthreadvar を指定します。コンパイラのスレッドローカルな記憶領域機能を利用するには、このオプションを __thread 宣言指定子と組み合わせて使用します。__thread 指定子を使用してスレッド変数を宣言したあとは、-xthreadvar を指定して動的 (共有) ライブラリの位置に依存しないコード (PIC 以外のコード) でスレッド固有の記憶領域を使用できるようにします。__thread の使用方法についての詳細は、31 ページの「スレッドローカルな記憶領域指示子」を参照してください。

o は dynamic または no%dynamic である必要があります。

表 81 -xthreadvar のフラグ

フラグ	意味
[no%]dynamic	動的ロード用の変数をコンパイルします。 -xthreadvar=no%dynamic を指定すると、スレッド変数へのアクセスは非常に早くなりますが、動的ライブラリ内のオブジェクトファイルは使用できません。すなわち、実行可能ファイル内のオブジェクトファイルだけが使用可能です。

-xthreadvar を指定しない場合、コンパイラが使用するデフォルトは位置独立コード (PIC) が有効になっているかどうかによって決まります。位置独立コードが有効になっている場合、オプションは -xthreadvar=dynamic に設定されます。位置独立コードが無効になっている場合、オプションは -xthreadvar=no%dynamic に設定されます。

-xthreadvar を指定するけれども値を指定しない場合は、オプションは -xthreadvar=dynamic に設定されます。

位置独立ではないコードが動的ライブラリに含まれる場合、-xthreadvar を指定する必要があります。

リンカーは、動的ライブラリ内の位置依存コード (非 PIC) スレッド変数と同等のスレッド変数はサポートできません。PIC でないスレッド変数は非常に高速なため、実行可能ファイルのデフォルトにするべきです。

-xcode、-KPIC、および -Kpic の説明も参照してください。

B.2.177 -xthroughput[={yes|no}]

-xthroughput オプションは、システム上で多数のプロセスが同時に実行されている状況でアプリケーションが実行されることをコンパイラに示します。

-xthroughput=yes を指定すると、コンパイラは、単一のプロセスのパフォーマンスは若干低下するが、システム上のすべてのプロセスによって実行される作業量が増加するように最適化を

行います。たとえば、コンパイラがデータの先読みの積極性を下げることを選択する可能性があります。そのように選択すると、そのプロセスによって消費されるメモリー帯域幅が減少し、プロセスの実行が遅くなることがありますが、ほかのプロセスが共有するメモリー帯域幅が増加します。

デフォルトは `-xthroughput=no` です。

B.2.178 -xtime

コンパイルの各コンポーネントが占有した実行時間とリソースを報告します。

B.2.179 -xtransition

K&R C と Oracle Developer Studio ISO C の違いに関する警告を発行します。

`-xtransition` オプションを、`-Xa` または `-Xt` オプションとともに使用すると警告を出します。異なる動作に関するすべての警告メッセージは適切なコーディングを行うことによって取り除くことができます。次の警告は、`-xtransition` オプションを使用していなければ表示されません。

- `\a` は ISO C の「警告」文字です
- `\x` は ISO C の 16 進エスケープです
- 無効な 8 進数
- 型の種類は実際には *type tag* です: *name*
- コメントが `"##"` で置き換えられます
- コメントがトークンを連結していません
- ISO C では新しい型で置き換えてしまう型の宣言です: *type tag*
- 文字定数中のマクロ置換
- 文字列リテラル中のマクロ置換
- 文字定数中のマクロ置換は行われません
- 文字列リテラル中のマクロ置換は行われません
- オペランドが符号なしとして処理されました
- 3 文字表記シーケンスが置き換えられました
- ISO C は定数を `unsigned` 型として扱います: *operator*
- ISO C では *operator* の意味が変わります。明示的なキャストを使用してください。

B.2.180 -xtrigraphs[={yes|no}]

`-xtrigraphs` オプションは、コンパイラが ISO C 規格で定義されている 3 文字表記シーケンスを認識するかどうかを決定します。

デフォルトにより、コンパイラは -xtrigraphs=yes を仮定し、コンパイル単位をとおしてすべての三文字表記シーケンスを認識します。

コンパイラが 3 文字表記シーケンスとして解釈している疑問符 (?) が含まれるリテラル文字列がソースコードにある場合は、-xtrigraph=no サブオプションを使用して 3 文字表記シーケンスの認識を無効にできます。-xtrigraphs=no オプションは、コンパイル単位全体ですべての 3 文字表記シーケンスの認識を無効にします。

次の例は、ソースファイル trigraphs_demo.c を示しています。

```
#include <stdio.h>

int main ()
{

  (void) printf("(\?\?) in a string appears as (??)\n");

  return 0;
}
```

次の例は、-xtrigraphs=yes を指定してこのコードをコンパイルする場合の出力を示します。

```
example% cc -xtrigraphs=yes trigraphs_demo.c
example% a.out
(??) in a string appears as (]
```

次の例は、-xtrigraphs=no を指定してこのコードをコンパイルする場合の出力を示します。

```
example% cc -xtrigraphs=no trigraphs_demo.c
example% a.out
(??) in a string appears as (??)
```

B.2.181 -xunboundsym={yes|no}

動的に結合されたシンボルへの参照がプログラムに含まれているかどうかを指定します。

-xunboundsym=yes は、動的に結合されたシンボルへの参照がプログラムに含まれていることを意味します。

-xunboundsym=no は、動的に結合されているシンボルへの参照がプログラムに含まれていないことを意味します。

デフォルトは -xunboundsym=no です。

B.2.182 -xunroll=*n*

ループを *n* 回展開するようオプティマイザに指示します。*n* は正の整数です。*n* が 1 のとき、ループを展開しないようコンパイラに要求します。*n* が 1 より大きいとき、-xunroll=*n* は、該当する場合にループを *n* 回展開することをコンパイラに推奨します。

B.2.183 -xustr={ascii_utf16_ushort|no}

ISO10646 UTF-16 文字列リテラルを使用する国際化アプリケーションをサポートする必要がある場合は、このオプション使用します。言い替えれば、このオプションは、オブジェクトファイル内で UTF-16 文字列に変換したい文字列リテラルがコードに含まれる場合に使用します。このオプションがない場合、コンパイラは 16 ビット文字列リテラルを生成も認識もしません。このオプションは、U"*ASCII_string*" 文字列リテラルを unsigned short int 型の配列として認識できるようにします。このような文字列はまだ標準の一部ではないので、このオプションは標準でない C の認識を有効にします。

U"*ASCII_string*" 文字列リテラルのコンパイラによる認識を無効にすることができます。-xustr=noこのオプションのコマンド行の右端にあるインスタンスは、それまでのインスタンスをすべてオーバーライドします。

デフォルトは -xustr=no です。引数を指定しないで -xustr を指定した場合、コンパイラはこの指定を受け付けず、警告を発行します。C または C++ 規格で構文の意味が定義されると、デフォルト値が変わることがあります。

-xustr=ascii_ustf16_ushort は、U"*ASCII_string*" 文字列リテラルを一緒に指定しなくても指定できます。

フラグ -xustr=ascii_utf16_ushort を指定する場合は、-Xc、-Xa、-Xt、-Xs、-xc99、-std=c99、-std=c89、-ansi のうちのいずれかのオプションも指定する必要があります。

すべてのファイルを、このオプションによってコンパイルしなければならないわけではありません。

次の例では、前に U が付いた引用符内の文字列リテラルを示します。-xustr を指定するコマンド行も示します。

```
example% cat file.c
const unsigned short *foo = U"foo";
const unsigned short bar[] = U"bar";
const unsigned short *fun() { return foo;}
example% cc -xustr=ascii_utf16_ushort file.c -c
```

8 ビットの文字列リテラルに U を付加して、unsigned short 型を持つ 16 ビットの UTF-16 文字を形成できます。例:

```
const unsigned short x = U'x';
const unsigned short y = U'\x79';
```

B.2.184 -xvector[=*a*]

SIMD をサポートするプロセッサ上でのベクトルライブラリ関数の呼び出しの自動生成や SIMD (Single Instruction Multiple Data) 命令の生成を有効にします。このオプションを使用するときは -fround=nearest を指定することによって、デフォルトの丸めモードを使用する必要があります。

次の表は、*a* の値の一覧です。no% 接頭辞は関連付けられたサブオプションを無効にします。

表 82 -xvector のフラグ

値	意味
[no%]lib	(Oracle Solaris) コンパイラは可能な場合はループ内の数学ライブラリへの呼び出しを、同等のベクトル数学ルーチンへの単一の呼び出しに変換します。大きなループカウントを持つループでは、これによりパフォーマンスが向上します。このオプションを無効にするには no%lib を使用します。
[no%]simd	(SPARC) -xarch=sparcace と -xarch=sparcaceplus の場合、特定のループのパフォーマンスを改善するために、浮動小数点および整数の SIMD 命令を使用するようにコンパイラに指示します。その他の SPARC -xarch 値とは逆に、-xarch=sparcace および -xarch=sparcaceplus の下では、-xvector=none または -xvector=no%simd が指定されていないかぎり、-xvector=simd は有効です。さらに、-xvector=simd には -xO4 以上が必要であり、それ以外では -xvector=simd は無視されます。 ほかのすべての -xarch 値の場合、特定のループのパフォーマンスを改善するために Visual Instruction Set [VIS1、VIS2、ViS3 など] SIMD 命令を使用するようにコンパイラに指示します。基本的に -xvector=simd オプションを明示的に使用すると、コンパイラは、ループ繰り返し数を減らすためにループ変換を実行して、特殊なベクトル化した SIMD 命令の生成を有効にします。以下に示す最適化レベル要件に加えて、-xarch=sparcvis3 以上である場合のみ、-xvector=simd オプションが有効です。
[no%]simd	(x86) コンパイラにネイティブ x86 SSE SIMD 命令を使用して特定のループのパフォーマンスを向上させるよう指示します。ストリーミング拡張機能は、x86 で最適化レベルが 3 かそれ以上に設定されている場合にデフォルトで使用されます。このオプションを無効にするには no%simd を使用します。 コンパイラは、ストリーミング拡張機能がターゲットのアーキテクチャーに存在する場合、つまりターゲットの ISA が SSE2 以上である場合にのみ SIMD を使用します。たとえば、最新のプラットフォームで -xtarget=woodcrest、–xarch=generic、-xarch=sse2、-xarch=sse3、または -fast を指定して使用できます。ターゲットの ISA にストリーミング拡張機能がない場合、このサブオプションは無効です。
%none	このオプションを完全に無効にします。
yes	これは非推奨であり、代わりに -xvector=lib を指定します。
no	これは非推奨です。代わりに -xvector=%none を指定してください。

x86 でのデフォルトは、-xvector=simd です。SPARC でのデフォルトは、-xarch=sparcace および -xarch=sparcaceplus の下では -xvector=simd であり、その他の SPARC -xarch 値の下では -xvector=%none です。サブオプションなしで -xvector を指定した場合、コンパイラは x86 Oracle Solaris 上では -xvector=simd,lib、SPARC Oracle Solaris 上では -

xvector=lib、Oracle Linux プラットフォーム上では -xvector=simd が指定されたものと見なします。

-xvector オプションを指定するには、最適化レベルが -xO3 かそれ以上に設定されていることが必要です。このオプションは、最適化レベルが -xO3 よりも低い場合は暗黙的に無視されます。

注記 - x86 プラットフォーム向けの Oracle Solaris カーネルコードをコンパイルするときは、-xvector=%none を指定してコンパイルします。

コンパイラは、リンク時に libmvec ライブラリを取り込みます。別々の手順でコンパイルおよびリンクする場合は、同じ -xvector オプションを両方のコマンドで使用します。

B.2.185 -xvis

(SPARC) -xvis=[yes|no] コマンドは、vis.h ヘッダーを使用して VIS 命令を生成するときや、VIS 命令を使用するアセンブラインラインコード (.il) を使用するときに使用します。デフォルトは -xvis=no です。-xvis と指定すると -xvis=yes と指定した場合と同様の結果が得られます。

VIS 命令セットは、SPARC-V9 命令セットの拡張機能です。SPARC プロセッサが 64 ビットでも、多くの場合で、特にマルチメディアアプリケーションではデータサイズが 8 ビットまたは 16 ビットに制限されています。VIS 命令は 1 つの命令で 4 つの 16 ビットデータを処理できるので、画像、線形代数、信号処理、オーディオ、ビデオ、ネットワーキングなどの新しいメディアを扱うアプリケーションのパフォーマンスが大幅に向上させます。

B.2.186 -xvpara

OpenMP を使用するときに正しくない結果をもたらす可能性のある、並列プログラミングに関連する潜在的な問題に関して、警告を発行します。-xopenmp および OpenMP API 指令とともに使用します。

次の状況が検出された場合は、コンパイラは警告を発行します。

- 異なるループ繰り返し間でデータに依存関係がある場合に、MP 指令を使用して並列化されたループ。
- OpenMP データ共有属性節に問題がある場合。たとえば、変数「shared」を宣言するとき (OpenMP 並列領域でのアクセスがデータ競合を招く可能性がある) や、変数「private」を宣言するとき (並列領域内のその値が並列領域のあとで使用される) です。

すべての並列化命令が問題なく処理される場合、警告は表示されません。

例:

```
cc -xopenmp -vpara any.c
```

B.2.187 -Y*c*, *dir*

コンポーネント *c* の場所として新しい *dir* を指定します。*c* は -W オプションで示したコンポーネントを表す文字です。

コンポーネントの検索が指定されている場合、ツールのパス名は *dir/tool* になります。2 つ以上の -Y オプションが 1 つの項目に適用されている場合には、最後に指定されたものが有効です。

B.2.188 -YA, *dir*

コンパイラのすべてのコンポーネントの検索場所にするディレクトリ *dir* を指定します。*dir* 内でコンポーネントが見つからない場合は、コンパイラがインストールされているディレクトリに戻って検索されます。

B.2.189 -YI, *dir*

include ファイルを検索するデフォルトディレクトリを変更します。

B.2.190 -YP, *dir*

ライブラリファイルを検索するデフォルトのディレクトリを変更します。

B.2.191 -YS, *dir*

起動用のオブジェクトファイルのデフォルトのディレクトリを変更します。

B.3 リンカーに渡されるオプション

cc は -a、-e、-r、-t、-u、および -z を認識し、これらのオプションとその引数を ld に渡します。cc は、認識されないすべてのオプションを警告付きで ld に渡します。Oracle Solaris プラットフォームでは、-i オプションとその引数もリンカーに渡されます。

B.4 ユーザー指定のデフォルトオプションファイル

これらのデフォルトコンパイラオプションファイルは、ユーザーがすべてのコンパイルに適用される (ほかの方法で上書きされる場合を除く)、一連のデフォルトオプションを指定することを許可します。たとえば、ファイルによって、すべてのコンパイルのデフォルトを –xO2 としたり、またはファイル `setup.il` を自動的に含めたりするように指定できます。

コンパイラは起動時に、すべてのコンパイルに含めるべきデフォルトオプションがリストされているデフォルトオプションファイルを検索します。環境変数 `SPRO_DEFAULTS_PATH` は、デフォルトファイルを検索するディレクトリのコロン区切りリストを指定します。

環境変数が設定されていない場合、標準のデフォルトセットが使用されます。環境変数が設定されているが空の場合、デフォルトは使用されません。

デフォルトのファイル名は compiler.defaults の形式である必要があり、ここで、コンパイラは `cc`、`c89`、`c99`、`CC`、`ftn`、または `lint` のいずれかです。たとえば、C コンパイラ用のデフォルトは `cc.defaults` です。

`SPRO_DEFAULTS_PATH` にリストされたディレクトリにコンパイラ用のデフォルトファイルが見つかった場合、コンパイラはファイルを読み取り、コマンド行でオプションを処理する前にオプションを処理します。最初に見つかったデフォルトファイルが使用され、検索は終了します。

システム管理者は、システム全体のデフォルトファイルを *Studio-install-path*`/lib/compilers/etc/config` に作成できます。環境変数が設定されている場合、インストールされたデフォルトファイルは読み取られません。

デフォルトファイルの形式はコマンド行と同様です。ファイルの各行には、1 つ以上のコンパイラオプションを空白で区切って含めてもかまいません。ワイルドカードや置換などのシェル展開は、デフォルトファイル内のオプションには適用されません。

–#、–###、および –dryrun の各オプションによって生成される詳細出力では、`SPRO_DEFAULTS_PATH` の値と、完全展開されたコマンド行が表示されます。

ユーザーによってコマンド行で指定されたオプションは、通常、デフォルトファイルから読み取られたオプションをオーバーライドします。たとえば、–xO4 でのコンパイルがデフォルトファイルで指定されており、ユーザーがコマンド行で –xO2 を指定した場合、–xO2 が使用されます。

デフォルトオプションファイルに記載されているオプションの一部は、コマンド行で指定されたオプションのあとに付加されます。これらは、プリプロセッサオプション –I、リンカーオプション –B、–L、–R、 –l、および、ソースファイル、オブジェクトファイル、アーカイブ、共有オブジェクトなどのすべてのファイル引数です。

次に示すのは、ユーザー指定のデフォルトコンパイラオプション起動ファイルがどのように使用される可能性があるかの例です。

```
demo% cat /project/defaults/cc.defaults
-I/project/src/hdrs –L/project/libs –llibproj –xvpara
```

```
demo% setenv SPRO_DEFAULTS_PATH  /project/defaults
demo% cc –c –I/local/hdrs –L/local/libs –lliblocal tst.c
```

現在、このコマンドは次と同義です。

```
cc -fast –xvpara –c –I/local/hdrs –L/local/libs –lliblocal tst.c \
     –I/project/src/hdrs –L/project/libs –llibproj
```

コンパイラデフォルトファイルはプロジェクト全体のデフォルトを設定するための便利な方法ですが、問題の診断を困難にする原因になる場合もあります。このような問題を回避するには、環境変数 SPRO_DEFAULTS_PATH を現在のディレクトリではなく絶対パスに設定します。

デフォルトオプションファイルのインタフェース安定性はコミットされていません。オプション処理の順序は、将来のリリースで変更される可能性があります。

♦ ♦ ♦ 付 録 C

C11 の機能

この付録では、現在 C コンパイラでサポートされている『Programming Language - C (ISO/IEC 9899:2011)』規格の機能について説明します。

`-std=c11` フラグは、コンパイラによる 9899:2011 ISO/C の認識を制御します。`-std` フラグの構文の詳細は、第3章「不可分型のサポート」を参照してください。

C.1 キーワード

- `_Alignas`
- `_Alignof`
- `_Atomic`
- `_Generic`
- `_Noreturn`
- `_Static_assert`
- `_Thread_local`

C.2 サポートされている C11 の機能

- `_Alignas` 指定子
- `_Alignof` 演算子
- `_Atomic` 修飾子
- `_Atomic` 型指定子
- `_Noreturn`
- `_Static_assert`
- `_Thread_local` 記憶指定子
- `typedef` 再定義の許可
- 無名構造体/共用体

- 総称選択
- Unicode 文字および文字列
- UCN 文字セットの更新の許可
- `__STDC_ANALYZABLE__` マクロ
- `__STDC_NO_THREADS__` マクロ

C.2.1 `_Alignas` 指定子

機能: 6.7.5 整列指定子

```
_Alignas ( type-name )
_Alignas ( constant-expression )
```

`_Alignas` 指定子は、`typedef` の宣言、ビットフィールド、関数、パラメータ、または register 記憶クラス指定子で宣言されたオブジェクトでは使用できません。

定数式は整数定数式に評価されます。定数式は、1 から 128 までの間の 2 のべき乗である整数定数式に評価される必要があります。有効な値は、0、1、2、4、8、16、32、64、および 128 です。この値は、宣言対象のオブジェクトまたはメンバーの型に必要なアライメントと同等かそれ以上に厳密なアライメントに評価される必要があります。

`_Alignas` (*type-name*) は `_Alignas` (`_Alignof` (*type-name*)) と同義です。

アライメント指定子 0 には効果がありません。

有効なアライメントは、もっとも厳密なアライメント指定子のアライメントです。

アライメント指定子で宣言されたオブジェクトを指定するときには、そのオブジェクトのその他のすべての宣言で、同じアライメント指定子を使用するか、またはアライメント指定子を使用しないでおく必要があります。オブジェクトのアライメントは、同じオブジェクトを宣言するすべてのソースファイルで同一の方法で指定する必要があり、このように指定しないと動作が未定義になります。

C.2.2 `_Alignof` 演算子

機能: 6.5.3.4 `_Alignof` 演算子

```
_Alignof ( type-name )
```

`_Alignof` 演算子は、そのオペランドの型のアライメント要件を示す整数定数に評価されます。オペランドは評価されません。`_Alignof` 演算子を関数または不完全な型で使用することはできません。

C.2.3 不可分

機能: 6.7.2.4 不可分型指定子

機能: 6.7.3 `_Atomic` 修飾子

機能: 6.5.2.4 不可分演算子

機能: 6.5.3.1 不可分演算子

機能: 6.5.16.2 不可分演算子

機能: 7.17 不可分

不可分機能では、不可分実行時サポートライブラリとのリンクが必要になることがあります。267 ページの「`-xatomic=a`」を参照してください。

C.2.4 _Noreturn

機能: 6.7.4 関数指定子、`_Noreturn`

`_Noreturn` 指定子は、戻らない関数の宣言に次のように配置します。

```
_Noreturn void leave () {
    abort();
  }
```

C.2.5 _Static_assert

機能: 6.7.10 静的アサーション

```
_Static_assert ( constant-expression , string-literal ) ;
```

C.2.6 汎用文字名 (UCN)

ISO/IEC 9899:2011 の Annex D に従って、UCN で許可されている文字セットを更新します。許可されているすべての文字の一覧については、ISO/IEC 9899:2011 Annex D を参照してください。

♦ ♦ ♦ 付 録 D

C99 の機能

この付録では、『Programming Language - C (ISO/IEC 9899:1999)』規格の一部の機能について説明します。

`-std=c99` フラグは、コンパイルによる 9899:1999 ISO/C の認識を制御します。`-std` フラグの構文の詳細は、255 ページの「`-std=`*value*」を参照してください。

D.1 説明と例

この付録では、サポートされている機能のうちの一部を詳細に説明し、使用例を示します。

- 5.2.4.2.2 項 浮動小数点型 `<float.h>` の特性
- 6.2.5 項 _Bool
- 6.2.5 項 _Complex 型
- 6.3.2.1 項 左辺値に限定されないポインタへの配列の変換
- 6.4.1 項 キーワード
- 6.4.2.2 項 定義済み識別子
- 6.4.3 項 汎用文字名
- 6.4.4.2 項 16 進数浮動小数点リテラル
- 6.4.9 項 コメント
- 6.5.2.2 項 関数呼び出し
- 6.5.2.5 項 複合リテラル
- 6.7.2 項 型指定子
- 6.7.2.1 項 構造体および共用体の指示子
- 6.7.3 項 型修飾子
- 6.7.4 項 関数指定子
- 6.7.5.2 項 配列宣言子
- 6.7.8 項 初期化
- 6.8.2 項 複合文
- 6.8.5 項 繰り返し文
- 6.10.3 項 マクロ置換

- 6.10.6 項 STDC プラグマ
- 6.10.8 項 __STDC_IEC_559 マクロおよび __STDC_IEC_559_COMPLEX マクロ
- 6.10.9 項 プラグマ演算子

D.1.1 浮動小数点評価における精度

機能: 5.2.4.2.2 浮動小数点型 <float.h> の特性

浮動小数点オペランドを持つ演算の値、および通常の算術変換および浮動小数点定数両方の影響を受ける値は、その型が必要とするより大きい可能性がある範囲および精度を持つ形式で評価されます。評価形式使用するは、次の表に示す FLT_EVAL_METHOD の実装定義値によって特徴付けられます。

表 83 FLT_EVAL_METHOD の値

値	意味
-1	判定不能。
0	コンパイラは、すべての演算および定数を正確にその型の範囲と精度で評価します。
1	コンパイラは、float および double 型の演算および定数を double 型の範囲および精度で評価します。long double 型の演算および定数は long double 型の範囲と精度で評価します。
2	コンパイラは、すべての演算および定数を long double 型の範囲と精度で評価します。

SPARC アーキテクチャーで float.h をインクルードすると、FLT_EVAL_METHOD はデフォルトで 0 に展開され、すべての浮動小数点式はその型に従って評価されます。

x86 アーキテクチャー上で float.h をインクルードすると、FLT_EVAL_METHOD はデフォルトで -1 に展開されます (-xarch=sse2 の場合を除きます)。すべての浮動小数点定数式はそれらの型に従って評価され、その他すべての浮動小数点式は long double として評価されます。

-fleval=2 を指定して、float.h をインクルードすると、FLT_EVAL_METHOD は 2 に展開され、すべての浮動小数点式は long double として評価されます。詳細については、240 ページの「-flteval[={any|2}]」を参照してください。

-xarch=sse2 (または sse3、ssse3、sse4_1、sse4_2 など、SSE2 プロセッサファミリのそれ以降のバージョン) または -m64 を x86 で指定して、float.h をインクルードすると、FLT_EVAL_METHOD は 0 に展開されます。すべての浮動小数点式はその型に従って評価されます。

浮動小数点式が double として評価されても、-Xt オプションがFLT_EVAL_METHOD の展開内容に影響することはありません。詳細については、259 ページの「-X[c|a|t|s]」を参照してください。

-fsingle オプションを指定すると、浮動小数点式が単精度で評価されます。詳細については、244 ページの「-fsingle」を参照してください。

-xarch=sse2 (または sse3、ssse3、sse4_1、sse4_2 など、SSE2 プロセッサファミリのそれ以降のバージョン) または -m64 を使用して x86 アーキテクチャーで -fprecision を指定して、float.h をインクルードすると、FLT_EVAL_METHOD が -1 に展開されます。

D.1.2 C99 のキーワード

機能: 6.4.1 キーワード

C99 の規格では、次のキーワードが追加されました。-std=c89 を指定したコンパイルの実行時にこれらのキーワードを識別子として使用すると、コンパイラから警告が発行されます。-std=c99 または -std=c11 が指定されている場合、コンパイラはコンテキストに応じて、これらのキーワードが識別子として使用されていることを示す警告メッセージまたはエラーメッセージを発行します。

- inline
- _Imaginary
- _Complex
- _Bool
- restrict

D.1.2.1 restrict キーワードの使用

restrict で修飾されたポインタを使用してオブジェクトにアクセスするには、その オブジェクトへのすべてのアクセスで、直接的または間接的にそのポインタの値を使用する必要があります。ほかの方法によってそのオブジェクトにアクセスすると、定義されていない動作になる可能性があります。restrict 修飾子の意図される使用は、コンパイラが最適化を拡張する想定を行うことを許可することです。

97 ページの「制限付きポインタ」 修飾子を効果的に使用する方法についての例および説明は、Restricted Pointersを参照してください。

D.1.3 __func__ のサポート

機能: 6.4.2.2 定義済み識別子

コンパイラで、__func__ のあるコードでの現在の関数の名前を格納する chars 配列として定義されている定義済み識別子 __func__ がサポートされています。

D.1.4 汎用文字名 (UCN)

機能: 6.4.3 汎用文字名

UCN では、C のソースで英字ばかりでなく、任意の文字を使用することができます。UCN は次の書式を持ちます。

- `\u`*4 桁の 16 進値*
- `\U`*8 桁の 16 進値*

UCN では、0024 ($)、0040 (@)、0060 (?) を除く 00A0 未満の値や、D800 ～ DFFF の範囲内の値を指定してはいけません。

識別子や文字定数、文字列リテラルで UCN を使用して、C の基本文字セットにはない文字を表すことができます。

UCN の `\U`*nnnnnnnn* は、8 桁の短い識別子が *nnnnnnnn* である文字を表します (ISO/IEC 10646 で規定)。同様に、汎用文字名 `\u`*nnnn* は、4 桁の短い識別子が *nnnn* (8 桁の短い識別子は 0000*nnnn*) である文字を表します。

D.1.5 // を使用したコードのコメント処理

機能: 6.4.9 コメント

文字 `//` は、文字定数、文字列リテラル、またはコメント内で `//` があるときを除いて、次の復帰改行まで (ただし、復帰改行は含まない) のすべての複数バイト文字を含むコメントを導入します。

D.1.6 暗黙の `int` および暗黙の関数宣言の禁止

機能: 6.5.2.2 関数呼び出し

暗黙の宣言は、1990 C 規格の場合とは異なり、1999 C 規格では許可されなくなりました。以前のバージョンの C コンパイラでは、`-v` (冗長形式) を指定した場合にだけ、暗黙の定義についての警告メッセージが生成されていました。暗黙の定義についてのこれらのメッセージおよび新しい追加警告は、識別子が暗黙に `int` または関数として宣言されているときは常に発行されるようになりました。

多数の警告メッセージが生成されることがあるため、この変更はたいていの場合はすぐにわかります。よくある原因には、`<stdio.h>` がインクルードされる必要がある `printf` など、使用される関数を宣言する適切なシステムヘッダーファイルのインクルードの失敗が含まれます。暗黙的

な宣言をサイレントに受け入れるという 1990 C 規格の動作は、-std=c89 を使用して復元できます。

次の例に示すように、C コンパイラは、暗黙の関数宣言に対する警告を生成するようになりました。

```
example% cat test.c
void main()
{
  printf("Hello, world!\n");
}
example% cc test.c
"test.c", line 3: warning: implicit function declaration: printf
example%
```

D.1.7 暗黙の int を使用した宣言

機能: 6.7.2 型指定子

少なくとも 1 つの型指示子を、各宣言の宣言指示子で指定します。詳細は、354 ページの「暗黙の int および暗黙の関数宣言の禁止」を参照してください。

暗黙の int 宣言時に、C コンパイラは次の例に示すように警告を発行するようになりました。

```
example% more test.c
volatile i;
const foo()
{
  return i;
}
example% cc test.c  "test.c", line 1: warning: no explicit type given
  "test.c", line 3: warning: no explicit type given
example%
```

D.1.8 柔軟な配列のメンバー

機能: 6.7.2.1 構造体と共用体の指定子

この機能は「*struct hack*」とも呼ばれます。構造体の最終メンバーを長さ 0 の配列にできます (int foo[]; など)。このような構造体は、malloc() されたメモリーにアクセスするためのヘッダーとして一般に使用されます。

たとえば、struct s { int n; double d[]; } S; では、配列 d が不完全な配列型です。C コンパイラは、この S のメンバーのメモリーオフセットをカウントしません。つまり、sizeof(struct s) は S.n のオフセットと同一になります。

たとえば S.d[10] = 0; のように、d は通常の配列メンバーと同様に使用できます。

C コンパイラが不完全な配列型をサポートしていない場合は、次の例の DynamicDouble のような構造体を定義および宣言します。

```
typedef struct { int n; double d[1]; ) DynamicDouble;
```

ここで、配列 d は不完全な配列型ではなく、1 つのメンバーを指定して宣言されています。

次に、ポインタdd を宣言してメモリーを割り当てます。

```
DynamicDouble *dd = malloc(sizeof(DynamicDouble)+(actual_size-1)*sizeof(double));
```

そのあとで、次のように S.n にオフセットのサイズを格納します。

```
dd->n = actual_size;
```

コンパイラが不完全な配列型をサポートしているため、1 つのメンバーを指定して配列を宣言することなく、同一の結果を得ることができます。

```
typedef struct { int n; double d[]; } DynamicDouble;
```

ここで、ポインタ dd を宣言し、以前と同様にメモリーを割り当てます。ただし、actual_size から 1 を引く必要はなくなりました。

```
DynamicDouble *dd = malloc (sizeof(DynamicDouble) + (actual_size)*sizeof(double));
```

以前と同様に、オフセットは S.n に保存されます。

```
dd->n = actual_size;
```

D.1.9 べき等修飾子

機能: 6.7.3 型修飾子

同一の指定子と修飾子のリストで、直接または typedefs により同一の修飾子が複数ある場合は、動作は型修飾子が 1 つだけの場合と同様になります。

C90 では、次のコードではエラーが発生します。

```
%example cat test.c

const const int a;

int main(void) {
  return(0);
}

%example cc -std=c89 test.c
```

```
"test.c", line 1: invalid type combination
```

ただし、C99 では、C コンパイラで複数の修飾子を使用できます。

```
%example cc -std=c99 test.c
%example
```

D.1.10 inline 関数

機能: 6.7.4 関数指定子

1999 C ISO 標準で定義されているインライン関数は、完全にサポートされています。

C 標準によると、インラインは C コンパイラに対する推奨に過ぎません。C コンパイラは、何もインライン化しないこと、または実際の関数への呼び出しをコンパイルすることを選択できます。

Oracle Developer Studio C コンパイラは、-x03 以上の最適化レベルでコンパイルしており、かつその方が利点があるとオプティマイザのヒューリスティックが判断しないかぎり、C 関数呼び出しをインライン化しません。C コンパイラは、関数のインライン化を強制する方法を用意していません。

*static インライン関数*は単純です。インライン関数指定子によって定義された関数を、参照時にインライン化するか、実際の関数を呼び出すかのどちらかです。コンパイラは、参照ごとにどちらを実行するかを選択できます。コンパイラは、-x03 以上でインライン化に利点があるかどうかを判定します。インライン化の利点がない場合 (または -x03 未満の最適化の場合)、実際の関数への参照がコンパイルされ、関数定義がオブジェクトコードにコンパイルされます。プログラムが関数のアドレスを使用している場合は、実際の関数がコンパイルされてオブジェクトコードの一部になり、インライン化されないことに注意してください。

*extern インライン関数*はより複雑です。extern インライン関数には、*インライン定義*および *extern インライン関数*の 2 種類があります。

*インライン定義*とは、キーワード inline を使って、static または extern キーワードなしで定義された関数です。ソース (またはインクルードファイル) 内に出現するすべてのプロトタイプでも、キーワード inline が含まれ、static または extern キーワードはなしです。インライン定義に対して、コンパイラは関数のグローバル定義を作成してはいけません。このことは、インライン化されないインライン定義へのあらゆる参照は、どこか他の場所で定義されたグローバル関数への参照になることを意味します。言い換えると、この変換ユニット (ソースファイル) をコンパイルすることで作成されたオブジェクトファイルには、インライン定義に対応するグローバルシンボルは含まれません。インライン化されない関数へのあらゆる参照は、リンク時にほかのオブジェクトファイルまたはライブラリから提供される extern (大域) シンボルになります。

*extern インライン関数*は、extern 記憶クラス指定子 (つまり、関数定義またはプロトタイプ) を持つファイルスコープ宣言によって宣言されます。extern インライン関数の場合、コンパイラはその関数に対応するグローバル定義を、結果として生成されるオブジェクトファイルの中で提供します。コンパイラは、関数定義の提供元である変換ユニット (ソースファイル) の中で観察さ

れた関数へのすべての参照をインライン化するか、グローバル関数を呼び出すかを選択できます。

関数呼び出しが実際にインライン化されるかどうかに依存する任意のプログラムの動作は、未定義です。

外部リンケージを持つインライン関数が、変換ユニットのどこであっても静的変数を宣言または参照してはいけないことにも注意してください。

D.1.10.1 インライン関数に対する Oracle Developer Studio C コンパイラと gcc の互換性

Oracle Developer Studio C コンパイラから、ほとんどのプログラムで GNU C コンパイラの `extern` インライン関数の実装と互換性のある動作を取得するには、`-features=no%extinl` フラグを使用します。このフラグが指定されていると、Oracle Developer Studio C コンパイラは、関数を static インライン関数として宣言されているかのように処理します。

この手法が互換性を維持できない状況の 1 つは、関数のアドレスを取る場合です。これは、gcc では大域関数のアドレスになり、Oracle Developer Studio の C コンパイラではローカルの static 定義アドレスが使用されます。

D.1.11 配列宣言子で使用可能な Static およびそのほかの型修飾子

機能: 6.7.5.2 配列宣言子

関数宣言子内のパラメータの配列宣言子で `static` キーワードを使用することが可能になりました。この場合は、コンパイラが、宣言する関数に多数の要素が引き渡されることを少なくとも認識することができます。これにより、オプティマイザで従来は不可能だった想定が可能になります。

C コンパイラは、配列パラメータをポインタに変換するので、`void foo(int a[])` は `void foo (int *a)` と同義になります。

`void foo(int * restrict a);` などの型修飾子を指定すると、C コンパイラはそれを配列文 `void foo(int a[restrict]);` で表現し、これは実質的には制限付きポインタを宣言するのと同義です。

C コンパイラは、配列サイズに関する情報を保持するためにも `static` 修飾子を使用します。たとえば、`void foo(int a[10])` を指定した場合でも、コンパイラはこれを `void foo(int *a)` と表現します。ポインタが NULL ではなく、少なくとも 10 個の要素を持つ整数配列へのポインタであることをコンパイラに認識させるには、`void foo(int a[static 10])` のように `static` 修飾子を使用します。

D.1.12 可変長配列 (VLA)

機能: 6.7.5.2 配列宣言子

VLA は、alloca 関数を呼び出した場合と同様に、スタックに割り当てられます。VLA の有効期間は、有効範囲に関係なく、alloca の呼び出しによりスタックに割り当てられたデータと同様に、関数から復帰するまでです。割り当てられた領域は、VLA が割り当てられた関数から復帰してスタックが解放されるときに同時に解放されます。

可変長配列では、一部の制約がまだ有効になっていません。制約に違反すると、定義されていない結果になります。

```
#include <stdio.h>
void foo(int);

int main(void) {
  foo(4);
  return(0);
}

void foo (int n) {
  int i;
  int a[n];
  for (i = 0; i < n; i++)
    a[i] = n-i;
  for (i = n-1; i >= 0; i--)
    printf("a[%d] = %d\n", i, a[i]);
}

example% cc test.c
example% a.out
a[3] = 1
a[2] = 2
a[1] = 3
a[0] = 4
```

D.1.13 指示付きの初期化子

機能: 6.7.8 初期化

指示付き初期化子は、数値プログラミングで一般的なスパース配列を初期化する仕組みです。

指示付き初期化子によって、システムプログラミングで一般的なスパース構造体を初期化したり、先頭メンバーであるかどうかに関係なく、任意のメンバーを使って共用体を初期化したりできます。

例を挙げて考えてみます。最初の例は、指示付き初期化子を使って配列を初期化する方法を示しています。

```
 enum { first, second, third };
          const char *nm[] = {
          [third] = "third member",
          [first] = "first member",
          [second] = "second member",
          };
```

次の例は、指示付き初期化子を使用して struct オブジェクトのフィールドを初期化する方法を示しています。

```
division_t result = { .quot = 2, .rem = -1 };
```

次の例は、指示付き初期化子を使用して、これ以外の方法では誤解を生むおそれがある複雑な構造体を初期化する方法を示しています。

```
 struct { int z[3], count; } w[] = { [0].z = {1}, [1].z[0] = 2 };
```

1 つの指示子で両端から配列を作成することができます。

```
int z[MAX] = {1, 3, 5, 7, 9, [MAX-5] = 8, 6, 4, 2, 0};
```

MAX が 10 より大きい場合、この配列の中央には値ゼロの要素が含まれます。MAX が 10 より小さい場合、最初の 5 つの初期化子が提供する値の一部は、2 つ目の 5 つの値によって置き換えられます。

共用体のすべてのメンバーを初期化することができます。

```
union { int i; float f;} data = { .f = 3.2 };
```

D.1.14 型宣言とコードの混在

機能: 6.8.2 複合文

C コンパイラは、次の例のように型宣言と実行可能コードの混在を受け入れます。

```
#include <stdio.h>

int main(void){
  int num1 = 3;
  printf("%d\n", num1);

  int num2 = 10;
  printf("%d\n", num2);
  return(0);
}
```

D.1.15 for ループ文での宣言

機能: 6.8.5 繰り返し文

C コンパイラは、for ループ文の最初の式として型宣言を受け入れます。

```
for (int i=0; i<10; i++){ //loop body };
```

for ループの初期化文で宣言した変数の有効範囲は、ループ全体になります (制御式と繰り返し式を含む)。

D.1.16 可変数の引数をとるマクロ

機能: 6.10.3 マクロ置換

C コンパイラで、次の形式の #define プリプロセッサ指令を使用することができます。

```
#define identifier (...) replacement_list
#define identifier (identifier_list, ...) replacement_list
```

マクロ定義で *identifier_list* が省略符号で終わる場合は、マクロ定義でのパラメータよりも呼び出しの引数の方が多いことを示します (省略符号を除く)。それ以外の場合は、マクロ定義でのパラメータ数 (プリプロセッサトークンを含まないそれらの引数を含む) が引数の個数と一致します。引数に省略符号表記を使用する #define プリプロセッサ指令の置換リストで、識別子 __VA_ARGS__ を使用します。次のコードは、マクロの可変引数リスト機能の例です。

```
#define debug(...) fprintf(stderr, __VA_ARGS__)
#define showlist(...) puts(#__VA_ARGS__)
#define report(test, ...) ((test)?puts(#test):\
                        printf(__VA_ARGS__))
debug(“Flag”);
debug(“X = %d\n”,x);
showlist(The first, second, and third items.);
report(x>y, “x is %d but y is %d”, x, y);
```

この結果は、次のようになります。

```
fprintf(stderr, “Flag”);
fprintf(stderr, “X = %d\n”, x);
puts(“The first, second, and third items.”);
((x>y)?puts(“x>y”):printf(“x is %d but y is %d”, x, y));
```

D.1.17 _Pragma

機能: 6.10.9 プラグマ演算子

_Pragma (*string-literal*) という形式の単項演算子の式は、次のように処理されます。

- 文字列定数の L 接頭辞がある場合は削除されます。
- 前および後ろの二重引用符は削除されます。
- エスケープシーケンス ' は、二重引用符に置換されます。

■ エスケープシーケンス ¥¥ は、1 つの ¥ に置換されます。

生成されたプリプロセッサトークンのシーケンスは、プラグマの指令でのプリプロセッサトークンと同様に処理されます。

単項演算子の式にある元の 4 つのプリプロセッサトークンは削除されます。

_Pragma は、#pragma と比較して、マクロ定義で使用可能であるという利点があります。

_Pragma("string") は、#pragma string と正確に同じ動作をします。次の例を考えてみましょう。まず、例のソースコードがリストされます。次に、プリプロセッサ処理後の例のソースがリストされます。

```
example% cat test.c

#include <omp.h>
#include <stdio.h>

#define Pragma(x) _Pragma(#x)
#define OMP(directive) Pragma(omp directive)

void main()
{
  omp_set_dynamic(0);
  omp_set_num_threads(2);
  OMP(parallel)
  {
  printf("Hello!\n");
  }
}

example% cc test.c -P -xopenmp -xO3
example% cat test.i
```

以下は、プリプロセッサ終了後のソースを示しています。

```
void main()
{
  omp_set_dynamic(0);
  omp_set_num_threads(2);
  # pragma omp parallel
  {
    printf("Hello!\n");
  }
}

example% cc test.c -xopenmp
example% ./a.out
Hello!
Hello!
example%
```

♦ ♦ ♦ 付 録 E

E ISO/IEC C 99 の処理系定義の動作

『Programming Languages- C (ISO/IEC 9899:1999)』規格では、C で記述されるプログラムの形式を定義し、その解釈を確立します。ただしこの規格では、いくつかの項目が処理系定義 (コンパイラごとに内容が異なる) のままとなっています。この付録では、それらの動作を詳しく説明します。ISO/IEC 9899:1999 規格そのものとすぐに比較できるよう、この付録では、すべてのセクションの見出しにセクション番号を付記しています。

- 各セクションの見出しには、ISO 規格にあるものと同じセクションテキストと *letter.number* 識別子を使用しています。
- 各セクションでは、処理系で定義すべきこととして ISO 規格に規定されている要件を示しています。この要件のあとに、Oracle の処理系の説明があります。
- 9899:1999 ISO C の動作を取得するには、`-std=c99` フラグを指定します。

E.1 処理系定義の動作 (J.3)

このサブ句に示されている各領域での動作の選択肢を文書化するには、準拠している実装が必要です。処理系定義の動作は次のとおりです。

E.1.1 翻訳 (J.3.1)

- (3.10, 5.1.1.3) 診断の識別方法

  エラーメッセージは次の書式です。

  filename, *line number*: *message*

  filename は、そのエラーまたは警告があるファイルの名前です

  line number はエラーまたは警告が検出された行の番号、*message* は診断メッセージです。
- (5.1.1.2) 翻訳段階 3 で改行以外の非空の空白文字の連続を保持するか、またはスペース文字 1 つに置き換えるかどうか。

  タブ (¥t) やフォームフィード (¥f)、垂直タブ (¥v) からなる非空の文字の連続をスペース文字 1 文字に置き換えます。

E.1.2 環境 (J.3.2)

- (5.1.1.2) 翻訳段階 1 における物理ソースファイルの複数バイト文字とソース文字セットのマッピング。

  ASCII 部分では、1 文字に 8 ビットです。ロケール固有の拡張文字部分では、ロケール固有の 8 ビットの倍数です。
- (5.1.2.1) 自立した環境でプログラム起動時に呼び出す関数の名前と種類。

  ホスト環境に実装されています。
- (5.1.2.1) 自立した環境でのプログラム終了の処理。

  ホスト環境に実装されています。
- (5.1.2.2.1) `main` 関数を定義する代わりの方法。

  規格に定義されている以外の `main` の定義方法はありません。
- (5.1.2.2.1) main の `argv` 引数が指し示す文字列に与える値。

  `argv` は、コマンド行引数へのポインタからなる配列です。`argv[0]` はプログラム名を表します (該当する場合)。
- (5.1.2.3) 対話型デバイスを構成するもの。

  対話型デバイスにはシステムライブラリコールの `isatty()` が 0 以外の値を返します。
- (7.14) シグナルとその意味、デフォルトの処理。

  次の表に `signal` 関数が認識する各シグナルの意味を示します。

表 84 `signal` 関数のシグナルの意味

シグナル番号	デフォルトのイベント	シグナルの意味
SIGHUP 1	終了	ハングアップ
SIGINT 2	終了	割り込み (rubout)
SIGQUIT 3	コア	終了 (ASCII FS)
SIGILL 4	コア	不当な命令 (捕捉されてもリセットされない)
SIGTRAP 5	コア	トレーストラップ (捕捉されてもリセットされない)
SIGIOT 6	コア	IOT 命令
SIGABRT 6	コア	異常終了時に使用
SIGEMT 7	コア	EMT 命令
SIGFPE 8	コア	浮動小数点例外
SIGKILL 9	終了	強制終了 (捕捉または無視できない)
SIGBUS 10	コア	バスエラー
SIGSEGV 11	コア	セグメンテーション違反
SIGSYS 12	コア	システムコールへの引数誤り
SIGPIPE 13	終了	読み手のないパイプ上への書き込み
SIGALRM 14	終了	アラームクロック

シグナル番号	デフォルトのイベント	シグナルの意味
SIGTERM 15	終了	プロセスの終了によるソフトウェアの停止
SIGUSR1 16	終了	ユーザー定義のシグナル 1
SIGUSR2 17	終了	ユーザー定義のシグナル 2
SIGCLD 18	無視	子プロセスのステータスが変化
SIGCHLD 18	無視	子プロセスステータスの変化の別名 (POSIX)
SIGPWR 19	無視	電源異常と再起動
SIGWINCH 20	無視	ウィンドウサイズの変更
SIGURG 21	無視	ソケット上に緊急状態
SIGPOLL 22	終了	ポーリング可能なイベント発生
SIGIO 22	Sigpoll	ソケット入出力可能
SIGSTOP 23	停止	停止 (キャッチまたは無視できない)
SIGTSTP 24	停止	tty より要求されたユーザーストップ
SIGCONT 25	無視	停止していたプロセスの継続
SIGTTIN 26	停止	バックグラウンド tty の読み込みを試みた
SIGTTOU 27	停止	バックグラウンド tty の書き込みを試みた
SIGVTALRM 28	終了	仮想タイマー期限切れ
SIGPROF 29	終了	プロファイルタイマー期限切れ
SIGXCPU 30	コア	CPU 時間制限の超過
SIGXFSZ 31	コア	ファイルサイズの限界をオーバー
SIGWAITING 32	無視	スレッド処理コードで使われていた予約シグナル
SIGLWP 33	無視	スレッド処理コードで使われていた予約シグナル
SIGFREEZE 34	無視	チェックポイント一時停止
SIGTHAW 35	無視	チェックポイント再開
SIGCANCEL 36	無視	スレッドライブラリで使われている取り消しシグナル
SIGLOST 37	無視	リソースがない (レコードロックがない)
SIGXRES 38	無視	リソース制御の超過 (setrctl(2) を参照)
SIGJVM1 39	無視	Java Virtual Machine 用に予約 1
SIGJVM2 40	無視	Java Virtual Machine 用に予約 2

- (7.14.1.1) SIGFPE、SIGILL、および SIGSEGV 以外の、演算例外に対応するシグナル値

  SIGILL、SIGFPE、SIGSEGV、SIGTRAP、SIGBUS、および SIGEMT。表84「signal 関数のシグナルの意味」を参照してください。
- プログラムの起動時に signal に相当するもの (sig、SIG_IGN) が実行される際のシグナル (7.14.1.1)。

  SIGILL、SIGFPE、SIGSEGV、SIGTRAP、SIGBUS、および SIGEMT。表84「signal 関数のシグナルの意味」を参照してください。
- (7.20.4.5) 環境名および、getenv 関数が使用する環境リストの変更方法。

マニュアルページの `environ`(5) に環境名の一覧を記載しています。

- (7.20.4.6) system 関数による文字列の実行方法。

  `system`(3C) のマニュアルページからの抜粋

  `system`() 関数は、端末からコマンドとして入力されかのように *string* を入力としてシェルに渡します。この呼び出し側は、シェルが完了するのを待ち、`waitpid`(2) が指定する形式でシェルの終了ステータスを返します。

  string が null ポインタの場合、`system`() はシェルが存在し、実行可能かどうかを調べます。シェルが使用可能な場合は、`system` () によってゼロ以外の値を返し、そうでない場合は、`0` を返します。

E.1.3 識別子 (J.3.3)

- (6.4.2) 識別子に追加で使用される複数バイト文字とその汎用文字名との対応。

  なし
- (5.2.4.1, 6.4.2) 識別子の有効初期文字数。

  1023

E.1.4 文字 (J.3.4)

- (3.6) 1 バイトのビット数。

  1 バイトは 8 ビットです。
- (5.2.1) 実行文字セットのメンバーの値。

  ASCII 部分では、配置はソース文字と実行文字と同様です。
- (5.2.2) 各標準の英字エスケープシーケンス用に生成される実行文字セットのメンバーの固有値。

表 85 標準の英字エスケープシーケンスの固有値

エスケープシーケンス	固有値
¥a (アラート)	7
¥b (バックスペース)	8
¥f (フォームフィード)	12
¥n (改行)	10
¥r (復帰)	13
¥t (水平タブ)	9
¥v (垂直タブ)	11

- (6.2.5) 基本実行文字セットのメンバー以外の文字が格納されている char オブジェクトの値。

  char オブジェクトに割り当てられている文字に関連付けられている下位 8 ビットの数値です。
- (6.2.5, 6.3.1.1) signed char または unsigned char のどちらが単純 char と同じ範囲、表現、および動作を持つか。

  signed char が通常の char として処理されます。
- (6.4.4.4, 5.1.1.2) ソース文字セット (文字定数と文字列リテラル) のメンバーの実行文字セットメンバーへのマッピング。

  ASCII 部分では、配置はソース文字と実行文字と同様です。
- (6.4.4.4) 複数の文字、または単一バイトの実行文字にマッピングされていない文字またはエスケープシーケンスを含む整数文字定数の値。

  エスケープシーケンスの発生しない複数バイト文字セットの値は、各文字の示す数値から派生しています。
- (6.4.4.4) 複数の複数バイト文字、または拡張実行文字セットで表現されていない複数バイト文字またはエスケープシーケンスを含むワイド文字定数の値。

  エスケープシーケンスではない複数文字のワイド文字定数は、各文字の数値から得られる値を持ちます。
- (6.4.4.4) 拡張実行文字セットのメンバーにマッピングする単一複数バイト文字からなるワイド文字定数を、対応するワイド文字コードに変換するために使用する標準ロケール。

  LC_ALL、LC_CTYPE、LANG 環境変数のいずれかで指定したロケールが標準で使用されます。
- (6.4.5) ワイド文字列リテラルを、対応するワイド文字コードに変換するのに使用する標準ロケール。

  LC_ALL、LC_CTYPE、LANG 環境変数のいずれかで指定されたロケールが標準で使用されます。
- (6.4.5) 拡張実行文字セットで表現されていない複数バイト文字またはエスケープシーケンスを含む文字列リテラルの値。

  複数バイト文字の各バイトが文字列リテラルの 1 文字を表し、この文字は、複数バイト文字のそのバイトの数値に等しい値を持ちます。

E.1.5 整数 (J.3.5)

- (6.2.5) 実装に存在する拡張整数型。

  なし
- (6.2.6.2) 符号付き整数型を符号と絶対値、2 の補数、1 の補数のどれで表現するか、また規格外の値をトラップ表現または通常値のどちらにするか。

  符号付き整数型は 2 の補数で表します。規格外の値は通常値になります。
- (6.3.1.1) 任意の拡張整数型と同じ精度を持つ別の拡張整数型との相対的なランク。

  この実装に該当するものはありません。

- (6.3.1.3) 整数を符号付き整数型に変換し、値がその型のオブジェクトで表現できない場合の結果、または立てられるシグナル。

  整数がより短い符号付き整数に変換される場合は、長い方の整数の下位ビットが短い方の符号付き整数に複写されます。結果は負になることがあります。

  符号なし整数が同サイズの符号付き整数に変換される場合は、符号なし整数の下位ビットが符号付き整数に複写されます。結果は負になることがあります。
- (6.5) 符号付き整数に対するビット単位演算の結果。

  ビット単位演算を符号付きの型に適用すると、符号ビットを含むオペランドのビット単位演算となります。その結果の各ビットは、両オペランドの対応するビットが設定されていた場合にのみ設定されます。

E.1.6 浮動小数点 (J.3.6)

- (5.2.4.2.2) 浮動小数点の結果を返す浮動小数点演算、および `<math.h>` と `<complex.h>` のライブラリ関数の精度。

  浮動小数点演算の精度は `FLT_EVAL_METHOD` の設定に合わせられます。`<math.h>` と`<complex.h>` のライブラリ関数の精度は、`libm`(3LIB) のマニュアルページに指定されているとおりです。
- (5.2.4.2.2) `FLT_ROUNDS` の規格外の値に対する丸め動作。

  この実装に該当するものはありません。
- (5.2.4.2.2) `FLT_EVAL_METHOD` の規格外の負の値に対する評価方法。

  この実装に該当するものはありません。
- (6.3.1.4) 整数を、元の値を正確に表現できない浮動小数点数に変換したときの丸め方向。

  そのとき有効な丸め方向モードに従います。
- (6.3.1.5) 浮動小数点数を短い浮動小数点数に変換した場合の丸め方向。

  そのとき有効な丸め方向モードに従います。
- (6.4.4.2) 特定の浮動小数点定数を表現する方法 (表現可能な最近似値か、最近似値にもっとも近い最大または最小値)。

  浮動小数点定数はつねに表現可能な最近似値に丸められます。
- (6.5) `FP_CONTRACT`プラグマが許可していない場合に浮動小数点式を短縮するかどうか、また、短縮する場合はその方法。

  この実装に該当するものはありません。
- (7.6.1) `FENV_ACCESS` プラグマのデフォルトの状態。

  `-fsimple=0` の場合、デフォルトは `ON` です。それ以外の `-fsimple` のほかのすべての値で `FENV_ACCESS` のデフォルト値は `OFF` です。
- (7.6, 7.12) 追加の浮動小数点例外、丸めモード、環境、分類、マクロ名。

  この実装に該当するものはありません。

- (7.12.2) FP_CONTRACTプラグマのデフォルトの状態。

  -fsimple=0 の場合、デフォルトは OFF です。それ以外の -fsimple のほかのすべての値で FP_CONTRACT のデフォルト値は ON です。
- (F.9) IED 60559 準拠の実装で丸め結果が実際には数学的な演算結果に等しくない場合に「不正確」の浮動小数点例外が立てられるかどうか。

  結果の判定は不可能です。
- (F.9) IEC 60559 準拠の実装で結果が小さいが不正確でない場合に、アンダーフロー (および「不正確」) の浮動小数点例外を立てられるかどうか。

  アンダーフロー時のトラップが無効 (デフォルト) の場合、このようなケースでハードウェアはアンダーフローや不正確の例外を立てません。

E.1.7 配列とポインタ (J.3.7)

- (6.3.2.3) ポインタを整数または 64 ビットに変換、またはその逆方向に変換した結果。

  ポインタおよび整数の変換では、ビットパターンは変化しません。整数またはポインタ型で結果を表現できない場合を除きますが、結果は定義されていません。
- (6.5.6) 同じ配列の要素への 2 つのポインタを減算した結果のサイズ。

  stddef.h で定義されているように、-m32 の場合は int、-m64 の場合は long。

E.1.8 ヒント (J.3.8)

- (6.7.1) レジスタ記憶クラス指示子で行う推奨を有効にする範囲。

  有効なレジスタ宣言の数は使用パターンおよび各関数における定義に依存し、割り当て可能なレジスタ数に制限されます。コンパイラやオプティマイザは、レジスタ宣言に従う必要はありません。
- (6.7.4) inline 関数指定子で行う推奨を有効にする範囲。

  inline キーワードは、最適化でコードのインライン化が発生し、インライン化のメリットがあるとオプティマイザが判断したときにのみ有効です。最適化のオプションのリストについては、217 ページの「最適化とパフォーマンスのオプション」を参照してください。

E.1.9 構造体、共用体、列挙型、およびビットフィールド (J.3.9)

- (6.7.2, 6.7.2.1) 単純な int 型ビットフィールドを signed int 型ビットフィールドまたは unsigned int ビットフィールドのどちらにみなすか。

  unsigned int とみなされます。
- (6.7.2.1) _Bool、signed int、および unsigned int 以外に使用可能なビットフィールドの型。

ビットフィールドは任意の整数型として宣言できます。

- (6.7.2.1) ビットフィールドが記憶装置の境界を越えられるかどうか。
  ビットフィールドは記憶装置の境界を越えません。
- (6.7.2.1) ユニット内のビットフィールドの割り当て順序。
  ビットフィールドは、記憶装置内で高位から低位の順に割り当てられます。
- (6.7.2.1) 構造体のビットフィールド以外のメンバーの整列条件。1 つの実装で書き込まれたバイナリデータが別の実装で読み取られないかぎり、このことは問題になりません。

表 86 構造体メンバーのパディングと整列

型	整列境界	バイト整列
`char` と `_Bool`	byte	1
`short`	halfword	2
`int`	word	4
`long -m32`	word	4
`long -m64`	doubleword	8
`float`	word	4
`double -m64`	doubleword	8
`double` (SPARC) `-m32`	doubleword	8
`double` (x86) `-m32`	doubleword	4
`long double` (SPARC) `-m32`	doubleword	8
`long double` (x86) `-m32`	word	4
`longdouble -m64`	quadword	16
`pointer -m32`	word	4
`pointer -m64`	quadword	8
`long long –m64`	doubleword	8
`long long` (x86) `-m32`	word	4
`long long` (SPARC) `-m32`	doubleword	8
`_Complex float`	word	4
`_Complex double -m64`	doubleword	8
`_Complex double` (SPARC) `-m32`	doubleword	8
`_Complex double` (x86) `-m32`	doubleword	4
`_Complex long double -m64`	quadword	16
`_Complex long double` (SPARC) `-m32`	quadword	8
`_Complex long double` (x86) `-m32`	quadword	4
`_Imaginary float`	word	4
`_Imaginary double -m64`	doubleword	8

型	整列境界	バイト整列
`_Imaginary double` (x86) `-m32`	doubleword	4
`_Imaginary` (SPARC) `-m32`	doubleword	8
`_Imaginary long double` (SPARC) `-m32`	doubleword	8
`_Imaginary long double -m64`	quadword	16
`_Imaginary long double` (x86) `-m32`	word	4

- (6.7.2.2) 各列挙型と互換性のある整数型。

  `int` 型です。

E.1.10 修飾子 (J.3.10)

- (6.7.3) volatile 修飾型のオブジェクトへのアクセス。

  オブジェクト名を参照するたびに、そのオブジェクトへアクセスされます。

E.1.11 前処理指令 (J.3.11)

- (6.4.7) 両方の形式のヘッダー名のシーケンスをヘッダーまたは外部ソースファイル名にマッピングする方法。

  ソースファイルの文字は対応する ASCII の値に配置されます。
- (6.10.1) 条件付きのインクルードを制御する定数式の文字定数の値が、実行文字セット中の同一の文字定数の値に一致するかどうか。

  前処理命令内の文字定数はほかの式のものと同一の数値を持ちます。
- (6.10.1) 条件付きのインクルードを制御する定数式の単一文字の文字定数が負の値をとることがあるかどうか。

  この場合の文字定数は負の値を取ることがあります。
- (6.10.2) インクルードする、< > 区切りのヘッダーの検索場所と、その場所の指定方法、ほかのヘッダーの識別方法。

  ヘッダーファイルの場所は、コマンド行のオプションの指定と、`#include` 指令 内に現れるファイルに依存します。詳細は、57 ページの「インクルードファイルを指定する方法」を参照してください。
- (6.10.2) インクルードする " " 区切りのヘッダー内での指定されたソースファイルの検索方法。

  ヘッダーファイルの場所は、コマンド行のオプションの指定と、`#include` 指令 内に現れるファイルに依存します。詳細は、57 ページの「インクルードファイルを指定する方法」を参照してください。

- (6.10.2) `#include` 指令内の前処理トークン (マクロ展開で生成されることもある) からヘッダー名を形成する方法。

  57 ページの「インクルードファイルを指定する方法」で説明しているように、ヘッダー名 (空白を含む) を形成するすべてのトークンは、ヘッダーを検索する際に使用するファイルパスとみなされます。
- (6.10.2) `#include` 処理の入れ子制限。

  コンパイラによる制限はありません。
- (6.10.3.2) 文字定数または文字列定数に # 演算子があるとき、汎用文字名で始まる ¥ 文字の前に ¥ 文字を挿入するかどうか。

  いいえ。
- (6.10.6) 非 STDC の `#pragma` 指令が認識されたときの動作。

  非 STDC の40 ページの「プラグマ」 指令が認識されたときの動作については、`Pragmas`を参照してください。
- (6.10.8) 翻訳の日付と時間がわからないときの `__DATE__` と `__TIME__` の定義。

  これらのマクロは常に使用できます。

E.1.12 ライブラリ関数 (J.3.12)

- (5.1.2.1) 第 4 節で規定されている最小セット以外に自立したプログラムから使用可能なライブラリ機能。

  ホスト環境に実装されています。
- (7.2.1.1) 表明マクロが出力する診断の形式。

  診断は次のような形式になっています。

  Assertion failed: *statement*. file *filename*, *line number*, *function name*

  statement は表明が失敗した文dす。*filename* は `__FILE__` の値です。*line number* は `__LINE__` です。*function name* は `__func__` の値です。
- (7.6.2.2) `fegetexceptflag` 関数が格納する浮動小数点ステータスフラグの表現。

  `fegetexceptflag` によってステータスフラグに格納された各例外は、定数のすべての組み合わせのビット単位 `OR` が明確な値を持つように、値を持つ整定数式に展開されます。
- (7.6.2.3) 「オーバーフロー」または「アンダーフロー」浮動小数点例外のほかに `feraiseexcept` 関数によって「不正確」浮動小数点例外が立てられるかどうか。

  「不正確」の例外は立てられません。
- `setlocale` 関数に 2 番目の引数として渡される可能性のある、「C」と "" 以外の文字列 (7.11.1.1)。

  意図的に空白にします。
- `FLT_EVAL_METHOD`マクロの値が 0 より小さいか、または 2 より大きい場合に、`float_t` および `double_t` に対して定義される型 (7.12)。

- SPARC の場合、型は次のとおりです。

```
typedef float float_t;

typedef double double_t;
```

- x86 の場合、型は次のとおりです。

```
typedef long double float_t;

typedef long double double_t;
```

(7.12.1) この国際規格で規定されている以外の、数学関数のドメインエラー。

入力引数が 0 か +/--Inf、 NaN のどれかの場合、ilogb()、ilogbf()、および ilogbl() は不正の例外を立てます。

- (7.12.1) ドメインエラー時に数学関数が返す値。

  ドメインエラー時に返される値は、『Programming Language - C (ISO/IEC 9899: 1999)』の Annex F で指定されているとおりです。

- アンダーフロー範囲エラー時に数学関数が返す値と、整数式の math_errhandling & MATH_ERRNO がゼロ以外の場合に *errno* にマクロ ERANGE の値が設定されるかどうか、また整数式の math_errhandling & MATH_ERREXCEPT がゼロ以外の場合に「アンダーフロー」浮動小数点例外が立てられるかどうか。(7.12.1)

  アンダーフロー範囲エラーについて: 値が非正規数の可能性がある場合は、その非正規数が返され、それ以外の場合は、適宜 +-0 が返されます。

  整数式の math_errhandling & MATH_ERRNO がゼロ以外の場合に *errno* に ERANGE マクロの値が設定されるかどうかについて、Oracle の実装では、(math_errhandling & MATH_ERRNO) == 0 のため、この部分は該当しません。

  整数式の math_errhandling & MATH_ERREXCEPT がゼロ以外の場合 (7.12.1) に「アンダーフロー」浮動小数点例外が立てられるかどうかについて: 浮動小数点アンダーフローとともに精度が失われた場合に例外が立てられます。

- (7.12.10.1) fmod 関数の第 2 引数が 0 の場合に、ドメインエラーとなるか、0 が返されるか。

  ドメインエラーが発生します。

- (7.12.10.3) 商を約分する際に remquo 関数が使用する係数の 2 を底とする対数。

  31.

- (7.14.1.1) シグナルハンドラを呼び出す前に signal(*sig*, SIG_DFL); 相当のものを実行するかどうか、また実行されない場合は、実行されるシグナルのブロック処理。

  シグナルハンドラを呼び出す前に signal(*sig*, SIG_DFL); 相当を実行します。

- (7.17) マクロ NULL を展開したときの null ポインタ定数。

  NULL は 0 に展開されます。

- (7.19.2) テキストストリームの最終行で改行文字による終了を必要とするか。

  最終行を改行文字で終了する必要はありません。

- (7.19.2) テキストストリームへの書き出しでスペース文字が改行文字の直前にあった場合、そのスペース文字が読み込みで表示されるかどうか。

ストリームが読み込まれるときにはすべての文字が表示されます。

- (7.19.2) バイナリストリームに書き込まれるデータに追加することのできる null 文字の数。

  バイナリストリームには null 文字を追加しません。
- (7.19.3) 当初、アペンドモードのストリームのファイル位置指示子がファイルの始まりと終わりのどちらに置かれるか。

  ファイル位置指示子は最初にファイルの終わりに置かれます。
- (7.19.3) テキストストリームへの書き込みを行うと、関係するファイルの内容が書き込み点以降切り捨てられるか。

  ハードウェアの命令がないかぎり、テキストストリームへの書き込みによって書き込み点以降の関連ファイルが切り捨てられることはありません。
- (7.19.3) ファイルバッファリングの特性。

  標準エラーストリーム (`stderr`) を除く出力ストリームは、デフォルトでは、出力がファイルの場合にはバッファリングされ、出力が端末の場合にはラインバッファリングされます。標準エラー出力ストリーム (`stderr`) は、デフォルトではバッファリングされません。

  バッファリングされた出力ストリームは多くの文字を保存し、その文字をブロックとして書き込みます。バッファリングされなかった出力ストリームは宛先ファイルあるいは端末に迅速に書き込めるように情報の待ち行列を作ります。行バッファリングされた出力は、その行が完了するまで (改行文字が要求されるまで) 行単位の出力待ち行列に入れられます。
- (7.19.3) 長さゼロのファイルが実際に存在するかどうか。

  ディレクトリエントリを持つという意味ではゼロ長ファイルは存在します。
- (7.19.3) 有効なファイル名の作成規則。

  有効なファイル名は 1 から 1,023 文字までの長さで、NULL 文字とスラッシュ (/) 以外のすべての文字を使用することができます。
- (7.19.3) 同一のファイルを同時に複数回開くことが可能か。

  同一のファイルを何回も開くことができます。
- (7.19.3) ファイル内の複数バイト文字に使用する符号化方式の性質と選択方法。

  複数バイト文字に使用する符号化方式は、ファイルごとに同じです。
- (7.19.4.1) 開いたファイルに対する `remove()` 関数の処理。

  ファイルを閉じる最後の呼び出しによりファイルが削除されます。すでに除去されたファイルをプログラムが開くことはできません。
- (7.19.4.2) `rename` 関数を呼び出す前に新しい名前を持つファイルがあった場合の処理。

  そのようなファイルがあれば削除され、新しいファイルが元のファイルの上に書き込まれます。
- (7.19.4.3) プログラムの異常終了時に開いていた一時ファイルが削除されるかどうか。

  ファイルの作成とリンク解除の間にプロセスが終了した場合は、ファイルがそのまま残ることがあります。`freopen`(3C) のマニュアルページを参照してください。
- (7.19.5.4) 許されるモードの変更とその状況。

  ストリームの基になっているファイル記述子のアクセスモードに従って、次のモード変更が許されます。

- + が指定されている場合、ファイル記述子モードは O_RDWR である必要があります。
- r が指定されている場合、ファイル記述子モードは O_RDONLY か O_RDWR である必要があります。
- a または w が指定されている場合、ファイル記述子モードは O_WRONLY か O_RDWR である必要があります。

  freopen(3C) のマニュアルページを参照してください。

(7.19.6.1, 7.24.2.1) 無限または NaN の出力に使用する形式と NaN で出力する n-char または n-wchar シーケンスの意味。

[-]Inf、[-]NaN です。F 変換指示子がある場合は、[-]INF、[-]NAN になります。

- (7.19.6.1, 7.24.2.1) fprintf または fwprintf 関数における %p 変換の出力。

  %p の出力は %x と等しくなります。

- (7.19.6.2, 7.24.2.1) fscanf() または fwscanf() 関数における %[変換のスキャンリストで、先頭文字でも最終文字でもなく、また先頭文字が ^ の場合に 2 番目の文字でもない - 文字の解釈。

  - がスキャンリストにあり、先頭文字でも最終文字でもなく、^ が先頭文字の場合に 2 番目の文字でない場合は、一致とみなす文字の範囲を示します。

  fscanf(3C) のマニュアルページを参照してください。

- (7.19.6.2, 7.24.2.2) fscanf() または fwscanf() 関数の %p 変換で一致とみなされるシーケンスと、対応する入力項目の解釈。

  対応する printf(3C) 関数の %p 変換で生成されるシーケンスと同じシーケンスを一致とみなします。対応する引数は、void 型ポインタへのポインタである必要があります。入力項目が同じプログラムの実行中の以前に変換された値の場合、生成されるポインタはその値に等しいとみなされます。それ以外の場合の %p 変換の動作は定義されていません。

  fscanf(3C) のマニュアルページを参照してください。

- (7.19.9.1, 7.19.9.3, 7.19.9.4) エラー時に fgetpos、fsetpos、ftell 関数がマクロ *errno*に設定する値。
  - EBADF ストリームの基になっているファイル記述子が不正です。fgetpos(3C) のマニュアルページを参照してください。
  - ESPIPE ストリームの基になっているファイル記述子がパイプか FIFO、ソケットに関連付けられています。fgetpos(3C) のマニュアルページを参照してください。
  - EOVERFLOW fpos_t 型のオブジェクトでは、ファイル位置の現在の値を正しく表現できません。fgetpos(3C) のマニュアルページを参照してください。
  - EBADF ストリームの基になっているファイル記述子が不正です。fsetpos(3C) のマニュアルページを参照してください。
  - ESPIPE ストリームの基になっているファイル記述子がパイプか FIFO、ソケットに関連付けられています。fsetpos(3C) のマニュアルページを参照してください。
  - EBADF ストリームの基になっているファイル記述子が開いているファイルの記述子ではありません。ftell(3C) のマニュアルページを参照してください。

- ESPIPE ストリームの基になっているファイル記述子がパイプか FIFO、ソケットに関連付けられています。ftell(3C) のマニュアルページを参照してください。
- EOVERFLOW long 型のオブジェクトでは、現在のファイルオフセット値を正しく表現できません。ftell(3C) のマニュアルページを参照してください。

(7.20.1.3, 7.24.4.1.1) strtod()、strtof()、strtold()、wcstod()、wcstof()、または wcstold() 関数によって変換される NaN を表す文字列内の *n-char* または *n-wchar* シーケンスの意味。

n-char シーケンスには特別な意味は与えられていません。

- アンダーフローが発生したとき、strtod、strtof、strtold、wcstod、wcstof、または wcstold 関数が *errno* に ERANGE を設定するかどうか。(7.20.1.3, 7.24.4.1.1)

  アンダーフロー時、*errno* には ERANGE が設定されます。

- (7.20.3) 要求サイズがゼロの場合、calloc、malloc、および realloc 関数が null ポインタまたは割り当てオブジェクトへのポインタのどちらを返すか。

  null ポインタか free() に渡すことが可能な一意のポインタが返されます。

  malloc(3C) のマニュアルページを参照してください。

- (7.20.4.1, 7.20.4.4) abort または _Exit 関数が呼び出されたときに、バッファー内にまだ書き出されていないデータがある開いているストリームをフラッシュするか、開いているストリームを閉じるか、一時ファイルを削除するか。

  異常終了処理では、開いているすべてのストリームに対して少なくとも fclose(3C) の処理が行われます。abort(3C) のマニュアルページを参照してください。

  開いているストリームが閉じられます。フラッシュはされません。_Exit(2) のマニュアルページを参照してください。

- (7.20.4.1, 7.20.4.3, 7.20.4.4) abort、exit、または _Exit 関数がホスト環境に返す終了ステータス。

  abort によって wait(3C) または waitpid(3C) から使用できるようにされたステータスが、SIGABRT シグナルで終了されたプロセスのステータスになります。abort(3C)、exit(1)、および _Exit(2) のマニュアルページを参照してください。

  exit または _Exit によって返される終了ステータスは、呼び出し側のプロセスの親プロセスが行なっていた処理によって異なります。

  呼び出し側プロセスの親プロセスが wait(3C) か wait3(3C)、waitid(2)、waitpid(3C) のどれかを実行していて、その SA_NOCLDWAIT フラグの設定がなく、かつ SIGCHLD を SIG_IGN に設定していなかった場合、親プロセスは呼び出し側プロセスの終了の通知を受け、ステータスの下位 8 ビット (すなわち、ビット 0377) を使用できるようになります。親が待ち状態ではない場合は、そのあと、親が wait()、wait3()、 waitid()、waitpid() のどれかを実行した時点で子のステータスを利用できるようになります。

- (7.20.4.6) 引数が null ポインタ以外の場合に system 関数によって返される値。

  waitpid(3C) によって指定された形式でシェルの終了ステータスが返されます。

- (7.23.1) 現地時間帯と夏時間。

現地時間帯は、環境変数 TZ で設定します。

- (7.23) clock_t および time_t で表現可能な時間の範囲と精度。

  clock_t および time_t の精度は 100 万分の 1 秒です。範囲は、x86 および SPARC-V8 では -2147483647-1 から 4294967295 (100 万分の 1 秒) です。SPARC-v9 では、-9223372036854775807LL-1 から 18446744073709551615 です。

- (7.23.2.1) clock 関数の経過時間。

  clock 関数の経過時間は、プログラム実行開始時を原点とする時間経過として表現されます。

- (7.23.3.5, 7.24.5.1) “C” ロケールにおける、strftime および wcsftime 関数に対する %Z 指定子の置換文字列。

  時間帯の名前か短縮名。また、時間帯の判定ができない場合は、置換文字なしです。

- (F.9) IEC 60559 準拠の実装で trigonometric、hyperbolic、e を底とする指数、e を底とする対数、エラー、ログガンマ関数が「不正確」の浮動小数点例外を立てるかどうか、また立てる場合はそのタイミング。

  一般に「不正確」の例外は、結果が正確に表現できない場合に立てられます。また「不正確」の例外は、結果が正確に表現可能な場合にも立てられることがあります。

- <math.h> 内の関数が IEC 60559 準拠の処理系における丸め方向モードに従うかどうか (F.9)。

  <math.h> のどの関数についても、デフォルトの丸め方向モードの強制は試みられません。

E.1.13 アーキテクチャー (J.3.13)

- (5.2.4.2, 7.18.2, 7.18.3) ヘッダー <float.h>、<limits.h>、および <stdint.h> に指定されているマクロに割り当てられている値または式。
  - <float.h> に指定されているマクロに対する値または式は次のとおりです。

```
#define CHAR_BIT 8 /* max # of bits in a “char” */
#define SCHAR_MIN (-128) /* min value of a “signed char” */
#define SCHAR_MAX 127 /* max value of a “signed char” */
#define CHAR_MIN SCHAR_MIN /* min value of a “char” */
#define CHAR_MAX SCHAR_MAX /* max value of a “char” */
#define MB_LEN_MAX 5
#define SHRT_MIN (-32768) /* min value of a “short int” */
#define SHRT_MAX 32767 /* max value of a “short int” */
#define USHRT_MAX 65535 /* max value of “unsigned short int” */
#define INT_MIN (-2147483647-1) /* min value of an “int” */
#define INT_MAX 2147483647 /* max value of an “int” */
#define UINT_MAX 4294967295U /* max value of an “unsigned int” */
#define LONG_MIN (-2147483647L-1L)
#define LONG_MAX 2147483647L /* max value of a “long int” */
#define ULONG_MAX 4294967295UL /* max value of “unsigned long int” */
```

```
#define LLONG_MIN (-9223372036854775807LL-1LL)
#define LLONG_MAX 9223372036854775807LL
#define ULLONG_MAX 18446744073709551615ULL

#define FLT_RADIX 2
#define FLT_MANT_DIG 24
#define DBL_MANT_DIG 53
#define LDBL_MANT_DIG 64

#if defined(__sparc)
#define DECIMAL_DIG 36
#elif defined(__i386)
#define DECIMAL_DIG 21
#endif
#define FLT_DIG 6
#define DBL_DIG 15
#if defined(__sparc)
#define LDBL_DIG 33
#elif defined(__i386)
#define LDBL_DIG 18
#endif

#define FLT_MIN_EXP (-125)
#define DBL_MIN_EXP (-1021)
#define LDBL_MIN_EXP (-16381)

#define FLT_MIN_10_EXP (-37)
#define DBL_MIN_10_EXP (-307)
#define LDBL_MIN_10_EXP (-4931)

#define FLT_MAX_EXP (+128)
#define DBL_MAX_EXP (+1024)
#define LDBL_MAX_EXP (+16384)

#define FLT_EPSILON 1.192092896E-07F
#define DBL_EPSILON 2.2204460492503131E-16

#if defined(__sparc)
#define LDBL_EPSILON 1.92592994438723585305597794258492731 9E-34L
#elif defined(__i386)
#define LDBL_EPSILON 1.08420217248550443400 75E-19L
#endif

#define FLT_MIN 1.175494351E-38F
#define DBL_MIN 2.2250738585072014E-308
```

```
#if defined(__sparc)
#define LDBL_MIN 3.362103143112093506262677817321752603E-4932L
#elif defined(__i386)
#define LDBL_MIN 3.36210314311209350626277817321752603E-4932L
#endif
```

■ <limits.h> に指定されているマクロに対する値または式は次のとおりです。

```
#define INT8_MAX (127)
#define INT16_MAX (32767)
#define INT32_MAX (2147483647)
#define INT64_MAX (92233720368547758O7LL)

#define INT8_MIN (-128)
#define INT16_MIN (-32767-1)
#define INT32_MIN (-2147483647-1)
#define INT64_MIN (-92233720368547758O7LL-1)

#define UINT8_MAX (255U)
#define UINT16_MAX (65535U)
#define UINT32_MAX (4294967295U)
#define UINT64_MAX (18446744073709551615ULL)

#define INT_LEAST8_MIN INT8_MIN
#define INT_LEAST16_MIN INT16_MIN
#define INT_LEAST32_MIN INT32_MIN
#define INT_LEAST64_MIN INT64_MIN

#define INT_LEAST8_MAX INT8_MAX
#define INT_LEAST16_MAX INT16_MAX
#define INT_LEAST32_MAX INT32_MAX
#define INT_LEAST64_MAX INT64_MAX

#define UINT_LEAST8_MAX UINT8_MAX
#define UINT_LEAST16_MAX UINT16_MAX
#define UINT_LEAST32_MAX UINT32_MAX
#define UINT_LEAST64_MAX UINT64_MAX
```

■ <stdint.h> に指定されているマクロに対する値または式は次のとおりです。

```
#define INT_FAST8_MIN INT8_MIN
#define INT_FAST16_MIN INT16_MIN
#define INT_FAST32_MIN INT32_MIN
#define INT_FAST64_MIN INT64_MIN

#define INT_FAST8_MAX INT8_MAX
#define INT_FAST16_MAX INT16_MAX
```

```
#define INT_FAST32_MAX INT32_MAX
#define INT_FAST64_MAX INT64_MAX

#define UINT_FAST8_MAX UINT8_MAX
#define UINT_FAST16_MAX UINT16_MAX
#define UINT_FAST32_MAX UINT32_MAX
#define UINT_FAST64_MAX UINT64_MAX
```

- (6.2.6.1) この国際規格に明示的に規定されていないオブジェクトのバイト数と順序、符号化方式。

  1999 C 規格に明示的に規定されていないオブジェクトの処理系定義のバイト数と順序、符号化方式は、この章の別の場所で定義する必要があります。

- (6.5.3.4) `sizeof` 演算子の結果の値。

  次の表は、`sizeof` の結果を一覧表示します。

表 87 `sizeof` 演算子の結果 (バイト単位)

型	バイト単位のサイズ
`char` と `_Bool`	1
`short`	2
`int`	4
`long`	4
`long -m64`	8
`long long`	8
`float`	4
`double`	8
`long double` (SPARC)	16
`long double` (x86) `-m32`	12
`long double` (x86) `-m64`	16
`pointer`	4
`pointer -m64`	8
`_Complex float`	8
`_Complex double`	16
`_Complex long double` (SPARC)	32
`_Complex long double` (x86) `-m32`	24
`_Complex long double` (x86) `-m64`	32
`_Imaginary float`	4
`_Imaginary double`	8
`_Imaginary long double` (SPARC)	16
`_Imaginary long double` (x86) `-m32`	12

型	バイト単位のサイズ
_Imaginary long double (x86) -m64	16

E.1.14 ロケール固有の動作 (J.4)

ホスト環境の次の特性はロケール依存で、処理系で文書化する必要があります。

- (5.2.1) 基本文字セット以外のソースおよび実行文字セットの追加メンバー。

  ロケール依存です。C ロケールでは、文字セットの拡張はありません。
- (5.2.1.2) 基本文字セット以外の実行文字セットの追加の複数バイト文字の有無と意味、表現。

  デフォルトまたは C ロケールでは、実行文字セットに存在する複数バイト文字はありません。
- (5.2.1.2) 複数バイト文字の符号化で使用するシフト状態。

  シフト状態はありません。
- (5.2.2) 連続する印刷文字の出力方向。

  常に左から右に印刷されます。
- (7.1.1) 小数点の文字。

  ロケール依存です (C ロケールでは、ピリオド「.」)。
- (7.4, 7.25.2) 印刷文字セット。

  ロケール依存です (C ロケールでは、ピリオド「.」)。
- (7.4, 7.25.2) 制御文字セット。

  制御文字セットは、水平タブ、垂直タブ、フォームフィード、アラート、バックスペース、復帰、改行で構成されます。
- isalpha、 isblank、islower、ispunct、 isspace、isupper、iswalpha、iswblank、iswlower、iswpunct、 iswspace、iswupper 関数によるテスト対象の文字セット (7.4.1.2, 7.4.1.3, 7.4.1.7, 7.4.1.9, 7.4.1.10, 7.4.1.11, 7.25.2.1.2, 7.25.2.1.3, 7.25.2.1.7, 7.25.2.1.9, 7.25.2.1.10, 7.25.2.1.11)。

  isalpha() および iswalpha() と、前述の関係するマクロについては、isalpha(3C) および iswalpha(3C) のマニュアルページを参照してください。これらの動作はロケールを変更することによって変更されることがあります。
- (7.11.1.1) ネイティブ環境。

  setlocale(3C) マニュアルページで説明しているように、ネイティブ環境は LANG および LC_* 環境変数で指定します。ただし、これらの環境変数が設定されていない場合は、C ロケールに設定されます。
- (7.20.1, 7.24.4.1) 数値変換関数が受け付ける追加の変換対象シーケンス。

  基数文字はプログラムのロケールで定義され (LC_NUMERIC カテゴリ)、ピリオド (.) 以外のものに定義できます。
- 実行文字セットの照合シーケンス (7.21.4.3, 7.24.4.4.2)。

ロケール依存です。C ロケールでは、照合順序は ASCII の照合シーケンスと同じです。

- (7.21.6.2) `strerror` 関数が作成するエラーメッセージ文字列の内容。

  アプリケーションが `-lintl` を付けてリンクされた場合、この関数が返すメッセージは `LC_MESSAGES` ロケールカテゴリで指定されたネイティブ言語になります。それ以外の場合は、C ロケールです。
- (7.23.3.5, 7.24.5.1) 時間と日付の書式。

  ロケール固有です。C ロケールでの形式を次の表にまとめます。

  月の名前は次のとおりです。

表 88 月の名前

January	May	September
February	June	October
March	July	November
April	August	December

曜日の名前は次のとおりです。

表 89 曜日の名前と省略名

曜日名	**省略名**
Sunday Thursday	Sun Thu
Monday Friday	Mon Fri
Tuesday Saturday	Tue Sat
Wednesday	Wed

時間の書式は次のとおりです。

`%H:%M:%S`

日付の書式は次のとおりです。

`%m/%d/` (`-pedantic` フラグを使用)

午前/午後を指定する書式は、次のとおりです。AM PM

- (7.25.1) `towctrans` 関数がサポートする文字マッピング。

  プログラムのロケール (`LC_CTYPE` カテゴリ) 内の文字マッピング情報で定義される符号化文字セットの規則で、`tolower` および `toupper` 以外の文字マッピングを規定できます。使用可能なロケールとその定義の詳細は、『*Oracle Solaris Internationalization Guide For Developers*』を参照してください。
- (7.25.1) `iswctype` 関数がサポートする文字分類。

使用可能なロケールと規格外の予約文字の分類についての詳細は、『*Oracle Solaris Internationalization Guide For Developers*』を参照してください。

♦ ♦ ♦ 付 録 F

ISO/IEC C90 の処理系定義の動作

『Programming Languages - C (ISO/IEC 9899:1990)』規格は、C で記述されるプログラムの形式を定義し、その解釈を確立します。ただしこの規格では、いくつかの項目が処理系定義 (コンパイラごとに内容が異なる) のままとなっています。この付録では、それらの動作を詳しく説明します。各項は ISO/IEC 9899:1990 規格そのものと簡単に比較できるようになっています。日本の対応規格は、JIS X 3010 - 1993 です。

- ISO 規格と同様の文を用いて各動作を説明しています。
- 各動作の説明の前に ISO 規格で対応するセクション番号を付けています。

F.1 ISO 規格との実装の比較

F.1.1 翻訳 (G.3.1)

括弧内の数は、ISO/IEC 9899/1990 規格のセクション番号に対応しています。

F.1.1.1 (5.1.1.3) 診断の認識:

エラーメッセージは次の書式です。

filename, `line` *line number: message*

警告メッセージは次の書式です。

filename, `line` *line number: warning message*

ここでは:

- *ファイル名*とはエラーまたは警告があったファイルの名前です
- *行番号*とはエラーまたは警告が検出された行の番号です
- *メッセージ*とは診断メッセージです

F.1.2 環境 (G.3.2)

F.1.2.1 (5.1.2.2.1) main の引数の意味

```
int main (int argc, char *argv[])
{
....
}
```

argc はプログラムの呼び出しに伴うコマンド行引数の数です。シェルによって展開されたあとは、argc は必ず 1 以上、つまりプログラム名が 1 つ以上になります。

argv はコマンド行引数へのポインタ配列です。

F.1.2.2 (5.1.2.3) 対話型デバイスを構成するもの

対話型デバイスにはシステムライブラリコールの isatty() が 0 以外の値を返します。

F.1.3 識別子 (G.3.3)

F.1.3.1 (6.1.2) 外部リンケージのない識別子の先頭から (31 を超える) 有意文字の数

最初の 1,023 文字が有意です。識別子は大文字と小文字を別の文字として扱います。

(6.1.2) 外部リンケージのある識別子の先頭から (6 を超える) 有意文字の数

最初の 1,023 文字が有意です。識別子は大文字と小文字を別の文字として扱います。

F.1.4 文字 (G.3.4)

F.1.4.1 (5.2.1) ソースと実行の文字セットについて (規格に明確に規定されているものを除く)

どちらの文字セットも ASCII 文字セットやロケール固有の拡張文字と同一です。

F.1.4.2 (5.2.1.2) 複数バイト文字を符号化するためのシフト状態について

シフト状態はありません。

F.1.4.3 (5.2.4.2.1) 実行文字セットで 1 文字のビット数

ASCII 部分では、1 文字に 8 ビットです。ロケール固有の拡張文字部分では、ロケール固有の 8 ビットの倍数です。

F.1.4.4 (6.1.3.4) ソース文字セット (文字と文字列リテラル) メンバーの実行文字セットメンバーへの配置

ASCII 部分では、配置はソース文字と実行文字と同様です。

F.1.4.5 (6.1.3.4) 基本の実行文字セット、またはワイド文字定数用の拡張文字セットのどちらにも表現されていない文字や、エスケープシーケンスを含む整数文字定数の値

右端の文字が示す数値です。たとえば、'\q' は 'q' に等しくなります。このようなエスケープシーケンスが発生すると警告が発行されます。

F.1.4.6 (6.1.3.4) 2 つ以上の文字を含む整数文字定数の値、または 2 つ以上の複数バイト文字を含むワイド文字定数の値

エスケープシーケンスの発生しない複数バイト文字セットの値は、各文字の示す数値から派生しています。

F.1.4.7 (6.1.3.4) 複数バイト文字を対応するワイド文字 (コード) に変換するのに使用される現ロケール (locale)

有効なロケールは LC_ALL、LC_CTYPE、または LANG 環境変数のいずれかで指定されたものです。

F.1.4.8 (6.2.1.1) 何も付いていない char は、signed char と、unsigned char のどちらと同じ範囲の値を持つか

char は、signed char とみなされます。

F.1.5 整数 (G.3.5)

F.1.5.1 (6.1.2.5) 整数の型の表現と値について

表 90 整数の表現と値

整数	ビット数	最小値	最大値
char	8	-128	127
signed char	8	-128	127
unsigned char	8	0	255
short	16	-32768	32767
signed short	16	-32768	32767
unsigned short	16	0	65535
int	32	-2147483648	2147483647
signed int	32	-2147483648	2147483647
unsigned int	32	0	4294967295
long -m32	32	-2147483648	2147483647
long -m64	64	-9223372036854775808	9223372036854775807
signed long -m32	32	-2147483648	2147483647
signed long -m64	64	-9223372036854775808	9223372036854775807
unsigned long -m32	32	0	4294967295
unsigned long -m64	64	0	18446744073709551615
long long	64	-9223372036854775808	9223372036854775807
signed long long †	64	-9223372036854775808	9223372036854775807
unsigned long long †	64	0	18446744073709551615

† -pedantic とともに指定した場合は無効となります。

F.1.5.2 (6.2.1.2) 値を表現できない場合に整数をより短い符号付き整数に変換した結果、また符号なしの整数を同じ長さの符号付き整数に変換した結果

整数がより短い `signed` 整数に変換される場合は、長い方の整数の下位ビットが短い方の `signed` 整数に複写されます。結果は負になることがあります。

符号なし整数が同サイズの `signed` 整数に変換される場合は、`unsigned` 整数の下位ビットが `signed` 整数に複写されます。結果は負になることがあります。

F.1.5.3 (6.3) 符号付き整数におけるビット単位演算の結果

ビット単位演算を `signed` の型に適用すると、`sign` ビットを含むオペランドのビット単位演算となります。その結果の各ビットは、両オペランドの対応するビットが設定されていた場合にのみ設定されます。

F.1.5.4 (6.3.5) 整数の除算における剰余の符号について

結果は被除数と同じ符号になります。たとえば、-23/4 の剰余は -3 となります。

F.1.5.5 (6.3.7) 負の値を持つ符号付き整数型を右シフトした結果

右シフトの結果は `signed` の右シフトとなります。

F.1.6 浮動小数点 (G.3.6)

F.1.6.1 (6.1.2.5) 浮動小数点数の型の表現と値

表 91 `float` の値

float	
ビット数	32
最小値	1.17549435E-38
最大値	3.40282347E+38
イプシロン	1.19209290E-07

表 92 `double` の値

double	
ビット数	64
最小値	2.2250738585072014E-308
最大値	1.7976931348623157E+308
イプシロン	2.2204460492503131E-16

表 93 `long double` の値

long double	
ビット数	128 *(SPARC)* 80 *(x86)*
最小値	3.3621031431120935062626778173217526 03E-4932 (SPARC) 3.362103143112093506262 7E-4932 *(x86)*
最大値	1.1897314953572317650857593266280070 16E+4932 *(SPARC)* 1.189731495357231765021 3E4932 *(x86)*
イプシロン	1.9259299443872358530559779425849273 19E-34 *(SPARC)* 1.0842021724855044340075E-19 *(x86)*

F.1.6.2 (6.2.1.3) 整数値が元の値を完全には表現できない浮動小数点数に変換された場合の切り捨ての指示

数値は元の値の近似値に丸められます。

F.1.6.3 (6.2.1.4) 浮動小数点数が短い浮動小数点数に変換された場合の切り捨てまたは丸めの指示

数値は元の値の近似値に丸められます。

F.1.7 配列とポインタ (G.3.7)

F.1.7.1 (6.3.3.4, 7.1.1) 配列の最大サイズを維持するのに必要な整数型、つまり `sizeof` 演算子の `size_t` 型。

`stddef.h` において定義されている `unsigned int` です (`–m32` の場合)。

unsigned long (-m64 の場合)

F.1.7.2 (6.3.4) ポインタを整数に cast で型変換した結果、またはその逆の結果

ポインタおよび int、long、unsigned int、unsigned long 型の値ではビットパターンは変わりません。

F.1.7.3 (6.3.6, 7.1.1) 同じ配列のメンバーへの 2 つのポインタの相違 ptrdiff_t を維持するのに必要な整数型。

stddef.h において定義されている int です (–m32 の場合)。

long (-m64 の場合)

F.1.8 レジスタ (G.3.8)

F.1.8.1 (6.5.1) register 記憶クラス指定子を使用して、オブジェクトを実際に入れることのできるレジスタの数

有効なレジスタ宣言の数は使用パターンおよび各関数における定義に依存し、割り当て可能なレジスタ数に制限されます。コンパイラやオプティマイザは、レジスタ宣言に従う必要はありません。

F.1.9 構造体、共用体、列挙型、およびビットフィールド (G.3.9)

F.1.9.1 (6.3.2.3) 共用体のオブジェクトのメンバーはほかの型のメンバーを使用してアクセスされる

共用体のメンバーに記憶されているビットパターンがアクセスされ、アクセスしたメンバーの型に従って値が解釈されます。

F.1.9.2 (6.5.2.1) 構造体のメンバーのパディングと整列条件

表 94 構造体メンバーのパディングと整列

型	整列境界	バイト整列
char と _Bool	バイト	1

型	整列境界	バイト整列
short	ハーフワード	2
int	ワード	4
long -m32	ワード	4
long -m64	ダブルワード	8
long long -m32	ダブルワード (SPARC) ワード (x86)	8 (SPARC) 4 (x86)
long long -m64	ダブルワード	8
float	ワード	4
double -m32	ダブルワード (SPARC) ワード (x86)	8 (SPARC) 4 (x86)
double -m64	ダブルワード	8
long double -m32	ダブルワード (SPARC) ワード (x86)	8 (SPARC) 4 (x86)
long double -m64	クワドワード	16
pointer -m32	ワード	4
pointer -m64	クワドワード	8
float _Complex	ワード	4
double _Complex -m32	ダブルワード (SPARC) ワード (x86)	8 (SPARC) 4 (x86)
double _Complex -m64	ダブルワード	8
long double _Complex -m32	ダブルワード (SPARC) ワード (x86)	8 (SPARC) 4 (x86)
long double _Complex -m64	クワドワード	16
float _Imaginary	ワード	4
double _Imaginary -m32	ダブルワード (SPARC) ワード (x86)	8 (SPARC) 4 (x86)
double _Imaginary -m64	ダブルワード	8
long double _Imaginary -m32	ダブルワード (SPARC) ワード (x86)	8 (SPARC) 4 (x86)
long double _Imaginary -m64	ダブルワード	16

各要素が適切な境界上に並ぶように、構造体のメンバーが自動的に埋め込まれます。

構造体自身の整列条件はそのメンバーの整列条件と同一です。たとえば、chars 型だけの struct は整列の制限がありませんが、–m64 を使用してコンパイルされた double 型を含む struct は 8 バイトの境界上に並びます。

F.1.9.3 (6.5.2.1) 単なる int のビットフィールドは signed int ビットフィールドとみなされるか、unsigned int ビットフィールドとみなされるか

unsigned int とみなされます。

F.1.9.4 (6.5.2.1) int 内のビットフィールドの割り当て順序

ビットフィールドは、記憶装置内で高位から低位の順に割り当てられます。

F.1.9.5 (6.5.2.1) ビットフィールドは記憶装置の境界を越えることができるか

ビットフィールドは記憶装置の境界を越えません。

F.1.9.6 (6.5.2.2) 列挙型の値を表現するための整数型

int 型です。

F.1.10 修飾子 (G.3.10)

F.1.10.1 (6.5.5.3) volatile 修飾子型を持つオブジェクトへのアクセス方法

オブジェクト名を参照するたびに、そのオブジェクトへアクセスされます。

F.1.11 宣言子 (G.3.11)

F.1.11.1 (6.5.4) 算術演算、構造体、または共用体の型が修正可能な宣言子の最大数

コンパイラによる制限はありません。

F.1.12 文 (G.3.12)

F.1.12.1 (6.6.4.2) switch 文中の case 値の最大個数

コンパイラによる制限はありません。

F.1.13 前処理指令 (G.3.13)

F.1.13.1 (6.8.1) 条件付きのインクルードを制御する定数式のシングルキャラクタ文字定数の値は、実行文字セット中の同一の文字定数の値に一致するか

前処理命令内の文字定数はほかの式のものと同一の数値を持ちます。

F.1.13.2 (6.8.1) そのような文字定数は負の値をとり得るか

この場合の文字定数は負の値を取ることがあります。

F.1.13.3 (6.8.2) インクルード可能なソースファイルの位置を知る方法

名前が < > で区切られているファイルは、最初に -I オプションで指定されているディレクトリ内で、次に標準ディレクトリ内で検索されます。異なるデフォルト位置を指定するのに -YI オプションが使用されていないかぎり、標準ディレクトリは /usr/include です。

名前が引用符で区切られているファイルは、最初に #include を含むソースファイルのディレクトリ内で、次に -I オプションで指定されているディレクトリ内で、最後に標準ディレクトリ内で検索されます。

< > や二重引用符で囲まれたファイル名が / で始まっている場合は、そのファイル名はルートディレクトリで始まるパス名であると解釈されます。このファイルの検索はルートディレクトリの中でのみ行われます。

F.1.13.4 (6.8.2) インクルード可能なソースファイルの引用符付きの名前のサポート

include 命令の引用符付きのファイル名はサポートされます。

F.1.13.5 (6.8.2) ソースファイルの文字シーケンスの配置

ソースファイルの文字は対応する ASCII の値に配置されます。

F.1.13.6 (6.8.6) 認識された各 #pragma 指令の動作:

次に示すプラグマがサポートされています。詳細は、40 ページの「プラグマ」を参照してください。

- `align` *integer (variable[, variable])*
- `c99 (“implicit” | “no%implicit”)`
- `does_not_read_global_data` *(funcname [, funcname])*
- `does_not_return` *(funcname[, funcname])*
- `does_not_write_global_data` *(funcname[, funcname])*
- `error_messages` *(on|off|default, tag1[tag2... tagn])*
- `fini` *(f1[, f2..., fn])*
- `hdrstop`
- `ident` *string*
- `init` *(f1[, f2..., fn])*
- `inline` *(funcname[, funcname])*
- `int_to_unsigned` *(funcname)*
- `MP serial_loop`
- `MP serial_loop_nested`
- `MP taskloop`
- `no_inline` *(funcname[, funcname])*
- `no_warn_missing_parameter_info`
- `nomemorydepend`
- `no_side_effect` *(funcname[, funcname])*
- `opt_level` *(funcname[, funcname])*
- `pack`*(n)*
- `pipeloop`*(n)*
- `rarely_called` *(funcname[, funcname])*
- `redefine_extname` *old_extname new_extname*

- `returns_new_memory` *(funcname[,funcname])*
- `unknown_control_flow` *(name[, name])*
- `unroll` *(unroll_factor)*
- `warn_missing_parameter_info`
- `weak` *symbol1 [= symbol2]*

F.1.13.7 (6.8.8) 翻訳の日付と時間がわからないときの __DATE__ と __TIME__ の定義

これらのマクロは常に使用できます。

F.1.14 ライブラリ関数 (G.3.14)

F.1.14.1 (7.1.6) マクロの NULL を拡張した null ポインタ定数

`NULL` は 0 になります。

F.1.14.2 (7.2) assert 関数によって出力される診断と assert 関数の終了動作

診断は次のようになります。

`Assertion failed:` *statement*`. file` *filename*`, line` *number*

ここでは:

- *statement* は表明に失敗した文です
- *filename* は障害を持ったファイルの名前です
- *line number* は障害が発生した行の番号です

F.1.14.3 (7.3.1) isalnum、isalpha、iscntrl、 islower、isprint、および isupper 関数によってテストされる文字セット:

表 95 `isalpha`、`islower` などによりテストされる文字セット

`isalnum`	ASCII 文字の A から Z、a から z、0 から 9

isalpha	ASCII 文字の A から Z、a から z、およびロケール固有の単一バイト文字
iscntrl	0 から 31 までと 127 の値を持つ ASCII 文字
islower	ASCII 文字の a から z
isprint	ロケール固有の単一バイトの出力可能文字
isupper	ASCII 文字の A から Z

F.1.14.4 (7.5.1) ドメインエラーの数値演算関数によって返される値

表 96 ドメインエラーの場合の戻り値

エラー	数値演算関数	コンパイラモード	
		-Xs, -Xt	-pedantic, -Xa, -Xc
DOMAIN	acos(|x|>1)	0.0	0.0
DOMAIN	asin(|x|>1)	0.0	0.0
DOMAIN	atan2(+-0,+-0)	0.0	0.0
DOMAIN	y0(0)	-HUGE	-HUGE_VAL
DOMAIN	y0(x<0)	-HUGE	-HUGE_VAL
DOMAIN	y1(0)	-HUGE	-HUGE_VAL
DOMAIN	y1(x<0)	-HUGE	-HUGE_VAL
DOMAIN	yn(n,0)	-HUGE	-HUGE_VAL
DOMAIN	yn(n,x<0)	-HUGE	-HUGE_VAL
DOMAIN	log(x<0)	-HUGE	-HUGE_VAL
DOMAIN	log10(x<0)	-HUGE	-HUGE_VAL
DOMAIN	pow(0,0)	0.0	1.0
DOMAIN	pow(0,neg)	0.0	-HUGE_VAL
DOMAIN	pow(neg,non-integal)	0.0	NaN
DOMAIN	sqrt(x<0)	0.0	NaN
DOMAIN	fmod(x,0)	x	NaN
DOMAIN	remainder(x,0)	NaN	NaN
DOMAIN	acosh(x<1)	NaN	NaN
DOMAIN	atanh(|x|>1)	NaN	NaN

F.1.14.5 (7.5.1) アンダーフローエラーの場合に、数値演算関数が整数式 errno をマクロ ERANGE の値に設定するかどうか

アンダーフローが検出された場合、scalbn を除いた数値演算関数は errno を ERANGE に設定します。

F.1.14.6 (7.5.6.4) fmod 関数の第 2 引数が 0 を持つ場合に、ドメインエラーとなるか、0 が返されるか

この場合は、ドメインエラーとして第 1 引数が返されます。

F.1.14.7 (7.7.1.1) signal 関数に対するシグナルの集合:

次の表に signal 関数が認識する各シグナルの意味を示します。

表 97 signal シグナルの意味

シグナル	いいえ。	デフォルト	イベント
SIGHUP	1	終了	ハングアップ
SIGINT	2	終了	interrupt
SIGQUIT	3	コア	quit
SIGILL	4	コア	不当な命令 (捕捉されてもリセットされない)
SIGTRAP	5	コア	トレーストラップ (捕捉されてもリセットされない)
SIGIOT	6	コア	IOT 命令
SIGABRT	6	コア	異常終了時に使用
SIGEMT	7	コア	EMT 命令
SIGFPE	8	コア	浮動小数点の例外
SIGKILL	9	終了	強制終了 (捕捉または無視できない)
SIGBUS	10	コア	バスエラー
SIGSEGV	11	コア	セグメンテーション違反
SIGSYS	12	コア	システムコールへの引数誤り
SIGPIPE	13	終了	読み手のないパイプ上への書き込み
SIGALRM	14	終了	アラームクロック
SIGTERM	15	終了	プロセスの終了によるソフトウェアの停止
SIGUSR1	16	終了	ユーザー定義のシグナル 1
SIGUSR2	17	終了	ユーザー定義のシグナル 2
SIGCLD	18	無視	子プロセスステータスの変化
SIGCHLD	18	無視	子プロセスステータスの変化の別名
SIGPWR	19	無視	電源障害による再起動
SIGWINCH	20	無視	ウィンドウサイズの変更
SIGURG	21	無視	ソケットの緊急状態
SIGPOLL	22	終了	ポーリング可能なイベント発生

シグナル	いいえ。	デフォルト	イベント
SIGIO	22	終了	ソケット入出力可能
SIGSTOP	23	停止	停止 (キャッチまたは無視できない)
SIGTSTP	24	停止	tty より要求されたユーザーストップ
SIGCONT	25	無視	停止していたプロセスの継続
SIGTTIN	26	停止	バックグラウンド tty の読み込みを試みた
SIGTTOU	27	停止	バックグラウンド tty の書き込みを試みた
SIGVTALRM	28	終了	仮想タイマーの時間切れ
SIGPROF	29	終了	プロファイリングタイマーの時間切れ
SIGXCPU	30	コア	CPU の限界をオーバー
SIGXFSZ	31	コア	ファイルサイズの限界をオーバー
SIGWAITINGT	32	無視	プロセスの LWP がブロックされた

F.1.14.8 (7.7.1.1) signal 関数によって認識される各 signal のデフォルトの取扱い、およびプログラムのスタートアップ時における取扱い

上記を参照してください。

F.1.14.9 (7.7.1.1) シグナルハンドラを呼び出す前に signal(sig, SIG_DFL); 相当のものが実行されない場合は、どのシグナルがブロックされるか

signal(sig,SIG_DFL) 相当のものは、常に実行されます。

F.1.14.10 (7.7.1.1) SIGILL 関数に指定されたハンドラにより SIGILL シグナルが受信された場合は、デフォルト処理はリセットされるか

SIGILL ではデフォルト処理はリセットされません。

F.1.14.11 (7.9.2) テキストストリームの最終行で、改行文字による終了を必要とするか

最終行を改行文字で終了する必要はありません。

F.1.14.12 (7.9.2) 改行文字の直前でテキストストリームに書き出されたスペース文字は読み込みの際に表示されるか

ストリームが読み込まれるときにはすべての文字が表示されます。

F.1.14.13 (7.9.2) バイナリストリームに書かれたデータに追加することのできる null 文字の数

バイナリストリームには null 文字を追加しません。

F.1.14.14 (7.9.3) アペンドモードのストリームのファイル位置指示子は、最初にファイルの始まりと終わりのどちらに置かれるか

ファイル位置指示子は最初にファイルの終わりに置かれます。

F.1.14.15 (7.9.3) テキストストリームへの書き込みを行うと、書き込み点以降の関連ファイルが切り捨てられるか

ハードウェアの命令がないかぎり、テキストストリームへの書き込みによって書き込み点以降の関連ファイルが切り捨てられることはありません。

F.1.14.16 (7.9.3) ファイルのバッファリングの特徴

標準エラーストリーム (stderr) を除く出力ストリームは、デフォルトでは、出力がファイルの場合にはバッファリングされ、出力が端末の場合にはラインバッファリングされます。標準エラー出力ストリーム (stderr) は、デフォルトではバッファリングされません。

バッファリングされた出力ストリームは多くの文字を保存し、その文字をブロックとして書き込みます。バッファリングされなかった出力ストリームは宛先ファイルあるいは端末に迅速に書き込めるように情報の待ち行列を作ります。行バッファリングされた出力は、その行が完了するまで (改行文字が要求されるまで) 行単位の出力待ち行列に入れられます。

F.1.14.17 (7.9.3) ゼロ長ファイルは実際に存在するか

ディレクトリエントリを持つという意味ではゼロ長ファイルは存在します。

F.1.14.18 (7.9.3) 有効なファイル名を作成するための規則

有効なファイル名は 1 から 1,023 文字までの長さで、null 文字とスラッシュ (/) 以外のすべての文字を使用することができます。

F.1.14.19 (7.9.3) 同一のファイルを何回も開くことができるか

同一のファイルを何回も開くことができます。

F.1.14.20 (7.9.4.1) 開いたファイルへの remove 関数の効果

ファイルを閉じる最後の呼び出しによりファイルが削除されます。すでに除去されたファイルをプログラムが開くことはできません。

F.1.14.21 (7.9.4.2) rename 関数を呼び出す前に新しい名前を持つファイルがあった場合、そのファイルはどうなるか

そのようなファイルがあれば削除され、新しいファイルが元のファイルの上に書き込まれます。

F.1.14.22 (7.9.6.1) fprintf 関数における %p 変換の出力

%p の出力は %x と等しくなります。

F.1.14.23 (7.9.6.2) fscanf 関数における %p 変換の入力

%p の入力は %x と等しくなります。

F.1.14.24 (7.9.6.2) fscanf 関数における %[変換のための走査リストで最初の文字でも最後の文字でもないハイフン文字 - の解釈

- 文字は包含的範囲を意味します。すなわち、[0-9] は [0123456789] に等しくなります。

F.1.15 ロケール固有の動作 (G.4)

F.1.15.1 (7.12.1) 現地時間帯と夏時間の設定

ローカルタイムゾーンは環境変数 TZ で設定します。

F.1.15.2 (7.12.2.1) clock 関数の経過時間

clock 関数の経過時間は、プログラム実行開始時を原点とする時間経過として表現されます。

ホスト環境については次のようなロケール固有の性質があります。

F.1.15.3 (5.2.1) 必要なメンバー以外の実行文字セットの内容

ロケール依存です。C ロケールでは、文字セットの拡張はありません。

F.1.15.4 (5.2.2) 印刷方向

常に左から右に印刷されます。

F.1.15.5 (7.1.1) 10 進小数点を表す文字

ロケール依存です (C ロケールでは、ピリオド「.」)。

F.1.15.6 (7.3) 処理系ごとに定義される文字テストおよびケース配置関数の項目

「4.3.1」と同義です。

F.1.15.7 (7.11.4.4) 実行文字セットの照合シーケンス

ロケール依存です。C ロケールでは、照合順序は ASCII の照合シーケンスと同じです。

F.1.15.8 (7.12.3.5) 時間と日付の書式

ロケール固有です。C ロケールでの形式を次の表にまとめます。月の名前は次のとおりです。

表 98 月の名前

January	May	September
February	June	October
March	July	November
April	August	December

曜日の名前は次のとおりです。

表 99 曜日の名前と省略名

曜日名		省略名	
Sunday	Thursday	Sun	Thu
Monday	Friday	Mon	Fri
Tuesday	Saturday	Tue	Sat
Wednesday		Wed	

時間の書式は次のとおりです。

```
%H:%M:%S
```

日付の書式は次のとおりです。

```
%m/%d/%y
```

午前/午後を指定するための書式は AM PM です。

♦ ♦ ♦ 付 録 G

ISO C データ表現

この付録では、ISO C の記憶装置におけるデータ表現と、関数に引数を渡す仕組みについて説明します。C 言語以外の言語でモジュールを記述したり使用したいプログラマが、それらのモジュールに C 言語コードとのインタフェースを持たせるための手引きとして役立つかもしれません。

G.1 記憶領域の割り当て

次の表は、データ型とそれらがどのように表されるかを示しています。サイズはバイト単位です。

注記 - スタックに割り当てられるストレージ (内部 (または自動) リンケージを持つ識別子) は 2G バイト以下に制限するようにしてください。

表 100 データ型の記憶装置の割り当て

C の型	LP64 (`-m64`) *サイズ*	LP64 *境界整列*	ILP32 (`-m32`) *サイズ*	ILP 32 *境界整列*
整数				

`_Bool`
`char`
`signed char`
`unsigned char`
	1	1	1	1

`short`
`signed short`
`unsigned short`
	2	2	2	2

`int`
`signed int`
`unsigned int`
`enum`
	4	4	4	4

`long`	8	8	4	4

C の型	LP64 (-m64) *サイズ*	LP64 *境界整列*	ILP32 (-m32) *サイズ*	ILP 32 *境界整列*
`signed long` `unsigned long`				

`long long`
`signed long long`
`unsigned long long`
	8	8	8	4 (x86) /
				8 (SPARC)

ポインタ				
任意の型 `*` *任意の型* `(*) ()`	8	8	4	4
浮動小数点				

`float`
`double`
`long double`
	4
	8
	16
		4
		8
		16
			4
			8
			12 (x86) /
			16 (SPARC)
				4
				4 (x86) /
				8 (SPARC)
				4 (x86) /
				8 (SPARC)

複素数				

`float _Complex`
`double _Complex`
`long double _Complex`
	8
	16
	32
		4
		8
		16
			8
			16
			24 (x86) /
			32 (SPARC)
				4
				4 (x86) /
				8 (SPARC)
				4 (x86) /
				8 (SPARC)

虚数				

`float _Imaginary`
`double _Imaginary`
`long double _Imaginary`
	4
	8
	16
		4
		8
		16
			4
			8
			12 (x86) /
			16 (SPARC)
				4
				4 (x86) /
				8 (SPARC)
				4 (x86) /
				8 (SPARC)

不可分 C 型のサイズと整列:

```
Where T is any of the above types, and struct or union types
    size : sizeof(_Atomic(T)) is equal to sizeof(T)
    alignment : if size is 1,2,4,8,16 then alignment is equal to the size,
otherwise alignof(_Atomic(T)) is equal to alignof(T)
```

G.2 データ表現

与えられたデータ要素のビット番号の割り当ては、使用しているアーキテクチャーによって異なります。SPARCstation™ マシンではビット 0 を最下位有効ビット、バイト 0 を最上位有効バイトとしてそれぞれ使用します。次の表に表現方法を示します。

G.2.1 整数表現

ISO C で使用されている整数型は `short`、`int`、`long`、および `long long` です。

表 101 `short` の表現

ビット数	内容
8- 15	バイト 0 (SPARC) バイト 1 *(x86)*
0- 7	バイト 1 (SPARC) バイト 0 (x86)

表 102 `int` の表現

ビット数	内容
24- 31	バイト 0 (SPARC) バイト 3 (x86)
16- 23	バイト 1 (SPARC) バイト 2 (x86)
8- 15	バイト 2 (SPARC) バイト 1 (x86)
0- 7	バイト 3 (SPARC) バイト 0 (x86)

表 103 `-m32` でコンパイルされる `long` の表現

ビット数	内容
24- 31	バイト 0 (SPARC) バイト 3 (x86)
16- 23	バイト 1 (SPARC) バイト 2 (x86)

ビット数	内容
8- 15	バイト 2 (SPARC) バイト 1 (x86)
0- 7	バイト 3 (SPARC) バイト 0 (x86)

表 104 `long` (`-m64`) および `long long` (`-m32` と `-m64` の両方) の表現

ビット数	内容
56- 63	バイト 0 (SPARC) バイト 7 (x86)
48- 55	バイト 1 (SPARC) バイト 6 (x86)
40- 47	バイト 2 (SPARC) バイト 5 (x86)
32- 39	バイト 3 (SPARC) バイト 4 (x86)
24- 31	バイト 4 (SPARC) バイト 3 (x86)
16- 23	バイト 5 (SPARC) バイト 2 (x86)
8- 15	バイト 6 (SPARC) バイト 1 (x86)
0- 7	バイト 7 (SPARC) バイト 0 (x86)

G.2.2 浮動小数点表現

`float`、`double`、`long double` のデータ要素は、ISO IEEE 754-1985 規格に従って表現されます。表現は次のとおりです。

$(-1)^{s} * 2^{(e - bias)} * [jf]$

ここでは:

- *s* は符号
- *e* はバイアス付きの指数

- *j* = 先行ビット。*e* の値によって決まる。`long double` *(x86)* では、先行ビットは明示的。そのほかは暗黙的。
- *f* = 仮数部
- *u* は、ビットが 0 でも 1 でも良いことを意味します (このセクションの表で使用)。

IEEE Single および Double の場合、*j* は常に暗黙的です。バイアス付きの指数が 0 の場合、*f* が 0 でない限り、*j* は 0 で、結果として生成される数値は非正規数です。バイアス付き指数が 0 より大きい場合、*j* は、その数が有限であるかぎり 1 です。

Intel 80 ビット拡張の場合、*j* は常に明示的です。

各ビットの位置は次の表のとおりです。

表 105 `float` の表現

ビット数	名前
31	符号
23- 30	バイアス付きの指数
0- 22	仮数部

表 106 `double` の表現

ビット数	名前
63	符号
52- 62	バイアス付きの指数
0- 51	仮数部

表 107 `long double` の表現 (SPARC)

ビット数	名前
127	符号
112- 126	バイアス付きの指数
0- 111	仮数部

表 108 `long double` の表現 (x86)

ビット数	名前
80- 95	使用されない
79	符号
64- 78	バイアス付きの指数
63	先行ビット
0- 62	仮数部

詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: 数値計算ガイド』を参照してください。

G.2.3 極値

正規化された `float` と `double` の数は「隠された」ビットまたは暗黙のビットを持つと言われます。それにより、精度を 1 ビット分高めることができます。`long double` の場合は、先行ビットは暗黙的 (SPARC) または明示的 (x86) のいずれかになります。このビットは正規数に対しては 1、非正規数に対しては 0 になります。

表 109 `float` の表現

正規数 (0<e<255):	$(-1)^s 2^{(e-127)} 1.f$
非正規数 (e=0, f!=0):	$(-1)^s 2^{(-126)} 0.f$
ゼロ (e=0, f=0):	$(-1)^s 0.0$
シグナルを発生する NaN	s=u, e=255(最大値); f=.0uuu〜uu (少なくとも 1 ビットは 0 以外)
シグナルを発生しない NaN	s=u, e=255(最大値); f=.1uuu〜uu
無限大	s=u, e=255(最大値); f=.0000〜00 (すべてが 0)

表 110 `double` の表現

正規数 (0<e<2047):	$(-1)^s 2^{(e-1023)} 1.f$
非正規数 (e=0, f!=0):	$(-1)^s 2^{(-1022)} 0.f$
ゼロ (e=0, f=0):	$(-1)^s 0.0$
シグナルを発生する NaN	s=u, e=2047(最大値); f=.0uuu〜uu (少なくとも 1 ビットは 0 以外)
シグナルを発生しない NaN	s=u, e=2047(最大値); f=.1uuu〜uu
無限大	s=u, e=2047(最大値); f=.0000〜00 (すべてが 0)

表 111 `long double` の表現

正規数 (0<e<32767):	$(-1)^s 2^{(e-16383)} 1.f$
非正規数 (e=0, f!=0):	$(-1)^s 2^{(-16382)} 0.f$
ゼロ (e=0, f=0):	$(-1)^s 0.0$
シグナルを発生する NaN	s=u, e=32767(符号); f=.0uuu〜uu (少なくとも 1 ビットは 0 以外)
シグナルを発生しない NaN	s=u, e=32767(最大値); f=.1uuu〜uu
無限大	s=u, e=32767(最大値); f=.0000〜00 (すべてが 0)

G.2.4 重要な数の 16 進数表現

よく使用される数値の 16 進数表現を次の表にまとめます。

表 112　重要な数の 16 進数表現 (SPARC)

値	float	double	long double
+0	00000000	0000000000000000	00000000000000000000000000000000
-0	80000000	8000000000000000	80000000000000000000000000000000
+1.0	3F800000	3FF0000000000000	3FFF0000000000000000000000000000
-1.0	BF800000	BFF0000000000000	BFFF0000000000000000000000000000
+2.0	40000000	4000000000000000	40000000000000000000000000000000
+3.0	40400000	4008000000000000	40080000000000000000000000000000
プラス無限大	7F800000	7FF0000000000000	7FFF0000000000000000000000000000
マイナス無限	FF800000	FFF0000000000000	FFFF0000000000000000000000000000
NaN	7FBFFFFF	7FF7FFFFFFFFFFFF	7FFF7FFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFFF

表 113　重要な数の 16 進数表現 *(x86)*

値	float	double	long double
+0	00000000	0000000000000000	00000000000000000000
-0	80000000	0000000080000000	80000000000000000000
+1.0	3F800000	000000003FF00000	3FFF8000000000000000
-1.0	BF800000	00000000BFF00000	BFFF8000000000000000
+2.0	40000000	0000000040000000	40008000000000000000
+3.0	40400000	0000000040080000	4000C000000000000000
プラス無限大	7F800000	000000007FF00000	7FFF8000000000000000
マイナス無限	FF800000	00000000FFF00000	FFFF8000000000000000
NaN	7FBFFFFF	FFFFFFFF7FF7FFFF	7FFFBFFFFFFFFFFFFFFF

詳細は、『Oracle Developer Studio 12.5: 数値計算ガイド』を参照してください。

G.2.5　ポインタ表現

`-m32` では、C でのポインタは 4 バイトを占有します。`-m64` では、C でのポインタは 8 バイトを占有します。`NULL` 値のポインタはゼロと等価です。

G.2.6　配列の格納

配列は、それぞれの要素が決められた記憶順序で格納されます。各要素は実際には記憶要素の一次元の列に格納されます。

C の配列は行メジャー順で格納されます。多次元配列の最後の添字はもっとも速く変化します。

文字列データ型は char 要素の配列です。連結後、文字列リテラルまたはワイド文字列リテラルに指定できる最大の文字数は、4,294,967,295 個です。

スタックに割り当てられた記憶領域のサイズ制限については、405 ページの「記憶領域の割り当て」を参照してください。

表 114 配列の型と最大の大きさ

型	-m32 の要素の最大数	-m64 の要素の最大数
char	4,294,967,295	2,305,843,009,213,693,951
short	2,147,483,647	1,152,921,504,606,846,975
int	1,073,741,823	576,460,752,303,423,487
long	1,073,741,823	288,230,376,151,711,743
float	1,073,741,823	576,460,752,303,423,487
double	536,870,911	288,230,376,151,711,743
long double	268,435,451	144,115,188,075,855,871
long long	536,870,911	288,230,376,151,711,743

静的および大域配列にはさらに多くの要素を格納することができます。

G.2.7 極値の算術演算

このセクションでは、浮動小数点の極値と通常値を組み合わせたものに基本算術演算を適用して得られる結果について説明します。トラップやその他の例外は起こらないものとします。

次の表で、略語を説明します。

表 115 略語の使用法

略語	意味
Num	非正規のまたは正規化された数字
Inf	無限大 (正または負)
NaN	数字ではない
Uno	順序不定

次の表は、異なるタイプのオペランドを組み合わせて行なった算術演算から得られた値のタイプを示しています。

表 116 加算と減算の結果

	右側のオペランド: 0	右側のオペランド: Num	右側のオペランド: Inf	右側のオペランド: NaN
左側のオペランド: 0	0	Num	Inf	NaN
左側のオペランド: Num	Num	を参照してください。[†]	Inf	NaN
左側のオペランド: Inf	Inf	Inf	[†]を参照	NaN
左側のオペランド: NaN	NaN	NaN	NaN	NaN

[†] Num + Num は、結果が大きすぎる (オーバーフロー) 場合は Num ではなく Inf になることがあります。無限量が逆の `sign` の場合は、Inf + Inf = NaN になります。

表 117 乗算結果

	右側のオペランド: 0	右側のオペランド: Num	右側のオペランド: Inf	右側のオペランド: NaN
左側のオペランド: 0	0	0	NaN	NaN
左側のオペランド: Num	0	Num	Inf	NaN
左側のオペランド: Inf	NaN	Inf	Inf	NaN
左側のオペランド: NaN	NaN	NaN	NaN	NaN

表 118 除算結果

	右側のオペランド: 0	右側のオペランド: Num	右側のオペランド: Inf	右側のオペランド: NaN
左側のオペランド: 0	NaN	0	0	NaN
左側のオペランド: Num	Inf	Num	0	NaN
左側のオペランド: Inf	Inf	Inf	NaN	NaN
左側のオペランド: NaN	NaN	NaN	NaN	NaN

表 119 比較結果

	右側のオペランド: 0	右側のオペランド: +Num	右側のオペランド: +Inf	右側のオペランド: +NaN
左側のオペランド: 0	=	<	<	Uno
左側のオペランド: +Num	>	比較の結果	<	Uno
左側のオペランド: +Inf	>	>	=	Uno

	右側のオペランド: 0	右側のオペランド: +Num	右側のオペランド: +Inf	右側のオペランド: +NaN
左側のオペランド: +NaN	Uno	Uno	Uno	Uno

注記 - NaN と比較した NaN は順序不定で、結果は不等価になります。+0 は -0 と比較結果が等しくなります。

G.3 引数を渡す仕組み

本セクションでは ISO C における引数の渡し方について説明します。

- C の関数への引数は、すべて値渡しされます。
- 実引数は関数の宣言において宣言されるのと逆の順序で渡されます。
- 式である実引数は、関数参照の前に評価されます。その後、式の結果がレジスタに置かれるかスタックにプッシュされます。

G.3.1 32 ビット SPARC

関数は `integer` 型の結果をレジスタ `%o0` に、`float` 型の結果wpレジスタ `%f0` に、`double` 型の結果をレジスタ `%f0` と `%f1` に返します。

`long long` 型整数は、上位ワード順序は `%oN`、下位ワード順序は `%o(N+1)` でレジスタに渡されます。レジスタ内の結果は同様の順序で `%o0` と `%o1` に返されます。

`double` および `long double` を除くすべての引数は 4 バイトの値として渡されます。`double` は 8 バイトの値として渡されます。先頭 6 個の 4 バイト値 (`double` を 8 と数える) は `%o0` から `%o5` までのレジスタに渡されます。残りはスタック経由で渡されます。構造体の場合は、構造体のコピーが作成され、ポインタがそのコピーに渡されます。`long double` は構造体と同様の方法で渡されます。

前述のレジスタは、呼び出し側から見えます。

G.3.2 64 ビット SPARC

すべての整数の引数は、8 バイト値として引き渡されます。

浮動小数点引数は可能なかぎり、浮動小数点レジスタに渡されます。

G.3.3 x86/x64

Intel 386 psABI および AMD64 psABI を遵守しています。

関数は次のレジスタで結果を返します。

表 120 型を返すために x86 関数が使用するレジスタ (`-m32`)

返される型	レジスタ
int	%eax
`long long`	`%edx` と `%eax`
`float`、`double`、`long double`	`%st(0)`
`float _Complex`	`%eax` (実数部) と `%edx` (虚数部)
`double _Complex` と `long double _Complex`	対応する浮動小数点型の 2 つの要素を含む構造体と同じ

詳細は、http://www.x86-64.org/documentation/abi.pdf で AMD64 psABI についての説明を参照してください。

`struct`、`union`、`long long`、`double`、`long double` を除くすべての引数は 4 バイト値として渡されます。`long long` は 8 バイト値として渡され、`double` は 8 バイト値として渡され、`long double` は 12 バイト値として渡されます。

`struct` と `union` はスタックにコピーされます。サイズは 4 の倍数バイトに丸められます。`struct` と `union` を返す関数には、その `struct` や `union` を格納する場所を指す隠された最初の引数が渡されます。

関数から戻ったあと、呼び出された関数によってポップされる `struct` や `union` の余分な引数を除き、スタックから引数をポップするのは呼び出し側の責任です。

♦ ♦ ♦ 付 録 H

パフォーマンスチューニング

この付録では、C プログラムのパフォーマンスチューニングについて説明します。『Oracle Developer Studio 12.5: パフォーマンスアナライザ』も参照してください。

H.1 libfast.a ライブラリ (SPARC)

libfast.a は、標準 C ライブラリ関数 malloc()、free()、realloc()、calloc()、valloc()、および memalign() の高速だが MT で安全でないバージョンを提供します。シングルスレッドアプリケーションでの高速割り当てのために最適化されているため、並列マルチスレッド割り振りや容量上の効率に優れたメモリー再利用を必要とするアプリケーションには適していない可能性があります。

libfast_r.a は libfast.a の MT で安全なバージョンですが、マルチスレッドによる並列メモリー割り振りはサポートしていません。一度に 1 つのスレッドだけがメモリーの割り当てまたは解放を実行できます。

32 ビットおよび 64 ビットの両方の Oracle Solaris で両方のバージョンがサポートされています。SPARC と x86 の両方のプラットフォームでサポートされています。

libfast malloc() により割り当てられたブロックを解放しても、異なるサイズの新しいブロックの割り当てにストレージは使用できるようにはなりません。このため、libfast はマルチフェーズアプリケーションでの使用には適していません。

プロファイリングを使用して、次のチェックリストのルーチンが自分のアプリケーションのパフォーマンスにとって重要かどうかを判断し、その後このチェックリストを使用して、libfast.a または libfast_r.a がパフォーマンスに有用であるかどうかを判断してください。

- メモリー割り当てのパフォーマンスが重要であり、もっともよく割り当てられるブロックのサイズが 2 のべき乗と同等またはわずかに少ない場合は、libfast.a または libfast_r.a を*使用してください*。重要なルーチンは、malloc()、free()、および realloc() です。
- アプリケーションがマルチスレッド対応である場合は、libfast.a を使用しないでください。代わりに libfast_r.a を使用します。

アプリケーションをリンクするときには、リンク時に使用するcc コマンドにオプション -lfast または -lfast_r を追加してください。cc コマンドは標準の C ライブラリにある同等のルーチンよりも先に libfast.a または libfast_r.a にあるルーチンをリンクします。

♦ ♦ ♦ 付 録 I

Oracle Developer Studio C: K&R C と ISO C の違い

この付録では、以前の K&R Oracle Developer Studio C と Oracle Developer Studio ISO C の違いについて説明します。

詳細は、25 ページの「準拠規格」を参照してください。

I.1 非互換性

表 121 K&R C と ISO C の非互換性

トピック	Oracle Developer Studio C (K&R)	Oracle Developer Studio ISO C
`main()` の `envp` 引数	`main()` の 3 番目の引数として `envp` を使用できる。	3 番目の引数として使用できるが、この使用法は厳密には ISO C 規格に準拠しない。
キーワード	識別子、`const`、`volatile`、`signed` を普通の識別子として扱う。	`const`、`volatile`、`signed` はキーワードである。
ブロック内の `extern` と `static` 関数宣言	これらの関数宣言をファイルスコープに拡張する。	ISO 規格は、ブロックスコープ関数宣言がファイルスコープに拡張されることを保証しない。
識別子	識別子でドル記号 (`$`) を使用できる。	`$` は許可されない。
`long float` 型	`long float` 宣言を受け入れ、これらを `double` として処理する。	このような宣言は使用できない。

複数文字文字定数	`int mc = 'abcd';`
	
	は、次を生成する。
	
	`abcd`
		`int mc = 'abcd';`
		
		は、次を生成する。
		
		`dcba`

整数定数	8 進数のエスケープシーケンスで、8 または 9 を使用できる。	8 進数のエスケープシーケンスで、8 または 9 を使用できない。
代入演算子	次の演算子の組み合わせを 2 つのトークンとして処理し、結果としてそれらの間の空白を許可する。 `*=, /=, %=, +=, -=, <<=, >>=, &=, ^=, |=`	1 つのトークンとして処理するため、演算子の間に空白を使用できない。

トピック	Oracle Developer Studio C (K&R)	Oracle Developer Studio ISO C
式の符号なし保存の意味解釈	符号なし保持をサポートする。つまり、unsigned char/shorts は unsigned int に変換される。	値の保持をサポート、つまり unsigned char/short は int に変換される。
単精度計算と倍精度計算	浮動小数点式のオペランドを double に拡張する。 float を返すように宣言された関数は常に、それらの戻り値は double に拡張する。	float の演算を単精度計算で行うことができる。 このような関数に float の戻り型を使用できる。
struct/union のメンバーの名前空間	struct と union を許可し、ほかの struct または union のメンバーを操作するためにメンバー選択演算子 ('.', '->') を使用する演算の型を許可する。	すべての一意な struct または union は、独自の一意な名前空間を持たなければならない。
左辺値 (lvalue) としてのキャスト	lvalue としての整数型およびポインタ型のキャストをサポートしている。例: `(char *)ip = &char;`	この機能はサポートしない。

暗黙の int 宣言	明示的な型指示子なしの宣言をサポートする。num; などの宣言は、暗黙の int として処理される。例:
	
	`num; /*num は暗黙の int*/`
	
	`int num2; /* num2 は*/`
	
	`/* 宣言された int */`
		num; 宣言 (明示的な型指定子 int なし) はサポートされず、構文エラーとなる。

空の宣言	空の宣言を許可する。例: `int;`	タグを除いて、空の宣言を使用できない。

型定義の型指示子	typedef 宣言で unsigned、short、long などの型指定子を使用できる。例:
	
	`typedef short small;`
	
	`unsigned small x;`
		typedef 宣言は型指示子で変更できない。

ビットフィールドで使用できる型	すべての整数型のビットフィールドを使用できる (名前なしビットフィールドも含む)。 ABI は、名前なしビットフィールドとほかの整数型のサポートを必要とする。	型 int、unsigned int、および signed int だけのビットフィールドをサポートする。ほかの型は未定義。

不完全な宣言におけるタグの処理	不完全な型宣言を無視する。次の例では、f1 は外側の struct を参照する。
	
	`struct x { . . . } s1;`
	
	`{struct x; struct y {struct x f1; } s2; struct x`
	
	`{ . . . };}`
		ISO 準拠の実装では、不完全な struct または union 型指定子は、同じタグで囲んだ宣言を隠す。

struct、union、または enum 宣言での不一致	入れ子にされた struct または union 宣言において、タグの struct、enum、union 型の不一致を許可する。次の例では、2 番目の宣言は struct として処理される。	外側のタグを隠し、内側の宣言を新しい宣言として処理する。

トピック	Oracle Developer Studio C (K&R)	Oracle Developer Studio ISO C

	`struct x {. . . }s1;`
	
	`{union x s2;. . .}`	

式内のラベル	ラベルを `(void *) lvalue` として処理する。	式内ではラベルを使用できない。
`switch` 条件型	`int` に変換することで、`float` と `double` を許可する。	整数型 (`int`、`char`、列挙型) だけを switch 条件型として評価する。
条件付きインクルード指令の構文	プリプロセッサは `#else` または `#endif` 指令のあとにあるトークンを無視する。	このような構文は使用できない。
トークンの結合と `##` プリプロセッサ演算子	`##` 演算子を認識しない。トークンの結合を行うには、結合される 2 つのトークンの間にコメントを置く。 `#define PASTE(A,B) A/*任意のコメント*/B`	`##` をトークンの結合を実行するプリプロセッサ演算子として定義する。例: `#define PASTE(A,B) A##B` さらに、プリプロセッサはメソッドを認識しない。その代わりに、2 つのトークン間のコメントを空白として処理する。

プリプロセッサの再走査	プリプロセッサは再帰的に置換する。
	
	`#define F(X) X(arg)`
	
	`F(F)`
	
	は、次を生成する。
	
	`arg(arg)`
		再走査中に置換リストに見つかったマクロは置換されない。
		
		`#define F(X)X(arg)F(F)`
		
		は、次を生成する。
		
		`F(arg)`

仮パラメータリスト内の `typedef` 名	関数宣言で `typedef` 名を仮引数名として使用できます。`typedef` 宣言を「非表示」にする。	`typedef` 名として宣言された識別子を仮パラメータとして使用できない。

実装固有の集合体の初期化	中括弧内で部分的に省略された初期設定子を構文解析および処理するときは、ボトムアップアルゴリズムを使用する。
	
	`struct{ int a[3]; int b; }\ w[]={{1}, 2};`
	
	は、次を生成する。
	
	`sizeof(w)=16`
	
	`w[0].a=1,0,0`
	
	`w[0].b=2`
		構文解析には、トップダウンアルゴリズムを使用する。例:
		
		`struct{int a[3];int b;}\`
		
		`w[]={{1},2};`
		
		は、次を生成する。
		
		`sizeof(w)=32w[0].a=1,0,0w[0].`
		`=0w[1].a=2,0,0w[1].b=0`

`include` ファイルをまたがるコメント	`#include` ファイルで始まり、最初のファイルをインクルードしたファイルで終了するコメントを許可する。	コンパイルの翻訳段階で、つまり、`#include` 指令が処理される前に、コメントは空白文字に置換される。

文字定数内の仮引数の置換	置換リストマクロと一致したとき、文字定数内の文字を置換する。
	
	`#define charize(c)'c'`
	
	`charize(Z)`
	
	は、次を生成する。
		文字は置換されない。
		
		`#define charize(c) 'c'charize(Z)`
		
		は、次を生成する。
		
		`'c'`

トピック	Oracle Developer Studio C (K&R)	Oracle Developer Studio ISO C
	'Z'	

文字列定数内の仮引数の置換	プリプロセッサは文字列定数内の囲まれた仮引数を置換する。
	
	`#define stringize(str) 'str'`
	
	`stringize(foo)`
	
	は、次を生成する。
	
	`"foo"`
		プリプロセッサ演算子 # を使用しなければならない。
		
		`#define stringize(str) 'str'`
		
		`stringize(foo)`
		
		は、次を生成する。
		
		`"str"`

コンパイラの「フロントエンド」に組み込まれたプリプロセッサ	コンパイラは、cpp(1) を呼び出し、指定したオプションに従って、コンパイルシステムのほかのすべてのコンポーネントを処理する。	ISO C の変換フェーズ 1 から 4 (プリプロセッサ指令の処理を含む) は acomp に直接組み込まれる。したがって、-Xs モードの場合を除き、cpp はコンパイル中に直接呼び出されることはない。
バックスラッシュによる行の連結	行の連結では、バックスラッシュ文字を認識しない。	改行文字の直前にバックスラッシュ文字を指定しなければならない。
文字列リテラル内の 3 文字表記	この ISO C の機能はサポートしない。	
asm キーワード	asm はキーワードである。	asm は通常の識別子として処理される。

識別子のリンケージ	初期化されていない static 宣言を仮定義として処理しない。この結果、2 番目の宣言が「再宣言」エラーを生成する。次に例を示します。
	
	`static int i = 1;`
	
	`static int i;`
		初期化されていない static 宣言を仮定義として処理する。

名前空間	struct、union、enum のタグ、struct、union、enum のメンバー、および、そのほかすべての 3 つだけを識別する。	ラベル名、タグ (キーワード struct、union、enum のあとに続く名前)、struct、union、enum のメンバー、および、通常の識別子の 4 つの名前空間を認識する。
long double 型	サポートしない。	long double 型の宣言を使用できる。
浮動小数点定数	浮動小数点の接尾辞 f、l、F、L はサポートされない。	
接尾辞なしの整数定数は異なる型を持つことができる。	整数定数の接尾辞 u と U はサポートされない。	
ワイド文字定数	ワイド文字定数についての ISO C 構文を使用できない。次に例を示します。 `wchar_t wc = L'x';`	この構文をサポートする。
'\a'および'\x'	文字 'a' と 'x' として処理する。	特別なエスケープシーケンス'\a'と'\x'として処理する。
文字列リテラルの連結	ISO C の隣接する文字列リテラルの連結はサポートしない。	
ワイド文字の文字列リテラル構文	ISO C のワイド文字の文字列リテラル構文はサポートしない。次に例を示します。	この構文をサポートする。

トピック	Oracle Developer Studio C (K&R)	Oracle Developer Studio ISO C
	`wchar_t *ws = L"hello";`	
ポインタ: `void *` と `char *`	ISO C の `void *` 機能をサポートする。	
単項プラス演算子	この ISO C の機能はサポートしない。	
関数のプロトタイプ — 省略記号	サポートしない。	ISO C は可変引数パラメータリストを示すための省略記号「...」の使用を定義する。
型定義	`typedef` は、同じ型名を持つ別の宣言により、内側のブロックで再宣言できない。	`typedef` は、同じ型名を持つ別の宣言により、内側のブロックで再宣言できる。
`extern` 変数の初期化	明示的に `extern` と宣言した変数の初期化はサポートしない。	明示的に `extern` と宣言した変数の初期化を定義として処理する。
集合体の初期化	ISO C の共用体または自動構造体の初期化はサポートしない。	
プロトタイプ	この ISO C の機能はサポートしない。	
前処理指令の構文	第 1 桁に `#` がある指令だけを認識する。	ANSI/ISO では、`#` 指令の前に空白文字を使用できる。
プリプロセッサ演算子 `#`	ISO C のプリプロセッサ演算子 `#` はサポートしない。	
`#error` 指令	この ISO C の機能はサポートしない。	
プリプロセッサ指令	`#ident` 指令とともに、2 つのプラグマ `unknown_control_flow` と `makes_regs_inconsistent` をサポートする。プラグマを認識できないとき、プリプロセッサは警告を発行する。	認識できないプラグマに対する動作は指定されていない。

事前定義されたマクロ名	次の ISO C 定義のマクロ名は定義されていない。
	`__STDC__`
	`__DATE__`
	`__TIME__`
	`__LINE__`	

I.2 キーワード

次の表は、ISO C 標準、Oracle Developer Studio ISO C コンパイラ、および Oracle Developer Studio C コンパイラのキーワードの一覧を示しています。

次の表は、ISO C 規格で定義されたキーワードのリストです。

表 122 ISO C 規格のキーワード

`_Alignas`[2]	`_Alignof`[2]	`_Atomic`[2]	`_Bool`[1]

_Complex[1]	_Generic[2]	_Imaginary[1]	_Noreturn[2]
_Static_assert[2]	_Thread_local[2]	auto	break
case	char	const	continue
default	do	double	else
enum	extern	float	for
goto	if	inline[1]	int
long	register	restrict	return
short	signed	sizeof	static
struct	switch	typedef	union
unsigned	void	volatile	while

[1] `-std=c99` および `-std=c11` のみで定義

[2] `-std=c11` のみで定義

C コンパイラは、追加のキーワード `asm` も定義しています。ただし `asm` は `-pedantic` モードではサポートされていません。

K&R Oracle Developer Studio C のキーワードを次の表に示します。

表 123 K&R のキーワード

asm	auto	break	case
char	continue	default	do
double	else	enum	extern
float	for	fortran	goto
if	int	long	register
return	short	sizeof	static
struct	switch	typedef	union
unsigned	void	while	

索引

数字・記号

_Alignas 指定子, 348
_Alignof 演算子, 348
_Atomic 型
  サイズと整列, 81
_Exit 関数, 376
_Noreturn, 349
_Pragma, 361
_Restrict, 54
_Static_assert, 349
__alignof キーワード, 56
__asm キーワード, 55, 55
__DATE__, 372, 396, 396
__func__, 353
__global, 31
__hidden, 31
__symbolic, 31
__thread, 31
__TIME__, 372, 396, 396
-#, 110, 230
-###, 110, 230
#assert, 37, 231
#define, 233
#error, 40
#include、ヘッダーファイルの追加, 57
#warning, 40
3 文字表記シーケンス, 162
10 進小数点文字, 402

あ

アセンブラ, 28
アセンブリ言語テンプレート, 342
値
  整数, 388
  浮動小数点, 389
値の保持 (拡張), 159
移植性, コード, 130
移植性、コード, 132
一時ファイル, 57
インライン, 301
インライン拡張テンプレート, 301, 309
エラーメッセージ, 385
  "error:" 接頭辞
    の追加, 234
  lint での抑制, 113
  型の不一致における長さ調整, 235
オブジェクトファイル
  er_src ユーティリティーによるコンパイラコメントの
  読み取り, 269
  ld によるリンク, 232
  削除の抑制, 232
  ソースファイルごとのオブジェクトファイルの作成,
  232
オブジェクトファイル内のコンパイラコメント、er_src
ユーティリティーによる読み取り, 269
オプション
  lint, 123
オプション, コマンド行
  lint, 109
  機能別に分類, 217
オプション、コマンド行, 230
  参照 cc コマンド行オプション
  アルファベット順リファレンス, 230

か

// コメントインジケータ
  -xCC との併用, 270
  C99, 354
改行、終了, 399

拡張, 161
  整数定数, 160
  デフォルトの引数, 154
  ビットフィールド, 160
  符号なし保持と値の保持, 159
型
  const と volatile 修飾子, 165, 168
  for ループでの宣言, 360
  互換と複合, 180, 183
  ストレージ割り当て, 405
  宣言での指定子要求, 355
  宣言とコード, 360
  不完全, 178, 180
型宣言を含む for ループ, 360
型に基づく別名明確化, 137, 152
型のストレージ割り当て, 405
活性文字列, 318
カバレッジ分析 (tcov), 327
環境変数
  cscope が使用する EDITOR, 200, 214
  cscope が使用する TERM, 200
  cscope が使用する VPATH, 200
  LANG
    C90, 387
    C99, 367, 381
  LC_ALL
    C90, 387
    C99, 367
  LC_CTYPE
    C90, 387
    C99, 367
  OMP_NUM_THREADS, 99
  PARALLEL, 99
  SOMP_TACKSIZE, 99
  SUN_PROFDATA_DIR, 57
  SUN_PROFDATA, 57
  SUNW_MP_WARN, 99
  TMPDIR , 57
  TZ, 402
関数, 372
  _Exit, 376
  abort, 376
  ascftime, 114
  calloc, 376
  cftime, 114
  clock, 377, 402
  creat, 114
  exec, 115
  fclose, 376
  fegetexceptflag, 372
  feraiseexcept, 372
  fgetc, 115
  fgetpos, 375
  fmod, 373, 398
  fopen, 114
  fprintf, 375, 401
  free, 376
  fscanf, 375, 401
  fsetpos, 375
  ftell, 375
  fwprintf, 375
  fwscanf, 375
  getc, 115
  getenv, 365
  gets, 114
  getutxent, 197
  ilogb, 373
  ilogbf, 373
  ilogbl, 373
  isalnum, 396
  isalpha, 381, 396
  isatty, 364
  iscntrl, 396
  islower, 396
  isprint, 396
  isupper, 396
  iswalpha, 381
  iswctype, 382
  main, 364
  malloc, 376
  printf, 375
  realloc, 376
  remove, 374, 401
  rename, 374, 401
  scanf, 114
  setlocale, 372
  signal, 364

sizeof, 195
stat, 115
strerror, 382
strftime, 377
strlcpy, 114
strtod, 376
strtof, 376
strtold, 376
system, 366, 376
towctrans, 382
wait3, 376
wait, 376
waitid, 376
waitpid, 376
wcsftime, 377
wcstod, 376
wcstof, 376
wcstold, 376
暗黙の宣言, 354
可変引数リストの使用, 158
可変引数リストを持つ, 156
宣言指定子, 31
並べ替え, 286
プロトタイプ, 130, 153, 156
プロトタイプ、lint による検査, 134
関数とデータの並べ替え, 286
キーワード, 55
C99 の一覧, 353
キャッシュ、オプティマイザが使用する, 270
共有ライブラリ、名前付け, 247
共有ライブラリの名前の変更, 247
組み込み関数, Intel MMX, 62
警告メッセージ, 385
計算型 goto, 33
結合、静的と動的, 231
言語混合リンク
-xlang, 299
検索、ソースファイル *参照* cscope
構造体
整列, 391
パディング, 391
構造体の整列, 391
構造体のパディング, 391
コード最適化
-fast を使用, 237
-xO で, 309
オプティマイザ, 28
コードジェネレータ, 28
互換性オプション, 259
国際化, 168, 170, 173, 176
コメント
-xCC での // の使用, 270
C99 での // の使用, 354
プリプロセッサによる削除を防止, 232

さ

最適化
-fast, 237
-xipo と, 293
-xmaxopt で, 306
-xO, 309
pragma opt および , 48
SPARC, 417
オプティマイザ, 28
リンク時, 302
先読み, 322
算術変換, 35, 36
時間と日付の書式, 403
式, グループ化と評価, 176, 178
シグナル, 398, 399
実装で定義された動作, 403
修飾子, 393
出力, 35, 402
省略記号, 154, 156, 182
処理系定義の動作, 385
診断、書式, 385
シンボリックデバッグ情報、削除, 255
シンボリックデバッグ情報の削除, 255
シンボル宣言指定子, 31
数値演算関数、ドメインエラー, 397
スタック
のページサイズを設定する, 313
メモリー割り当ての最大, 405
スタックへのメモリー割り当て, 405
スタックへのメモリー割り当ての制限, 405
ストリーム, 399
スペース文字, 400
スレッド *参照* 並列化

整数, 388, 389
整数定数, 拡張, 160
静的なリンク, 233
ゼロ長ファイル, 400
宣言子, 393
宣言指定子
  __global, 31
  __hidden, 31
  __symbolic, 31
  __thread, 31
前処理, 162, 165
  コメントを保護する方法, 232
  事前に定義されている名前, 53, 54
  指令, 233, 394
  ディレクティブ, 54, 57, 58
  トークンの連結, 165
  文字列化, 164
ソースでのアセンブリ, 55
ソースでのアセンブリの使用, 55
ソースファイル
  lint を使用した検査, 135
  位置の指定, 394
  検索 *参照* cscope
  編集 *参照* cscope
属性, 38

た

対話型デバイス, 386
多重処理, 89
  -xjobs, 297
段階的アンダーフロー, 32
定数
  Oracle Developer Studio C ISO C に固有, 30
  Oracle Developer Studio ISO C に固有, 29
  拡張, 160
ディレクティブ *参照* プラグマ
データ型
  long long, 34
  unsigned long long, 34
データに追加されない null 文字, 400
データの並べ替え, 286
テキスト
  ストリーム, 399
  セグメントと文字列リテラル, 334
テキストストリームへの書き込み, 400
テキストセグメント内の文字列リテラル, 334
デバッガデータ形式, 280
デバッグ情報、削除, 255
デフォルト
  コンパイラの動作, 259
  処理 SIGILL, 399
  ロケール, 387
動作, 実装で定義された, 403
動作、処理系定義, 385
動的なリンク, 233
トークン, 162, 165
ドメインエラー、数値演算関数, 397

な

内部手続き解析パス, 293

は

廃止オプション, のリスト, 226
バイナリ最適化, 269
配列
  C99 での不完全な配列型, 355
  C99 の宣言子, 358
バッファリング, 400
パフォーマンス
  -fast での最適化, 237
  -xO での最適化, 309
  SPARC の最適化, 417
汎用文字名 (UCN), 349
ヒープ、のページサイズを設定する, 313
日付と時間の書式 , 403
ビット、実行文字セット, 387
ビットフィールド
  ISO C への移行による影響, 182
  signed または unsigned とみなされる, 393
  拡張, 160
  に代入された定数の移植性, 131
表現
  整数, 388
  浮動小数点, 389
表示、各コンポーネントの名前とバージョン, 257
標準に準拠, 29
標準への準拠, 25
ファイル

一時, 57
フィルタlint, 135
不完全な型, 178, 180
複数バイト文字とワイド文字, 168, 170
符号付き整数におけるビット単位演算, 389
符号なし保持 (拡張), 159
符号なし char, 272
符号なし char の保持, 272
浮動小数点, 389
値, 389
切り捨て, 390, 390
段階的アンダーフロー, 32
表現, 389
無停止, 32
プラグマ, 40, 138
#pragma alias, 139
#pragma alias_level, 138
#pragma align, 40
#pragma c99, 41
#pragma does_not_read_global_data, 41
#pragma does_not_return, 41
#pragma does_not_write_global_data, 42
#pragma dumpmacros, 42
#pragma end_dumpmacros, 43
#pragma error_messages, 43
#pragma fini, 44
#pragma hdrstop, 44
#pragma ident, 45
#pragma init, 45
#pragma inline, 46
#pragma int_to_unsigned, 46
#pragma may_not_point_to, 140
#pragma may_point_to, 139
#pragma must_have_frame, 46
#pragma no_inline, 46
#pragma no_side_effect, 47, 48
#pragma noalias, 140, 140
#pragma nomemorydepend, 47
#pragma opt, 48
#pragma pack, 48
#pragma pipeloop, 49
#pragma rarely_called, 49
#pragma redefine_extname, 50
#pragma returns_new_memory, 51
#pragma unknown_control_flow, 51
#pragma unroll, 52
#pragma warn_missing_parameter_info, 52
#pragma weak, 53
フリースタンディング環境, 60
プリコンパイル済みヘッダーファイル, 316
プログラム全体の最適化, 293
プロファイリング
-xprofile, 325
プロモーション, 158
並列化, 89, 89
参照 OpenMP
-xloopinfo による並列化ループの検索, 303
-xopenmp による OpenMP プラグマの指定, 312
-xreduction による縮約の認識の有効化, 329
-xvpara による適切な並列化ループの検査, 342
環境変数, 99
マルチプロセッサ用に -xautopar で有効化, 268
ページサイズ、スタックとヒープ用の設定, 313
ヘッダーファイル
#include ディレクティブのフォーマット, 57
C90 の float.h, 352
Intel MMX 組み込み関数宣言, 62
lint の使用, 109, 109
sunmedia_intrin.h, 62
インクルードする方法, 57, 58
標準の場所, 57, 58
標準ヘッダーのリスト, 171
別名明確化, 137, 152
変換, 35, 36
整数, 389
編集、ソースファイル *参照* cscope
変数, スレッドローカルストレージ指定子, 31
変数宣言指定子, 31
変数のスレッドローカルストレージ, 31

ま

マクロ
__DATE__, 372, 396
__TIME__, 372, 396
ERANGE, 373
float.h に指定されている, 377
FLT_EVAL_METHOD, 352, 372
limits.h に指定されている, 379

NULL, 373
stdint.h に指定されている, 379
マクロ展開, 163
マニュアルページ、アクセス, 25
マルチスレッド化, 251
マルチメディアタイプ、処理, 342
丸め動作, 32
右シフト, 389
無停止
浮動小数点演算, 32
メイクファイル依存関係, 304
メッセージ
エラー, 385
メッセージ ID (タグ), 234, 235
メモリーバリア組み込み関数, 104
モード、コンパイラ, 260
文字
10 進小数点, 402
シングルキャラクタ文字定数, 394
スペース, 400
セット, 照合シーケンス, 402
セットのテスト, 396
セットのビット, 387
ソースと実行のセット, 386
複数バイト、シフトステータス, 387
マッピング、セット, 386

や

予約名, 171, 173
拡張用, 172
実装用, 171
選択のガイドライン, 172

ら

ライブラリ
cc によって検索されるデフォルトのディレクトリ, 230
libfast.a, 417
lint, 133, 135
llib-l*x*.ln, 133
sun_prefetch.h, 323
イントリンシック名, 247
共有または非共有, 231
共有ライブラリの構築, 280
動的なリンクまたは静的なリンクの指定, 231
名前の変更、共有, 247
ライブラリが検索されるデフォルトのディレクトリ, 230
ライブラリの結合, 231
リンカー
コンパイラから渡されるオプション, 343
動的なリンクまたは静的なリンクの指定, 233
リンクを抑制, 232
リンク時のオプション、リスト, 219
リンク時の最適化, 302
リンク、静的と動的, 233
ループ, 282
ローカルタイムゾーン, 402
ロケール, 173, 173, 175
ja_JP.PCK, 280
デフォルト, 387
動作, 402
非準拠の使用, 280

わ

ワイド文字, 169, 170
ワイド文字定数, 170, 170
ワイド文字列リテラル, 170, 170

A

-a, 110
-A, 231
-Aname の事前表明, 231
-ansi, 231
abort 関数, 376
acomp (C コンパイラ), 28
any レベルの別名明確化, 262
ascftime 関数, 114
ATS: 自動チューニングシステム, 321

B

-b, 110
-B, 231
basic レベルの別名明確化, 262

binopt, 263

C

-C, 110, 232
-c, 111, 232
C99
  // コメントインジケータ, 354
  _Pragma, 361
  __func__ のサポート, 353
  FLT_EVAL_METHOD, 352
  for ループでの型宣言, 360
  inline 関数指定子, 357
  Oracle Developer Studio コンパイラの実装, 363
  暗黙の関数宣言, 354
  型指定子の要求, 355
  型宣言とコードの混在, 360
  可変長配列, 359
  キーワードの一覧, 353
  柔軟な配列のメンバー, 355
  配列宣言子, 358
  べき等修飾子, 356
C99 の可変長配列, 359
C99 のべき等修飾子, 356
C99 の inline 関数指定子, 357
C コンパイラ
  コンパイルモードと依存関係, 54
  コンポーネント, 28
  プログラムのコンパイル, 229
  問題のコンパイル, 230
  ライブラリが検索されるデフォルトのディレクトリの変更, 230
  リンカーに渡すオプション, 343
C でプログラミングするためのツール, 28
C プログラミングツール, 28, 28
calloc 関数, 376
case 文, 394
cc c コマンド行オプション
  -xtemp, 336
cc command-line options
  -fprecision, 242
cc コマンド行オプション, 230
  -#, 230
  -###, 230
-A, 231
-ansi, 231
-B, 231
-C, 232
-c, 232
-d, 233, 245
  -G との相互関係, 245
-E, 233
-errfmt, 234
-erroff, 234
-errshort, 235
-errtags, 235
-errwarn, 236
-fast, 237
-fd, 238
-features, 238
-flags, 240
-flteval, 240
  FLT_EVAL_METHOD との相互関係, 352
-fma
  -fast の展開の一部, 237
-fns, 241
  -fast の展開の一部, 237
-fopenmp, 242
-fprecision
  FLT_EVAL_METHOD との相互関係, 353
-fround, 242
  -xlibmopt との相互関係, 301
-fsimple, 243
  -fast の展開の一部, 237
-fsingle, 244
  -fast の展開の一部, 237
  FLT_EVAL_METHOD の相互関係, 353
-fstore, 244
-ftrap, 244
-G, 245
-g, 245
-g*n*, 246
-H, 247
-h, 247
-I, 247
-i, 248
-include, 248

-keeptmp, 249
-KPIC, 249
-Kpic, 249
-L, 249
-l, 249
-library=sunperf, 250
-mc, 250
-mr, 251
-mt, 251
-native, 251
-nofstore, 252
  -fast の展開の一部, 237
-O, 252
-o, 252
-P, 252
-pedantic, 253
-preserve_argvalues, 253
-Q, 254
-Qoption, 253
-qp, 254
-R, 254
-S, 255
-s, 255
-std, 255
-temp, 256
-traceback, 256
-U, 257
-V, 257
-v, 258
-W, 258
-w, 259
-X, 259
  FLT_EVAL_METHOD との相互関係, 352
-xaddr32, 261
-xalias_level, 261
  -fast の展開の一部, 238
  説明, 137
  例, 143, 152
-xannotate, 263
-xarch
  FLT_EVAL_METHOD との相互関係, 352
-xatomic, 267
-xautopar, 268
-xbinopt, 269
-xbuiltin, 269
  -fast の展開の一部, 238
-xc99, 270
-xCC, 270
-xchar, 272
-xchar_byte_order, 273
-xcheck, 273
-xchip, 276
-xcode, 278
-xcsi, 280
-xdebugformat, 280
-xdebuginfo, 281
-xdepend, 282
-xdryrun, 283
-xdumpmacros, 283
-xe, 285
-xF, 286
-xglobalize, 287
-xhelp, 287
-xhwcprof, 287
-xinline, 289
-xinline_param, 290
-xinline_report, 292
-xipo, 293
-xipo_archive, 295
-xipo_build, 296
-xjobs, 297
-xkeepframe, 298
-xlang, 299
-xldscope, 31, 300
-xlibmieee, 301
-xlibmil, 301
  -fast の展開の一部, 238
-xlibmopt, 301
  -fast の展開の一部, 238
-xlinkopt, 302
  -G との相互関係, 302
-xloopinfo, 303
-xM, 304
-xM1, 304
-xmaxopt, 306
  -xO との相互関係, 306

-xMD, 305
-xmemalign, 306
  -fast の展開の一部, 238
-xMerge, 306
-xMF, 305
-xMMD, 305
-xmodel, 308
-xnolib, 309
-xnolibmil, 309
-xnolibmopt, 309
  -xlibmopt との相互関係, 302
-xO, 309
  -xmaxopt との相互関係, 310
-xopenmp, 312
-xP, 313
-xpagesize, 313
-xpagesize_heap, 314
-xpagesize_stack, 315
-xpch, 316
-xpchstop, 320
-xpec, 321
-xpentium, 321
-xpg, 322
-xprefetch, 322
-xprefetch_auto_type, 324
-xprefetch_level, 324
-xprevise, 324
-xprofile, 325
-xprofile_ircache, 328
-xprofile_pathmap, 328
-xreduction, 329
-xregs, 329
-xrestrict, 331
-xs, 331
-xsafe, 332
-xsecure_code_analysis, 333
-xsegment_align, 333
-xsfpconst, 334
-xspace, 334
-xstrconst, 334
-xtarget, 334
-xthroughput, 337
-xtime, 338
  -xtransition, 338
    3 文字表記に関する警告, 162
  -xtrigraphs, 338
  -xunboundsym, 339
  -xunroll, 340
  -xustr, 340
  -xvector, 341
  -xvis, 342
  -xvpara, 342
  -Y, 343
  -YA, 343
  -YI, 343
  -YP, 230, 343
  -YS, 343
cftime 関数, 114
cg (コードジェネレータ), 28
char
  符号なし, 272
clock 関数, 377, 402
const, 165, 181
Cool Tools URL, 321
cpp (C プロセッサ), 28
creat 関数, 114
cscope, 199, 199, 214
  環境設定, 200, 200, 214
  環境変数, 209, 210
  コマンド行の使用, 201, 201, 207, 209
  使用例, 200, 207, 210, 213
  ソースファイルの検索, 199, 199, 200, 201, 206
  ソースファイルの編集, 200, 200, 206, 207, 213, 214

D

-d, 233
-dirout, 111
dbx ツール
  オブジェクトファイルから実行可能ファイルへのデバッグ情報のリンク, 331
  シンボルテーブル情報, 245, 246
dwarf デバッガデータ形式, 280

E

-E, 233
-err, 111
-errchk, 111
-errfmt, 112, 234
-errhdr, 113
-erroff, 113, 234
-errsecurity, 114
-errshort, 235
-errtags, 115, 235
-errwarn, 115, 236
EDITOR, 200, 214
elfdump, 279
er_src ユーティリティー, 269
ERANGE, 397
ERANGE マクロ, 373
errno
  -fast の影響, 237, 237
  -xbuiltin の影響, 269
  -xlibmieee の影響, 301
  -xlibmil の影響, 301
  -xlibmopt の影響, 302
  C98 実装, 397
  値の保持, 54
  アンダーフロー時に ERANGE に値を設定, 373, 375, 376
  終了関数の影響, 44
  初期化関数の影響, 45
  ヘッダーファイル, 172, 173
exec 関数, 115

F

-F, 116
-fast, 237
-fd, 116, 238
-features, 238
-flags, 240
-flagsrc, 116
-flteval, 240
-fns, 241
-fopenmp, 242
-fprecision, 242
-fround, 242
-fsimple, 243
-fsingle, 244
-fstore, 244
-ftrap, 244
fbe (アセンブラ), 28
fclose 関数, 376
fegetexceptflag 関数, 372
feraiseexcept 関数, 372
fgetc 関数, 115
fgetpos 関数, 375
float.h
  C90, 352
  に定義されているマクロ, 377
FLT_EVAL_METHOD
  C99 での評価形式, 352
  float_t および double_t への影響, 372
  規格外の負の値, 368
  浮動小数点の精度に対する影響, 368
fmod 関数, 373
fopen 関数, 114
fprintf関数, 375, 401
free 関数, 376
fscanf 関数, 375, 401
fsetpos 関数, 375
ftell 関数, 375
fwprintf 関数, 375
fwscanf 関数, 375

G

-G, 245
-g, 245
-g*n*, 246
getc 関数, 115
getenv 関数, 365
gets 関数, 114
getutxent 関数, 197

H

-h, 116, 247
-H, 247

I

-I, 116, 247
-i, 248
-include, 248
ilogb 関数, 373
ilogbf 関数, 373
ilogbl 関数, 373
ipo (C コンパイラ), 28
iropt (コードオプティマイザ), 28
isalnum 関数, 396
isalpha 関数, 381, 396
isatty 関数, 364
iscntrl 関数, 396
islower 関数, 396
ISO/IEC 9899:1990 標準, 29
ISO/IEC 9899:1999 規格, 29
ISO/IEC 9899:2011 規格, 29
ISO/IEC 9899:
  1999 Programming Language C, 25, 351
  2011 Programming Language C, 347
ISO C と K&R C, 259, 260
isprint 関数, 396
isupper 関数, 396
iswalpha関数, 381
iswctype 関数, 382

J

ja_JP.PCK ロケール, 280

K

-k, 117
-keeptmp, 249
K&R C と ISO C, 259, 260

L

-L, 117, 249
-l, 117, 249
-library=sunperf, 250
LANG 環境変数
  C99, 367, 381
LANG環境変数
  C90, 387
layout レベルの別名明確化, 262
LC_ALL 環境変数
  C90, 387
  C99, 367
LC_CTYPE 環境変数
  C99 , 367
LC_CTYPE環境変数
  C90, 387
ld (C コンパイラ), 28
libfast.a, 417
limits.h
  定義されたマクロ, 379
LINT_OPTIONS 環境変数, 109
lint
  LINT_OPTIONS, 109
  lint コマンド行オプション
    -#, 110
    -### , 110
    -a , 110
    -b , 110
    -C , 110
    -c , 111
    -dirout , 111
    -err=warn, 111
    -errchk , 111
    -errfmt , 112
    -errhdr, 113
    -erroff, 113
    -errsecurity , 114
    -errtags, 115
    -errwarn , 115
    -F , 116
    -fd , 116
    -flagsrc , 116
    -h , 116
    -I , 116
    -k , 117
    -L, 117
    -l , 117
    -m, 117
    -n, 119
    -Ncheck, 118
    -Nlevel, 118

-o, 120
-p, 120
-R, 120
-s, 120
-u, 120
-V, 120
-v, 121
-W, 121
-x, 123
-Xalias_level, 121
-Xc99, 122
-XCC, 121
-Xkeeptmp, 122
-Xtemp, 122
-Xtime, 122
-Xtransition, 122
-Xustr, 123
-y, 123
lint のコード検査方法, 108
移植性検査, 130, 132
疑わしい構造, 132, 133
拡張モード
概要, 107
呼び出し, 108
基本モード
概要, 107
起動, 108
事前定義, 37
指令, 126, 129
診断, 129, 133
整合性検査, 130
の紹介, 107
フィルタ, 135, 135
ヘッダーファイル、検索, 109
メッセージ
書式, 124, 125
メッセージ ID (タグ), 識別, 115, 123
抑制, 123
ライブラリ, 133, 135
lint によって実行される移植性検査, 130
lint により実行される移植性検査, 132
lint による整合性検査, 130
lint の拡張モード, 107
lint の基本モード, 107
lint のフィルタ, 135
llib-l*x*.ln ライブラリ, 133
long double
ISO C での引き渡し, 414
long int, 35
long long, 34, 36
値の保持, 30
返す, 414
算術拡張, 35
接尾辞, 30
の表現, 408
渡す, 414, 415

M

-m, 117
-mc, 250
-mr, 251
main、args の意味, 386
main 関数, 364
malloc 関数, 376
mbarrier.h, 104
mcs (C コンパイラ), 28
MP C, 89

N

-n, 119
-native, 251
-Ncheck, 118
-Nlevel, 118
-nofstore, 252
NULL 値, 396
NULL マクロ, 373

O

-o, 120, 252
-O, 252
OMP_NUM_THREADS, 99
OMP_STACKSIZE 環境変数, 99
OMP_STACKSIZE のスレーブスレッドのデフォルト設定, 99
OpenMP

-xopenmp コマンド, 312
をコンパイルする方法, 89

P

-p, 120
-P, 252
-pedantic, 253
-preserve_argvalues, 253
PARALLEL, 99
PEC: 移植可能な実行可能コード, 321
Pentium, 336
POSIX スレッド, 251
postopt (C コンパイラ), 28
printf 関数, 375

Q

-Q, 254
-qp, 254

R

-R, 120, 254
readme ファイル, 25
realloc 関数, 376
remove 関数, 374, 401
rename 関数, 374, 401
restrict キーワード
-Xs により認識される, 98
サポートされる C99 機能の一部として, 353
並列化コードの型修飾子, 98

S

-s, 120, 255
-S, 255
scanf 関数, 114
setlocale(3C), 173, 175
setlocale 関数, 372
signal 関数, 364
signed, 388
sizeof 関数, 195
Solaris スレッド, 251
ssbd (C コンパイラ), 28
stab デバッガデータ形式, 280
stat 関数, 115
std, 255
std レベルの別名明確化, 262
stdint.h
定義されたマクロ, 379
strerror 関数, 382
strftime 関数, 377
strict レベルの別名明確化, 262
strlcpy 関数, 114
strong レベルの別名明確化, 263
strtod 関数, 376
strtof 関数, 376
strtold 関数, 376
sun_prefetch.h, 323
SUN_PROFDATA_DIR
定義, 57
SUN_PROFDATA
定義, 57
SUNW_MP_WARN 環境変数, 99
system 関数, 366, 376

T

-temp*dir*、コンパイラオプション, 256
/tmp , 57
tcov
-xprofile, 327
TERM cscope が使用する環境変数, 200
TMPDIR 環境変数, 57, 57
towctrans 関数, 382
traceback, 256
TZ, 402

U

-u, 120
-U, 257
ube (C コンパイラ), 28
unsigned long long, 34
unsigned, 388

V

-V, 120, 257
-v, 121, 258
varargs(5), 154
VIS Software Developers Kit, 342
volatile
  C90, 393
  キーワードと使用方法の説明, 165, 167
  互換宣言, 181
  定義と例, 168, 168
VPATH 環境変数, 200

W

-W, 121, 258
-w, 259
wait3 関数, 376
wait 関数, 376
waitid 関数, 376
waitpid 関数, 376
wcsftime 関数, 377
wcstod 関数, 376
wcstof 関数, 376
wcstold 関数, 376
weak レベルの別名明確化, 262

X

-x, 123
-X, 259
-Xalias_level, 121
-xalias_level, 261
-xanalyze, コンパイラオプション, 263
-xarch=*isa*、コンパイラオプション, 263
-xautopar, 268
-xbinopt, 269, 269
-xbuiltin, 269
-Xc99, 122
-xc99, 270
-XCC, 121
-xCC, 270
-xchar_byte_order, 273
-xchar, 272
-xcheck, 273
-xchip, 276
-xcode, 278
-xcsi, 280
-xdebugformat, 280
-xdebuginfo, 281
-xdepend, 282
-xdryrun, 283
-xe, 285
-xF, 286
-xglobalize, 287
-xhelp, 287
-xhwcprof, 287
-xinline_param, 290
-xinline_report, 292
-xinline, 289
-xipo_archive, 295
-xipo_build, 296
-xipo, 293
-xivdep, コンパイラオプション, 297
-xjobs, 297
-Xkeeptmp, 122
-xlang, 299
-xldscope, 300
-xlibmieee, 301
-xlibmil, 301
-xlibmopt, 301
-Xlinker、コンパイラオプション, 260
-xlinkopt, 302
-xloopinfo, 303
-xM, 304
-xM1, 304
-xmaxopt, 306
-xmemalign, 306
-xMerge, 306
-xMF, 305
-xMMD, 305
-xmodel, 308
-xnolib, 309
-xnolibmil, 309
-xnolibmopt, 309
-xO, 309
-xopenmp, 312
-xP, 313

-xpagesize_heap, 314
-xpagesize_stack, 315
-xpagesize, 313
-xpch, 316
-xpchstop, 320
-xpec, 321
-xpentium, 321
-xpg, 322
-xprefetch_auto_type, 324
-xprefetch_level, 324
-xprefetch, 322
-xprofile_ircache, 328
-xprofile_pathmap, 328
-xprofile, 325
-xpxpatchpadding、コンパイラオプション, 315
-xreduction, 329
-xregs, 329
-xrestrict, 331
-xs, 331
-xsafe, 332, 333
-xsfpconst, 334
-xspace, 334
-xstrconst, 334
-xtarget, 334
-Xtemp, 122
-xtemp, 336
-xthreadvar, 337
-xthreadvar、コンパイラオプション, 337
-xthroughput, 337
-Xtime, 122
-xtime, 338
-Xtransition, 122
-xtransition, 338
-xtrigraphs, 338
-xunboundsym, 339
-xunroll, 340
-Xustr, 123
-xustr, 340
-xvector, 341
-xvis, 342
-xvpara, 342

Y

-y, 123
-Y, 343
-YA, 343
-YI, 343
-YP, 343
-YS, 343